

岐阜県吉城郡宮川村

堂ノ前遺跡 発掘調査報告書

国道360号線バイパス改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1996年3月

岐 阜 県
宮川村教育委員会

堂ノ前遺跡 発掘調査報告書

国道360号線バイパス改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告



15号住居址出土土器（部分）

例 言

1 本書は、国道360号線バイパス改修工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査に関する報告書である。

2 発掘調査の対象となった家ノ下・堂ノ前・宮ノ前の3遺跡のうち、本書では堂ノ前遺跡を取り扱った。

3 本遺跡の発掘調査・資料整理・報告書刊行事業は次の要領で行なわれた。なお降雪期（12月～3月）の野外調査は不可能であり、該期は室内作業が主務となっている。

91年度 発掘調査（宮ノ前遺跡発掘と同時並行）

92年度 発掘調査（宮ノ前遺跡発掘と同時並行）

93年度 発掘予定地区完掘（宮ノ前遺跡発掘と同時並行）

94年度 資料整理（家ノ下・宮ノ前遺跡の発掘・資料整理と同時並行）
調査概報発刊

95年度 資料整理・報告書刊行事業（宮ノ前遺跡の発掘・資料整理、家ノ下遺跡の資料整理と同時並行）・報告書発刊（96年3月）

4 出土遺物は、宮川村教育委員会により、管理・保管・一部公開されている。

5 本調査は、岐阜県古川土木事務所施工の事業に関わるもので、古川土木事務所の委託により、宮川村教育委員会が実施した。調査団の構成は以下のとおりである。

調査団長 宮川村長 道下則明

調査副団長 宮川村教育長 野村恢司（～93・1）・谷口徹（93・1～）

指 導 早川正一（南山大学文学部教授） 岐阜県教育委員会文化課
本部事務局

幅雅久（～93・3）・森下真次（～94・3）・石腰豊（94・4～）

小島功（93・4～）・平田治美（～94・10）・岡田和子（94・11～）

道上圭（95・4～）

埋蔵文化財調査室

調査担当者 林 直樹 (90・4～、県教委より宮川村へ派遣)

調査員 大熊茂弘 (90・4～91・7、現在は各務原市教委勤務)

小島功 (93・4～、事務局兼務) ・立田佳美 (90・5～)

6 作業従事者は以下の通りである (堂ノ前遺跡調査参加者のみ、五十音順)。

[発掘作業] 新谷キヨ子・井尻利男・上野蓮枝・大上ヨシ子

大下キヨ子・大下公久・蒲義次・坂上和枝・坂本アヤ子・新家健吉

田頭マキノ・竹内義一・立田サヨ・立田隆資・谷口顕久・種村トミ子

谷畑通造・谷脇英子・寺門政雄・中瀬千秋・中谷伸次・中畑亀繁

西田ちづ子・西田ハル子・野村茂 (故人) ・山口勝美・山森みさを

[資料整理作業] 荒谷恵子・上崎恵子・川合美穂子・佐藤孝子・佐藤晴美

佐藤美保子・清水文代・田頭桂子・谷畑千春・寺門秋江・野道尚子

畠中裕子・政井順子・森下美千代・山小瀬弘子・吉田典子

[大学生] 秋山妙子 (大阪大学) ・阿部徹 (関西大学)

今成和弘 (愛知県立大学) ・岩田崇 (静岡大学) ・肘井仁美 (明治大学)

水橋公恵 (広島大学)

[高校生] 大下徹・大下浩史・小坂実・佐藤悦史・下林弘明・田下一郎

丸田英行・溝端泰彰

7 本書の挿図・図版作成および編集は、林・立田・小島の3名が行なった。
本文執筆は林と早川が担当し、立田・小島がこれを補佐した。

8 本書掲載の挿図類の縮尺は、住居址 1 / 60、炉址 1 / 15、土器・大型石器類実測図 1 / 3、小型剥片石器類 2 / 3 を基本とした (例外あり)。図版類 (遺物写真) については縮尺不同とした。

9 調査・資料整理・報告書作成にあたっては、下記の方々の御指導・御協力を得た。記して深甚なる謝意を表します (敬称略、五十音順)。

粟田泰夫・石原哲弥 (故人) ・岩花秀明・大江 侖・大野政雄・大熊厚志

岡村道雄・狩野睦・河野典夫・小島俊彰・小林達雄・齋藤基生・酒井重洋

田中彰・寺門隆治・土肥孝・戸沢充則・戸田哲也・藤田富士夫・吉朝則富

山本正敏・吉田英敏・渡辺誠

序 文

平成元年度に始まった「国道360号線バイパス改修工事に伴う発掘調査」は、関係各位の御協力の下、野外における発掘調査を無事終了することができ、ここに「堂ノ前遺跡発掘調査報告書」を発刊する運びとなりました。

堂ノ前遺跡は、縄文時代中期の中ごろ（約4500年前に推定）のムラのあと（集落遺跡）で、大量の土器や石器とともに、当時の人々の住まいのあとが約20軒ほど発見されております。

山あいの地に生活の場を求めた縄文人の営みの中には、現代に生きる我々の生活や行動様式のルーツがあるといっても過言ではありません。

たとえば、山菜や木の実、鳥獣や魚類などの利用法・保存法や、豪雪をしのぐ知恵と忍耐力は、縄文以来の伝統に基づくものと思われまじ、北陸系と信州系との2系統に大きく分けられる土器の文様やかたち、各地から持ち込まれた石器材料の数々は、当時の人々の文化系統や移動、物々交換などの経済活動の反映であると見られ、縄文人のもつバイタリティーの一端を垣間見るかのようであります。

さて、当村では本年度、報告書刊行に向けての諸作業を続ける中、埋蔵文化財の保管・活用を主目的とした「出土文化財管理センター」を建設いたしました。堂ノ前をはじめとする村内諸遺跡の出土遺物については、皆様方に御覧いただけるよう、同施設の展示室にて常設公開いたしております。

さらには本年度9月には、同施設竣工を記念した考古学シンポジウム「石棒の謎をさぐる」を実施し、県内外より多数の方々の御来村を仰いだ次第であります。当村では今後も、埋蔵文化財の積極的な保存及び活用を図り、活力ある地域づくりの源とする所存でございます。

末尾ではありますが、本報告書作成にあたって御協力を頂戴した諸機関・諸先生に対しまして、心よりの謝意を表しつつ、引き続き行なわれる家ノ下遺跡・宮ノ前遺跡の資料整理・報告書刊行事業につきましても、格別の御支援・御指導を頂戴できますようお願い申し上げます、報告書発刊の挨拶といたします。

平成8年3月吉日

宮川村長 道下 則明

本文目次

例言

序文

第Ⅰ章	経緯と経過	1
	第1節 経緯	1
	第2節 経過	1
	第3節 普及活動	2
第Ⅱ章	位置と環境	3
	第1節 地勢と地質	3
	第2節 宮川下流域の考古資料について	4
	第3節 遺跡の立地と環境	6
第Ⅲ章	基本層序と堆積年代	10
	第1節 基本層序	10
	第2節 土層の堆積年代とC14測定	11
第Ⅳ章	検出された遺構・遺物	15
	第1節 縄文早期・前期包含層の遺物	15
	(1) 早期 土器・石器	15
	(2) 前期 土器・石器・石製品	15
	第2節 縄文中期の遺構と遺物	17
	(1) 竪穴住居址と住居内出土遺物	17
	(2) 包含層出土遺物 土器・石器・土製品・石製品	27
	第3節 縄文後期の遺構と遺物	34
	(1) 竪穴住居址と住居内出土遺物	34
	(2) その他の出土遺物	34
第Ⅴ章	まとめ	35
	第1節 調査成果の要約	35
	第2節 考察・結語	39

挿図・集計表目次

第1図	宮川村管内図とおもな遺跡の位置	8
第2図	堂ノ前遺跡・家ノ下遺跡・宮ノ前遺跡の位置	9
第3図	堂ノ前遺跡の位置と周辺	9
第4図	基本層序	12
第5図	遺構配置図	13
第6図	4号住居址	44
第7図	4号住居址石囲炉・埋設土器	45
第8図	6号住居址	46
第9図	7・16・17号住居址	47
第10図	8号住居址	48
第11図	9・11号住居址	49
第12図	13号住居址	50
第13図	5・15号住居址	51
第14図	20号住居址	52
第15図	20号住居址石囲炉・埋甕	53
第16図	19・21・22号住居址	54
第17図	23号住居址	55
第18図	14・18号住居址	56
第19図	1号住居址および単独出土の埋甕	57
第20図	早期包含層出土土器	58
第21図	前期包含層出土土器	59
第22図	早期・前期包含層出土石器・石製品	60
第23図	早期・前期包含層出土石器	61
第24図	4号住居址出土土器	62
第25図	4号住居址出土土器	63
第26図	4号住居址出土土器	64
第27図	4・5号住居址出土土器	65
第28図	6号住居址出土土器	66
第29図	7号住居址出土土器	67
第30図	7号住居址出土土器	68
第31図	8号住居址出土土器	69
第32図	8号・9号住居址出土土器	70

第33図	9号住居址出土土器	71
第34図	9号住居址出土土器	72
第35図	動物意匠文土器	73
第36図	13号・15号住居址出土土器	74
第37図	16号住居址出土土器	75
第38図	17号・23号住居址出土土器	76
第39図	20号住居址出土土器	77
第40図	20号住居址出土土器	78
第41図	20号住居址出土土器	79
第42図	20号住居址出土土器	80
第43図	20号住居址出土土器	81
第44図	信州系土器	82
第45図	包含層出土信州系土器	83
第46図	北陸系土器	84
第47図	包含層出土北陸系土器	85
第48図	包含層出土北陸系土器	86
第49図	包含層出土北陸系土器	87
第50図	信州・北陸の両要素が混在する土器	88
第51図	粗製土器	89
第52図	包含層出土粗製土器	90
第53図	土器片円盤・土板・土偶	91
第54図	6号住居址出土石皿	92
第55図	石皿	93
第56図	石皿	94
第57図	石皿	95
第58図	石皿	96
第59図	住居址出土大型砥石	97
第60図	大型砥石	98
第61図	住居址磨石類	99
第62図	住居址磨石類	100
第63図	住居址磨石類	101
第64図	礫石錘	102
第65図	包含層出土礫石錘	103
第66図	磨製石斧	104

第67図	打製石斧	105
第68図	横刃形石器・擦切石器・小型砥石・石核様石器・礫器	106
第69図	住居址出土石鏃・石錐・異形石器	107
第70図	住居址出土削器・石匙・調整剥片類	108
第71図	包含層出土石鏃・石錐	109
第72図	包含層出土異形石器・石匙・粗製石匙	110
第73図	包含層出土削器	111
第74図	4号・20号住居址石棒	112
第75図	石棒・石棒未製品	113
第76図	後期遺物	114
(付編)	石器集計表	115

図版目次

図版 1	遺跡遠景（俯瞰写真）	123
	遺跡遠景（俯瞰写真）	123
図版 2	遺構プラン検出状況	124
	遺構掘り下げ作業	124
図版 3	遺跡内土層堆積状況	125
	遺構清掃作業	125
図版 4	中学生体験学習	126
	1号住居址炉址	126
図版 5	4号住居址	127
	4号住居址炉址（部分）	127
図版 6	5・6・15号住居址	128
	6号・15号住居址	128
図版 7	7・16・17号住居址	129
	7号住居址埋甕	129
図版 8	8号住居址	130
	9号住居址覆土土器	130
図版 9	9号住居址	131
	11号住居址炉址	131
図版10	動物意匠文土器検出状況	132
	13号住居址覆土堆積状況	132

図版11	13号住居址炉址	133
	5号・6号・15号住居址	133
図版12	動物意匠文土器検出状況(15号住居址内)	134
	16号住居址	134
図版13	17号住居址埋甕	134
	19号住居址炉址	135
図版14	20号住居址炉址(覆土堆積状況)	136
	20号住居址	136
図版15	20号住居址埋甕	136
	20号住居址土器検出状況	137
	20号住居址周溝(部分)	137
	21号住居址炉址	137
図版16	14号住居址(後期)	138
	18号住居址(後期)	138
図版17	早期包含層遺物	139
	前期包含層遺物	139
図版18	前期包含層遺物	140
	前期中葉尖底土器	140
	前期石皿	140
図版19	4号住居址出土土器(1)	141
図版20	4号住居址出土土器(2)	142
図版21	4号住居址出土土器(3)	143
	13号住居址出土土器	143
図版22	4号住居址出土石器	144
	4号住居址出土石皿	144
	4号住居址出土砥石	144
図版23	4・20住居址石棒接合資料	145
	4号住居址石棒検出状況	145
	4・13住居址石棒片	145
図版24	5号住居址出土土器	146
	5号住居址出土石器	146
図版25	6号住居址出土土器(1)	147
図版26	6号住居址出土土器(2)	148
図版27	6号住居址出土石器	149

	6号住居址出土石皿	149
	6号住居址出土石核様石器	149
図版28	7号住居址出土土器	150
図版29	7号住居址出土石器	151
	7号住居址出土石皿	151
	7号住居址出土石皿(部分)	151
図版30	8号住居址出土土器(1)	152
図版31	8号住居址出土土器(2)	153
	8号住居址出土石棒	154
図版32	8号住居址出土石器(1)	154
	8号住居址出土石器(2)	154
図版33	9号住居址出土土器	155
図版34	9号住居址出土石器	156
	9号住居址土器出土状況	156
図版35	動物意匠文土器(全体・部分・破片)	157
図版36	13号住居址出土土器(1)	158
	13号住居址出土土器(2)	158
	13号住居址出土石器・石製品	158
図版37	15号住居址出土土器	159
図版38	15号住居址出土石器	160
	16号住居址出土土器(埋甕炉内出土)	160
	16号住居址出土土器	160
	16号住居址出土石器	160
図版39	17号住居址埋甕	161
	20号住居址埋甕(旧・新)	161
	20号住居址出土土器(1)	161
図版40	20号住居址出土土器(2)	162
図版41	20号住居址出土石器(1)	163
	20号住居址出土石器(2)	163
図版42	20号住居址出土石器(3)	164
	14号・18号住居址 出土遺物	164
図版43	包含層出土土器(信州系)	165
図版44	包含層出土土器(北陸系)	166
図版45	包含層出土土器(粗製土器)	167

圖版46	包含層出土石皿·····	168
圖版47	包含層出土磨石類(1)·····	169
	包含層出土磨石類(2)·····	169
圖版48	包含層出土礫石錘(1)·····	170
	包含層出土礫石錘(2)·····	170
圖版49	包含層出土敲石類(1)·····	171
	包含層出土大型砥石·····	171
圖版50	包含層出土磨製石斧(1)·····	172
	包含層出土磨製石斧(2)·····	172
圖版51	包含層出土打製石斧(1)·····	173
	包含層出土打製石斧(2)·····	173
圖版52	包含層出土橫刃形石器·····	174
	包含層出土擦切石器·····	174
圖版53	包含層出土石鏃·····	175
	包含層出土石錐·石匙·異形石器·····	175
圖版54	包含層出土削器類·····	176
	包含層出土石棒·····	176
圖版55	包含層出土土製品·····	177
	包含層出土調整剝片類·····	177

第Ⅰ章 経緯と経過

第1節 経緯

国道360号線バイパス改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼書が、岐阜県古川土木事務所から宮川村教育委員会に提出されたのは、1989年7月24日のことであった。工事施工区間には、家ノ下遺跡・堂ノ前遺跡・宮ノ前遺跡の3遺跡（既知の埋蔵文化財包蔵地）が所在するため、工事施工に先立つ緊急調査が急務となったからである。

県内屈指の積雪地帯である宮川村では、富山県方面に向う国道360号線が冬期閉鎖されるため、交通上の大きな障害となり村民の生活や経済活動の妨げとなっている。国道バイパス改修工事は、東海・北陸を結ぶ幹線道路の整備事業として、村内外の関係各機関・地域住民の熱い期待を担いスタートしたわけである。

村教育委員会では、ニコイ岩陰遺跡（縄文早期）・塩屋金清神社遺跡（縄文後期）・稲葉遺跡（旧石器）など、村内の考古学調査を手懸けてきた南山大学文学部人類学科の早川正一教授に工事予定地区内の試掘を依頼、89年には宮ノ前遺跡の一部が早川教授の手により調査された。

この時の調査の出土遺物の年代は、旧石器時代終末期から歴史時代にまで及ぶものの、そのうちの大半が縄文時代中期後葉に属する土器・石器類であると判断されている。

予想以上の遺物出土量への対応を余儀なくされた村教育委員会当局では、調査体制の本格的整備を図り、翌90年度より村教育委員会事務局を本部とする発掘調査が行なわれることとなり、現在に至っている。

第2節 経過

堂ノ前遺跡の調査の進行に関しては、以下の通りである。

- 91年度 発掘調査（宮ノ前遺跡発掘と同時並行）
- 92年度 発掘調査（宮ノ前遺跡発掘と同時並行）
- 93年度 発掘予定地区完掘（宮ノ前遺跡発掘と同時並行）
- 94年度 資料整理（家ノ下・宮ノ前遺跡の発掘・資料整理と同時並行）
発掘調査概報発刊
- 95年度 資料整理・報告書刊行事業（宮ノ前遺跡の発掘・資料整理、家ノ下遺跡の資料整理と同時並行）

第 3 節 普及活動

発掘調査の成果を、研究者・研究団体はもとより、広く一般に公開することを目的とした諸活動は随時行なった。

- ・ 諸団体の視察（縄文時代文化研究会・高山考古学研究会・東海民具学会・萩原町教育委員会発掘調査会などが、視察・資料研究のために来村。）
- ・ 現地説明会
- ・ 発掘体験学習（村内の小中学生・一般村民・飛騨こども考古学会・高山考古学研究会が参加。）
- ・ 石器作り体験学習（村内の小中学生・一般村民が参加。）
- ・ 遺物の公開展示（郷土文化伝習館で展示、1995年9月以降は出土文化財管理センター展示室にて公開。）

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地勢と地質

宮川村は岐阜県の西北端、飛騨高地の北部に位置し、東は吉城郡神岡町に、西南は同郡河合村及び古川町に、北は富山県に境を接する。村の中央部を北流する宮川（神通川水系）は深いV字谷の峡谷を形成し、この宮川に沿ってJ R高山本線及び国道360号線が通じており、流域に広がる河岸段丘以外は村内のほとんどが山地で占められている。

標高1000mから最高1600mに及ぶ山々の間からは、幾筋もの深い溪流が宮川本流に向って流れこんでいる。この地域の山塊は、全般的に見て標高800～900mを越すと、高低差が少なくなだらかな高原上を呈するようになり、山頂も平坦に近いのが特徴である。万波高原やニコイ高原はその代表的な例といえよう。

この地は日本でも最古と言われる飛騨帯に属し、主に飛騨変成岩類（飛騨片麻岩）と船津花崗岩類（黒雲母花崗閃緑岩・花崗岩）から形成されている。宮川村内においては飛騨変成岩類が広範囲に分布するが、これに囲まれるようにして2地域、周辺部に1地域、船津花崗岩類が分布する（塩屋金清神社遺跡はこのうちのひとつに立地する）。その他に、石灰岩も片麻岩に挟まれて大きな層を形成したり、レンズ状になって存在するが、変成作用を受けて結晶質になっているため、地質年代の年代鑑定に大きな役割をもつ化石を検出することは難しい。

船津花崗岩類は、日本で唯一の中生代に形成された花崗岩で、飛騨片麻岩の内部や周辺部に分布している。飛騨片麻岩に広域にわたって影響を与えているのに対し、それ以外の周辺の岩石にほとんど熱変成作用を与えていない特異な岩石である。

飛騨片麻岩については、その原石、変成作用を受けた年代や回数など、明確にされていない点が多い。一般に明瞭な縞模様をもち、周辺部では黒鉛鉱床が豊富になるなどの特徴をもつ。とくに隣村である河合村荒町付近に多く近年まで利用されていたが、中心部である宮川村では鉱床も比較的少なく品質も劣るらしい。黒鉛鉱床のうち、泥質を呈するものは、縄文時代早期前葉の沢式土器の素材として利用されたと考えられている。飛騨地域では、河合村天生峠や神岡町巢山の鉱床が有名であるが近年、宮川村万波高原の工事現場付近から、飛騨片麻岩のあいだに挟まれたかたちで検出された（1995年8月確認）。

坂上地区においては、岸奥地区の嫁ヶ淵付近に多く見られる黛色をした輝石片厚狭岩が、厚層になることなく結晶質石灰岩や角閃片麻岩と互層したり、細い花崗岩脈に貫かれたりしながら国道360号線に沿って続いている。透輝石角閃片麻

岩、黒雲母透輝石石英片麻岩、石灰質片麻岩などがこれに付随する。

また村の西南西から東北東に向けて、日本でも有数の活断層として名高い跡津川断層が走行している（1858年の安政大地震もこれに起因する）。

断層線は河合村天生峠南方より、野首・林・西忍・丸山の各地区からニコイ高原をへて、富山県の立山付近までほぼ直線上に続き、野首・林地区では宮川を縫うようにして約200mにわたって続いている。このうち野首地区では堂ノ前遺跡が、西忍地区では宮ノ前遺跡が、断層崖の前面を中心に立地している。

跡津川断層は垂直方向より水平方向の動きが大きいため、河川に遭遇する部分ではほぼ直角に川の流れを変えたり、山の尾根のずれなどを引き起こしている。このほかにも跡津川断層に平行したかたちで、水無断層・杉原断層などが、斜交及び直交するかたちで無雁断層・菅沼断層・打保断層・万波川断層などが存在する。時代が古いことから断層崖がはっきりと認められるものは少ないが、付近の深谷にはこれらの断層に起因するものが多く、大小さまざまな断層がこの地の地形に多大な影響を及ぼしている。

（「国道360号線バイパス改修工事に伴う発掘調査概報」1995より引用、一部に加筆修正を行なった。）

第2節 宮川下流域の考古資料について

飛騨北半部を北流する宮川は、河合村角川地区・宮川村落合地区付近で小鳥川と合流し、県境付近で高原川と合流し神通川となる。ここでは、小鳥川合流点から高原川合流点までを「宮川下流域」と仮称しておこう。

宮川下流域に形成された山峡地帯は、飛騨盆地部（古川・高山地域）と神通川流域・富山平野方面とを結ぶ交通路の役割を果たしたようであり、山峡の各所にある河岸段丘上の平坦地には、旧石器～縄文時代の遺跡が営まれている。他方、弥生・古墳時代以降の遺物の出土例・採集例はきわめて少ない。

(1)旧石器および縄文草創期・早期

宮川下流域における人類文化の痕跡は、後期旧石器時代にまでさかのぼる。岩野遺跡（大無雁地区）や稲葉遺跡（西忍地区）で採集されている硬質頁岩製の石刃やナイフ形石器・搔器などがそれで、富山県大沢野町直坂遺跡から出土した石器群とのあいだに近親性をもつ。

硬質頁岩自体、北陸を中心に産出すると思われる石材であり、宮川下流域には見られない非在地的なものである。この種の石器文化は、東北日本の東山系石刃文化の流れをくむものと推測されている。

そのほかの旧石器時代遺物としては、稲葉遺跡に近接する宮ノ前遺跡で出土し

た国府型のナイフ形石器が挙げられる。

つづく縄文草創期の資料については、わずかに岩野遺跡採集の有舌尖頭器1点を数えるのみであったが、最近行なわれた宮ノ前遺跡の調査成果により、事情は一変した。旧石器時代終末から縄文時代草創期・早期にかけての文化層が、以下の如く層位的に検出されたからである。

- 押型文土器包含層（第10～12層）
- 表裏縄文土器包含層（第13層）
- 隆起線文土器包含層（第15層）
- 神子柴・長者久保系石器群包含層（第16層）
- 細石刃包含層（第17層）
- ナイフ形石器包含層（第18層）

このうち第17・13・12の各層は有機物に恵まれており、植物や昆虫の遺存体が検出されている。有機物遺存体は、該期の実年代測定や自然環境復元のための資料として貴重である。旧石器から縄文早期にいたる宮ノ前遺跡の層位と遺物の堆積状況は、短期間のキャンプ生活が繰り返された結果を示唆するものと思われる。細久保式に属する押型文土器片や石器片・獣骨が検出されたニコイ岩陰遺跡（菅沼地区）の調査成果と同様の事例であろう。

(3) 縄文前期・中期・後期・晩期

前期から中期前葉にかけての資料はきわめて乏しい。堂ノ前遺跡下層や宮ノ前遺跡で確認された前期末包含層の出土遺物、村内牧戸地区・高牧地区などでわずかに採集されている中期前葉土器の破片（新崎式・貉沢式など）が知られているのみである。

中期中葉の良好な資料は、今般調査された堂ノ前遺跡より検出された。同時期の遺跡としては、河合村下田遺跡や古川町中野山越遺跡があり、相互の比較検討が望まれる。北陸系中期土器の影響は、分水嶺を越えた久々野町・小坂町など飛騨南部方面にも及んでいるが、宮川下流域を含めた飛騨北部の地は、北陸系土器と信州系土器とが競合する地域として評価されている。

中期後葉から後期前葉にかけての資料は、杉原地区の瑞穂遺跡よりその存在が確認されている。中期後葉を迎えた宮川下流域の地は、北陸系の串田新式土器の強い影響下にあったようであり、杉原のみならず村内各地からの採集品の中には、串田新式と思われる破片が相当数含まれている。

続く後期の資料は、塩屋金清神社遺跡の調査によって検出された。金清神社遺跡は裏山にある柱状節理する溶結凝灰岩を利用した石棒製作址で、この地の石棒は飛越各地にもたらされているようである。主体を占める土器は、関東編年にい

う堀之内2式から加曾利B1式にあたり、該期が石棒製作のピークであったことを示唆している。

後期中葉から晩期中葉にかけての土器様相は、やはり富山・石川を中心とした北陸西部地域に近い状況を示す。林地区の家ノ下遺跡はその典型であり、類似資料は河合村室屋遺跡や古川町中野山越遺跡でも得られている。飛騨地域に多く見られる石冠や御物石器の多くは、遺物の刻文や出土土器の状況から考えて、後期末～晩期中葉（八日市新保・御経塚・中屋に相当する諸型式）の所産であると思われる。

中屋式に後続する晩期後葉の北陸系土器（下野式）の検出例は乏しい。晩期終末を迎えると、飛騨北部の地でも一転して中部高地や東海方面の影響が強くなるようである。家ノ下遺跡や近年調査された国府町立石遺跡などがその具体例である。

弥生文化の到来を告げる水神平式土器は、杉原・西忍・林などの村内各地の遺跡から、小量ではあるが破片資料が発見されている。また西忍や林からは、弥生文化の所産と思われる磨製石鏃や扁平片刃石斧が採集されている（高山市郷土館蔵、高山市教委「前平山稜遺跡・赤保木遺跡」1993）。

第3節 遺跡の立地と環境

堂ノ前遺跡は村内の野首地区に所在する（第1・2・3図参照）。村内諸集落のうち野首地区・林地区は、宮川右岸に発達した同一河岸段丘上に立地している。河岸段丘上には、南方の山塊より供給された扇状地由来の堆積物が被覆しているが、その流出は現在の地形変換ライン付近（現国道やJR高山本線が通過するあたり）でとどまっているらしい。段丘北側を流れる宮川に向っての扇状の張りだしは、扇状地の流出によって形成されたものではなく、河川の蛇行・曲流によって浸蝕されたことにより出来上がったと考えるべきであろう。

堂ノ前遺跡は、扇状の張りだし部分の南端近くに形成されている。野首とは本来、平坦地端部の狭隘な地形を言いあらわした言葉であるらしい。

遺跡は、川に面する最低位段丘面に形成されているが、遺物の分布状況から見て、JR線を挟んだ背後の山塊付近まで広がりを見せるものと推測される（野首宮ノ尾遺跡）。したがって今回の調査区は、遺跡の中心部というよりむしろ縁辺部に設定された可能性が高い。

遺跡の北東辺には跡津川断層が走行している。断層崖の高さは現状で約5m程度で、その前面にはかつて「おくごうたんぼ」と呼ばれた窪地が存在したという（基盤整備により消失）。

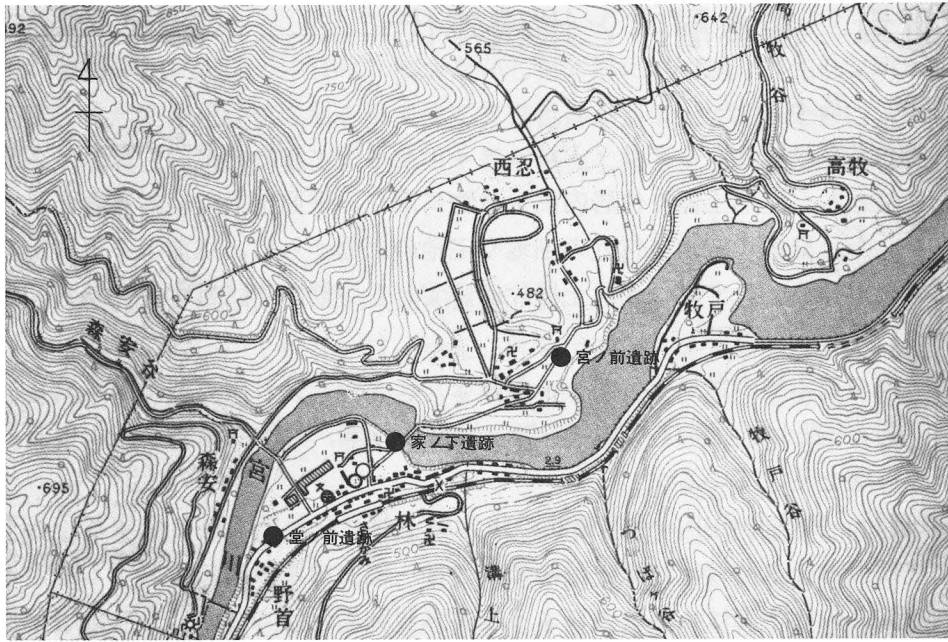
この窪地は断層の運動に伴って形成されたもの（断層角窪地という）と見られ、宮ノ前遺跡で検出された窪地や、ニコイの池ヶ原湿原などもその一例と考えられる。断層線が縦横に走る飛騨・美濃の地においては、遺跡の分布調査や試掘を行なう際に、断層活動に伴う断層角窪地や湧水点の出現、およびその周囲における遺跡の形成について、特別な注意を払う必要があるだろう。

なお堂ノ前という小字名は、遺跡内に所在した阿弥陀堂に由来する名称であるらしい（古田外季二氏が管理、現在は国道改修工事に伴い別地点に移転）。阿弥陀堂のあった場所、すなわち今回の調査区のある小字名は本来「家ノ前」であり、遺跡名となった「堂ノ前」とは、国道を挟んだ反対側の南側一帯を指した小字名である。

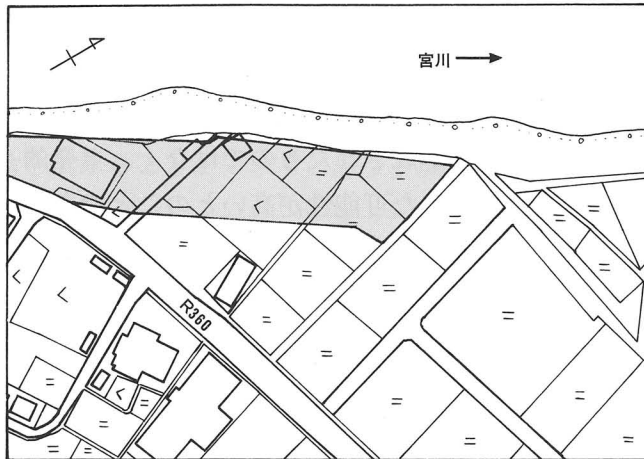
阿弥陀堂の本尊は、上品上生印を結び蓮華座に座している。古式を模した江戸期の木製仏で、遊行僧ないし修験者が刻んだものと推測がなされているが、はっきりしたことはわからない。阿弥陀堂の由来は不詳であるが、元禄年間には2畝10歩ほどの敷地を所有していたと言われる。本来は付近一帯を寺域とした比較的規模の大きい寺院があった可能性が高い（『宮川村誌』1981）。

今回の調査では、江戸期～明治初期のものと推測される土葬墓の痕跡が複数検出された。そのほとんどが耕作や樹木の根により破壊されており、人骨片や六道銭と思われる近世銭（渡来銭・寛永通宝）が耕作土に混じっている程度の状況で、規模や内容を明らかにすることはできなかった。

この土葬墓群などは、あるいはこの地にあった寺院と関連するものなのかも知れない。



第2図 堂ノ前遺跡・家ノ下遺跡・宮ノ前遺跡の位置 (1/25,000)



第3図 堂ノ前遺跡の位置と周辺 (1/2,000)

第Ⅲ章 基本層序と堆積年代

第1節 基本層序

調査の基本単位となるグリッドは4×4mを単位とした。遺物の採取はグリッドを単位とし、完形土器や住居内出土遺物に限り、平面位置や絶対高を記録することとした。発掘予定地区付近の畑地や宅地の周囲からは、以前より縄文土器・石器の類が採集されていたが、土器片はいずれも中期中葉に属する北陸系・信州系のものであった。

遺跡内の基本層序は以下の如く、おおまかに5層に分けられる（第4図）。

【第1層】 表土層。耕作や樹木の根、近世土葬墓、現代の建築基礎などにより、攪乱・破壊を受けている。

【第2層】 縄文時代中・後期遺物の包含層。おおむね黒褐色を呈する。若干の縄文後期遺物をのぞけば、出土遺物の大半は、縄文中期中葉に所属するものと思われる。この第2層は、ところによって腐食質灰褐色砂の間層により分層できる（14号住居、D32・E32グリッド付近）。この腐食質灰褐色砂には、後期中葉の遺構（第14号住居址）が掘り込まれていた。したがって第3層は場所により、

- a 後期住居（14号住居址）の検出面のある層。黒褐色。後期遺物の包含層。
- b 腐食質灰褐色砂層。後期に属する14号住居の基盤層。
- c 中期中葉遺物の包含層。

の3つの層位に細分が可能である。

【第3層】 洪水堆積層。黄褐色を呈する砂層で、宮川本流の氾濫による河川堆積物と判断される。肉眼観察による分層はできない。堆積状況から見て、定期的な河川氾濫の繰り返しによって形成されたものではなく、単発的・偶発的に起きた洪水により、いちどきに堆積した可能性が高いとのことである（栗田泰夫氏の御教示、後述）。

【第4層】 縄文時代早・前期遺物の包含層。黒褐色あるいは暗黄褐色を呈する。
a・bの2層に分層が可能である。

a 下層に比べ粒子が細かく黒っぽい。縄文前期遺物の包含層である。遺物の年代は一様ではない。

b 上層に比べ粒子が荒くなる。やや黄味を帯びる。早期遺物の包含層である。細久保式に比定可能な早期押型文土器片やそれに伴う石器群が検出された層であり、堂ノ前遺跡では最古の文化層にあたる。

【第5層】 河川堆積物の互層がつづく層。黄褐色を呈する砂層・礫層により形成されている。場所によっては灰褐色の厚い砂層が堆積している。遺物は検出さ

れていない。

縄文中期の竪穴住居の中には、第3ないし第4層にまで掘りこまれたものがあるが、住居廃絶後に第3層を形成する黄褐色砂が遺構内に流れこむことがあるため、遺構覆土と遺構構築面の土色・土質が区別し難く、遺構平面プランの確認は容易ではなかった。

第2節 土層の堆積年代とC14測定

第4層からは北白川下層Ⅱc式に比定される土器が、また第3層からは新道式土器を伴う住居が検出されていることを勘案するならば、第3層形成の起因となった河川氾濫の発生年代を、前期後半～中期中葉初頭の時期に限定することができよう。

このような洪水の痕跡は、当遺跡より近い家ノ下遺跡地内の調査では検出できなかった。この洪水の発生原因は、遺跡付近の河川を斜めに横切る活断層の運動にあると思われる。おそらくは断層の運動により、遺跡近くの川底が一時的に上がったことが、洪水を発生せしめた直接的原因となったのだろう。

1982年に行なわれた跡津川断層野首地区の調査（京都大学防災研究所）では、今回行なわれた埋蔵文化財調査区の隣接地に試掘坑が設けられている。さらに1992年には、通産省地質調査所の手による再調査が、1982年の調査地点付近で行なわれている。

82・92年の断層調査時の土層観察図と、今回の堂ノ前遺跡の基本層序図とは、比較検討が可能である。さらに、断層調査の際に行なわれたC14年代値測定（土壌サンプルによる）の結果と、検出された土器型式による相対年代を比較すると、次のような推論を試みることができると思う。試案として提示しておく。

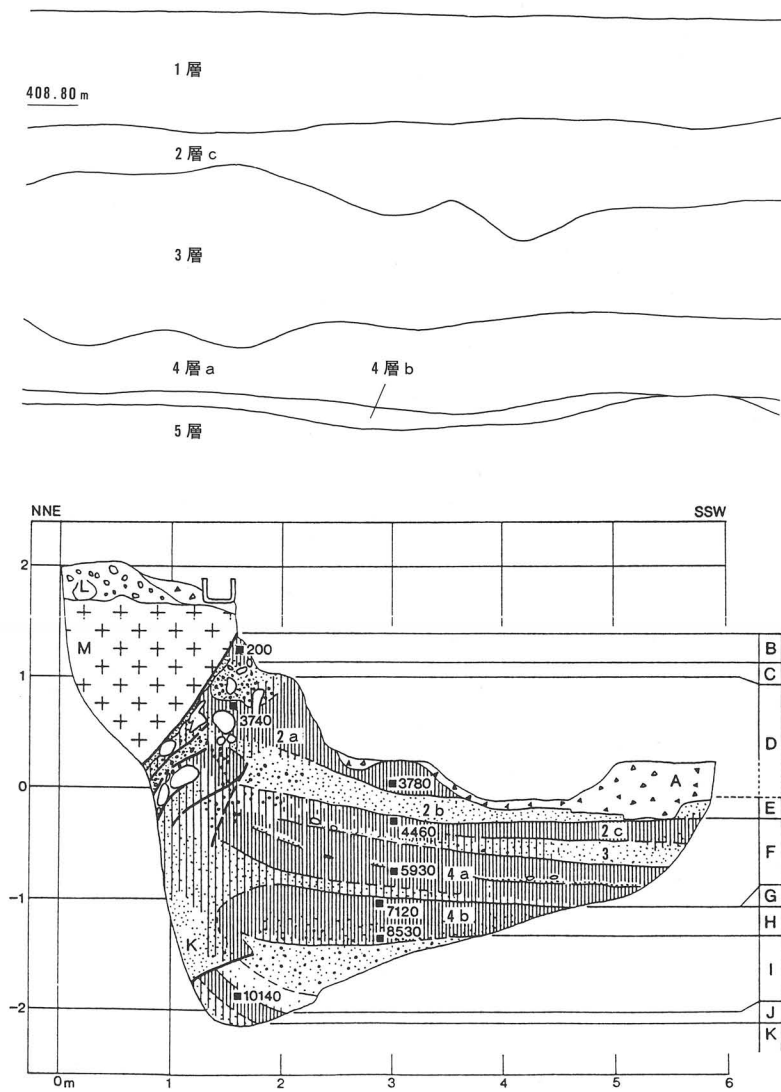
層位	1982年調査	1992年調査	縄文土器の相対年代
第2層 a	3150±90	3740、3480	後期
b			
c		4460	中期中葉
第3層	5200±250		前期後半～中期中葉前半
第4層 a	5390±120	5930	前期
b	8340±260	8539、7120	早期後半

このデータは、全国各地で行なわれているC14測定の結果とも整合的であるとい

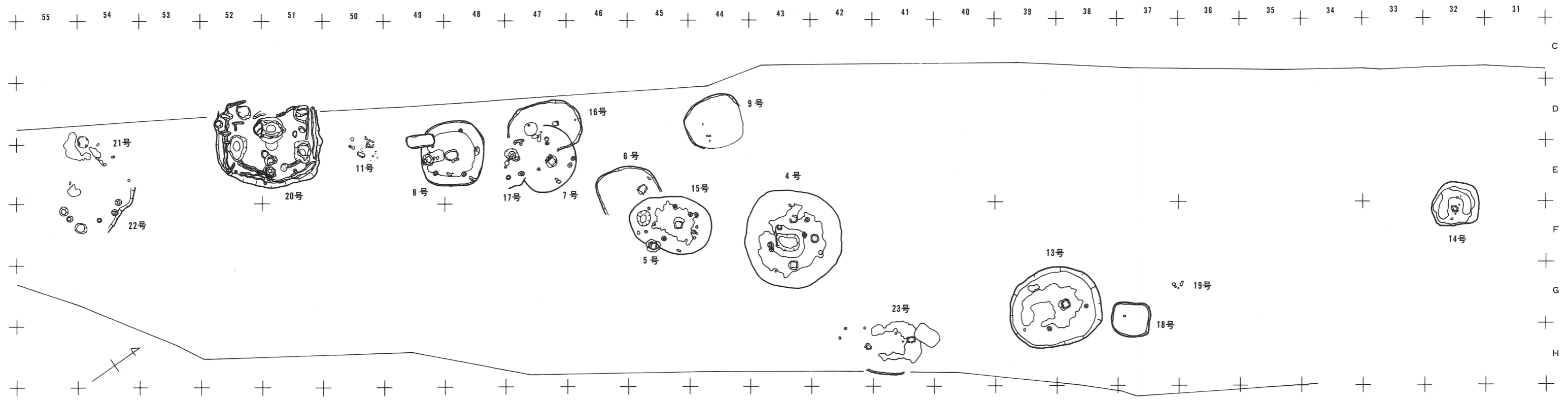
える。

(活断層研究会「1982年跡津川断層(野首地区)トレンチ調査」『活断層研究』3
1986、栗田泰夫・佃栄吉「最近1万年間における跡津川断層の活動」日本地震学
会1993年度秋期大会講演要旨を参照)。

第4図 遺跡内基本層序と断層トレンチ調査断面図 (E40グリッド)



(栗田・佃1993に加筆)



第5図 遺構配置図 (1/250)

第Ⅳ章 検出された遺構・遺物

第1節 縄文早期・前期包含層の遺物

(1)早期

[土器] (第20図、図版17)

早期包含層の最下層からは、細久保式（早期後半）に属する押型文土器片が出土している（第20図）。破片はいずれも楕円ないし山形の密接施文で、焼成は良好、やや黄味を帯びる淡い赤褐色を呈するものが多い。本包含層中には、胎土に黒鉛を含む個体や帯状施文の押型文土器片（いわゆる沢式土器）は含まれていなかった。

押型文土器出土層位の真下は、すでに河川堆積の土砂である。本包含層（＝細久保段階）は、今回の調査で検出された当遺跡における最古の文化層として位置付けられよう。

[石器] (第22図1～3、第23図1、図版17)

細久保式押型文土器と同一層位より、礫器1点・石鏃2点・削器1点・ピエス＝エスキュー1点出土している。

礫器は花崗閃緑岩の川原石製。片面に単設の剥離面を作出し、これを打面とした刃部を設けている（第23図1）。石鏃は下呂石製およびチャート製の鋏形鏃で、前者は脚部欠損品（第22図2）、後者は完形品である。ピエス＝エスキューはチャート製で、両極に階段状剥離が見られ両側面に剪断面を有する。本来は削器ないし調整剥片であつたらしく、側面片側には細部調整痕が残っている（第22図3）。削器はチャート製で片側に細部調整痕が見られる（第22図1）。

(2)前期

[土器] (第21図、図版17・18)

・前期初に位置付けられる無文指頭押圧土器（通称オセンベ土器）の破片が出土している（第21図2～4）。

・南太閤山Ⅱ式（前期中葉）に併行する尖底深鉢がほぼ完形で出土している（第21図9）。口縁部は若干外反。焼成は赤褐色で、胴部の一部には炭化物が付着しており、口縁直下に補修孔が4ヶ所見られる。内面には条線様のはっきりしない調整痕残り、胎土には繊維が含まれているようである。ループをもつ原体（環付縄原体）が、横位に26段前後にわたって施文されている。施文幅は約1～1.5cm程度。

・口縁部から頸部にかけての部位に半截竹管文（コンパス文を含む）が、胴部に羽状縄文が施文される前期中葉の土器（第21図5～8）。黒浜式に併行するも

のと思われる。南太閤山遺跡に類似土器片が出土している。

・そのほか、前期後半の北白川下層Ⅱc式に属する土器片が出土（第21図1）。薄手で焼成はよく、淡い褐色を呈する。

【石器】（第22図4～9、第23図2～5、図版18）

石皿1点・磨石類10点・礫器1点・石匙1点・石錐1点のほか、剥片（調整剥片1点・使用痕剥片3点・受熱剥片1点を含む）や削片が出土している。打製石斧・石鏃は未検出であったが、前述の調整剥片1点は石鏃未製品の可能性も考えられる。

石皿は盤状で浅いくぼみをもつ（第23図5）。多孔質安山岩製。磨石類は1点（砂岩製）をのぞき、すべて多孔質安山岩である。礫器は凝灰岩製（第23図3）。石匙は縦形でチャート製（第22図7）。稜線を残す縦長の石刃様剥片を素材としている。石錐はチャート製（第22図8）。両面加工で断面形は三角形を呈する。基部と錐部の区分は不明瞭である。

【石製品】（第22図10、図版18）

玦状耳飾の完形品が1点出土している（第22図10）。蛇紋岩製品。

第2節 縄文中期の遺構と遺物

(1) 竪穴住居址と住居内出土遺物

竪穴住居址およびその痕跡が検出されている。住居壁面が確認し難かったため、石囲炉や床面のみを検出し得た遺構もあった。これも住居の残欠と見なし、通し番号を付することとした。

以下、住居の検出状況及び出土遺物について略記したい。

1号住居（第19図1、図版4）

〔時期〕 不明。形態から見て、中期中葉後半以降の所産と思われる。

〔遺構〕 E42・D42グリッドに所在。石囲炉のみ検出。炉縁の一部が破損している。目立った遺物の出土は見られない。

2号住居（欠番）

3号住居（欠番）

4号住居（第6・7図、図版5）

〔時期〕 埋設土器の年代から見て、中期中葉前半の所産と考えられる。

〔遺構〕 F43グリッドを中心として所在する。小型の石囲炉4基を有する特殊な住居である。上山田式の前段階に比定される埋設土器を有する。

住居は、直径6.4mほどの円形プランを呈し、小型石囲炉が4基、住居内に整然と設営されていた。このうち1基の一隅には、土器片を組みあわせた遺構（副炉の一形態か）が併設されている。また住居の中央部からは、不定形を呈する大型土坑が検出された。住居中央部の遺構周囲からは床面が検出されているが、明瞭な柱穴は確認できなかった。

〔土器〕（第24～27図、図版19・20・21）

埋設土器は、上山田式の前段階に所属する（第24図1）。器面は隆帯と半隆帯により飾られており、半隆帯の各所に三叉文があしらわれている。隆帯中央部を走る稜線の両側には、篋状工具により刻目が施されている。

覆土中には、上山田のほか・古府（第24図4）・古串田新（第26図1）の各型式が混在していた。また井戸尻末～曾利I式併行の中野山越A類に該当する（第24図5）も含まれている。土器はいずれも、大枠では中期中葉に属するものであるが、時間幅があるので一括性を認めることはできない。

〔石器〕（図版22）

石鏃4点、石錐1点、削器5点、磨製石斧1点、石錘1点、磨石類4点、敲石1点、石皿1点、砥石1点が出土。このうち下呂石製および珪質頁岩製の石鏃（第69図1～3）、礫石錘（第64図1）、磨石類（第61図1）は、床面より出土している。また下呂石製の石錐は、ピエス＝エスキューのスポールを利用したもの

である（第69図23）。礫の脱落による自然の穴をもつ砂岩製の大型砥石には、研磨痕以外にも敲打痕が残されている。台石としての用途にも供された可能性がある（第59図2）。

〔調整剥片類〕 調整剥片1点が出土。

〔石製品〕（第74図、図版23）

同一個体と思われる彫刻石棒の頭部片（第74図1）と基部片（第74図3）が出土。塩屋石（村内塩屋に産する特殊な溶結凝灰岩）製品。頭部端に平坦面をもち、側面には敲打による装飾（鏝や隅丸三角形の浮文）を有する。一方の基部端にも平坦面が作出されている。

4号住居出土の石棒頭部と接合する胴部破片（第74図2）は、20号住居の覆土上層部分より出土した。また20号住居出土の胴部破片と接合する小型破片2点が、13号住居の覆土より出土している。

〔植物遺存体〕 大型土坑中より堅果の果皮が検出されている。種別不明。

5号住居（第13図、図版6）

〔時期〕 切りあい関係から見て、15号住居（中期中葉前半）より新しい。5号住居覆土中に存した土器は、いずれも中期中葉後半に所属する。やや大きめの石囲炉の規模や覆土中の土器の年代から見て、中期中葉後半の所産と見るのが妥当であろう。

〔遺構〕 F45グリッドに所在する。石囲炉のみを検出。長楕円形・扁平形を呈する川原石を組み合わせた方形の炉で、うち3辺の石囲いが二重になっている。二重の部分は台石としてもちいられた可能性が高い。炉の外縁は0.7×0.52m、炉縁よりの深さは0.16mほど。

〔土器〕（第27図2～5、図版24）

大型の浅鉢は石囲炉に近接して出土している（第46図2）。床面より出土したと認めてよい状況にあった。内外ともに丁寧に研磨されており、口縁部文様帯には浮文をもつ。覆土と思われる部分からは、曾利Ⅱ式・古府式併行の土器が出土している（第27図2・5）また信州・北陸の両要素が混在する個体（第50図1）も存在する。

〔石器〕（図版24）

打製石斧1点、磨石類1点が出土。打製石斧（第67図3）は炉内で、磨石類（第61図3）は床面から出土している。

6号住居（第8図、図版6）

〔時期〕 床面直上出土の吊手土器は、曾利Ⅱ式併行の所産と思われる。住居も該期のものと見るべきであろう。

[遺構] E46・F46グリッドを中心に所在する。長楕円形・扁平形を呈する川原石を組み合わせた石囲炉を有する。平面プランは方形で、外縁が0.7×0.5mほど。炉縁よりの深さは0.12mほど。

半壊していたために住居プランの全容は把握し難いが、隅丸方形に近いと思われる。辺3.9m。床面及び床面近くの覆土中に炭化物片（クルミ片など）・炭化物粒子が多く含まれていた。石器や剥片類の中には、受熱したものが多く見られる。焼失家屋の可能性も考えられる。

[土器]（第28図、図版25・26）

完形に近い吊手土器が床面直上より出土（第28図1）。曾利Ⅱ式に併行するものであろう。覆土からは、井戸尻末併行（中野山越A2類）の小型土器（第28図3）、大木8b式の影響を受けたとも思える曾利風の台付鉢（第28図2）、縄文や条痕が施文された粗製土器（第28図4～6）が出土している。

[石器]（図版27）

石鏃4点、石錐1点、石匙1点、打製石斧2点、横刃形石器2点、擦切石器6点、磨製石斧4点、磨石類7点、石皿1点、砥石1点、石核様石器1点が出土している。このうち磨製石斧（第66図3）と磨石類1点（第61図2）が床面から出土している。また頁岩製の石核様石器（第68図15）は、打製石斧や横刃形石器など、大型剥片石器類の製作に供された石核、ないし刃部を生かした敲石の一種であったと考えられる。

[調整剥片類] 調整剥片1点が出土している。

7号住居（第9図、図版7）

[時期] 埋甕や床面直上の土器は、中期中葉後半（曾利Ⅱ式や古串田新式）に併行する。住居の構築年代と見てよいだろう。

[遺構] E47グリッドを中心に所在する。石囲炉・床面をもつ。長楕円形を呈する川原石や板状に節理する山石（花崗岩）を組み合わせた方形の炉である。うち1辺のみ二重・三重の石囲いをもつ。本来は円形プランを呈する住居であった可能性が高い。

[土器]（第29・30図、図版28）

埋甕は曾利Ⅱ式併行期の所産と考えられる（第29図1）。壁近くの床面からは古串田新式に属すると思われる深鉢（第30図4）が出土。同時期に属する土器片は、住居中央部近くの床面からも出土している。出土状況から考えて、両者（曾利Ⅱ式と古串田新式）は併行関係にあるものと思われる。

覆土中からは、古串田新式が在地化したと思われる深鉢（第29図3）が出土している。縄文地文の上に竹管による半隆帯で流線を描いたものである。第30図1

は、西日本系の土器で里木Ⅱ式併行のものと思われる。本遺跡では珍しい。第29図2は、上山田式併行の深鉢口縁部の破片である。動物意匠文の範疇に含めてもよいだろう。

[石器] (図版29)

石鏃1点、石匙1点、石鉤形の異形石器1点(第69図26)、擦切石器2点、砥石1点、磨石7点、石皿1点が出土している。このうち磨石類2点(第61図7・8)は炉内から出土している。また石皿の周縁部には弧状の刻文が見られる(第55図1)。類似資料は下田遺跡からも出土している。石鉤形の異形石器(チャート製)には、著しい摩滅痕が全面に及んでいる。

[調整剥片類] 調整剥片1点、ピエス=エスキーユ1点が出土している。

8号住居(第10図、図版8)

[時期] 埋甕や床面直上遺物には恵まれなかったものの、住居・石囲炉の形態や覆土中の遺物の状況を勘案するならば、曾利ⅡないしⅢ式に併行する可能性が高い。

[遺構] D48・D49・E48・E49グリッドを中心に所在する。長楕円形・扁平形を呈する川原石を組み合わせた舟形の石囲炉を住居中央部にもつ。炉の平面プランは楕円形で、外縁の長軸は1m、短軸は0.7mほどである。炉石の内側には被熱の痕跡が見られる。炉縁からの深さは0.21m。

6本柱で住居の平面形は隅丸方形に近い。方5.4m程度のプランを有する。

[土器] (第31・32図、図版30・31)

いずれも覆土中の資料である。里木Ⅱ式に併行すると思しき撚糸文施文の西日本系キャリパー形深鉢(第31図3)、上山田式新段階から古府式に相当する土器(第31図1・2)、加曾利E風の要素をもつ小型鉢(第31図5)、信州系の櫛歯形文が簡略化されたかのような沈線文を胴部にもつ小型鉢(第31図4)などが出土している。

[石器] (図版32)

削器2点、打製石斧1点、礫石錘2点、磨製石斧2点、磨石類8点、砥石1点出土している。このうち削器1点(第70図4)は炉内から、礫石錘1点(第64図2)は柱穴内から、砥石1点(第60図1)は床面から出土している。また蛇紋岩製の磨製石斧の中には側面に擦切痕を残すもの(第66図5)がある。

[調整剥片類] 使用痕剥片1点、ピエス=エスキーユ1点が出土している。このうちピエス=エスキーユは炉内よりの出土である。

[石製品] 覆土中より彫刻石棒の頭部片(第75図2、図版31)が出土。二重の鏢と三叉文風の文様を有する(鏢のひとつは欠損)。三叉文風の文様は四面に

施文されている。石材は塩屋石。

9号住居（第11図、図版9）

〔時期〕 覆土層中位の完形土器は、新道式ないし藤内I式併行。住居の年代も該期に近いと思われる。

〔遺構〕 D44グリッドを中心に所在する。住居プランは円形に近い。床面付近から、炉石の形状に近い棒状礫が出土したものの、炉址は検出されなかった。

〔土器〕（第32～34図、図版33）

覆土中の同一平面上より、新道式及び藤内I式に比定される完形土器が、近接してそれぞれ1個体分ずつ出土した（第33図4・5）。また覆土上層の摺り鉢状に堆積した黒褐色土の中からは、井戸尻末期～曾利I式併行の波状口縁深鉢（中野山越A2類に該当）が出土した（第34図2）。そのほか、4単位の波状口縁と動物意匠文風の加飾をもつ上山田式の深鉢（第32図3）、古府式に属すると思われる深鉢（第32図4）、全面縄文施文の粗製深鉢（第33図1～3）などが出土している。

〔石器〕（図版34）

石鏃2点、削器3点、擦切石器1点、敲石1点、磨製石斧1点、礫石錘1点、磨石類4点が出土している。このうち敲石1点（第63図8）は床面から出土している。

〔調整剥片類〕 ピエス＝エスキーユ2点が出土している。

10号住居（欠番）

11号住居（第11図、図版9）

〔時期〕 中期中葉に属すると思われる。

〔遺構〕 E50グリッドを中心に分布する。石囲炉及び床面のみ検出。石囲炉の平面プランは方形で、一辺約0.5mほど。炉石はいずれも扁平な川原石で、内側には被熱痕跡が残る。炉縁よりの深さは0.2mほど。また炉縁より0.5mほど離れたところに、径0.52×0.23mほどの台石が埋め込まれていた。台石上面と炉縁のレベルはほぼ等しい。

〔土器〕（第35図、図版35）

付近より深鉢形を呈すると思われる動物意匠文土器（上山田式段階）が出土している（第35図1・2）。本住居覆土内の出土かどうかについては判断できないが、便宜上ここに付した。

動物意匠文は4単位の波状口縁に沿って付されており、本来は4個体分あったと考えられるが、1個体分は欠損している。目・鼻・口が表現されており、哺乳類の幼獣を思わせる風貌をもつ。顔面は、折りまげた粘土紐の真ん中をつまみだ

すことにより表現されている（第35図3参照）。

12号住居（欠番）

13号住居（第12図、図版10・11）

〔時期〕 床面や覆土中の土器から見て、中期中葉前半と判断される。

〔遺構〕 G38・G39・H38・H39グリッドにかけて所在する。扁平な川原石をもちいた小型の石囲炉を有する。外縁0.54×0.52m。炉縁からの深さは0.21m。炉縁を構成する石囲いのうち一辺は、二重に構築されている。住居プランは楕円形に近い。6.2×5.0m程度の規模を有する。

〔土器〕（第36図2・4、図版36）

床面及び覆土よりは、上山田式段階に比定され得る土器が出土している。床面直上より出土した完形品（第36図4）は、口縁部に隆帯文が付加されるもので、以下の胴部には縄文が施文されている。文様構成に信州系の影響が見られるものの、隆帯・半隆帯の使い分けは北陸的な技法ともいえる。やはり両系統の要素が混在する土器なのであろう。

覆土中からは、北陸系の隆帯文土器（第36図2）が出土しているが、上山田式に属すると思われる。

〔石器〕（図版36）

石鏃4点（有茎鏃1点を含む）、石錐2点、削器2点、横刃形石器4点、磨製石斧2点、敲石1点、磨石類3点が出土している。このうち磨製石斧1点（大型品）は、床面よりの出土である（第66図7）。また石鏃の中に石錐への転用品1点（第69図11）が見られるほか、石錐1点（第69図22）はピエス＝エスキーユのスポールから作出されたものである。

〔調整剥片類〕 調整剥片2点、ピエス＝エスキーユ3点が出土している。調整剥片2点（第70図13・14）は、下呂石・チャートを素材としており、石鏃の未製品の可能性が考えられる。

〔石製品〕（第75図、図版23）

鏢付石棒の頭部破片（第75図3）が出土。砂岩製である。塩屋石製の大型石棒の小破片も2点出土している（4号・20号住居出土の石棒片と接合可能）。

15号住居（第13図、図版11・12）

〔時期〕 床面直上より出土した動物意匠文土器や、ピット内出土の大型破片から考えて、中期中葉前半（上山田式）の所産と思われる。

〔遺構〕 F45グリッドを中心に所在する。扁平礫・長楕円礫を組み合わせた石囲炉の外縁規模は0.53×0.5m。炉縁からの深さは0.16m。石囲いのうち一辺は二重に構築されている。住居プランは楕円形に近い（5.4×3.7m）。

[土器] (第36図、図版37)

床面直上より動物意匠文を有する台付鉢（ほぼ完形）が出土している（第36図1）。口縁は4単位の波状を呈し、波頂部下にそれぞれ動物意匠文を有する。顔面と思しき部分はハート形で、北陸西部地域の縄文中期前葉～中葉に流行する動物意匠文との共通要素を有する。

胴ないし腕に相当する部分は、刻み目を有する隆帯で表現されており、先端部は三つまたあるいは四つまたの指状に分岐している。この種の表現法は、同時期の信州系土器の中に見られるものである。

また貯蔵穴と思われるピット内より、上山田式に属する深鉢の大型破片（第36図3）が出土した。台付鉢と同時期の所産と考えられる。

[石器] (図版38)

縦形石匙1点（黒曜石製、第70図12）、削器1点、礫石錘1点、礫器1点、磨石類3点が出土している。

16号住居（第9図、図版7・12）

[時期] 埋甕炉内や床面の土器、埋甕から考えて、中期中葉前半期のごく初頭に相当すると考えられる。

[遺構] D47グリッドを中心に所在する。住居プランは小判形に近い楕円を呈する（4.8×3.3m）。住居内には埋甕炉の痕と思しきピットがあった。当該地域に石囲炉が出現する以前の状況をあらわす遺構と考えられる。床面からの深さは0.2m。

また埋甕炉と対応する位置から埋甕が検出されている。4単位の波状口縁を有する縄文施文の粗製土器で、口縁には無文部を残す。無文部と縄文施文部の境目には、ところにより縄文原体の押圧が見られる。以上の特徴から、上山田式ともなう粗製土器の一形態と考えておきたい。

[土器] (第37図、図版38)

前述の埋甕炉から新道式併行の土器（第37図3）が出土。また床面よりは、上山田式古段階の土器（第37図1）が検出された。埋甕（第37図2）は、上述のごとく上山田式に併行するものと思われる。

[石器] (図版38)

石鏃2点（第69図14・19）、磨製石斧1点（第66図6）が出土している。このうち磨製石斧は床面よりの出土である。

17号住居（第9図版7・13）

[遺構] E47・E48グリッドを中心に分布する。埋甕及び大型ピットが検出された。

[土器] (第38図1、図版39)

埋甕(第38図1)が出土。胴部下半および頸部を欠く。頸部に施文された横位の半隆帯がわずかに残る。胴部は全面縄文施文。北陸系の隆帯文土器に供伴する粗製縄文深鉢と考えられる。

19号住居(第16図2、図版13)

[遺構] G37グリッドにかけて所在する。石組炉の残欠のみを検出。

20号住居(第14・15図、図版14・15)

[時期] 埋甕・覆土中の完形土器ともに、古串田新式に比定できる。中期中葉の最終段階に近い。

[遺構] D51・D52・E51・E52グリッドにかけて所在する。長辺がやや胴張りする方形プランの住居。長辺は7mで、短辺側は破壊を蒙っているが6m前後に復元できる。建替えられた痕跡が認められる(以下、建替え前を旧段階、建替え後を新段階と呼び分けたい)。

新段階に伴う大型石囲炉が検出されている。炉石の素材は長楕円形・扁平形を呈する川原石で、外縁1.85m×1.1mほどの舟形プランを有する。炉石内側には被熱痕跡が残る。炉縁からの深さは0.2m。短辺片側には、0.77×0.4mほどの割石(川原石)が台石として埋め込まれていた。炉石の一角に埋め込まれた長楕円礫には、明瞭な加工痕は認められないが、久々野町堂之上遺跡の石棒出土事例を想わせる。旧段階に属するものとしては、炉石の抜去痕が検出されている。抜去痕の径は0.8m程度に復元できる。床面からの深さは0.19m。

周溝もやはり新旧2段階に伴うものが検出されている。柱穴は5本分検出されている。本来は6本柱であったらしい。

[土器] (第39～43図、図版39・40)

埋甕は2基。ともに逆位。それぞれが新・旧段階に所属するものと考えられる。旧段階の埋甕(第39図2)には、口縁帯が除去され底部が穿孔された小型深鉢がもちいられている(古串田新式)。埋甕上面には蓋石として、長楕円の自然礫が付されていた。一方、新段階の埋甕(第40図2)には、撚糸文を地文とする粗製深鉢の上半部がもちいられている。

覆土内からは完形土器や復元可能個体が多数出土した。いわゆる吹上パターンであると考えられる。大半が、幅広の半隆帯や櫛歯状刺突文を駆使した古串田新式併行の土器で、埋甕との時期差は見られない。

[石器] (図版41・42)

石鏃4点、石錐1点、削器1点、石匙1点、異形石器1点、打製石斧12点、横刃形石器14点、擦切石器1点、磨製石斧10点、礫器2点、礫石錘3点、敲石5点、

磨石類54点、台石類9点、砥石11点が出土している。

このうち石鏃1点（第69図17）は柱穴から、礫石錘1点（第64図7）と磨石類1点（第63図2）は炉内から、打製石斧1点（第67図8）・横刃形石器1点（第68図6）・磨製石斧1点（第66図9）・磨石類1点（第63図5）は床面から出土している。また異形石器（第69図27）は、下呂石製で刃部に抉りをもつ。石匙の可能性も考えられる。

〔調整剥片類〕 使用痕剥片1点、調整剥片4点、ピース=エスキーユ1点が出土している。

〔石製品〕（第74図2）

石棒胴部片1点（第74図2）および種別不明の石製品片1点が出土している。ともに塩屋石製。石棒頭部片は、4号住居覆土内出土の石棒頭部片、13号住居覆土内出土の破片2点と接合関係にある。この頭部片には、製作時のものとは認めがたい剥離痕・研磨痕が加えられており、再利用・転用されたのちに廃棄されたと考えられる。

21号住居（第16図1・3、図版15）

〔時期〕 石囲炉の形態や床面出土の土器から考えて、中期中葉の所産と推定される。

〔遺構〕 D54・D55・E54・E55グリッドにかけて所在する。石組炉及び床面・壁面の一部を検出。炉石には扁平な川原石がもちいられており、原位置を保つ炉縁の外縁は0.26m。

〔土器〕 床面から北陸系中期中葉土器の破片が出土。

〔石器〕 削器1点（第70図11）が出土している。

〔調整剥片類〕 頁岩製の調整剥片1点が出土している。打製石斧の破片かも知れない。

22号住居（第16図1、図版15）

〔遺構〕 F54・F55・E54・E55グリッドに所在する。壁面・床面の一部とピットが検出された。

23号住居（第17図）

〔時期〕 石囲炉の形態や周囲出土の土器から考えて、中期中葉に属すると思われる。

〔遺構〕 壁面の一部と床面、石囲炉2基が検出されている。ともに川原石の扁平礫・長楕円礫を組み合わせた小型の炉で、炉縁外縁はそれぞれ0.54×0.42mと0.42×0.4m、炉縁からの深さ0.2mと0.23mである。おそらくは4号住居と同じく、石囲炉を複設する住居であると考えられる。

[土器] (第38図2・3)

覆土中より出土。前者は、口縁部に4単位の突起と無文帯をもち、胴部には縄文が施文される鉢(第38図2)。突起は粘土紐を捻ることにより作出されている。北陸の作風を受けた土器と考えられる。信州系の個体も出土している(第38図3)。

(2)包含層出土遺物

住居の壁面確認が困難であったため、包含層出土遺物としたものの中には、本来は住居覆土内の出土遺物であったものも存在すると思われる。以下、土器、石器、土製品・石製品に大別し、住居内出土資料の知見を加味しながら、概要を述べることにする。

土器

縄文中期中葉に属すると思われる土器を、近隣の同時期遺跡である河合村下田遺跡や古川町中野山越遺跡の調査報告（河合村教委「下田遺跡」1987、古川町教委「中野山越遺跡」1993）を参考に、以下のごとく分類した。

出土土器は大まかに見て、信州系（Ⅰ群）、北陸系（Ⅱ群）、縄文・条痕施文の粗製土器（Ⅲ群）の3種に分けられる。

信州系土器と北陸系土器の混在・競合および在地化、縄文・条痕施文の粗製土器の供伴が、当該地域（北部飛騨）の縄文中期中葉土器文化の特徴として指摘できる。

[Ⅰ群] 信州系および信州系類似の土器をⅠ群とした。

Ⅰ－1類（図版43）

勝坂式併行期の土器。勝坂前半段階（藤内式併行）に属する土器（第44図1～3）と、後半段階（井戸尻式併行）に属する一群とが検出されている。

隆帯による三角形区画文を有する縄文施文土器（第44図1・2）は、2個体分が「入れ籠」状態で検出された。埋甕であろう。

後者には、「中野山越遺跡発掘調査報告書」にいう「中野山越A類土器」（戸田哲也氏による命名）が含まれている。井戸尻式末期～曾利Ⅰ式段階に位置付けられる土器群である（第34図2など）。

櫛歯形文を多用するこの種の土器は、隆帯による連結弧状文や隆帯間の押引爪形文を波状口縁部に施文するグループ（第27図1、第34図2）と、隆帯による重弧文・波状文・流水文を平縁口縁部に施文するグループとに分けられる（第24図5、第25図1）。両者ともに、胴部くびれ部の無文帯の下に櫛歯形文をもつ。

Ⅰ－2類（第45図、図版43）。

曾利式併行期の土器。曾利Ⅰ式段階に併行するもの（第45図2・4）と、曾利Ⅱ・Ⅲ式段階に併行するもの（第45図1・3）とに大別される。この段階の土器には、南信方面からの強い影響が認められる。

[Ⅱ群] 北陸系および北陸系類似の土器をⅡ群とした。

Ⅱ－1類（第47図2～4、第48図5、第49図2など、図版44）

上山田式併行期の土器。端部が渦巻き状となる隆帯、半截竹管による半隆帯を文様構成の基調とする。隆帯の上には刻み目が施文される。

Ⅱ－２類（第47図1、第48図2・3、第49図1、第50図2など、図版44）

古府式併行期の土器。深鉢・台付鉢が出土している。隆帯・半隆帯が平行施文されたり、隆帯が省略されたりするものもある。

Ⅱ－３類（図版44）

古串田新式併行期の土器。幅広の半隆帯や櫛歯状刺突文を駆使した土器で、北陸出土のものにきわめて近似した一群（第41図1・2、第42図3など）と、在地化が進んだと思われる一群（第29図3、第42図1・2など）とに大別できそうである。

[Ⅲ群]（第51・52図、図版45）

縄文・条痕文・無文の粗製土器をⅢ群とした。口縁帯に幅の狭い半隆帯が施文されたり、無文部をもつものも含まれる。

Ⅲ－１類

縄文施文の粗製土器。回転縄文が主であるが、撚糸文をもつものも含まれる。全面に縄文が施文されるもの（第40図1など）と、口縁部や頸部に文様帯や無文帯をもつものにと大別できる。

後者には、沈線文・竹管文による半隆帯や刻み目をもつ隆帯（第40図1）、縄文原体押圧による無文帯との区画（第51図2）など、北陸風の技法が駆使されている。

Ⅲ－２類（第52図4など）

条痕文施文の粗製土器。Ⅲ－１類同様、全面に条痕文が施文されるタイプ（第28図5など）と、口縁部・頸部に文様帯・無文帯をもつタイプ（第52図4）とに分けられる。

石器

総数1152点にのぼる（住居内出土のものも含む）出土石器は、石核石器（礫石器）・大型剥片石器・小型剥片石器に大別できる。石核石器には石皿・台石類・砥石の一部・磨石類・礫石錘・礫器・敲石類・磨製石斧が、大型剥片石器には打製石斧・横刃形石器・粗製石匙・擦切石器・砥石の一部が、小型剥片石器には石鏃・石錐・石匙・削器類・異形石器が、それぞれ含まれる。

住居内出土のものも含め、以下に器種別の特徴を記しておく。

[石皿]（第55～58図、図版46）

総数45点が出土（有縁石皿14点、盤状石皿31点）。多孔質安山岩をもちいたも

のが大半を占める（64.4%）。有縁石皿の中には刻文を有するものがある。弧状の刻文は下田遺跡にも出土例があるが、玉抱三叉文をあしらったもの（第57図）は珍しい。同じく玉抱三叉文を有する彫刻石棒と、ほぼ同時期（中期中葉）に製作されたものと考えられる。

[台石類]

総数18点。石皿や砥石と判別しがたい個体が存在する。また住居の床面に据え付けられるタイプ（例：11号住居）や、石囲炉の一部に埋置されるタイプ（例：20号住居）については、総数から除外してある。

床面に埋設された11号住居出土品の場合、キズがつきにくい濃飛流紋岩を素材としているために、肉眼では使用痕が判別しがたい。明瞭な使用痕を残さないこの種の台石が遺構から外れた場合、肉眼による「石器」としての認定は不可能に近い。包含層から出土した盤状の大型扁平自然礫の中には、台石として使用されたものが多く含まれていると考えられる。

[砥石]（第59・60図、第68図14、図版49）

大きめの砂岩の礫皮を砥石面とするタイプ（32点）と、砂岩の小礫や大型剥片を手持砥石として利用するタイプ（33点）とに大別される。前者の中には、摩滅の進んだ砥石面に対し、新たな剥離を加えることによって、新鮮な砥石面を作出した個体も見られる。

砂岩製砥石の中には、大小を問わず、受熱・変色したものが多く見られる。また中期中葉に限らず、後期中葉（塩屋金清神社遺跡）や後期中葉～晩期中葉（家ノ下遺跡）の資料の中にも数多く存在する。

この種の受熱・変色例については、偶然の産物と見なすより、砥石面作出・剥片採取の簡便化を狙った意図的行為の痕跡と解釈したほうが妥当であると思われる。おそらくは、火中に投ずることにより石材そのものを割りやすくするための作業（火割り）があったのだろう（林 直樹「縄文後期の石棒製作址 塩屋金清神社遺跡」『考古学ジャーナル』398 1996・1を参照）。

[磨石類]（第61・62図、第63図1～6・9・12、図版47）

総数353点に及ぶ。多孔質安山岩の使用率は65.4%。くぼみ痕・まばらな敲打痕・集中敲打痕・研磨痕など、さまざまな使用痕を有する。従来、磨石・くぼみ石・敲石といわれたもののうち、手持に手ごろな川原石楕円礫・円礫を利用したものを、磨石類として一括した。

[礫石錘]（第64・65図、図版48）

総数95点。うち10cmを越す大型品が47点。川原石の扁平楕円礫の長軸両端に対し、剥離や敲打による打ち欠きを施した石器である。堂ノ前遺跡や下田遺跡には、

10cmを越す大型品が多い。

[敲石類] (第63図7・8・10・11、図版49)

棒状礫の端部に敲打痕を残すもの(第63図7・10・11)や、肉厚な大型剥片の縁辺に敲打痕を残すもの(第63図8)を一括して敲石と仮称する。

[磨製石斧] (第66図、図版50)

総数98点。92.9%が蛇紋岩製品である。鉄斧のごとき大型品から鑿を思わせる小型品まで、サイズはバラエティに富む。すべて定角であり、乳棒状のものは検出されていない。刃部を欠く欠損品の中には、敲石やくぼみ石などとして再利用されたものもある。

磨製石斧に用いられている蛇紋岩の質感は、荒城川や高原川流域に見られる飛驒在地系のものとは異なる。むしろ北陸海岸部(富山県東部～新潟県西部)に見られるものに近い。近年注目されている北陸海岸部の磨製石斧製作址(富山県境A遺跡・新潟県長者ヶ原遺跡など)からの製品搬入を想定すべきであろう。

[打製石斧] (第67図、図版51)

総数131点。一般に、打製石斧は短冊形・撥形・分銅形に大別されるが、宮川下流域には、明瞭な分銅形打製石斧は見当たらない。

堂ノ前遺跡の出土品の大半は、川原石の頁岩を素材としている(使用率79.4%)。頁岩は層状に節理する性質を有しているため、小型・薄型の短冊形製品の製作に適している。

一方、後期・晩期にいくに従い、各種川原石を素材とした大型・肉厚・撥形の個体が主流となる(塩屋金清神社遺跡・家ノ下遺跡の出土資料)。中期に顕著に見られた頁岩への執着傾向はすでにない。宮川村内遺跡出土の打製石斧の計量分析結果については、「宮川下流域における打製石斧の変遷」(『斐陀』1995、林・秋山・肘井・立田)を参考にされたい。

[横刃形石器] (第68図3・5～12、図版52)

総数66点。ここにいう横刃形石器とは、横剥ぎした川原石の一次剥片の縁辺を、刃部として利用する剥片石器の一種をさす。周辺の遺跡では、「塩屋金清神社遺跡」(南山大学1981)にいう「大型剥片石器」がこれに相当する。

製作技法や使用痕(刃こぼれ)の在り方から考えて、機能的には削器(サイド・スクレイパー)の一群に含められるものと判断される。本稿では便宜上、チャート・下呂石・黒曜石などの緻密な石材を用いて製作された小型品を「削器」とし、川原石の一次剥片を利用した大型品を「横刃形石器」と呼び分けた。

頁岩製剥片の場合には、二次調整が施されることが多いが、安山岩・濃飛流紋岩・砂岩などの剥片の場合には、一次剥片の縁辺をそのまま利用しているものが

多い。前者の場合、層状節理する素材の特徴を生かし、ひとつの石核からいくつもの剥片を作出しているようである。それに対し後者は、ほとんどの場合、片面に礫皮を残している。前者は全体の49.7%。

[擦切石器] (第68図1・2・4、図版52)

総数20点。横刃形石器に同じく、横剥ぎした川原石の一次剥片の縁辺を利用している。外見は横刃形石器に近いが、縁辺に残る著しい摩滅痕により区別が可能である。具体的な被加工物については想定しがたいが、使用痕の在り方から見て、擦切具として使用された石器であると考えられる。本稿では、とりあえず「擦切石器」と命名しておく。横刃形石器とは異なり、砂岩製品が大半を占め、頁岩製品はまったく見られない。砂岩使用率75%。

[石鏃] (第69図1～19、第71図1～19、図版53)

総数50点。ほとんどが凹基無茎鏃である。下呂石・チャート・珪質頁岩・黒曜石・ホルンフェルス・珪質凝灰岩が、素材として用いられている。下呂石使用率66%。錐としての使用痕を残す個体もある(第69図11)。

[石錐] (第69図20～25、第70図20～25、図版53)

総数14点。チャート・下呂石・輝石安山岩・高原川系流紋岩が、素材として用いられている。つまみ(頭部ないし基部)を有するものと、棒状のものに分けられる。

[石匙・異形石器] (第69図26・27、第70図12・15～17、第72図、図版53)

総数14点。チャート・下呂石・黒曜石・珪質凝灰岩・凝灰岩が、素材として用いられている。このうち凝灰岩製のものは、いわゆる大型粗製石匙の範疇に含めてよいかも知れない。大半が中期中葉のものと思われるが、横形のうち正三角形を呈する個体は、前期の所産と見たほうがよい。

また刃部にえぐりが入る石匙類似の小型剥片石器が、合計3点出土している(うち1点は20号住居内出土)。石匙の範疇に含めてよいか疑問を残すので、異形石器の仮称を与えた。異形石器にはこのほかにも石鈎形の個体が存在する(7号住居址出土)。

[削器類] (第70図1～8、10・11、図版54)

総数57点。川原石製の大型製品(横刃形石器)に対し、チャート・下呂石・硬質頁岩・ガラス質流紋岩を素材とする小型品をさす。

調整剥片類

大量に出土した剥片類のうち、使用痕剥片・調整剥片・ピース=エスキューの3種を、調整剥片類と仮称しておく。

[使用痕剥片・調整剥片]

総数41点。一次剥片の縁辺に、刃こぼれ状の痕跡が残るものを使用痕剥片として一括した。ただし刃こぼれ状の痕跡は、自然破碎・転石作用などにより生じることもあるので、そのすべてを人為の所産と見なすことについては疑問を残す。一方、明らかな二次調整痕が見られる一群を調整剥片とした。調整剥片の中には、当然のことながら、石鏃・石錐などの小型剥片石器類の未製品が含まれていると考えられる。また使用痕剥片や調整剥片の一部には、削器として使用されたものもあると思われる。

[ピエス=エスキーユ]

総数27点。両極の階段状剥離痕、側面に残る截断面などの特徴をもつ石核・剥片類を、ピエス=エスキーユ（楔形石器）として一括した。この種の石核・剥片の具体的性格については、両極打法による石核（いわゆる曾根型石核）・剥片説と、骨角や石材などの被加工物を分割するための実用具（クサビ）説の2説が提示されている。

前者の説に対しては、当遺跡出土の2点の石錐（第69図20・23）に、両極剥離痕が残されていた事実がまさに適合的である。両極技法により作出された剥片の一部が、小型剥片石器類の素材となったことはほぼ間違いない。当遺跡内における「考古学的事実」として特記しておきたい。

前述の「塩屋金清神社遺跡」（南山大学1981）では、「楔形石器」を石鏃などの小型剥片石器の製作に供された曾根型石核と見なす説が展開されている。また岡村道雄氏によれば、縄文後期のオホーツク沿岸地域には、両極剥片の「目的的生産が見られるという（岡村「ピエス=エスキーユ」『縄文文化の研究7』1983）。しかしながら当遺跡の場合、検出事例はわずかに石錐2点であり、「目的的」かつ組織的な技法として、両極剥離技法が行なわれたかどうかについては、さらなる検討を要する。

一方の後者の説（=クサビ説）は、梶原洋氏による実験と使用痕観察により補強されている（石器文化談話会「座散乱木遺跡調査報告書Ⅱ」1981）。

土製品・石製品

[土製品]

土製品は、土偶（第53図15・18・20～23）・土板（第53図16・17・19）・土器片円盤（第53図1～14）に大別される。出土数は少ない。

土板には貫通孔を有するものと、未貫通のものがある。沈線文や円形の連続刺突文を施文することを特徴とする。6号住居の炉址覆土から出土した小型土偶

(第53図23)、および20号住居の覆土内から出土した土偶(第53図21)は、文様構成や供伴土器から見て、ともに曾利Ⅱ～Ⅲ式併行期の所産と思われる。

[石棒](第74・75図、図版23・31・54)

彫刻石棒が3点(8号住居覆土出土1点、4・13・20号住居覆土間接合資料1点、包含層出土1点)、鏝付石棒の破片が1点(第13号住居覆土出土1点)、大型石棒未製品1点が出土している。

彫刻石棒片の遺構間出土事例(4・13・20号住居)や受熱出土例は、石棒に関わる儀礼および廃棄のプロセスを考える上で示唆的である。

鏝付石棒の破片(砂岩製)をのぞく他の出土品は、いずれも村内塩屋に産する特殊な凝灰岩(黒雲母流紋岩質溶結凝灰岩、通称塩屋石)の柱状節理を生かしたものである。近年、塩屋の柱状節理露頭直下の扇状地に、後期中葉の石棒製作址が営まれていることが判明した(林 直樹「柱状節理利用の石棒製作址」『季刊考古学』41 1992を参照)。

塩屋石利用の下限は、異形石棒や石冠・御物石器の素材として利用されていることから考えて、晚期中葉まで下るものと思われる。一方の上限については、堂ノ前遺跡の住居出土例から、遅くとも中期中葉に求められる。

第3節 縄文後期の遺構と遺物

(1) 竪穴住居址と住居内出土遺物

14号住居（第18図1・2、図版16）

〔遺構〕 D32・E32グリッドに所在する。住居プランは方形に近い。小型住居で石囲炉を有する。炉石には扁平な川原石がもちいられていた。炉縁からの深さは0.16m。

〔土器〕（第76図6、図版42）

覆土中より後期中葉の土器が検出された。弧状に施文された沈線の区画内に、縄文が充填されている。加曽利B3式ないし曾谷式に併行すると考えられる。

〔石器・剥片類〕（第76図1・2・4、図版42）

横刃形石器1点、敲石1点、磨石類2点、使用痕剥片1点が出土している。このうち磨石1点（第76図1）は、炉内より出土したものである。

18号住居（第18図3、図版16）

〔遺構〕 G37・H37グリッドを中心に所在する。不定形な小型住居。床面は検出できたが、炉址については不明。住居の規模は2.45×2.24m。

〔遺物〕（第76図8、図版42）

床面より、後期中葉（井口併行）の土器片が出土している。

(2) その他の遺物

堀之内式類似の小型土器（第76図5）、八日市新保式に併行する浅鉢（第76図7）、石刀の破片（76図3）が出土している。

第V章 まとめ

第1節 調査成果の要約

(1)遺跡の立地と年代

堂ノ前遺跡は、岐阜県吉城郡宮川村大字野首（小字家ノ前）に所在する縄文時代の遺跡である。野首地区は、宮川右岸に発達した低位段丘上の集落で、飛越国境からもほど近い位置にある（約22km）。

出土遺物の年代は、縄文時代の早期から後期にまで及ぶが、そのほとんどが中期中葉に所属するものと考えられる。検出された住居址のうち17軒が中期中葉、2軒が後期のものであった。

当遺跡の縄文時代文化層は、分厚い洪水堆積層の介在によって、下層（早期・前期）と上層（中期・後期）とに大別できる。土砂堆積をひき起こした洪水は、土器の年代観から見て、「前期後半～中期中葉前半」（北白川Ⅱc式～新道式段階）のあいだに発生したと考えられる。

この洪水は、遺跡付近を通る跡津川断層の活動に起因するものであるらしい。この時の断層活動の実年代については、土壌中に含まれるC14の分析により、5200±250年という具体的数値が提示されている（『活断層研究』3 1986）。

(2)北陸西部編年と信州編年の比較検討

日本海水系に属する北部飛騨地域の縄文遺跡からは、北陸・信州両地域の土器が混在・競合するかたちで出土する（南部飛騨に多い東海系・西日本系土器の出土例は稀である）。そのような混在傾向は、中期中葉段階の諸型式において著しい。

具体的にいえば、北陸系の上山田式・古府式・古串田新式、信州系の新道式・勝坂式（藤内式・井戸尻式）・曾利Ⅰ～Ⅲ式の諸型式がそれであり、両系統の土器の供伴関係の実態把握は、飛騨地域の考古学が当面する重要課題のひとつといえる。

堂ノ前遺跡における土器の住居内検出状況（埋甕・床面出土土器・一括性の高い覆土出土土器群）や、隣接地域の下田遺跡（河合村）・中野山越遺跡（古川町）の住居址調査の成果を総合するならば、次のような大まかな供伴関係を指摘することができよう（河合村教委・古川町教委前掲書を参考に作成）。

I 期	新崎式～上山田式古段階	新道式～勝坂前半
II 期	上山田式新段階～古府式	勝坂後半～曾利 I 式
III 期	古府式～古串田新式	曾利 II 式～III 式

(3)複設式の石囲炉について

石囲炉を複設する住居は、いわゆる「長方形大型家屋」を除けば、きわめて稀である。河合村下田遺跡 2 号住居址（炉 2 基）、古川町中野山越遺跡 9～11 号住居址（炉 3 基ないし 5 基）、立山町野沢狐幅遺跡 8 号住居址（炉 3 基）、および本遺跡 4 号住居址（炉 4 基）は、その数少ない検出事例である（立山町教委「野沢狐幅遺跡発掘調査概報」1985）。

中野山越 9～11 号住居（井戸尻末併行期）と堂ノ前 4 号住居（上山田式古段階）のあいだにはやや時期差が介在するが、4 遺跡の住居址ともに大枠では中期中葉の所産と見なすことができる。

これらの住居址は、住居内に大型のピットを有する点で共通点をもつ。また「長方形大型家屋」よりは小さいが、普通サイズの住居に比べるといずれも大型である（下田 2 号住居は 7.84m、中野山越 9～11 号住居は約 8 m、野沢狐幅 9～11 号住居は約 7.9m、堂ノ前遺跡 4 号住居は約 6.4m）。

この種の住居の具体的な性格については、現状では言及し難いが、遺構内施設の在り方や規模から考えて、普通サイズの住居とは異なる特殊な性格を有した可能性が強い。石囲炉と大型ピットを利用した作業施設との見方も一案であろう。

(4)動物意匠文土器について

器形復元の可能な北陸系の動物意匠文土器が 2 個体分出土した。2 点ともに、ハート形に整形された顔とつりあがった目をもつ。隣接する富山県では、宇奈月町浦山寺蔵遺跡や庄川町松原遺跡などで、同種の土器の出土が報告されている。この種の顔面意匠は、新崎式以来の伝統的土器装飾のひとつと考えられる。

15 号住居出土の台付鉢の意匠について土肥孝氏は、「尾部の三ないし四本の指状表現法は関東・中部高地地方に見られる土器の人体装飾法とも共通」（『原始の造形』1994）と評価した。

たしかに信州的な指状隆帯の付加は、北陸風の顔面表現とは対照的な在り方を示す。信州・北陸両地域の意匠が混淆した結果生じたものと見なすことが妥当であろう。

北陸と信州双方のモチーフが混在したと思われる動物意匠文土器は、前述の野沢狐幅遺跡からも出土している（70号・93号住居出土）。当該土器は、口縁部に無文帯をもつ縄文施文の鉢であり、堂ノ前15号住居出土のものに似た顔・胴・指（ないし尾）状の表現をもつ意匠を有する。また顔面の表現こそないが、境A遺跡出土の有孔鏝付土器の胴部には、端部が指状を呈する隆帯が4単位施文されている（『北陸自動車道遺跡調査報告』1991）。これもまた信州系のモチーフの応用と考えられる。

(5) 石器の素材と組成について

下呂石やチャートなどの緻密な石材を用いた小型剥片石器（石鏃・石錐・石匙・削器など）に比べ、磨石類・敲石・石皿・台石などの礫石器、打製石斧・横刃形石器・擦切石器などの大型剥片石器が、数量的に卓越する。

礫石器・大型剥片石器ともに、遺跡付近の河川より採集が可能な川原石（安山岩・濃飛流紋岩・飛騨片麻岩・砂岩・頁岩・凝灰質流紋岩・花崗閃緑岩・閃緑岩など）を素材としている。

それに対し、小型剥片石器の素材には、在地系石材（チャート・転石系玉髓）以外にも、非在地系石材（下呂石・珪質頁岩・黒曜石・露頭系玉髓・珪質凝灰岩・高原川系流紋岩・輝石安山岩）が多用されている。

蛇紋岩製磨製石斧については、そのほとんどが、北陸海岸部の製作地からの搬入品であったと考えられる。

(6) 両極剥離痕を残す石錐について

ピエス＝エスキーユのスポールを利用したと考えられる下呂石製の石錐が、4号住居および13号住居内覆土から、それぞれ1点ずつ検出されている。ともに製品の端部に両極剥離痕を残す。わずか2点の検出例であるため、両極打法が「目的的」に行使された証左にはなり得ないが、今後検討すべき内容を含んだ資料といえる。

(7) 土器・石製品の遺構間破片接合について

異なる住居覆土より出土した遺物の破片が接合する事例は、前述の野沢狐幅遺跡（中期中葉）のほか、可児市宮ノ脇遺跡（中期後半）でも見られる事象である。本遺跡でも、土器や石棒のあいだに遺構間破片接合が見られた（例：4号・13号・20号住居間）。いずれも遺構覆土中の遺物に見られる現象であり、廃棄行為との関わりが想定される。

遺構間接合については、「2～3の遺構間に分けて、廃棄処分する行為については、何かの意味のある行為と思われる」（立山町教委前掲）、「遺物の廃棄に関しては、何らかの理由がある行為と推測される」（可児市教委「川合遺跡群」

1994) との評価がなされている。

(8)塩屋石と鐔付石棒・彫刻石棒

頭部に有する鐔付石棒が1点(破片)、三叉文などの刻文を有する彫刻石棒が3点、大型石棒の未製品1点および原石1点が出土している。ともに中期中葉の所産であり、該期の飛越地域の縄文文化を特徴付けるものとされる。

このうち彫刻石棒とその未製品は、村内塩屋地区の露頭から採取された石材を利用したものである(柱状節理する溶結凝灰岩、通称塩屋石)。塩屋石の利用は、後期中葉段階(堀之内Ⅱ～加曾利B1式段階)にピークを迎えるようであるが、すでに中期中葉にその初源があったことが、今回の堂ノ前遺跡の調査により判明した。塩屋石製の中期石棒は、古川町岡前遺跡・神岡町寺林遺跡・魚津市天神山遺跡などでも発見されている。

原石・未製品が遺跡内に持ち込まれていることや、住居覆土内から破損した石棒が出土していることから考えて、堂ノ前遺跡の石棒については、

- ①塩屋における原石採取
- ②堂ノ前における石棒製作
- ③石棒を使用した何らかの儀礼の実施
- ④儀礼終了後の石棒廃棄

の4つの大まかなプロセスを想定することが可能である。原石・未製品の出土は①・②と、住居覆土内の石棒出土や破片の遺構間接合は④と、それぞれ関わる事項であると思われるが、堂ノ前の場合、③のプロセスの様相を彷彿とさせる資料(例：久々野町堂之上遺跡など)には恵まれなかった。

(林 直樹)

第2節 考察・結語

南山大学教授 早川正一（人類学）

今回の発掘調査において導きだされた堆積土層の相対年代によれば、この宮川河畔の地域を最初に訪れたのは、縄文早期後半の「細久保式」押型文土器を使用した生活者であり、「細久保式」の包含層である第4層の下位には、C14テストにより、「8539年前から7120年前」という絶対年代が与えられている。ただし、確たる住居址の痕跡やまとまった遺物の出土はなかった。若干の土器片と鋳形鎌や礫器が供伴している状況から、山間における早期縄文人に特有な短期移動を類推し得るのみである。

早期同様の生活状況は、ここでは前期初頭から後半まで続く。その絶対年代については、C14テストにより、「5930年」「5390年」「5200年ごろより以前」を与えることができ、東海地方に顕著な「オセンベ土器」や、日本海側で知られる「南太閤山Ⅱ式」の尖底土器、西日本系の「北白川下層Ⅱc式」などが、わずかに存在する。周辺各地からの土器型式の流入は、この宮川の一帯を生活の場とした早・前期の人びとの生活圏が、予想以上に広がったことを暗示しているであろう。早期から前期にいたるこの時期を、堂ノ前遺跡の形成期と見ることができよう。

ところが、中期に至ると状況は一変する。発掘された堂ノ前遺跡の中期住居址群のうち、16号住居址では、信州系の「新道式」が炉址から、北陸系の「上山田式」古式が床面から検出されている。これらの土器の相対年代が告げる中期中葉の初頭を、この遺跡における定住開始の時期と見てよいだろう。

宮川山峡からほど近い北陸文化圏の土器と、はるばる遠来した信州系の土器の共存状態は、八ヶ岳山麓に集落を営んだ一派が、此地にも影響を及ぼした可能性を示唆するものである。我々は、定住が開始されたと考えられるこの時期を、中期第Ⅰ期と仮称している。覆土中層から「新道式」「藤内Ⅰ式」の完形品が出土した9号住居址も、この時期の所産である可能性が高い。

次の第Ⅱ期は、4・13・15・17・23号などの住居址が営まれた時期である。出土土器の型式は、北陸系の「上山田式」を基調とし、これに信州系の「井戸尻式」「曾利Ⅰ式」が共存するようである。

それに加えて、13・15号住居址から検出された土器の文様構成には、北陸系・信州系要素の個体内における混用、いわばハーフ現象が認められる。たとえば、15号住居址出土の台付鉢に付けられた動物意匠では、北陸系の顔面表現と信州系の指状肢体表現が混用されている。つまり、この第Ⅱ期では、両系統の土器の混

在現象だけではなく、個体内での混用が認められるのであって、両文化圏の縄文人の一層の融合を考えなければならない。向後、この融合現象の具体的内容を、考古学的に検証すべきであろう。

更に次の第Ⅲ期では、5・6・7・8号などの住居址群が近接して切り合っている。中でも、6号住居址の床面出土の吊手土器は、信州系「曾利Ⅱ式」併行期に比定でき、5号住居とともに、やはり北陸系土器と供伴するようである。中期中葉後半の所産であろう。また7号や8号住居址からは、より新しい北陸系「古串田新式」や信州系「曾利Ⅱ・Ⅲ式」の供伴現象が観察されるとともに、西日本の系譜に連なる「里木Ⅱ式」に特有なキャリパー形深鉢までもが出土している。いくつもの重複した異系統の土器の共存は、この第Ⅲ期の縄文人の広範囲な何らかの交流を想起させるものである。

第Ⅲ期は第Ⅱ期とともに、この堂ノ前遺跡の諸段階のうち、もっとも定着のかつ集会的であることは明瞭であり、これら第Ⅱ・Ⅲ期を当遺跡の最盛期と判断したい（C14テストによる絶対年代は「4460年前」とされた）。

第Ⅲ期の終末状況については、「古串田新式」の埋甕をもつ20号住居址があらわすこととなる。この住居の覆土内土器は、一括性の高い吹上パターンの資料であると思われるが、なぜか、信州系土器を供伴していない。信州の影響はわずかに文様構成の一部に見られるだけであって、北陸の影響が圧倒的に濃厚であることが特徴である。この状況が信州系文化の影響の後退を意味するものであるのなら、長野県下における発掘調査の成果（曾利Ⅲ式以後の遺跡減少傾向）とも一致している。この第Ⅲ期の終末をもって、堂ノ前遺跡中期文化は終焉したと考えておきたい。後期の遺構としては、中期集落に近接する小規模住居が散見されるのみである。

前述の第Ⅰ期から第Ⅲ期終末に及ぶ合計17基の中期住居址群は、マクロスコープに観察すると、宮川に向かってはりだすかたちで弧状をなし接続している。今回の調査部分はおそらく、内側に中央広場をもつ環状ないし弧状集落の一部に相当するのであろう。当然のことながら、集落は道路計画地外にも広がっているのであって、今後は、未発掘部分の開発計画にも注意を払わねばならない。

一方、ミクロスコープな観点に立てば、まず複設式石囲炉の存在に注目したい。住居址内の床面から検出された炉址の中で、特異な形態を有する4号住居址（23号住居址もそうであろう）の複設式石囲炉は、出土土器の年代から中期中葉に比定できる。遺構の在り方は、河合村下田遺跡や古川町中野山越遺跡など、他遺跡の発見例とのあいだに共通性を有していて、大きなピットを伴うが、石囲炉との関係は解明されていない。なぜ複設式の石囲炉が必要なのか、大型ピットの用途

は何であったのかについては今後の課題である。

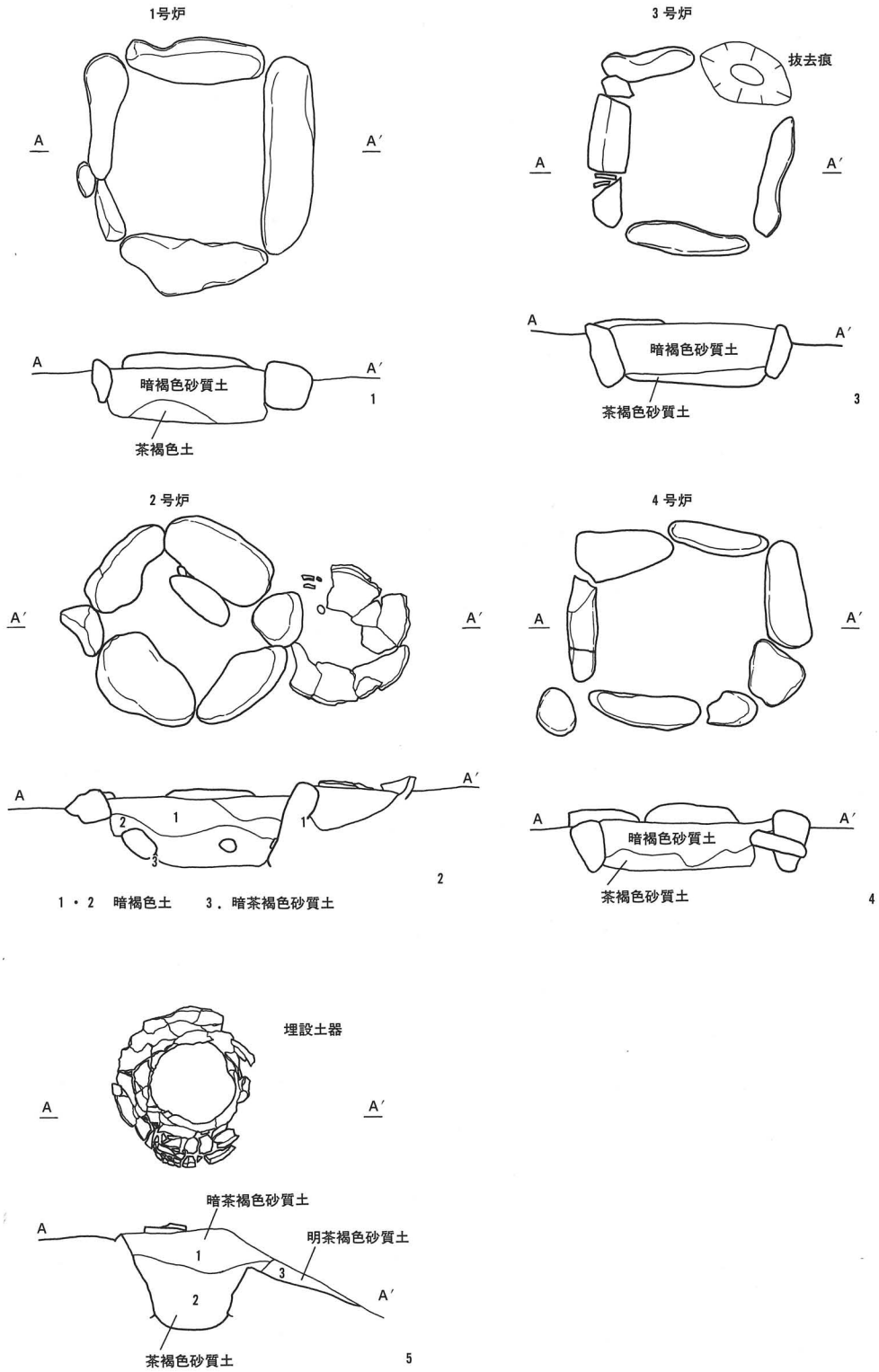
微視的なもうひとつの視点としては、出土した石器の特徴があげられる。数量において、他を圧倒するのは、磨石・敲石・礫石錘などの川原石円礫を素材とした石器類であり、同じく川原石を素材とする石皿や砥石・台石のたぐいを含めると、石器組成に占める大型石器の割合は明らかに多い。さらに蛇紋岩製の磨製石斧、頁岩製の横刃形石器、砂岩製の擦切石器などを加えれば、大型の加工用具の比率はきわめて高い。

これに掘削用具の打製石斧が次ぐが、チャート主体の石錐や削器などの小型の加工用具の比率は小さく、下呂石主体の石鏃に代表される狩猟用具の比率も小さい。小型の剥片石器が卓越する早期・前期の石器の在り方とは、根本的に相違しているのである。

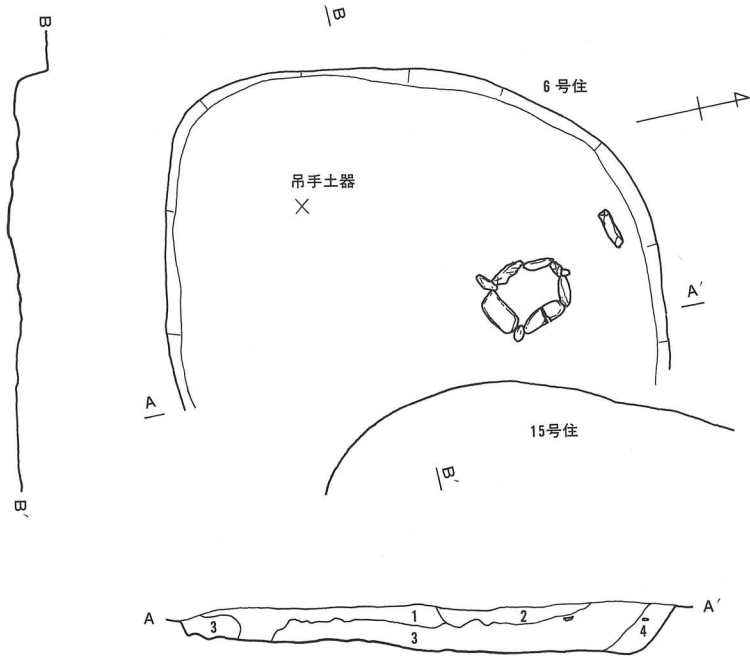
石製品研究の立場に立てば、村内塩屋の溶結凝灰岩（＝塩屋石）を使った石棒の検出に意義を認めることができる。石棒素材として塩屋石については、後期中葉の塩屋金清神社遺跡の調査により判明していたが、堂ノ前遺跡の調査によって、中期中葉から石棒製作が始まることの確認が得られた成果は特筆に値する。

挿図・集計表

第7图 4号住居址·炉, 埋设土器 (1/15)

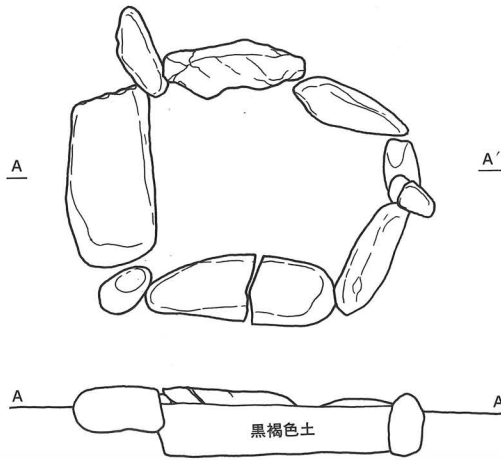


第 8 图 6 号住居址 (1/60) · 6 号住居炉 (1/15)



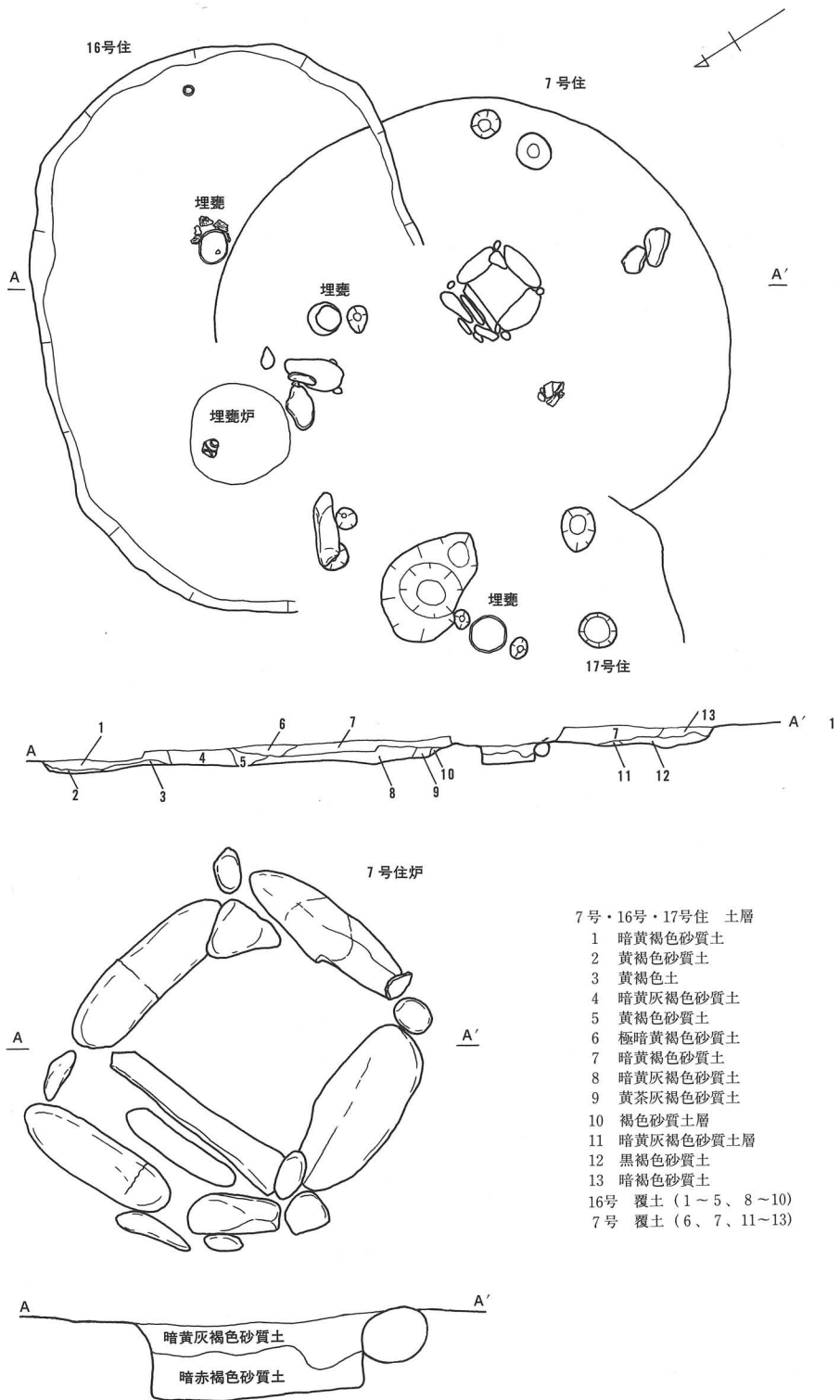
6号住 土层
 1. 暗褐色土 2. 褐色土 3. 黑褐色土 4. 茶褐色土

1



2

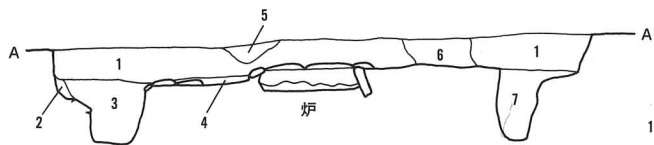
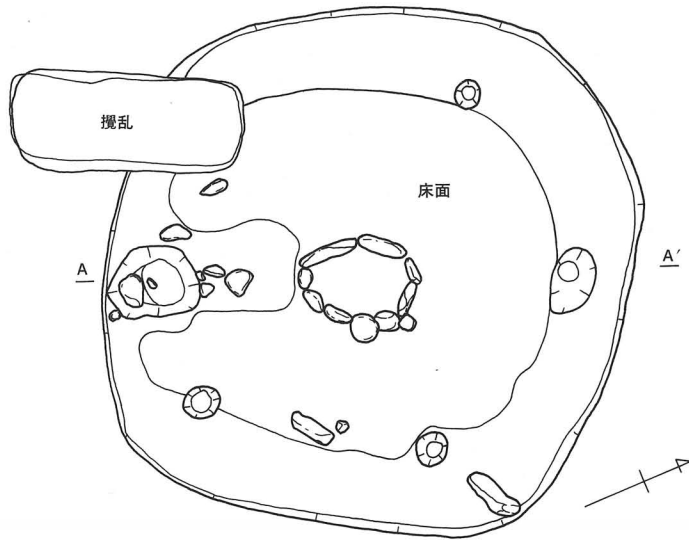
第9图 7号·16号·17号住居址 (1/60), 7号住居炉 (1/15)



7号·16号·17号住 土層

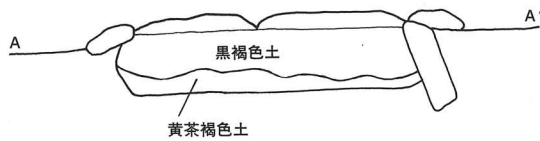
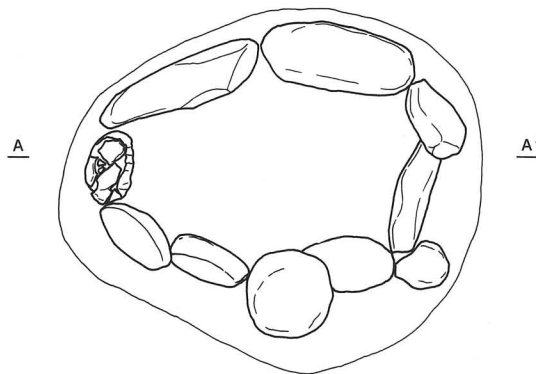
- 1 暗黄褐色砂质土
- 2 黄褐色砂质土
- 3 黄褐色土
- 4 暗黄灰褐色砂质土
- 5 黄褐色砂质土
- 6 極暗黄褐色砂质土
- 7 暗黄褐色砂质土
- 8 暗黄灰褐色砂质土
- 9 黄茶灰褐色砂质土
- 10 褐色砂质土層
- 11 暗黄灰褐色砂质土層
- 12 黑褐色砂质土
- 13 暗褐色砂质土
- 16号 覆土 (1~5、8~10)
- 7号 覆土 (6、7、11~13)

第10图 8号住居址 (1/60) · 8号住居炉 (1/15)



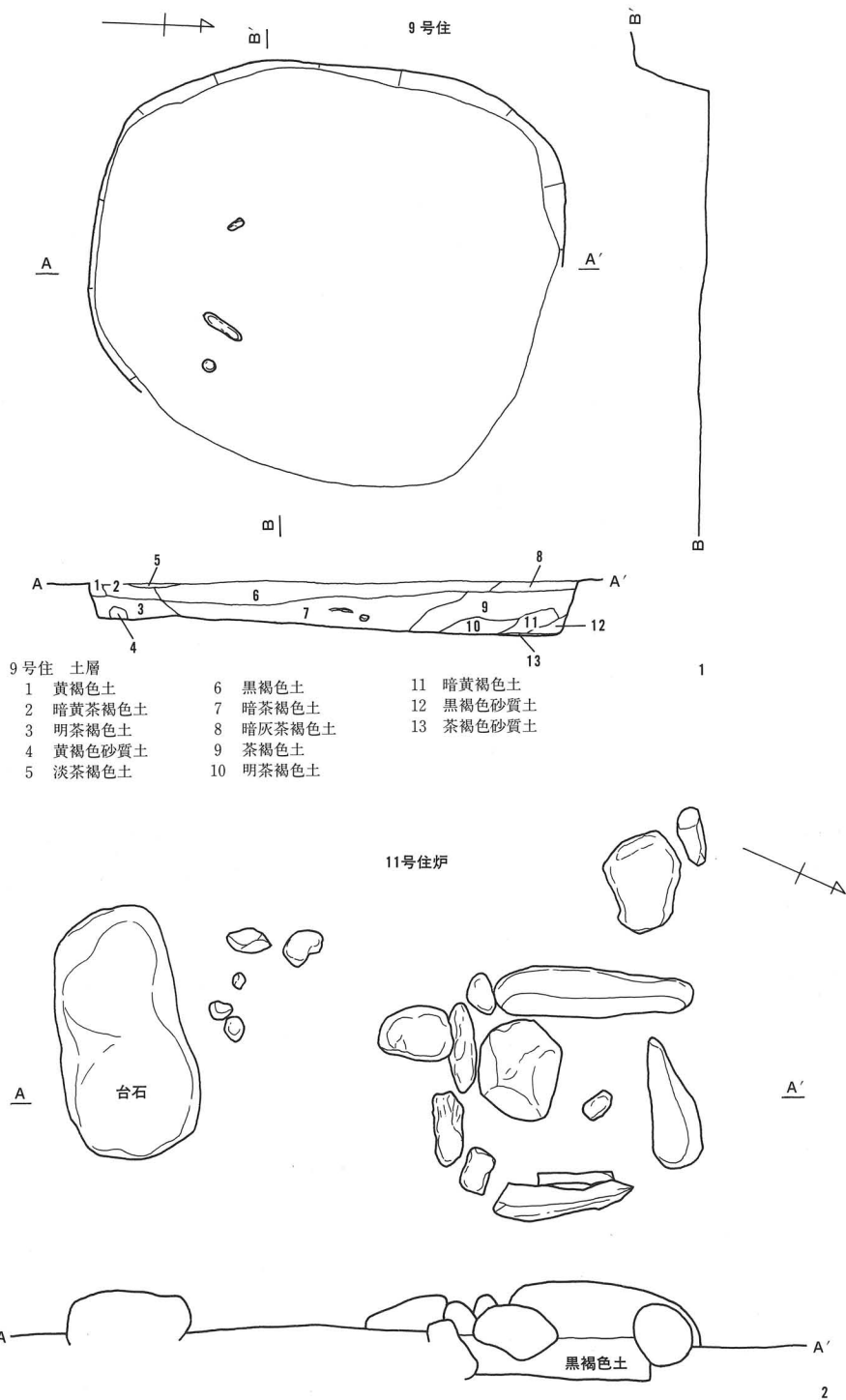
8号住 土层

- | | | | |
|---------|--------|---------|---------|
| 1 茶褐色土 | 2 茶褐色土 | 3 暗茶褐色土 | 4 暗茶褐色土 |
| 5 暗灰褐色土 | 6 暗褐色土 | 7 暗茶褐色土 | |

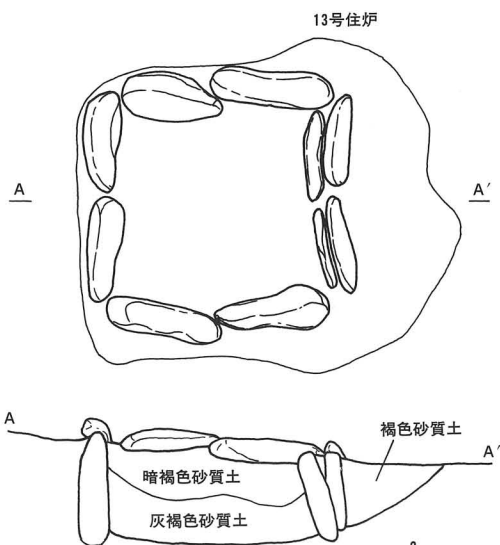
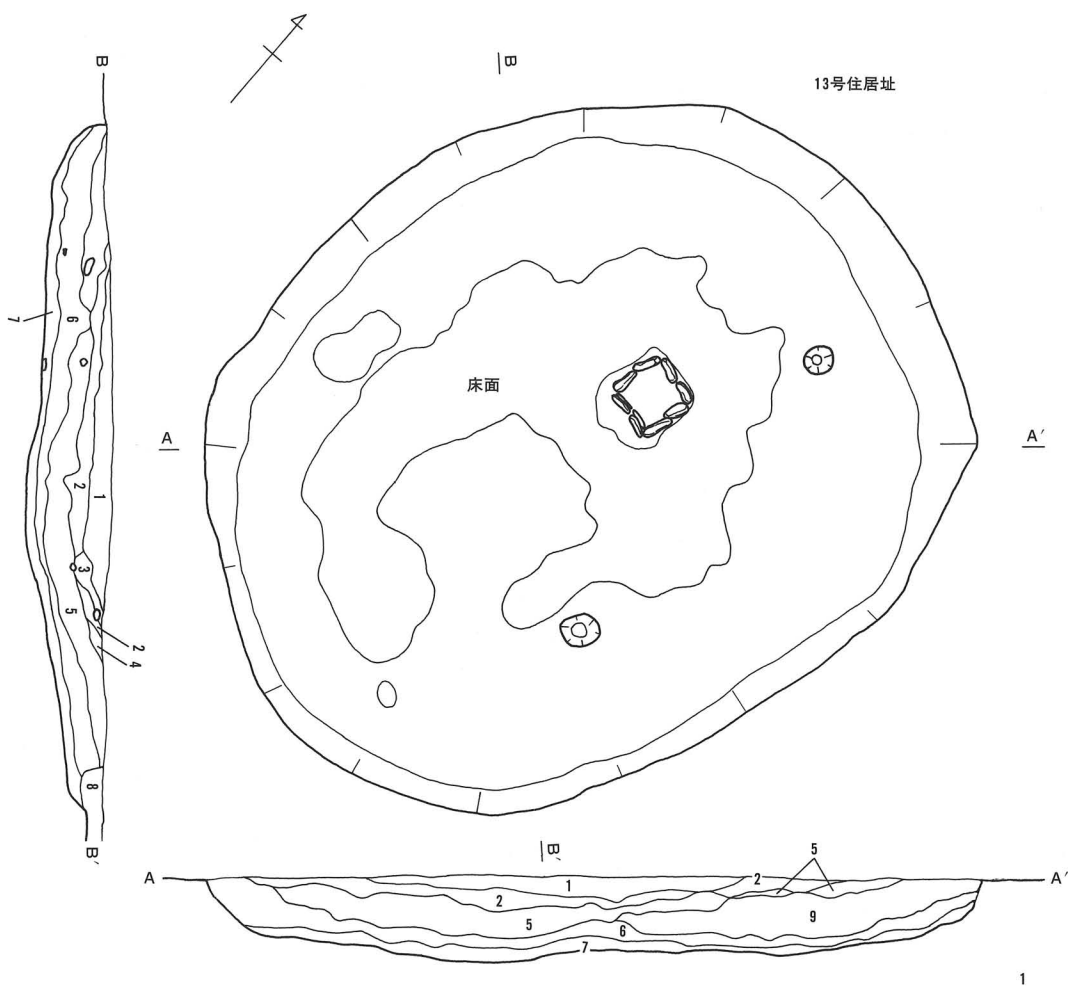


2

第11图 9号住居址 (1/60) · 11号住居炉 (1/15)

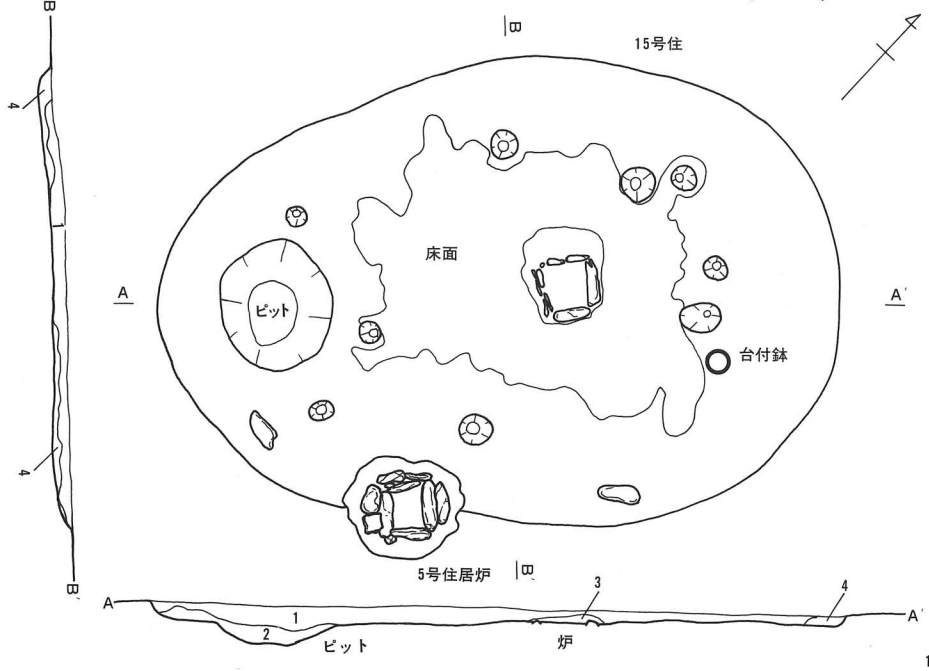


第12图 13号住居址 (1/60) · 13号住居炉 (1/15)



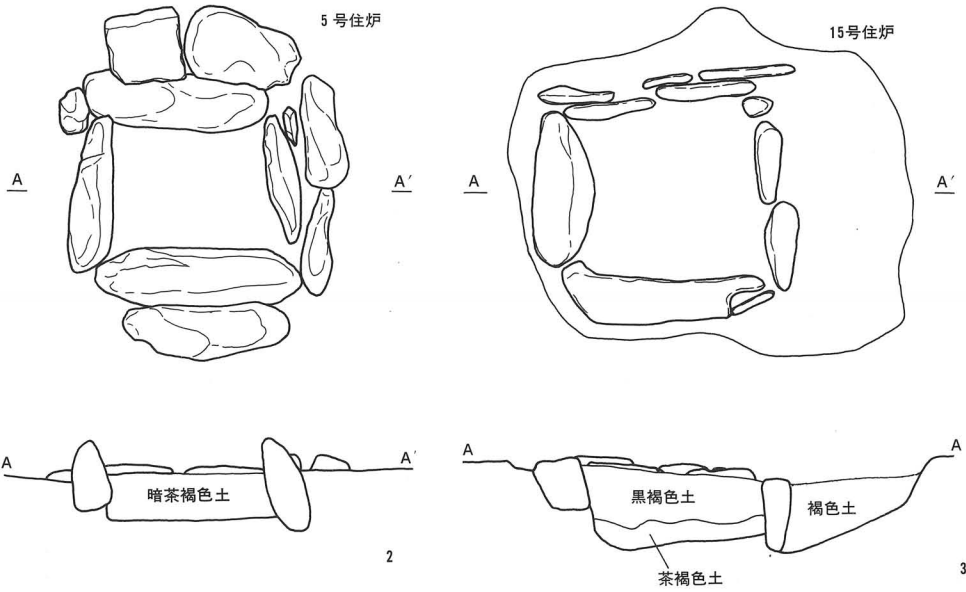
- 13号住 土層
- 1 黑色腐植土
 - 2 黑褐色土
 - 3 茶褐色土
 - 4 黄茶褐色砂質土
 - 5 黄茶褐色土
 - 6 黄茶褐色砂
 - 7 黄茶褐色土
 - 8 攪乱
 - 9 黄茶褐色土

第13図 5号・15号住居址 (1/60), 5号・15号住居炉 (1/15)

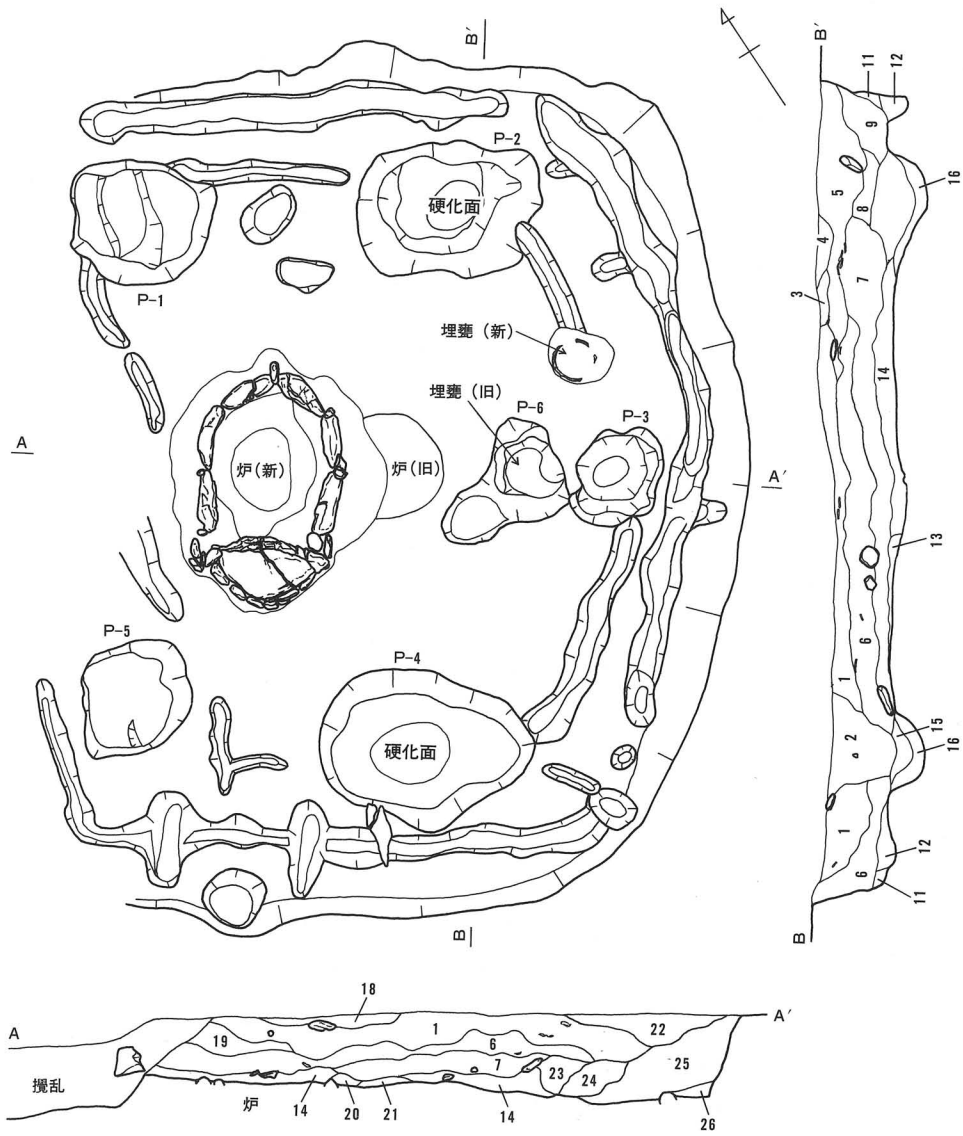


15号住 土層

- 1 黒褐色砂質土 2 暗茶褐色土 3 茶褐色土 4 灰褐色土



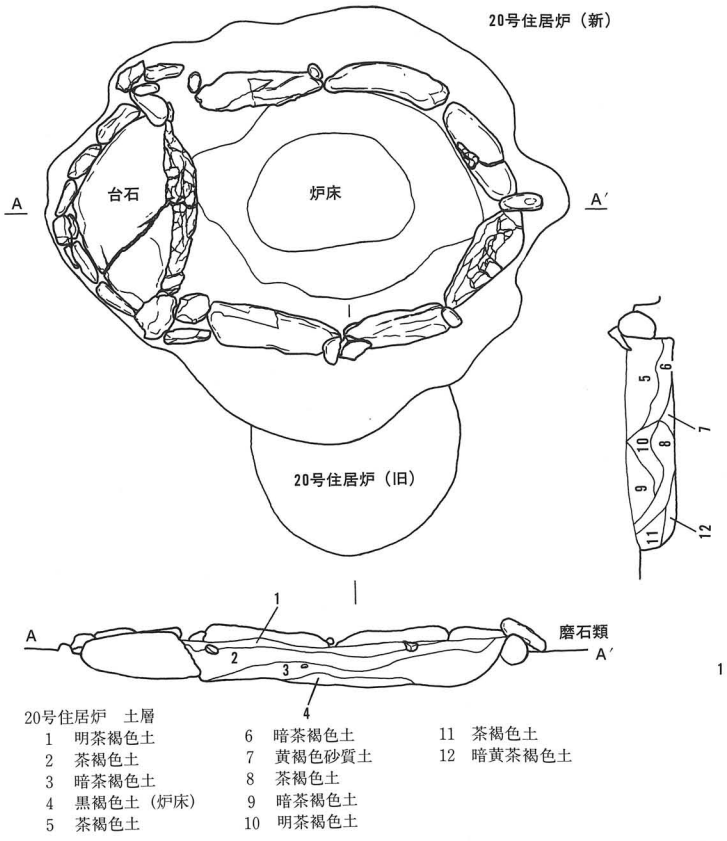
第14图 20号住居址 (1/60)



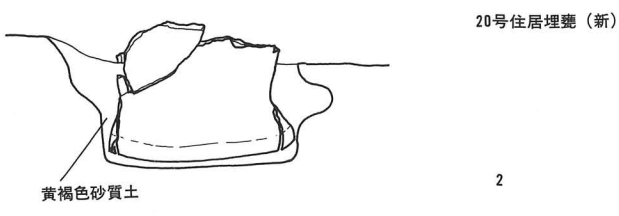
20号住 土層

- | | | | |
|---------|----------|-----------|----------|
| 1 濃茶褐色土 | 6 黑褐色土 | 11 暗黄褐色土 | 16 黄褐色砂 |
| 2 黑褐色土 | 7 黑褐色土 | 12 暗茶褐色土 | 17 明茶褐色土 |
| 3 暗茶褐色土 | 8 暗茶赤褐色土 | 13 明茶褐色土 | |
| 4 明茶褐色土 | 9 暗茶褐色土 | 14 黄褐色土 | |
| 5 暗茶褐色土 | 10 明茶褐色土 | 15 暗黄茶褐色土 | |

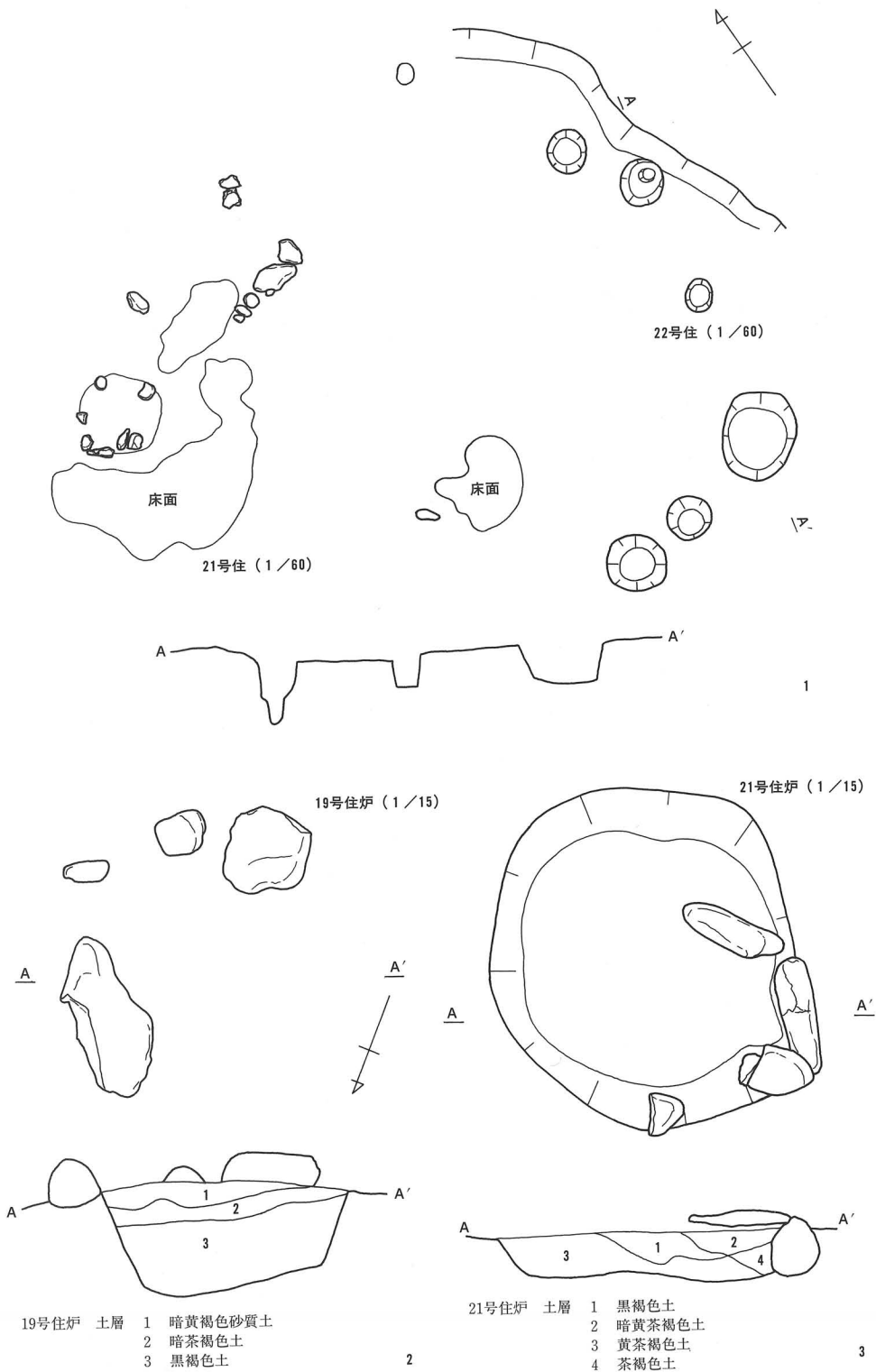
第15图 20号住居炉・埋甕 (1/20)



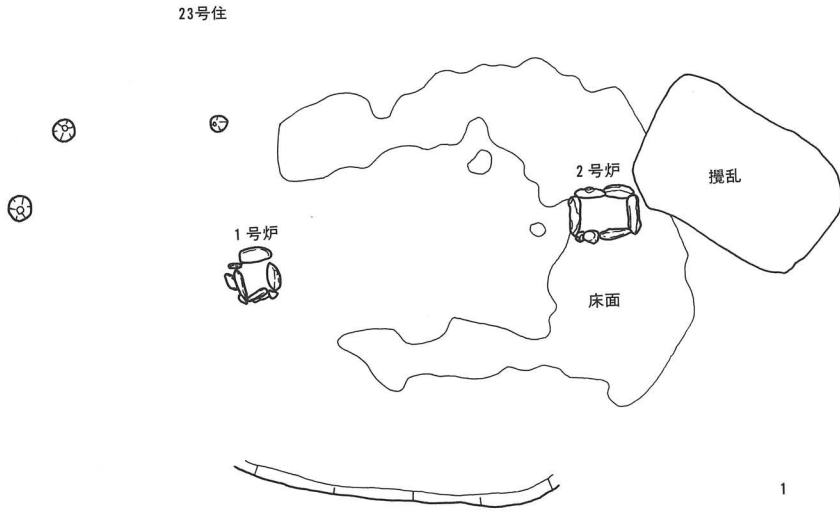
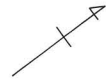
- 20号住居炉 土层
- | | | |
|-------------|----------|-----------|
| 1 明茶褐色土 | 6 暗茶褐色土 | 11 茶褐色土 |
| 2 茶褐色土 | 7 黄褐色砂质土 | 12 暗黄茶褐色土 |
| 3 暗茶褐色土 | 8 茶褐色土 | |
| 4 黑褐色土 (炉床) | 9 暗茶褐色土 | |
| 5 茶褐色土 | 10 明茶褐色土 | |



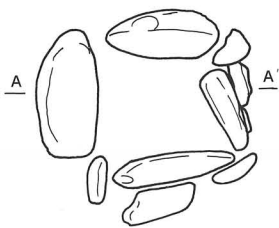
第16图 19号・21号・22号住居址



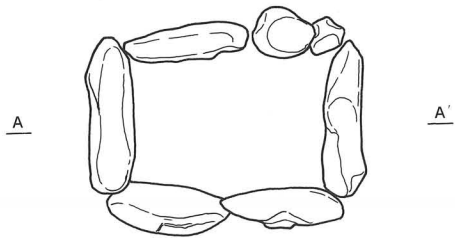
第17图 23号住居址 (1/60) · 23号住居炉 (1/15)



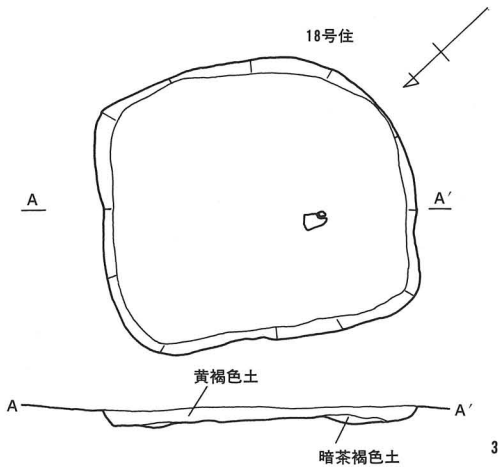
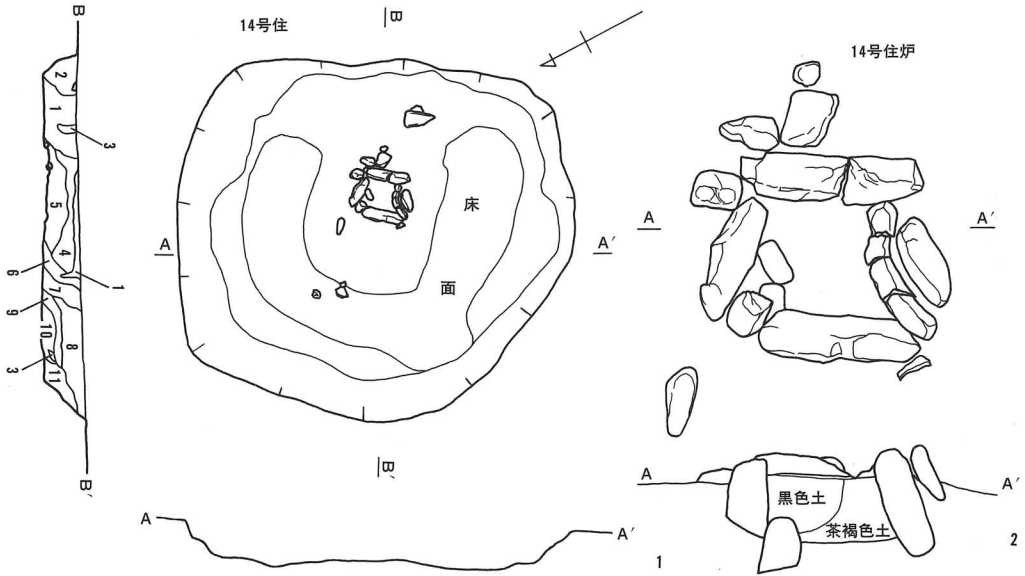
23号住 1号炉



23号住 2号炉



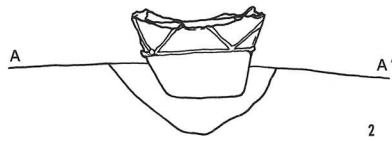
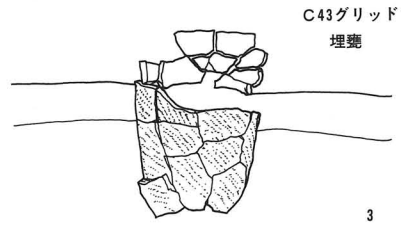
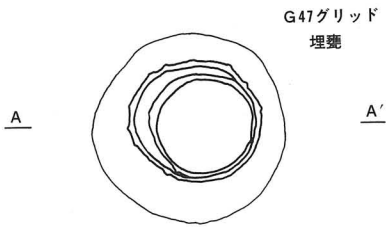
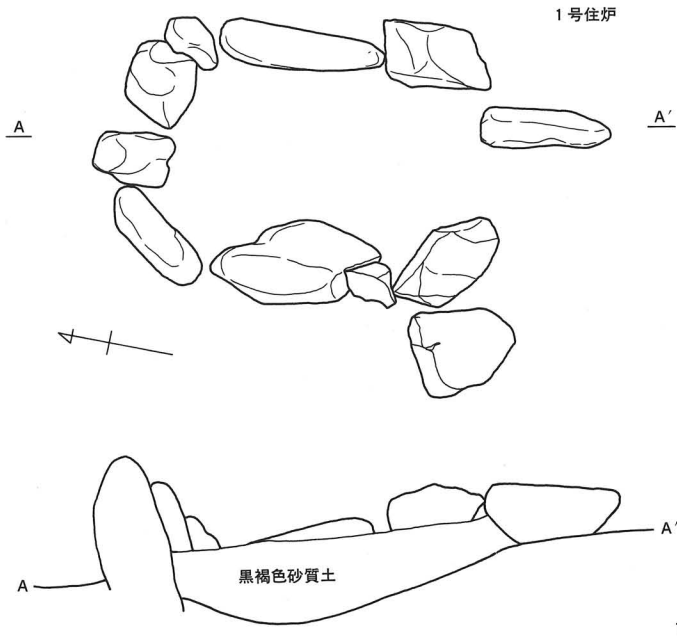
第18图 14号·18号住居址 (1/60) 14号住居炉 (1/15)



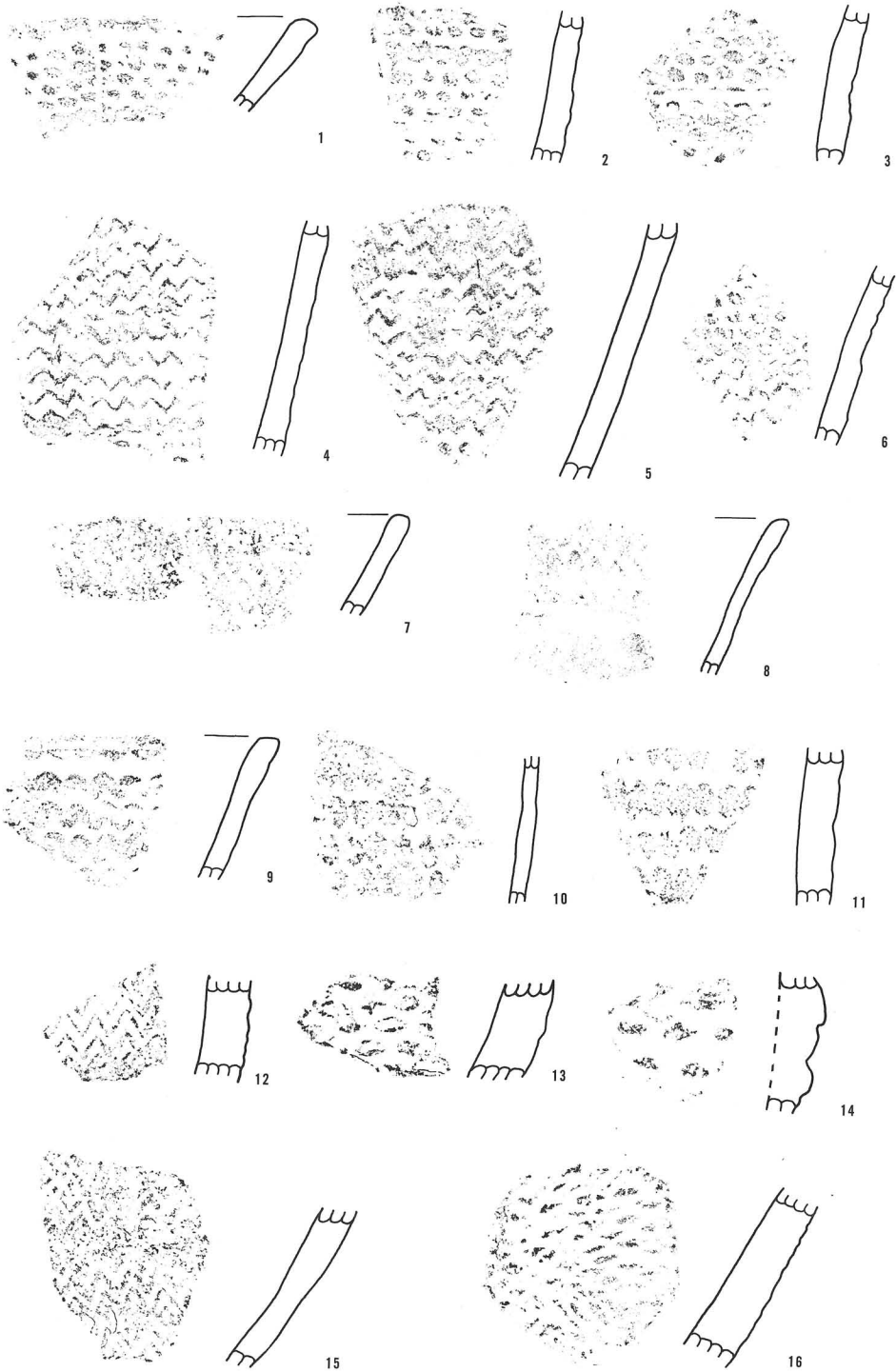
14号住居址

1. 黑褐色土
2. 茶褐色土
3. 搅乱
4. 黑褐色土
5. 黑色土
6. 黑褐色土
7. 茶褐色土
8. 茶褐色砂质土
9. 黑褐色土
10. 黑色土
11. 茶褐色砂质土

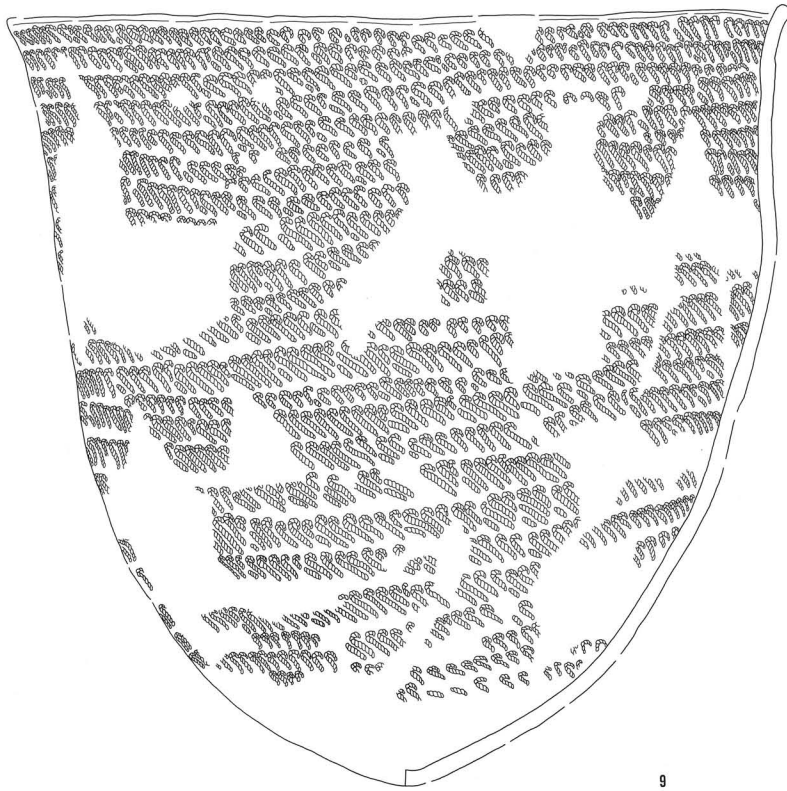
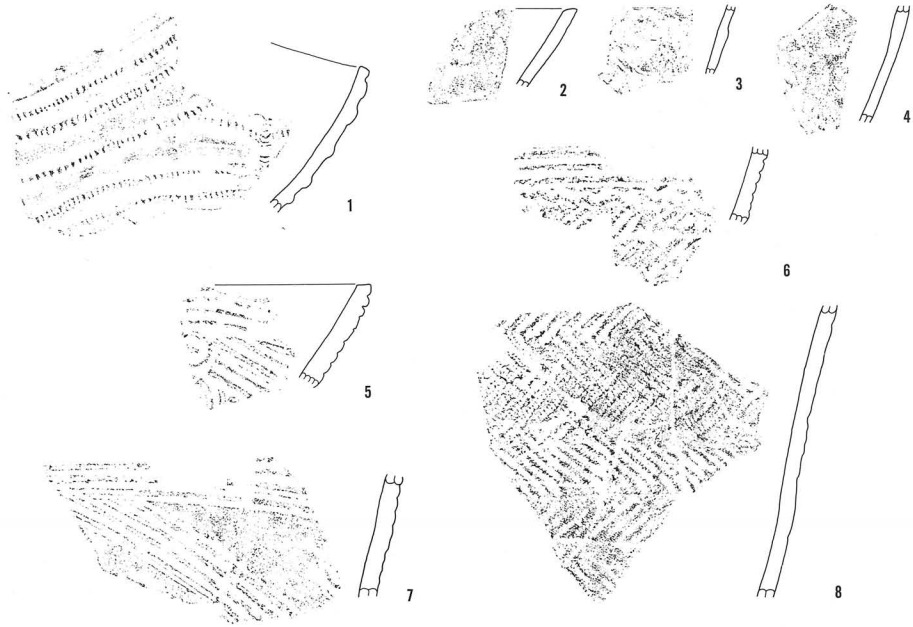
第19図 1号住居炉・单独出土埋甕 (1/15)



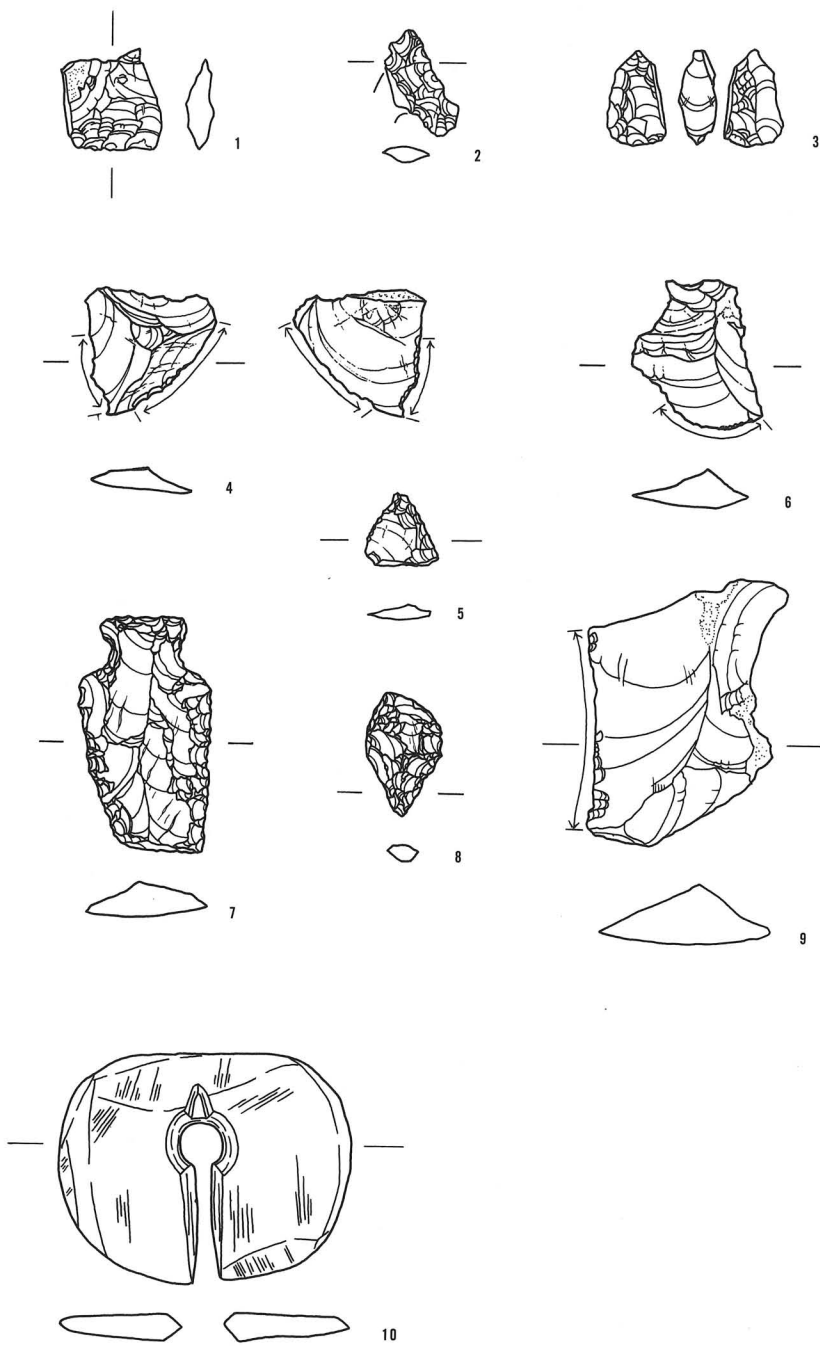
第20图 早期包含層出土土器 (2/3)



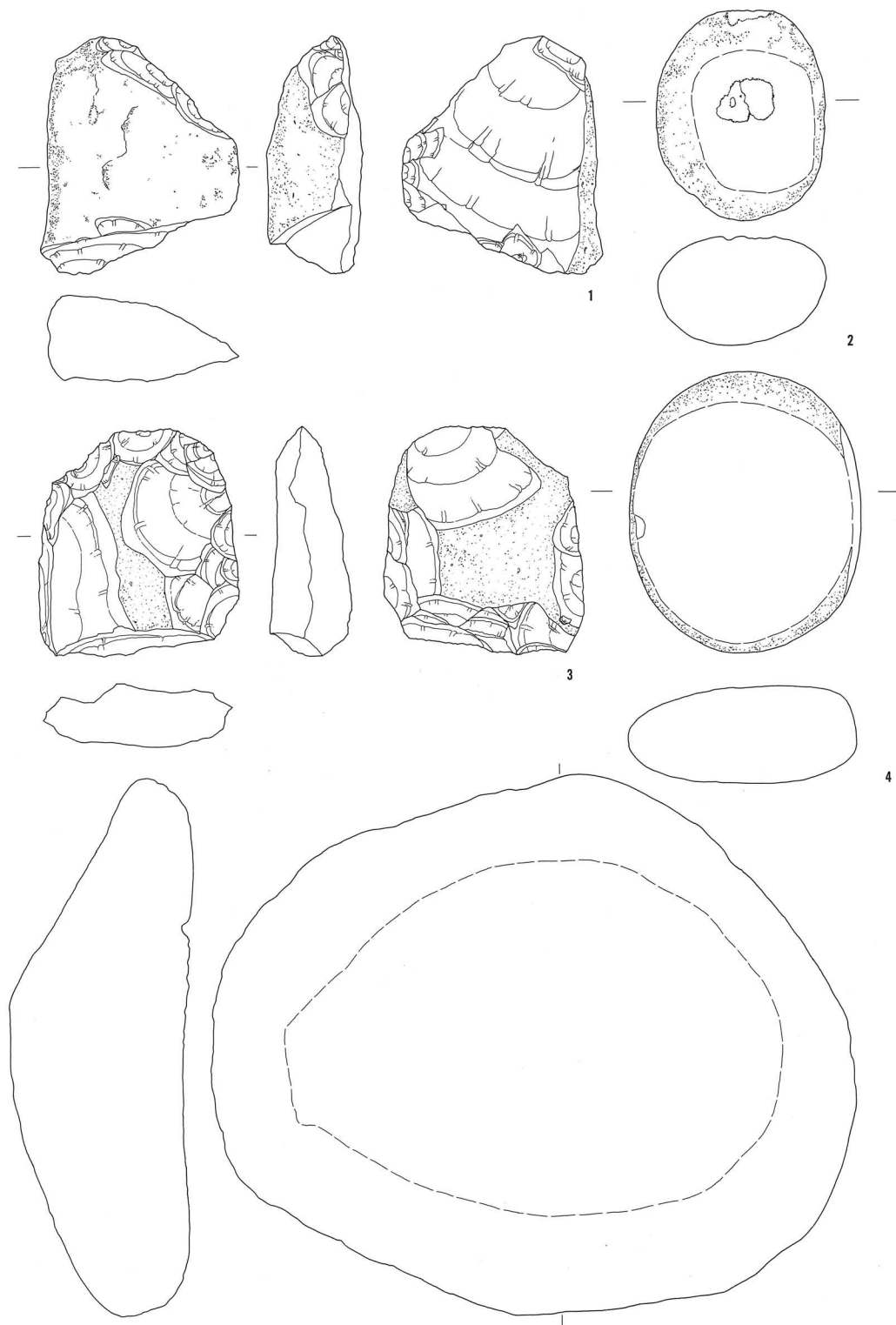
第21図 前期包含層出土土器 (1/3)



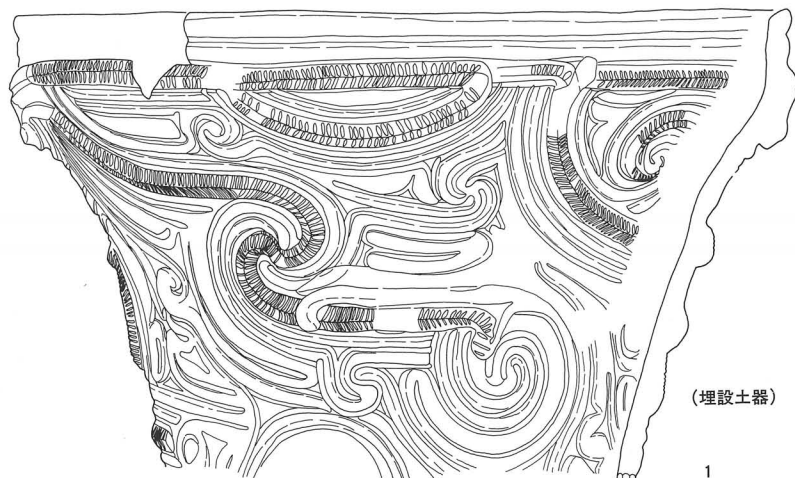
第22図 早期・前期包含層出土石器・石製品 (2/3) (1~3は早期)



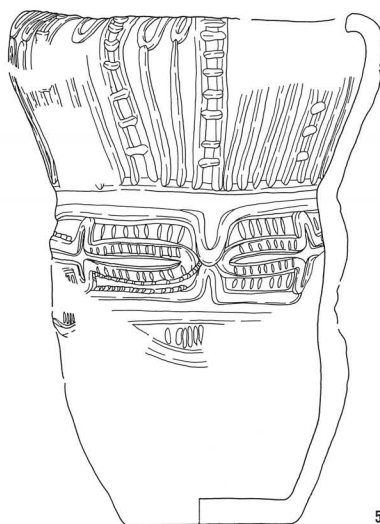
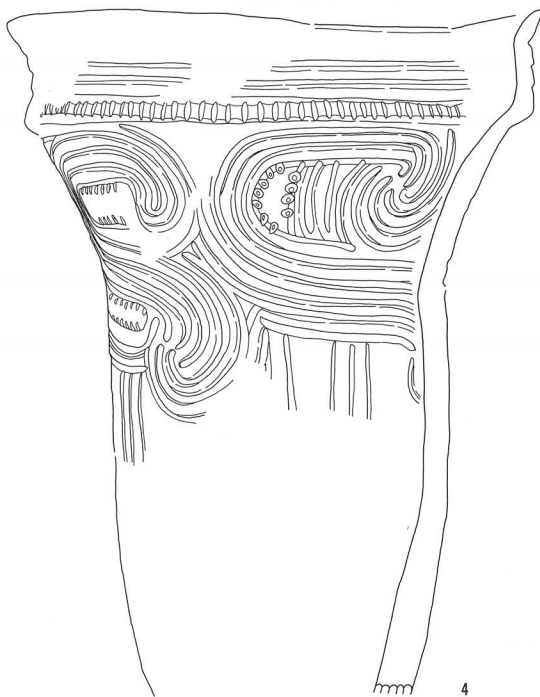
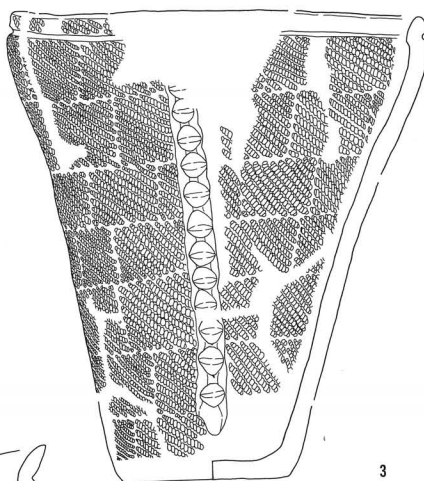
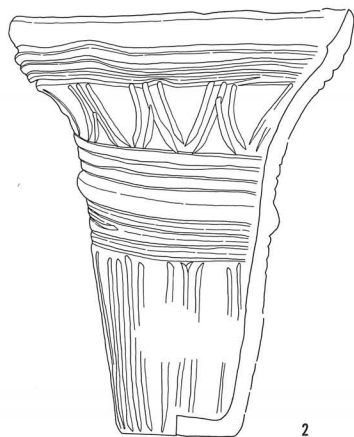
第23図 早期・前期包含層出土石器（1～4は1/3、5は2/9）（1のみ早期）



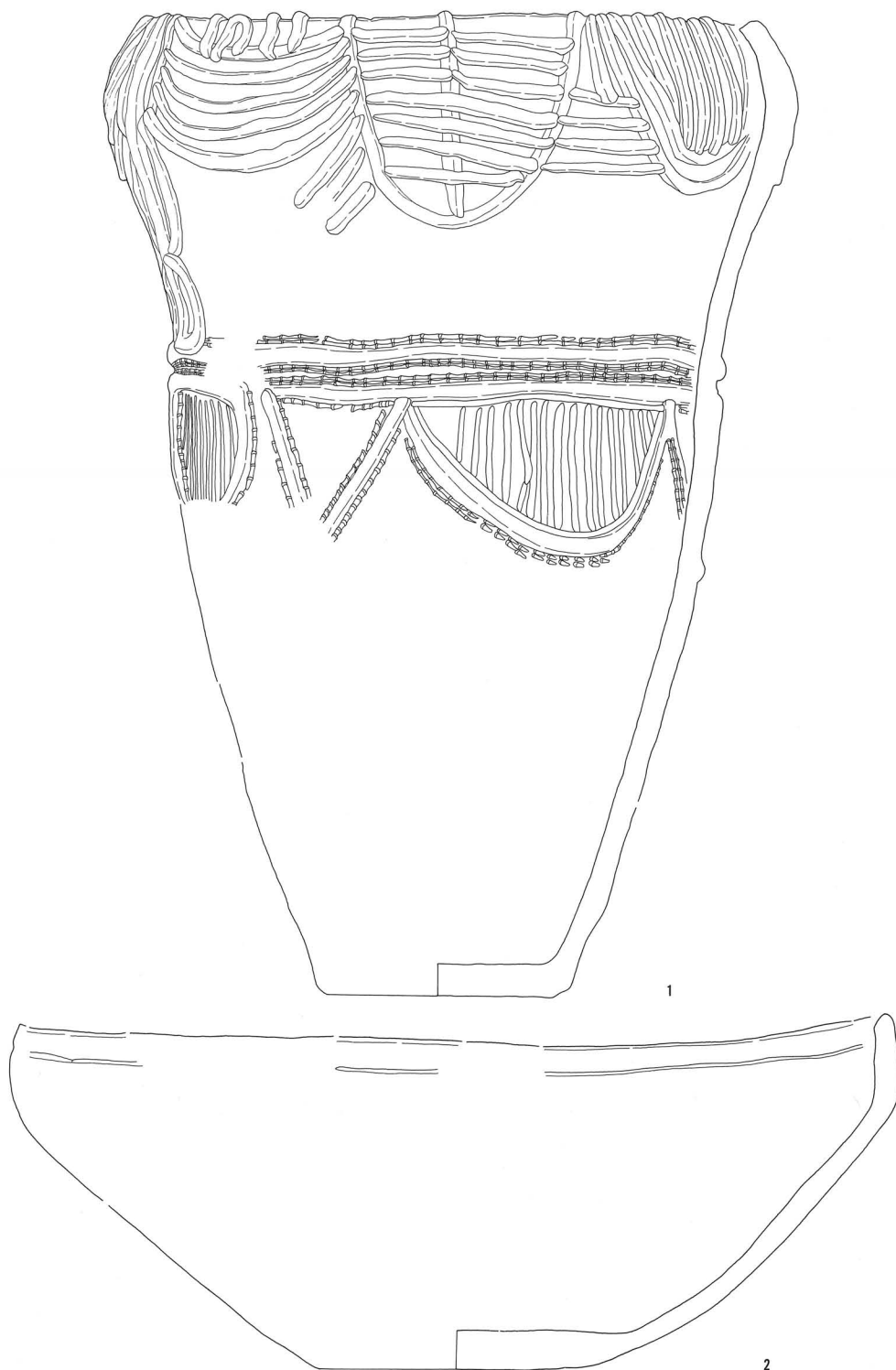
第24図 4号住居址出土土器 (1/3)



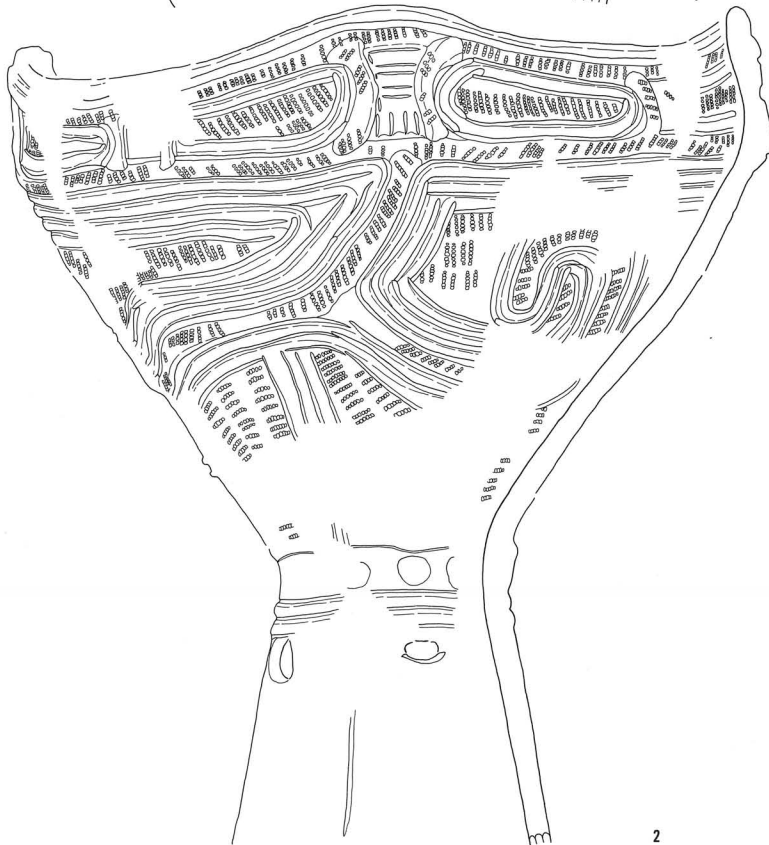
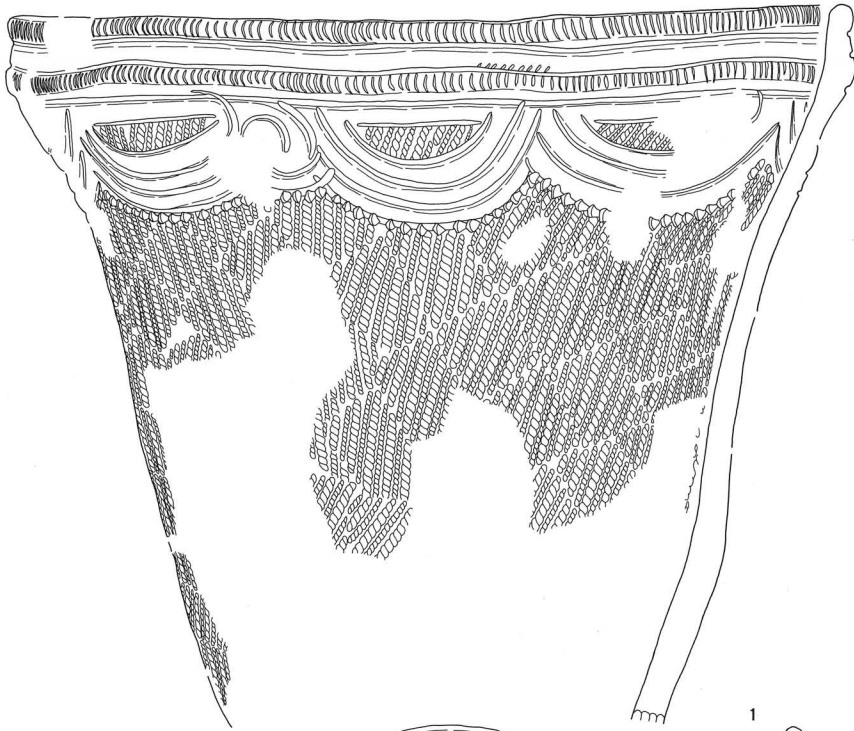
(埋設土器)



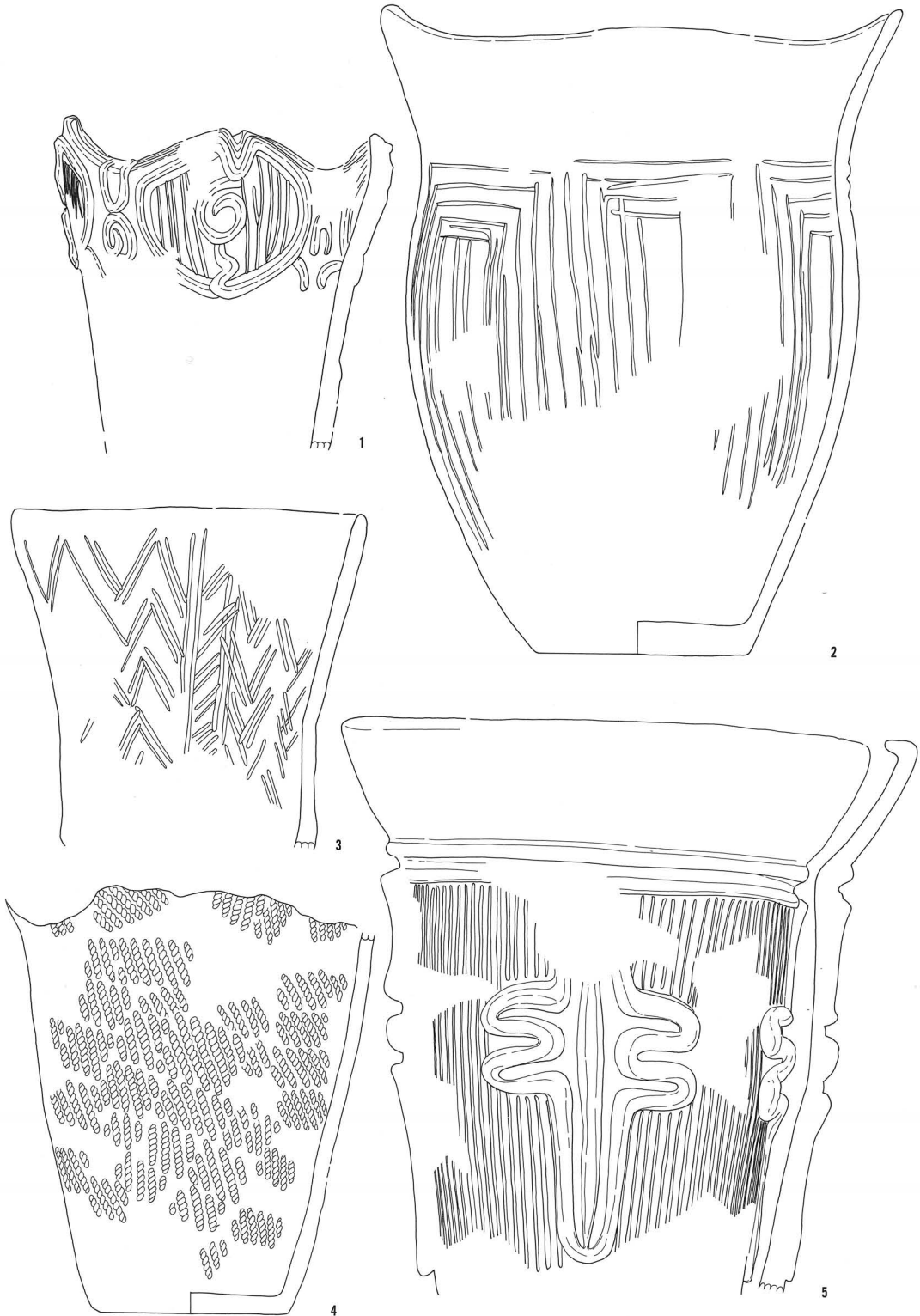
第25图 4号住居址出土土器(1/3)



第26图 4号住居址出土土器 (1/3)

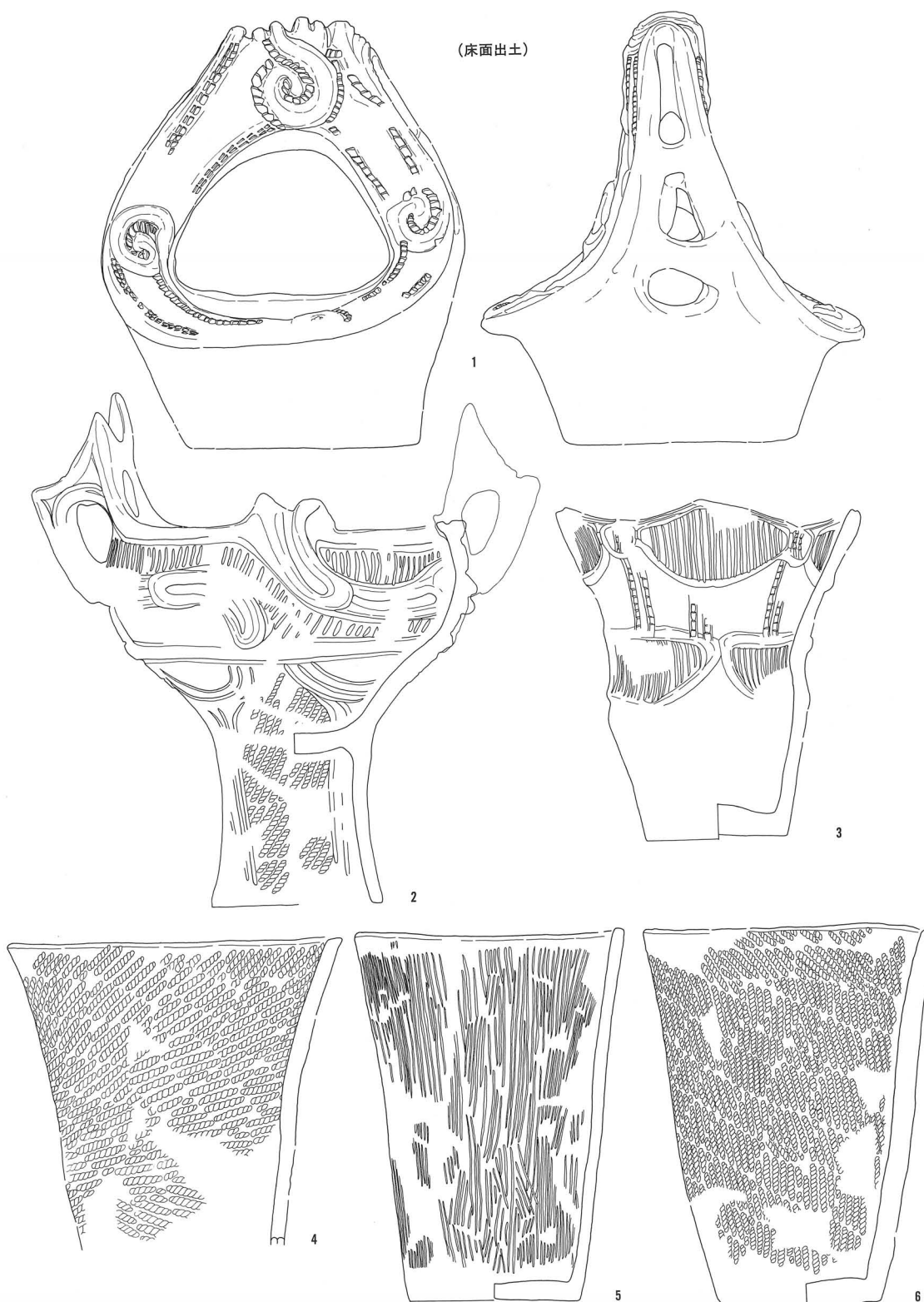


第27図 4号・5号住居址出土土器 (1/3)
(1のみ4号住居出土)

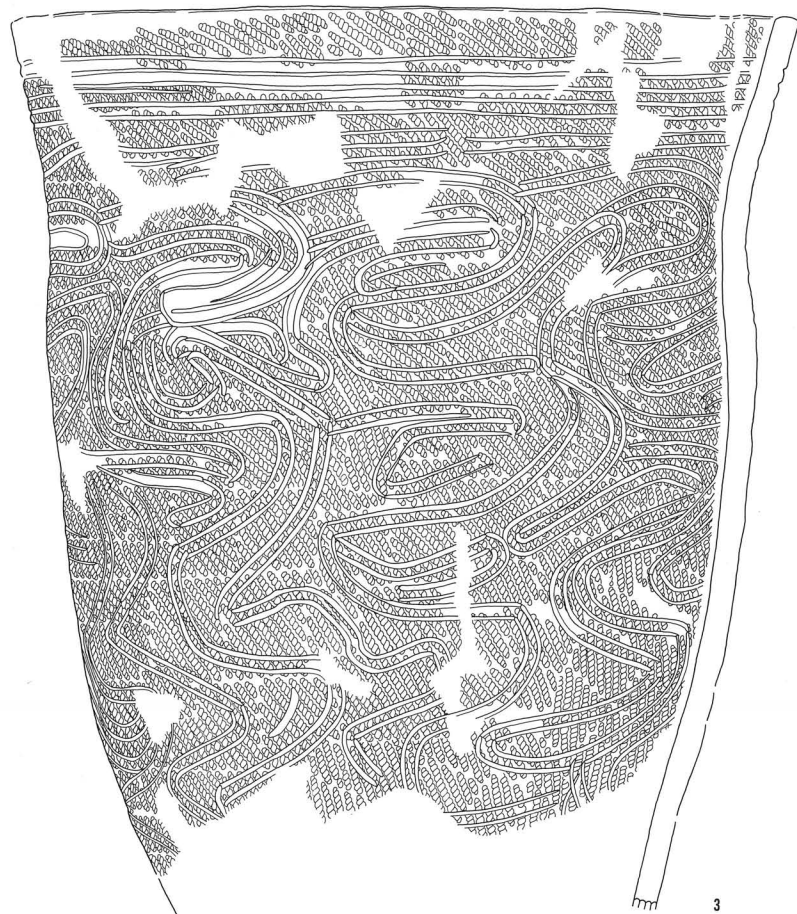


第28图 6号住居址出土土器 (1/3)

(床面出土)



第29图 7号住居址出土土器 (1/3)

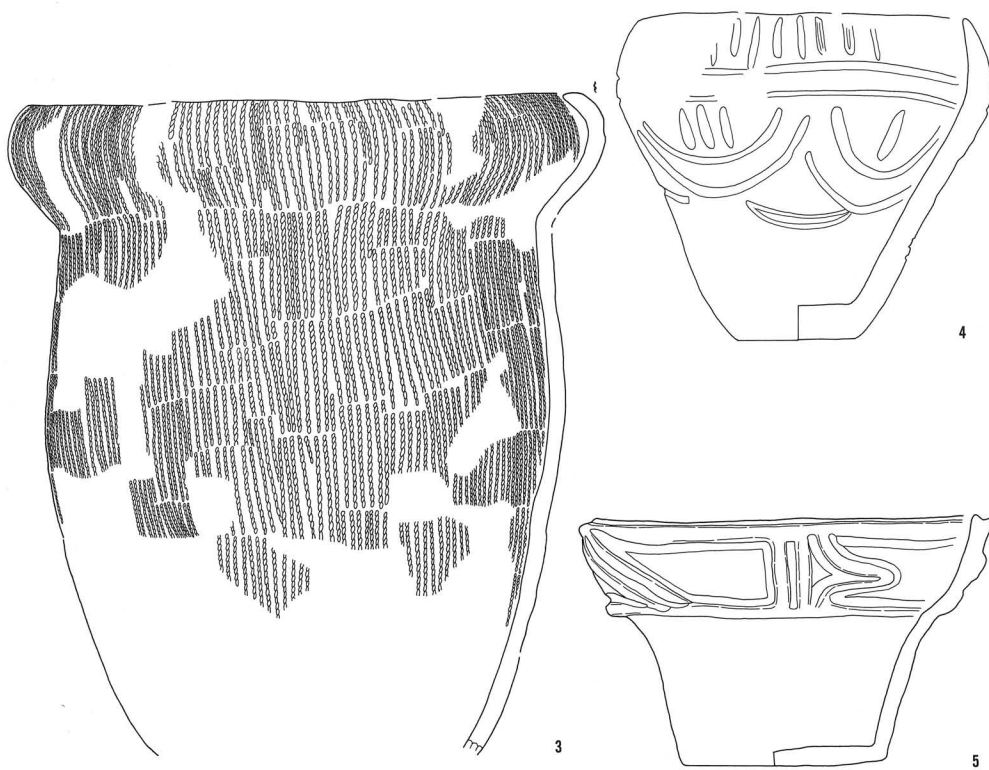
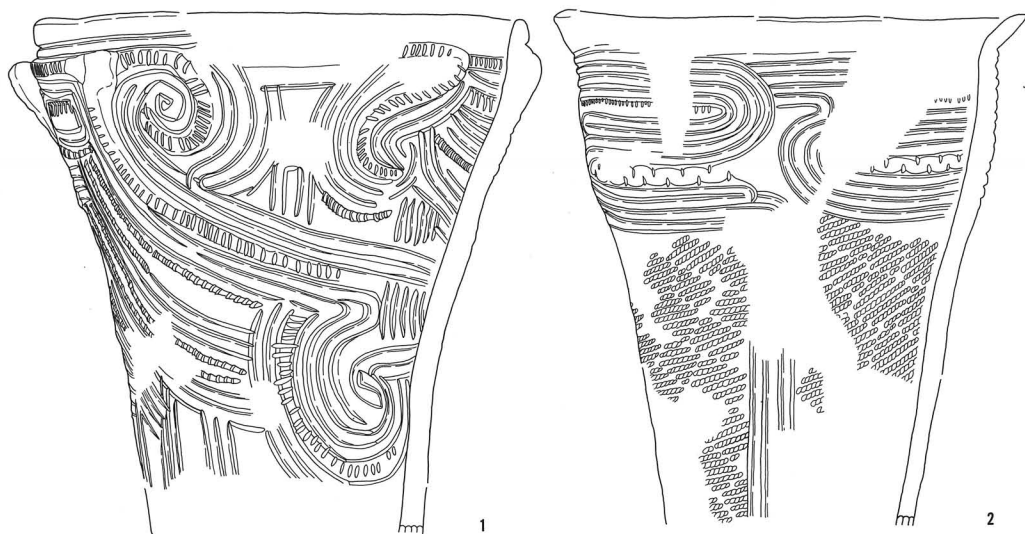


第30图 7号住居址出土土器 (1/3)

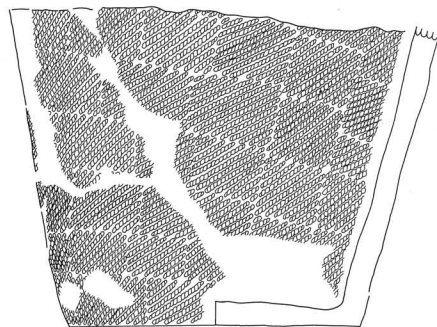
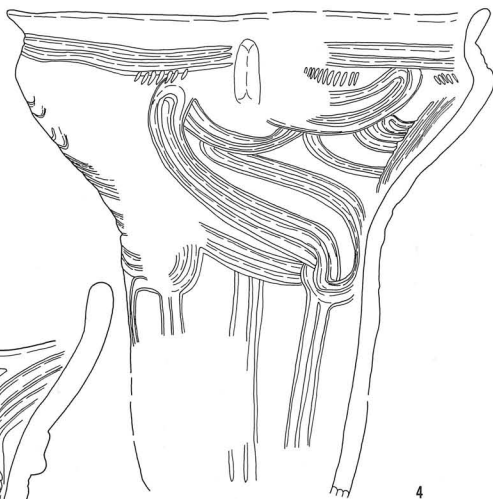
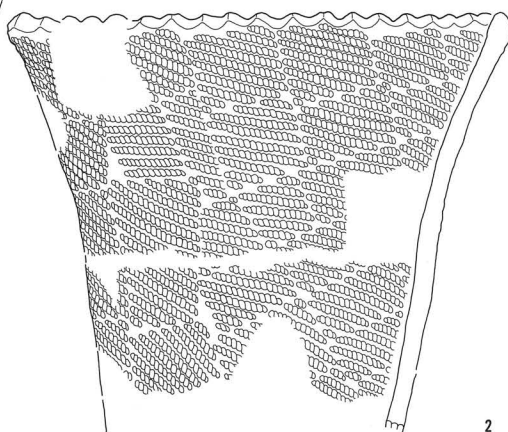
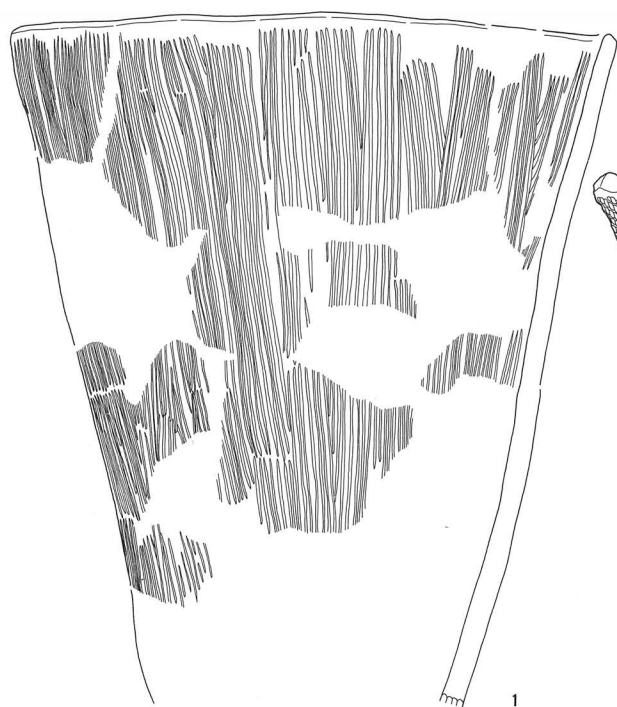


(床面出土)

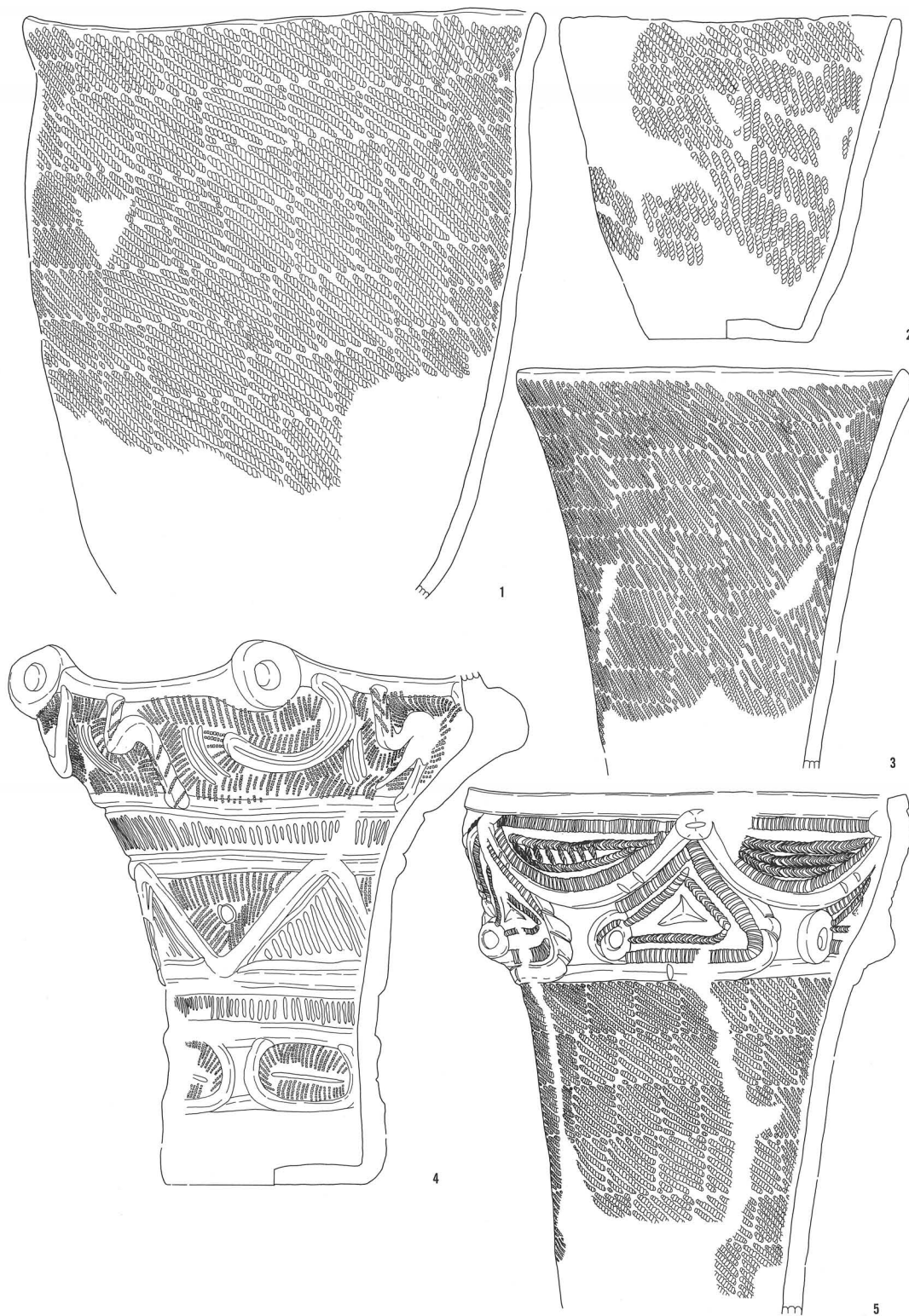
第31图 8号住居址出土土器(1/3)



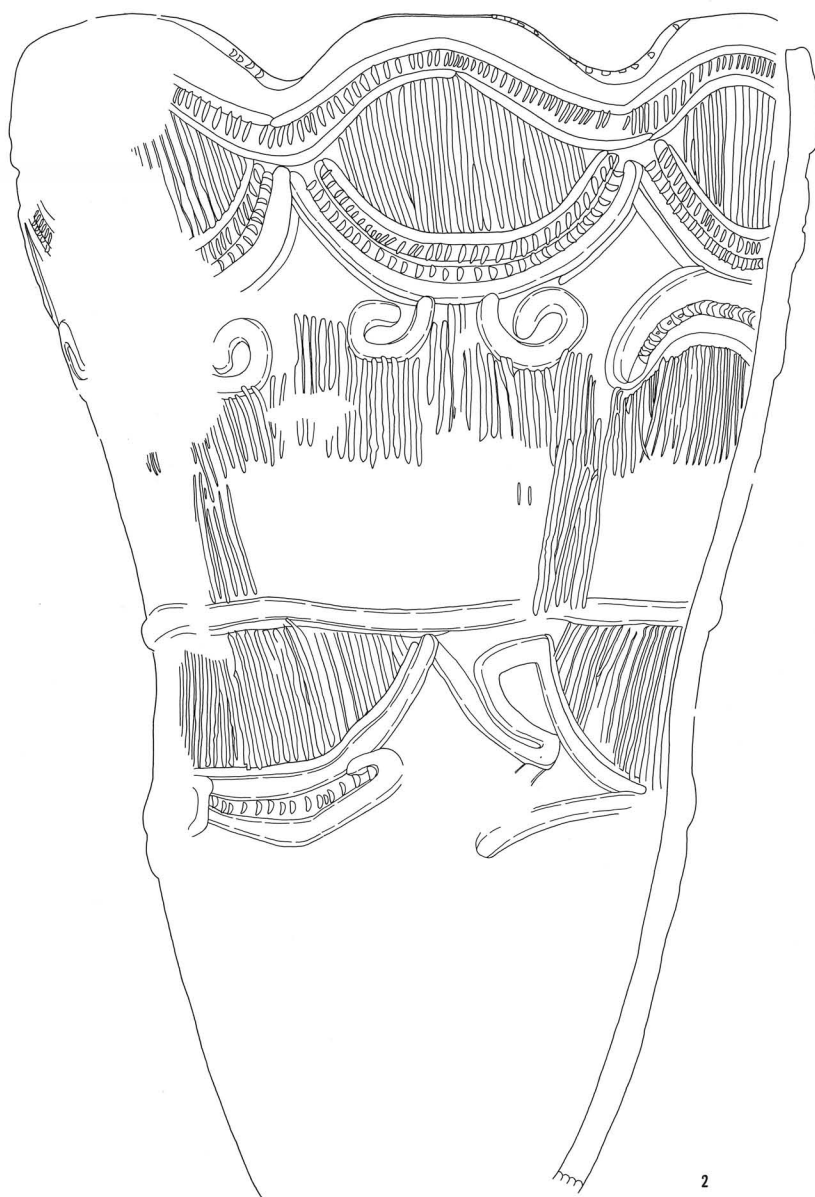
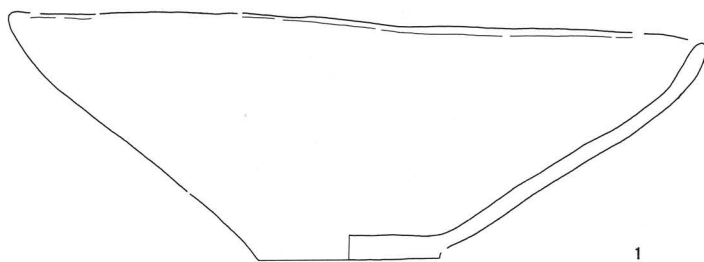
第32図 8号・9号住居址出土土器 (1/3) (2のみ8号住居)



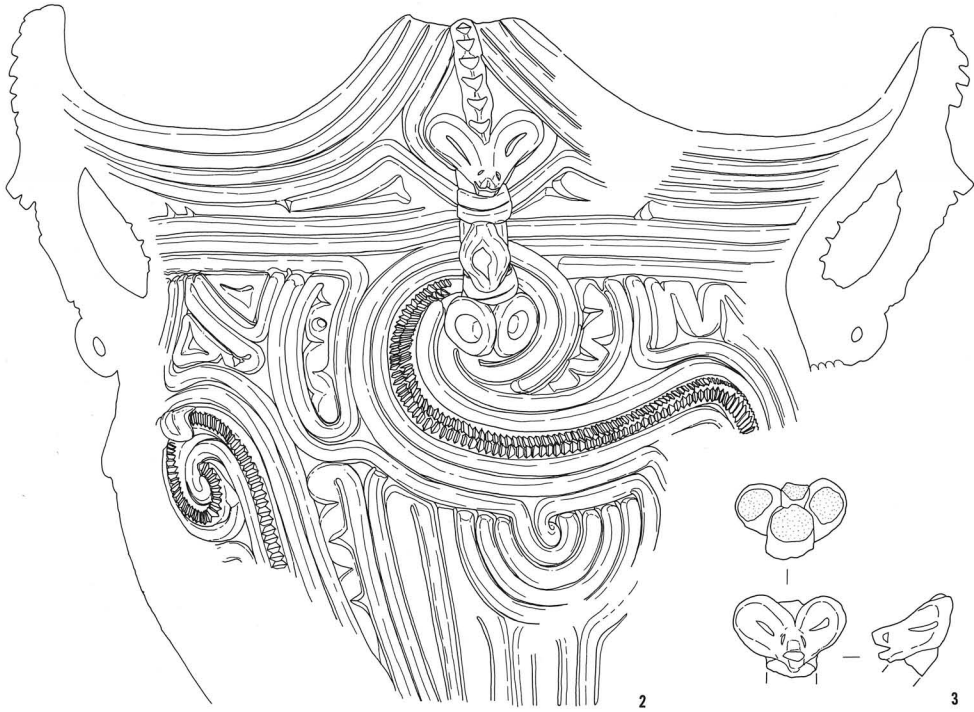
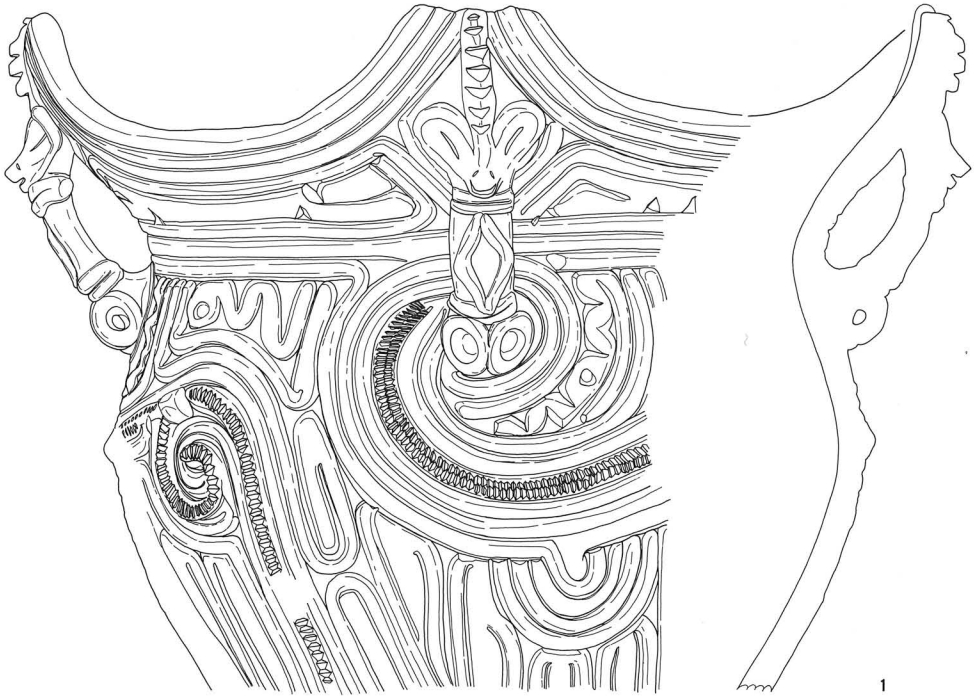
第33图 9号住居址出土土器(1/3)



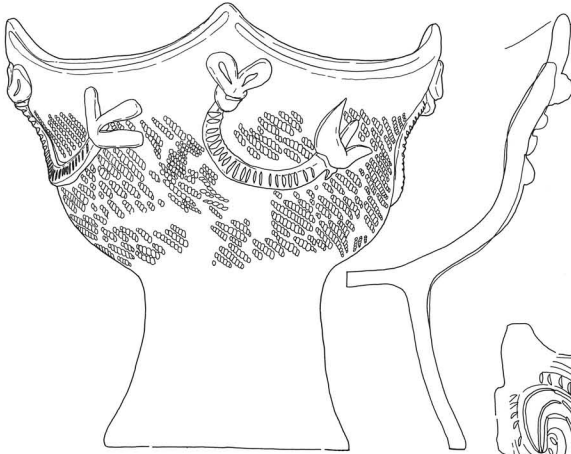
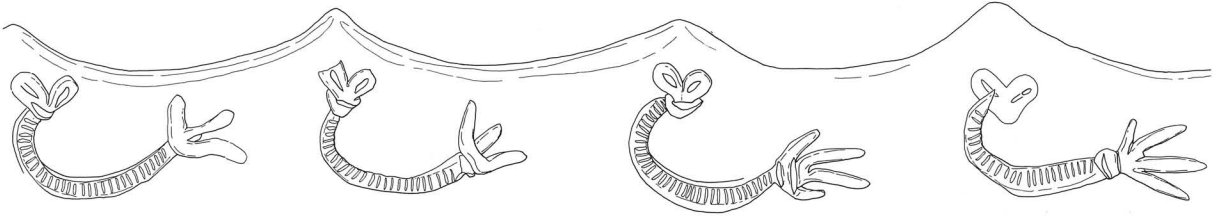
第34图 9号住居址出土土器(1/3)



第35図 動物意匠文土器 (1/3)

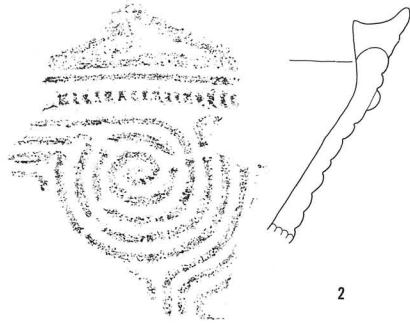


第36図 13号・15号住居址出土土器 (1/3) (1・3が15号住居出土)

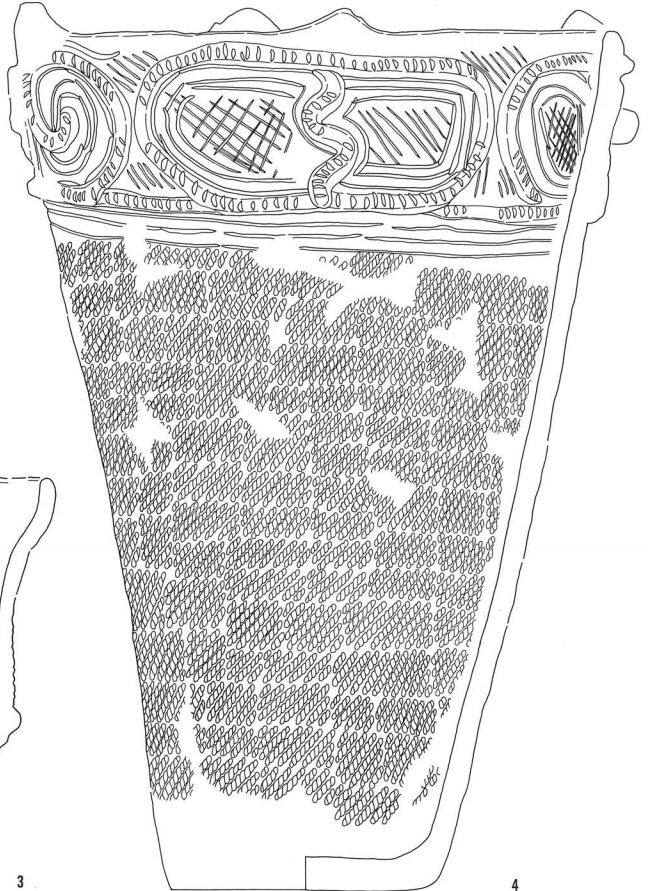


1

(床面出土)



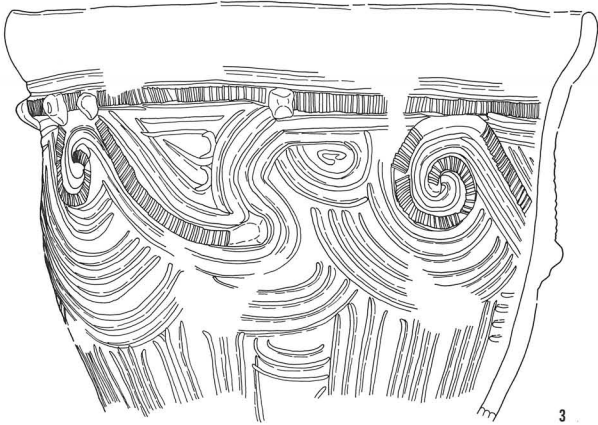
2



3

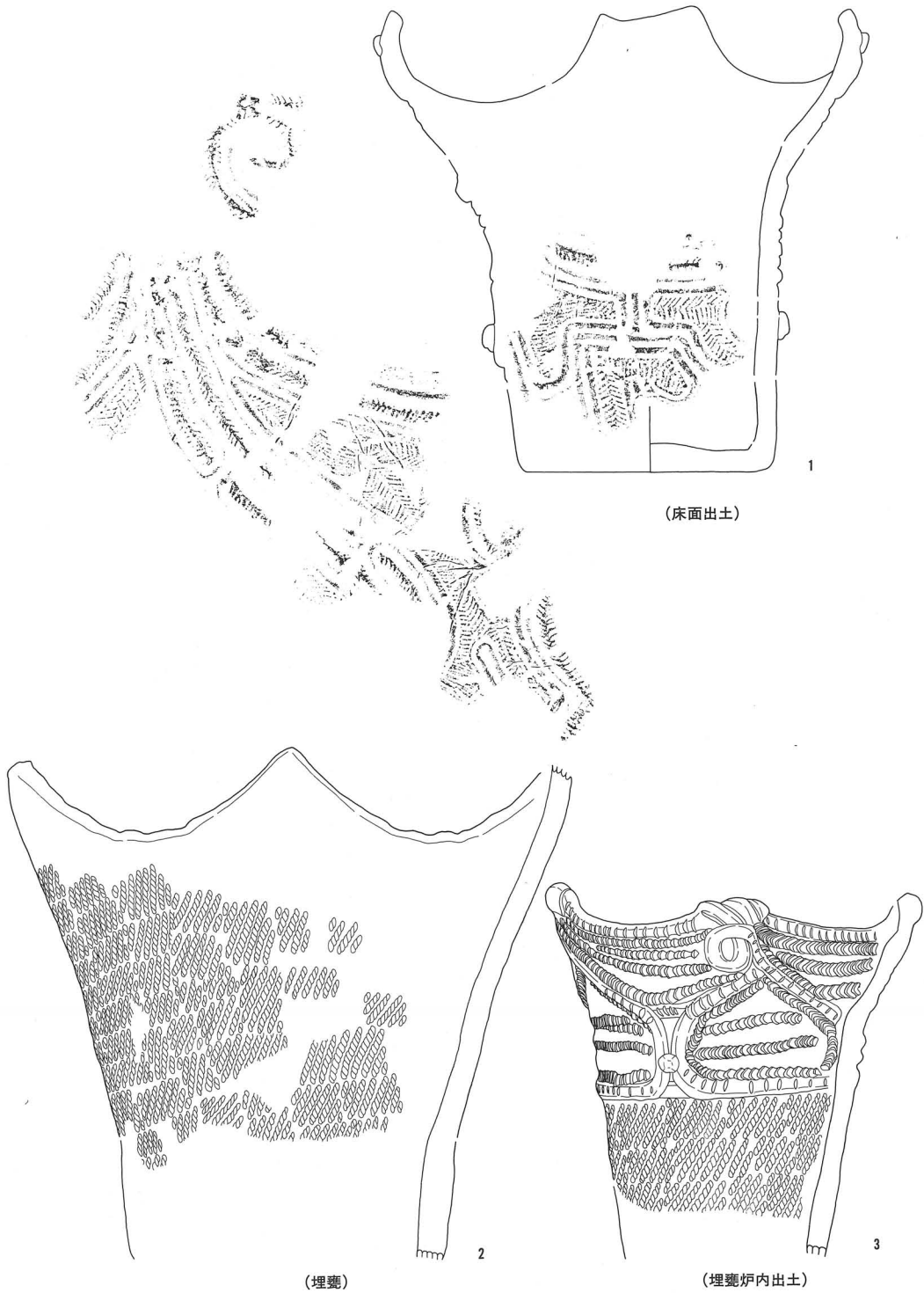
4

(床面出土)

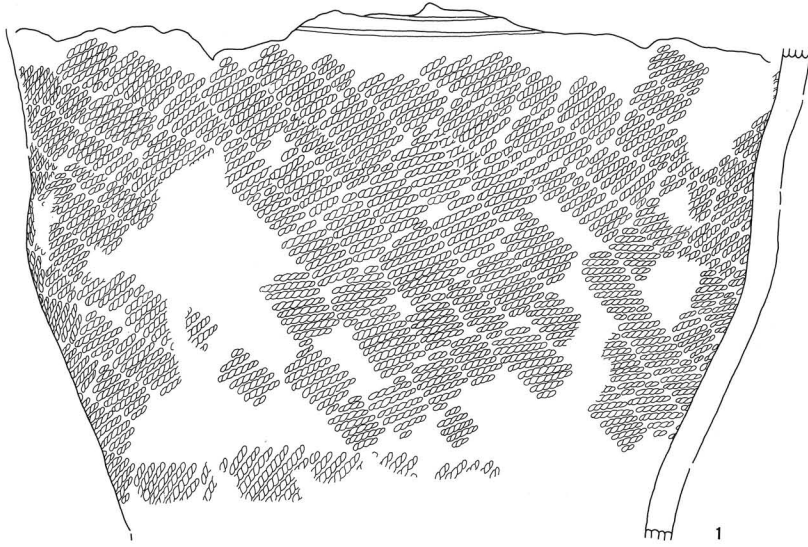


(ピット内出土)

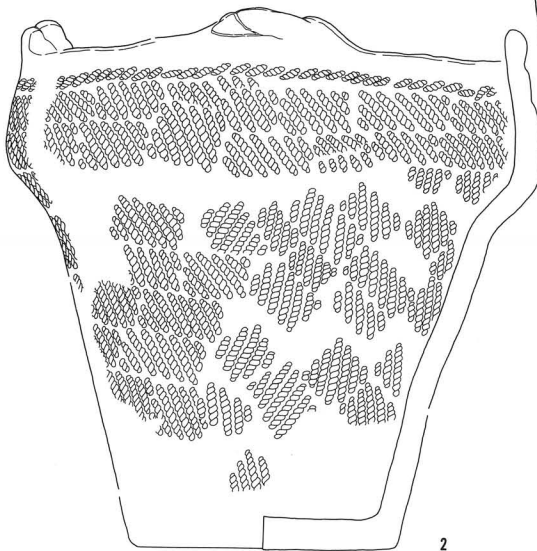
第37图 16号住居址出土土器 (1/3)



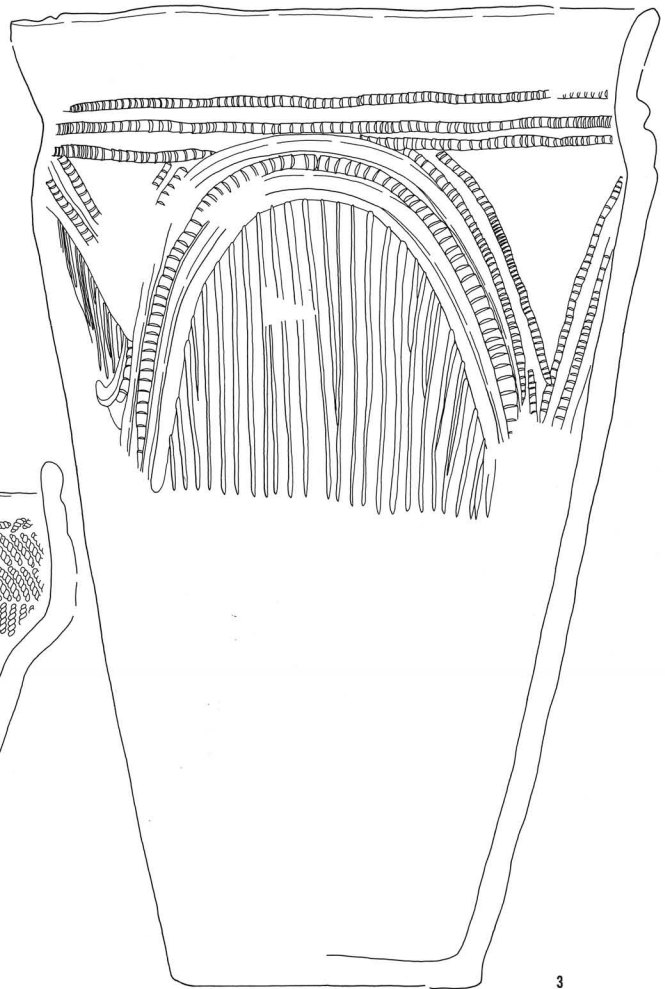
第38図 17号・23号住居址出土土器 (1/3) (1が17号住居)



(埋藏)

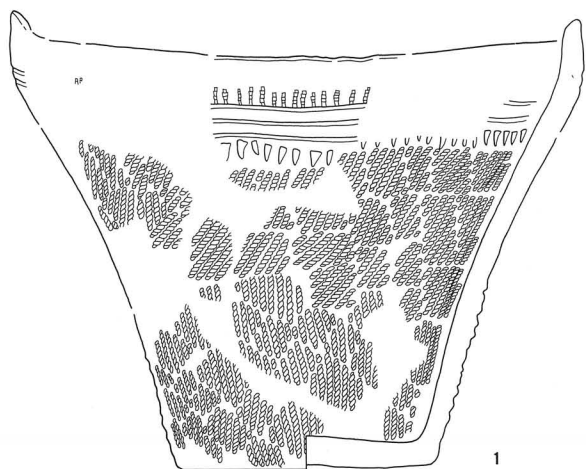


2

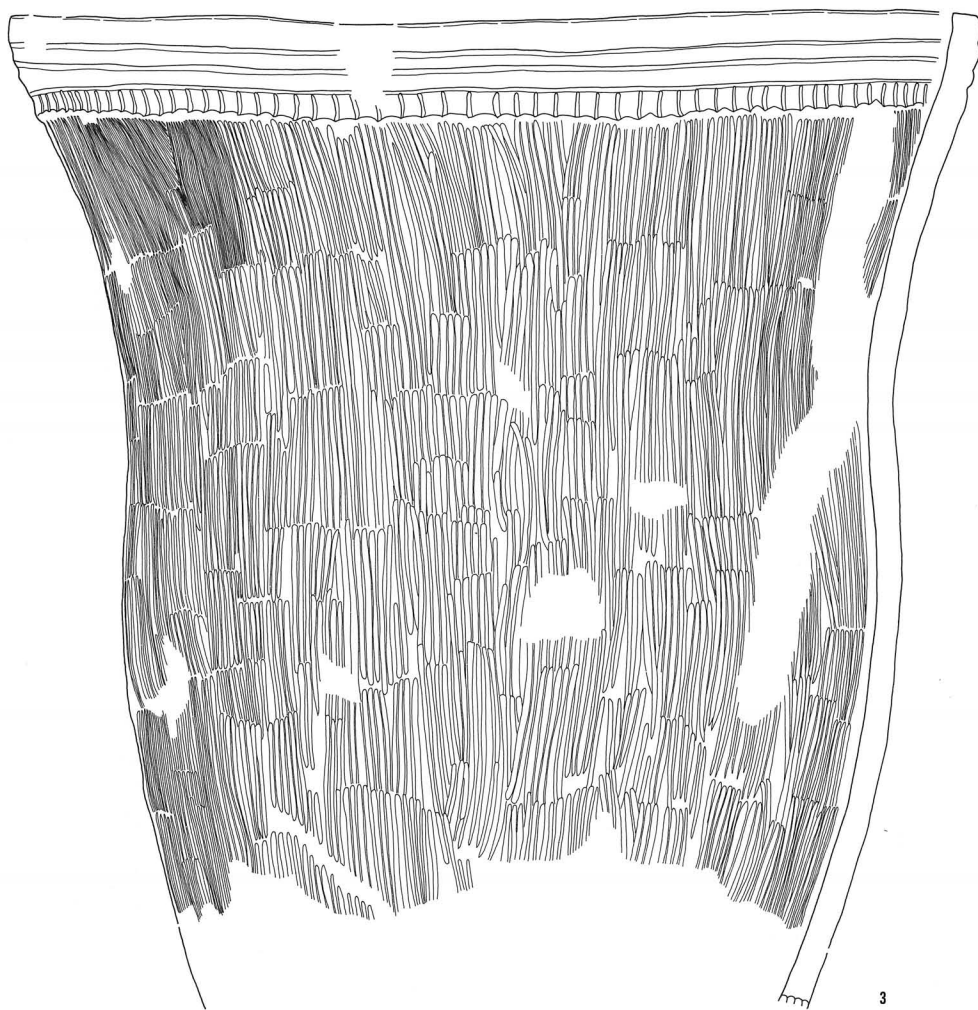
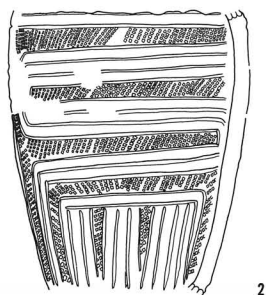


3

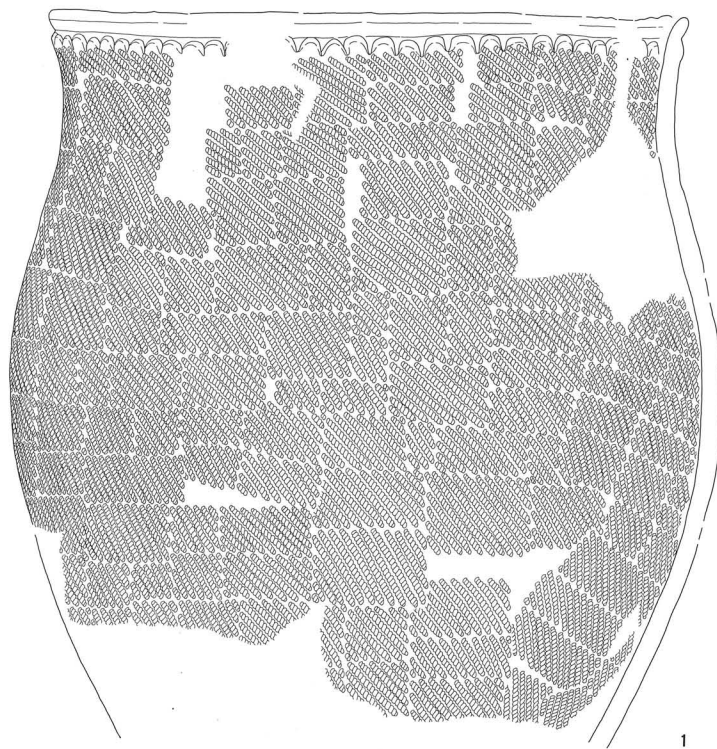
第39图 20号住居址出土土器 (1/3)



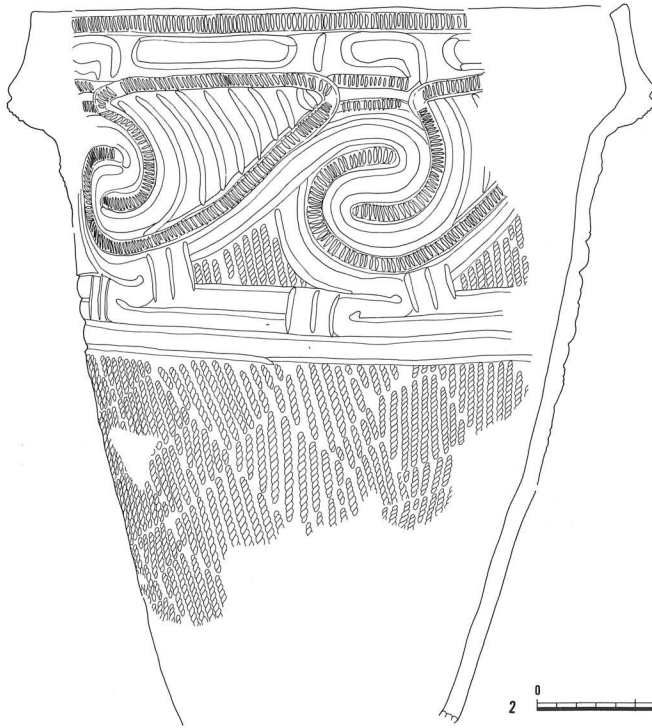
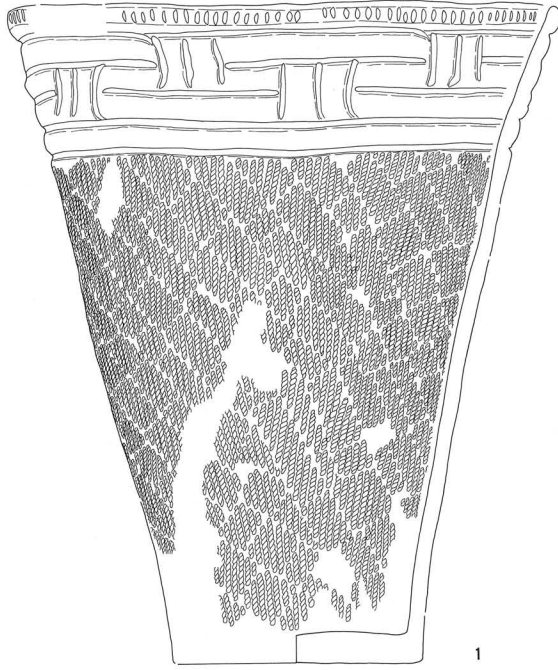
(埋甕・旧)



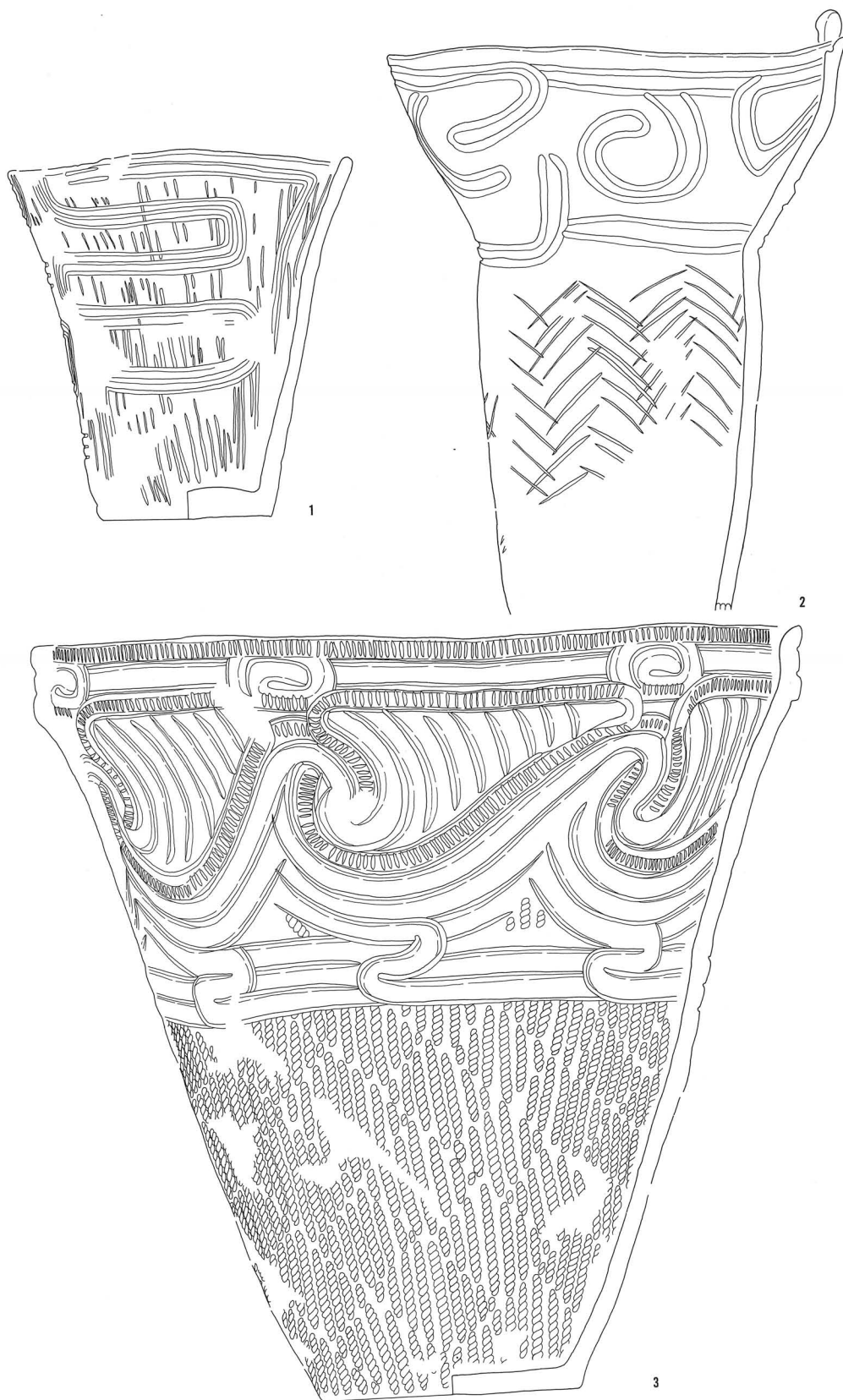
第40图 20号住居址出土土器



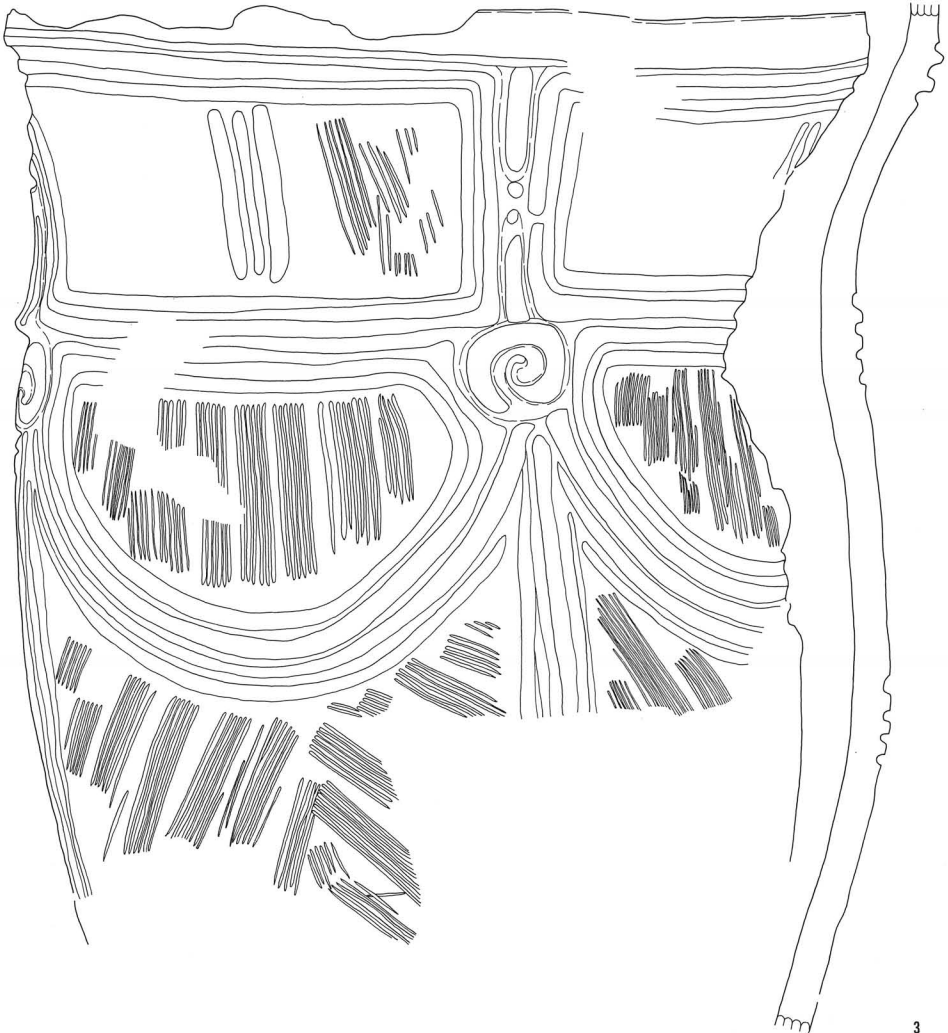
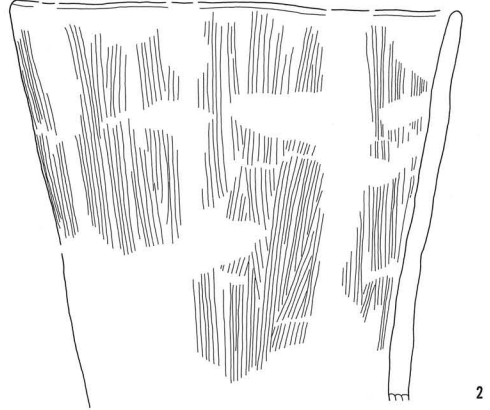
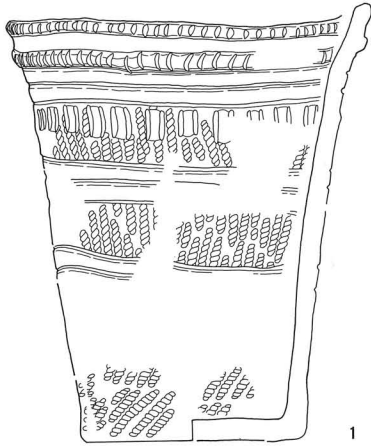
第41图 20号住居址出土土器



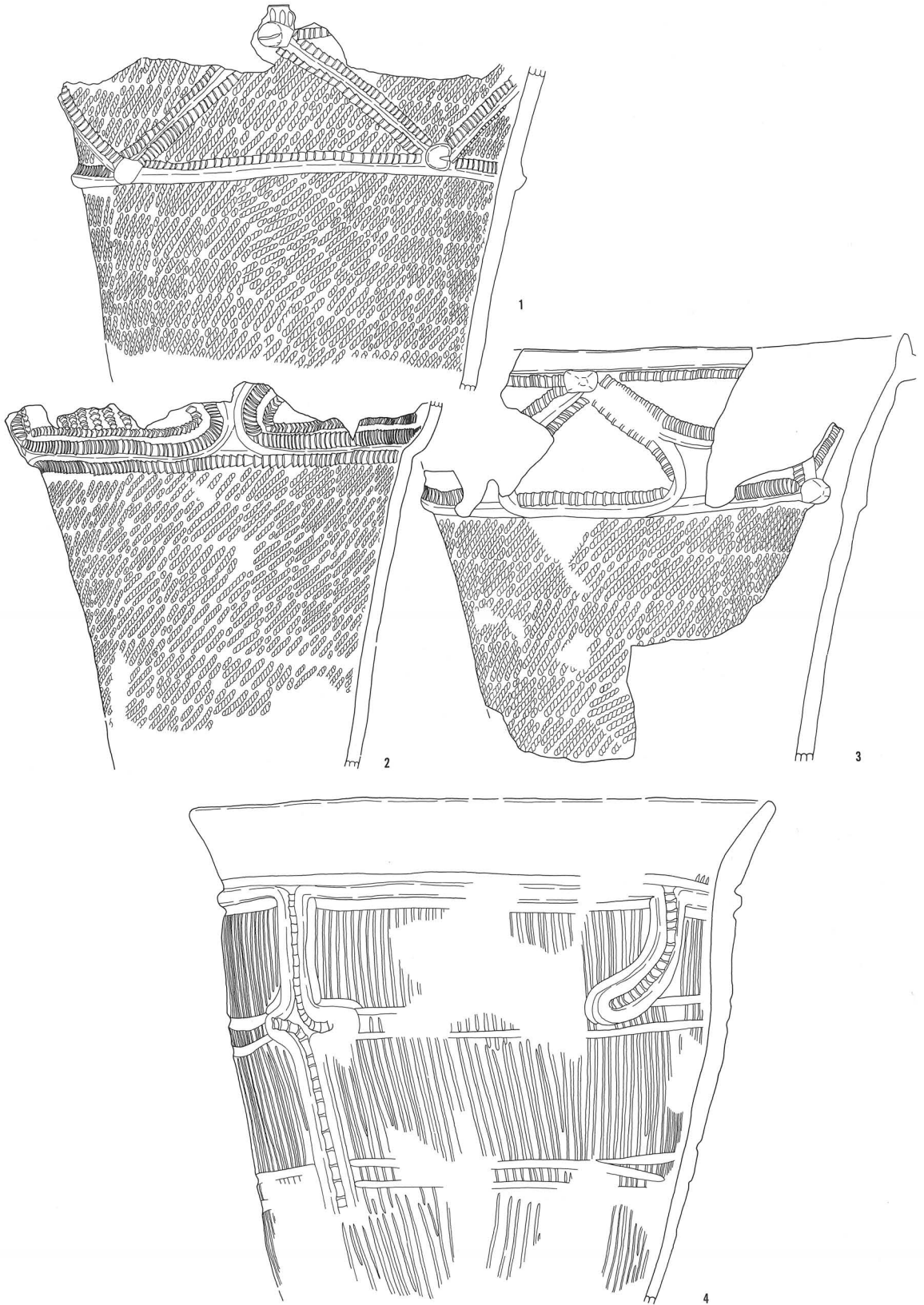
第42图 20号住居址出土土器 (1/3)



第43图 20号住居址出土土器 (1/3)



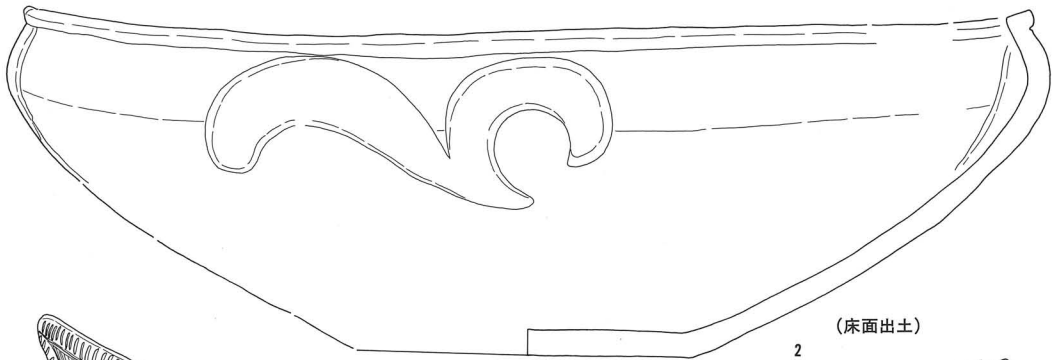
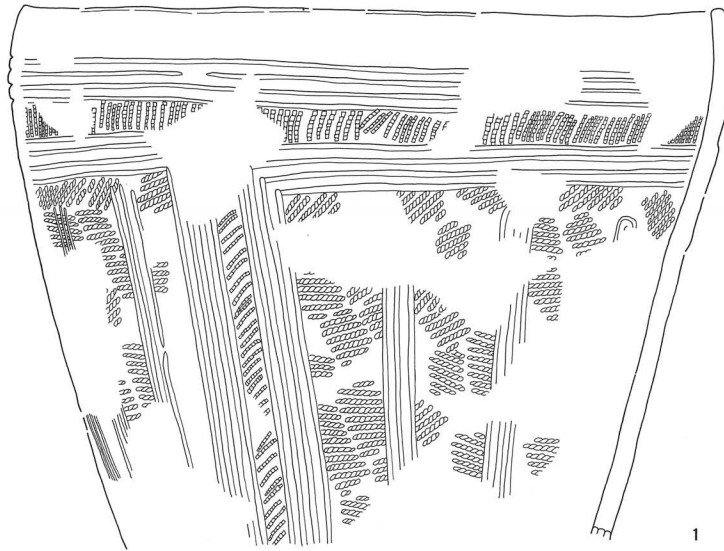
第44図 信州系土器 (1/3) (1・2は単独出土の埋甕、G47グリッド)



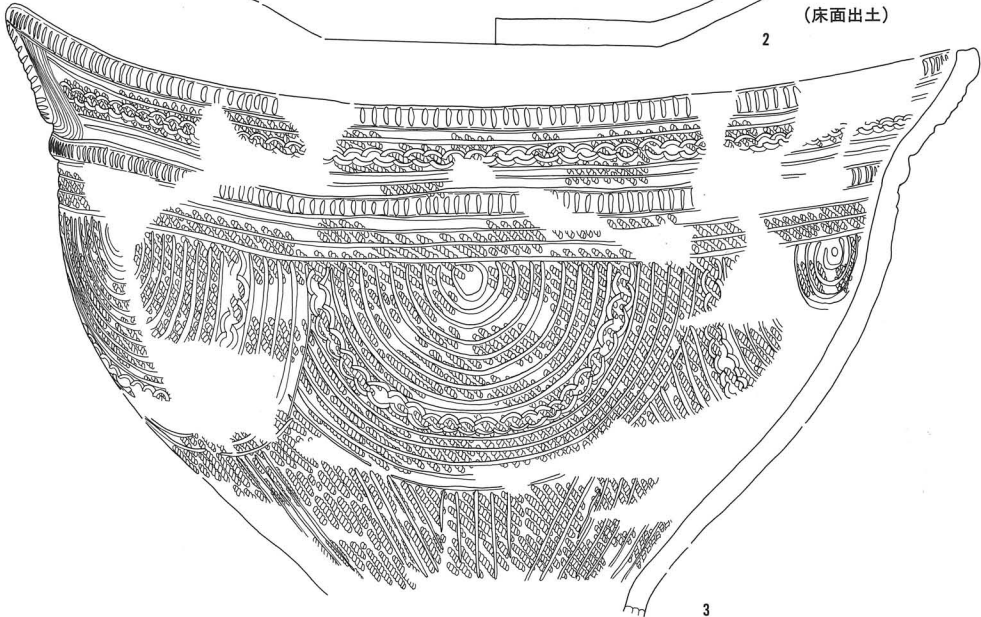
第45图 包含層出土・信州系土器 (1/3)



第46図 北陸系土器 (1/3) (1・2は5号住居出土)



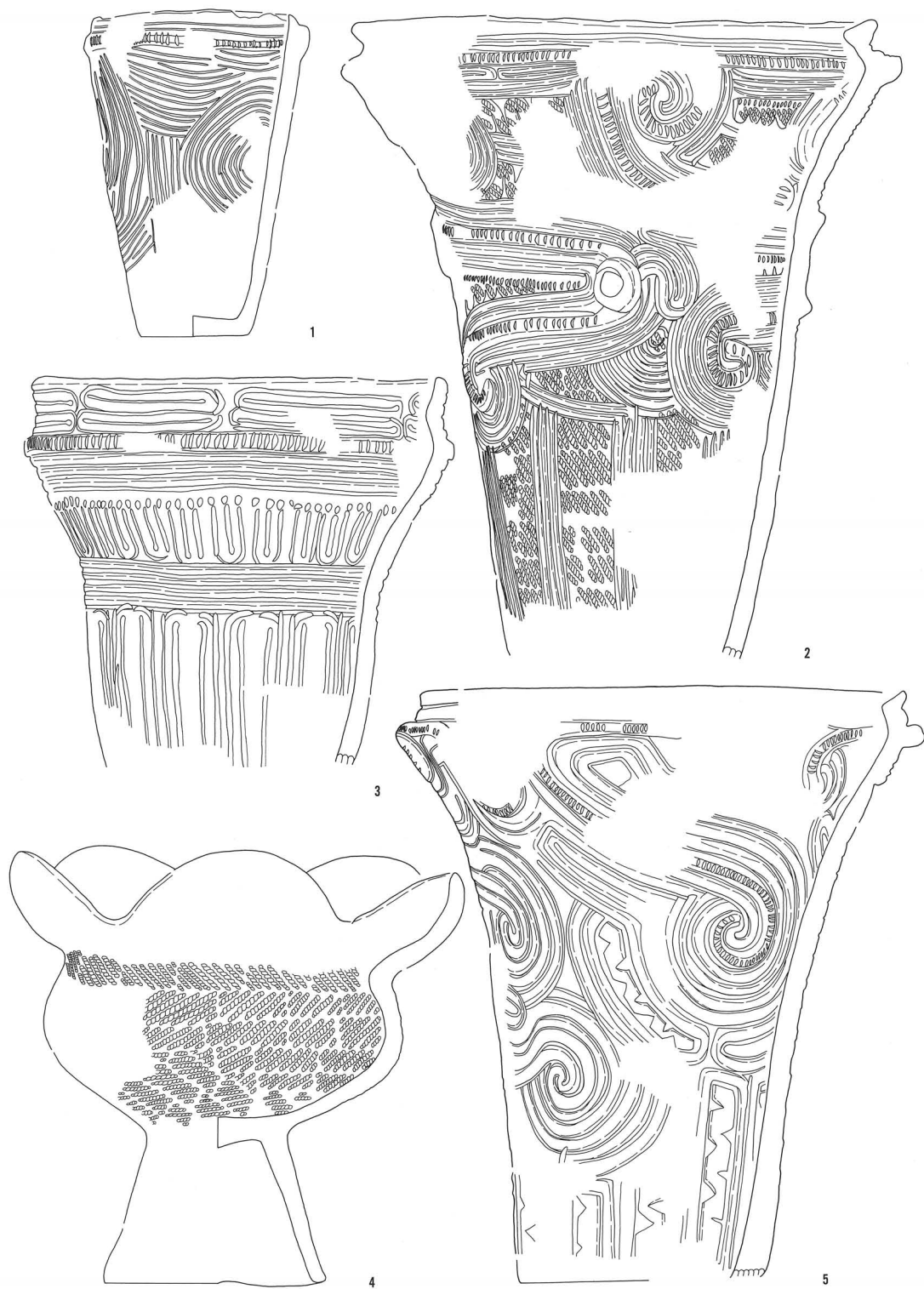
(床面出土)



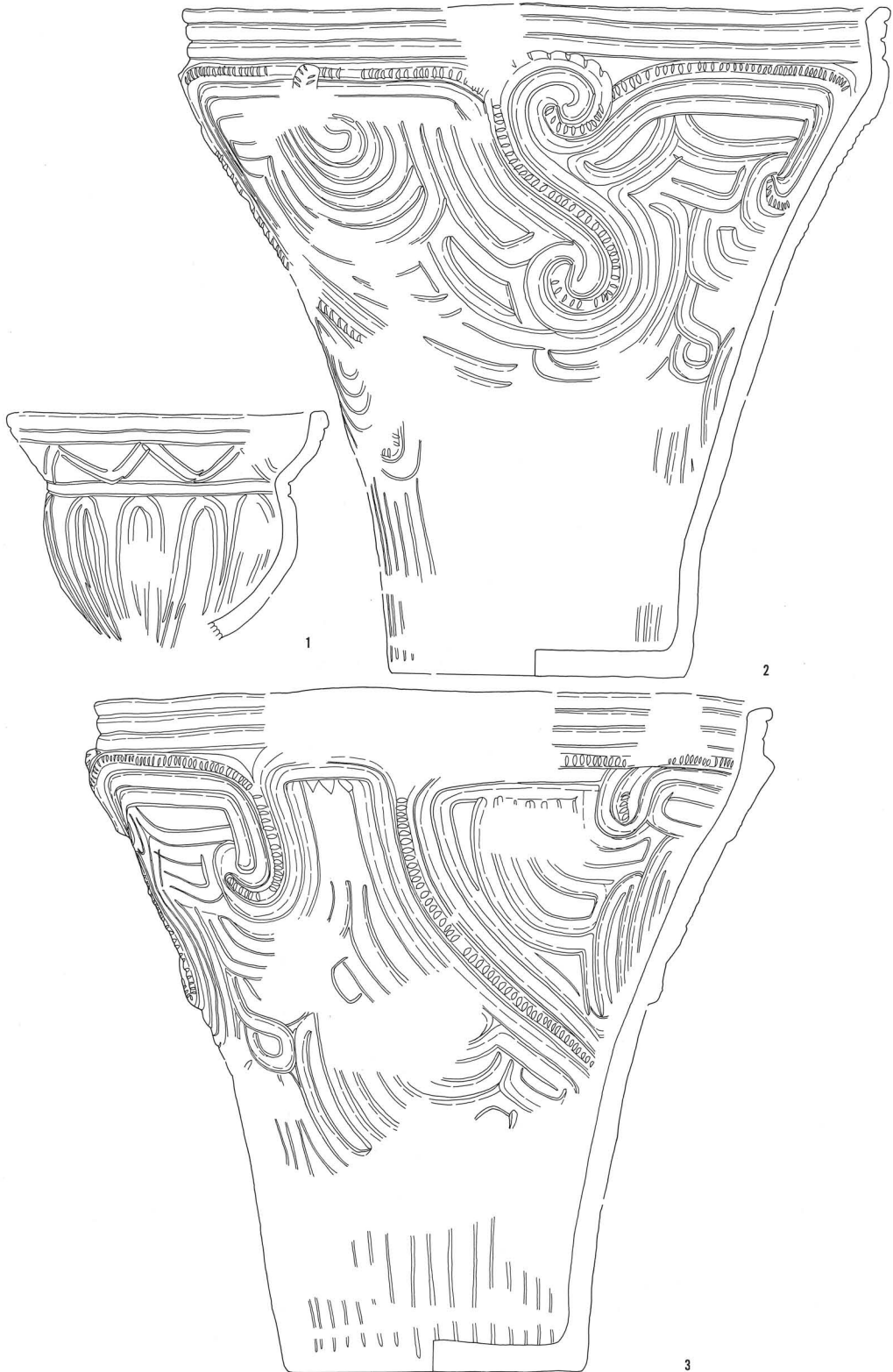
第47図 包含層出土北陸系土器 (1/3)



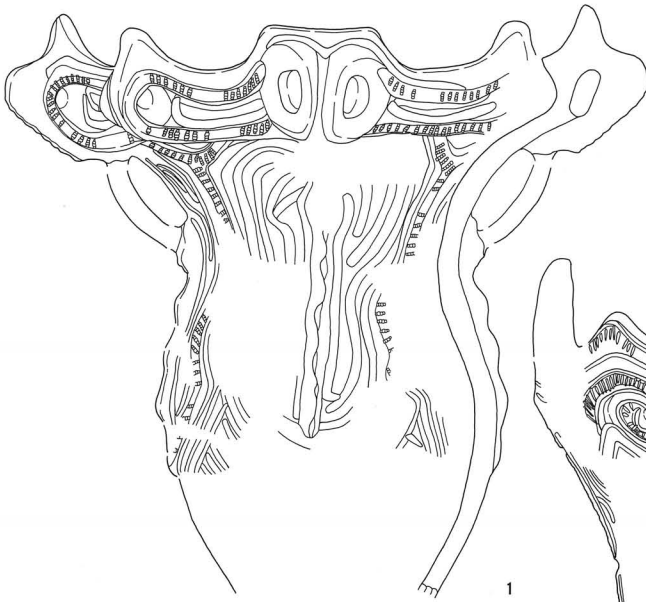
第48图 包含層出土北陸系土器 (1/3)



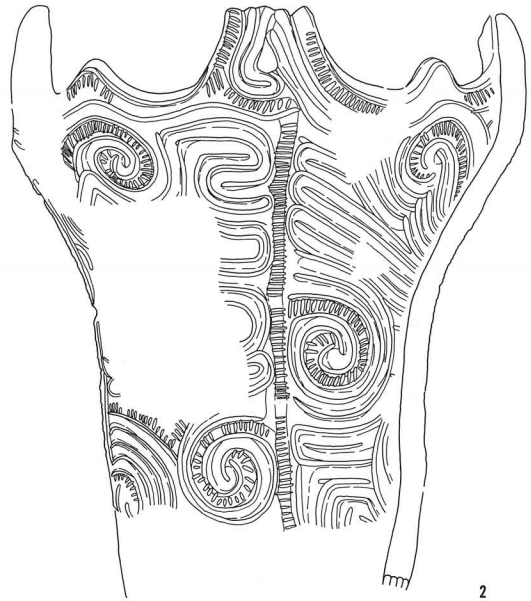
第49図 包含層出土北陸系土器 (1/3) (2・3は同一個体)



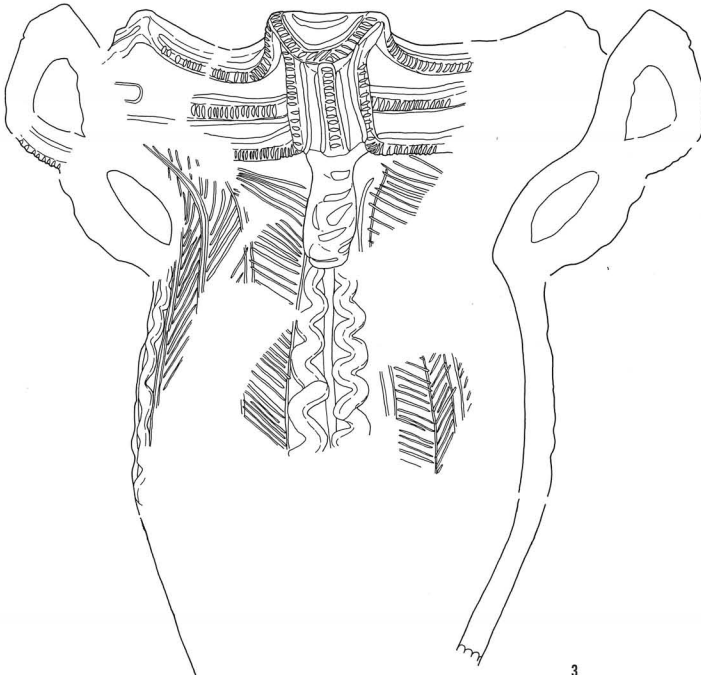
第50図 信州・北陸の両要素が混在する土器 (1/3) (1は5号住居出土)



1



2

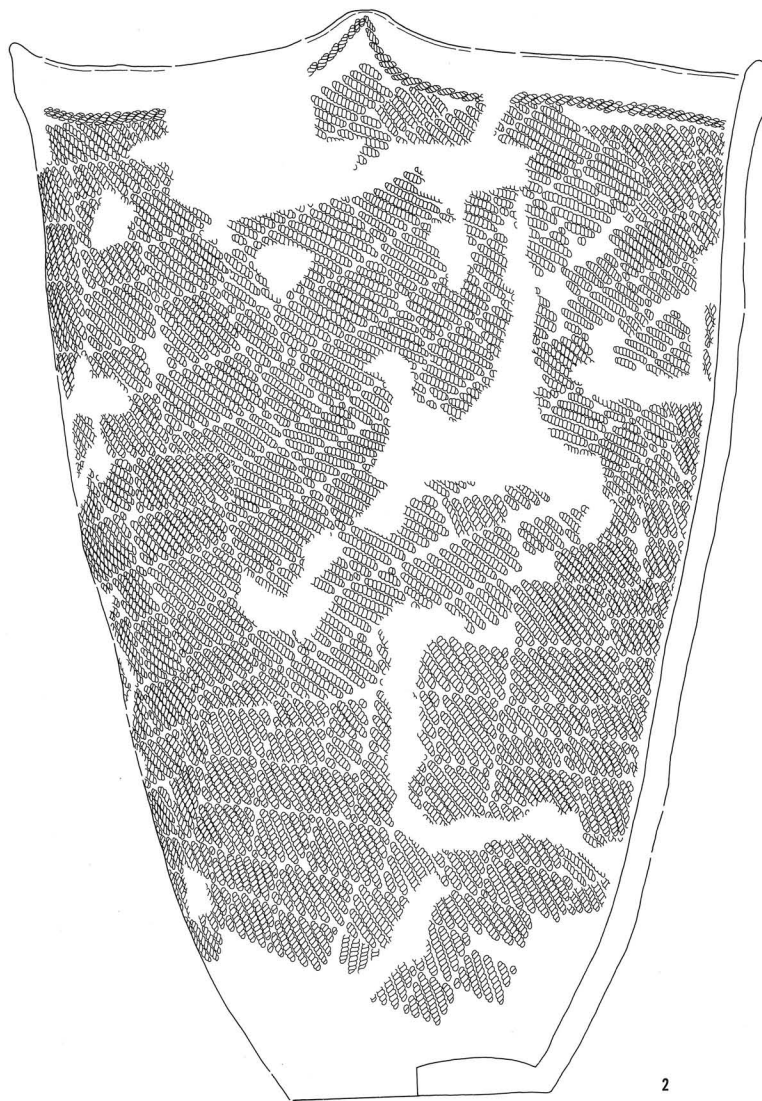


3

第51図 粗製土器 (1/3) (2は単独出土の埋甕、C43グリッド)

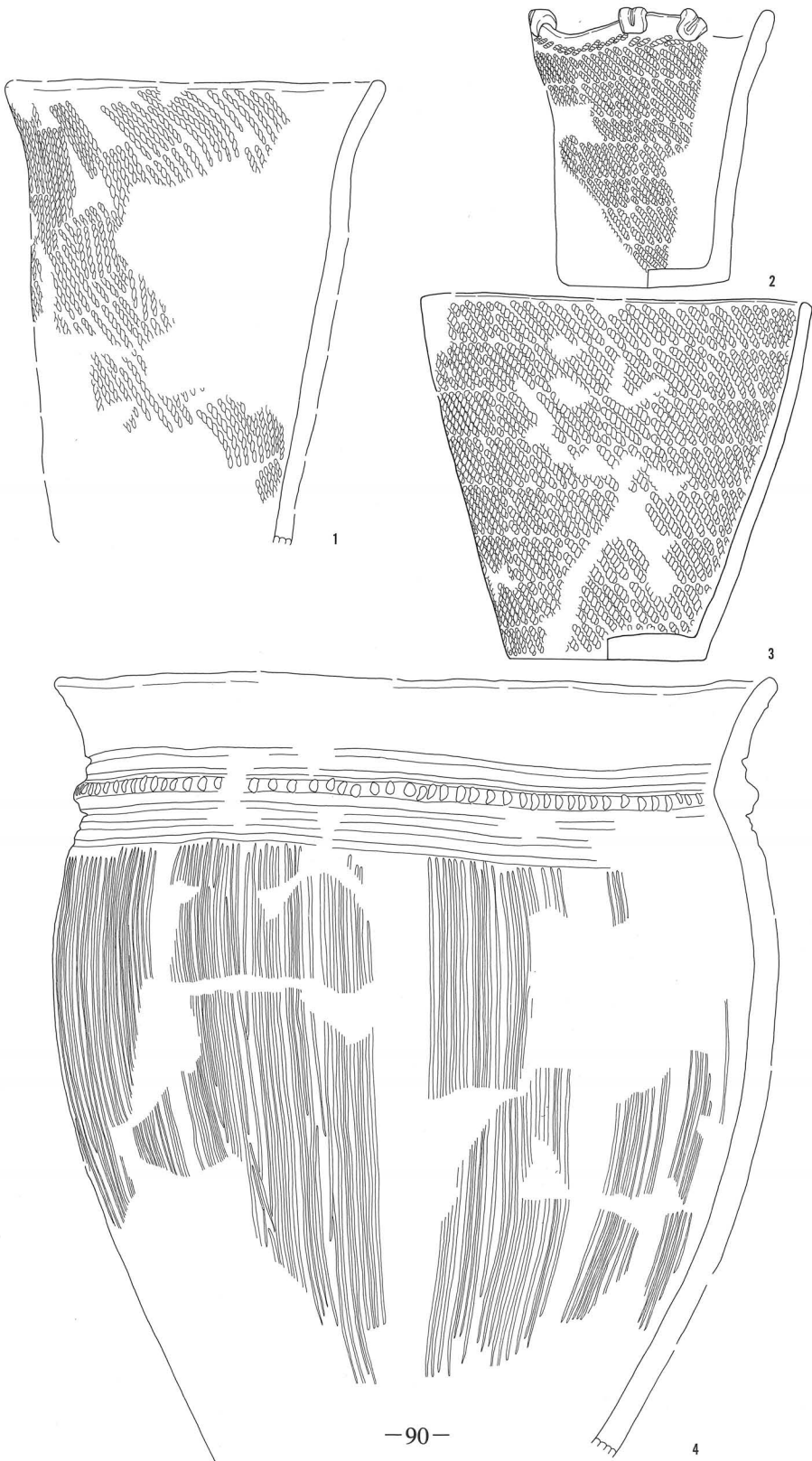


1

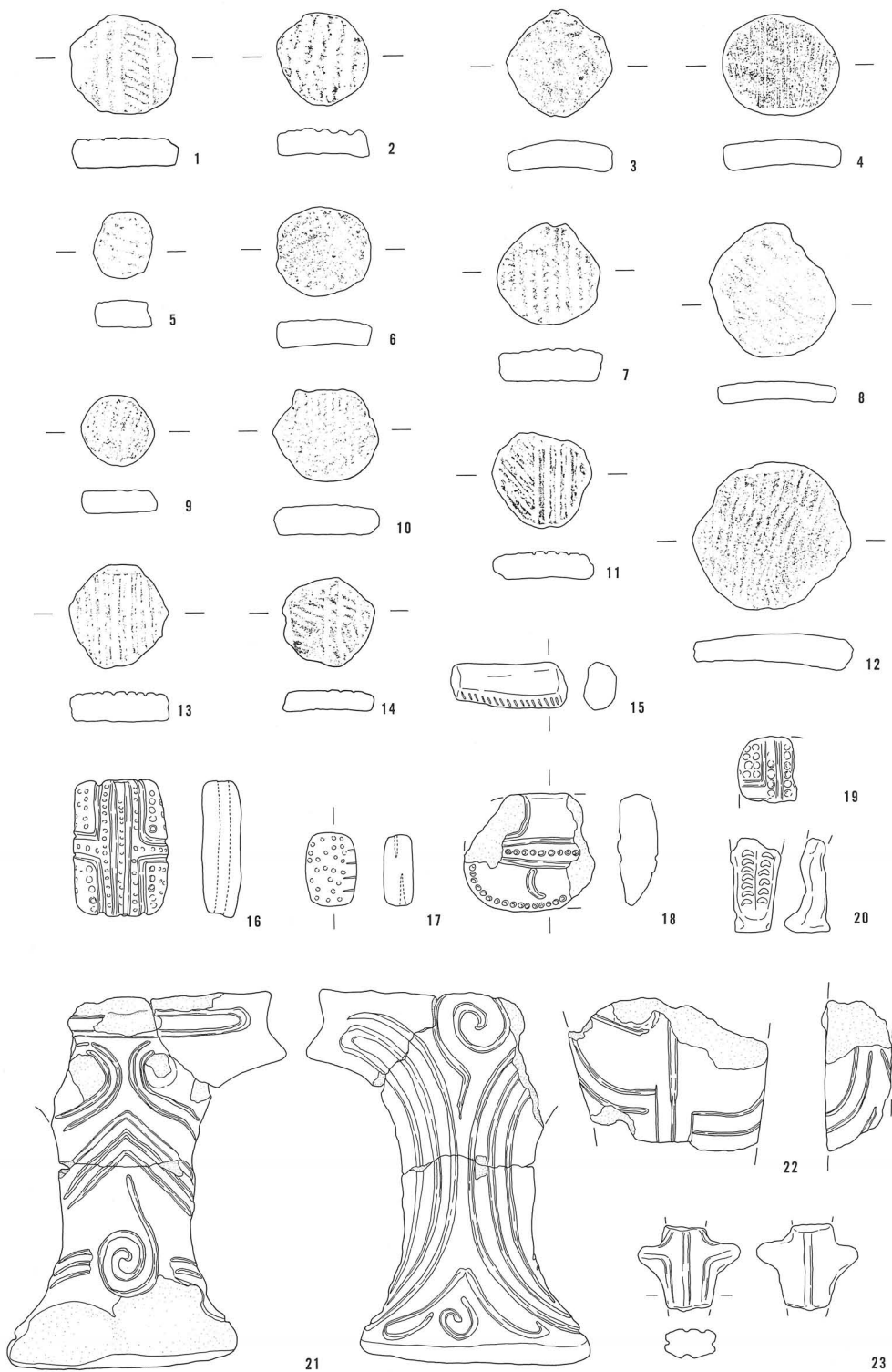


2

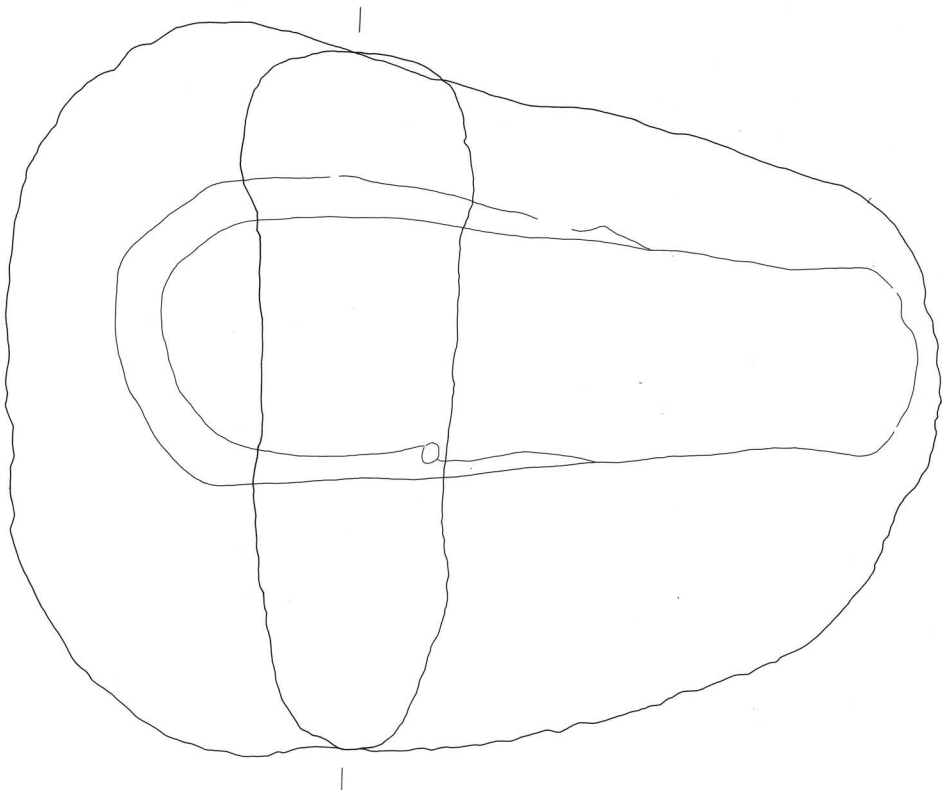
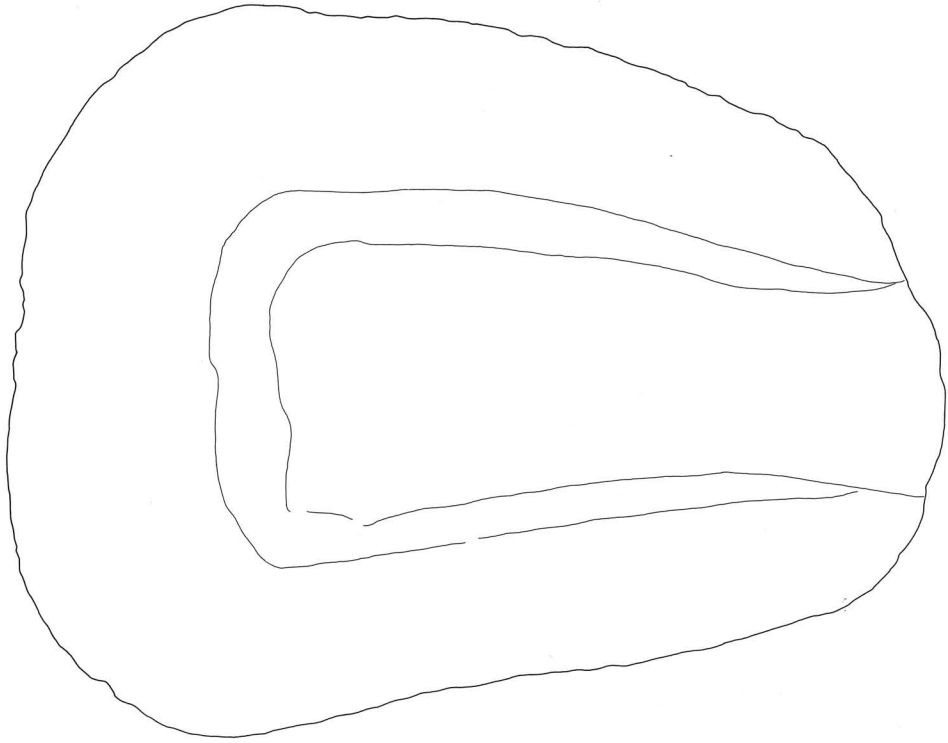
第52図 包含層出土粗製土器 (1/3)



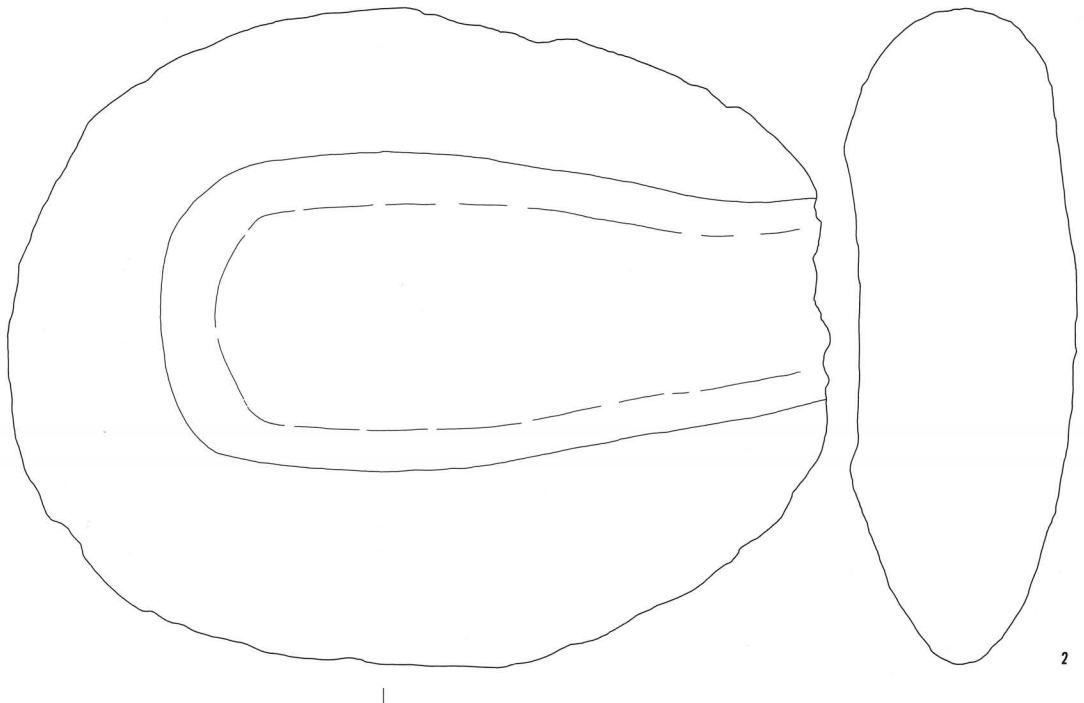
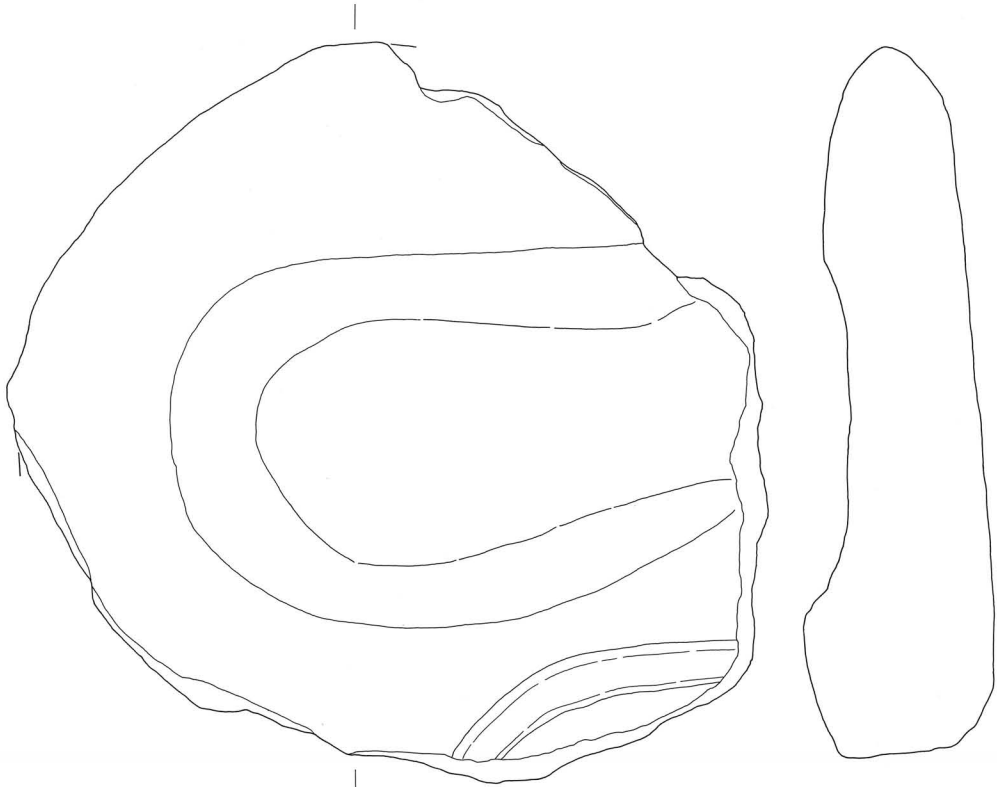
第53図 土器片円盤・土板・土偶 (1/3)



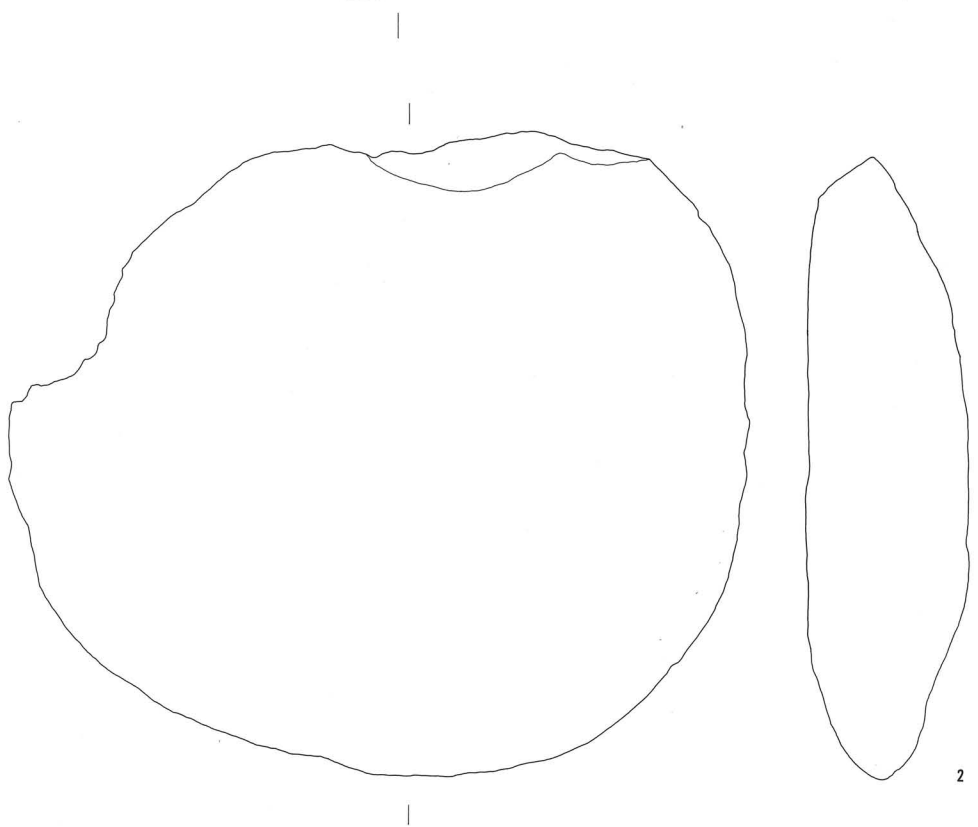
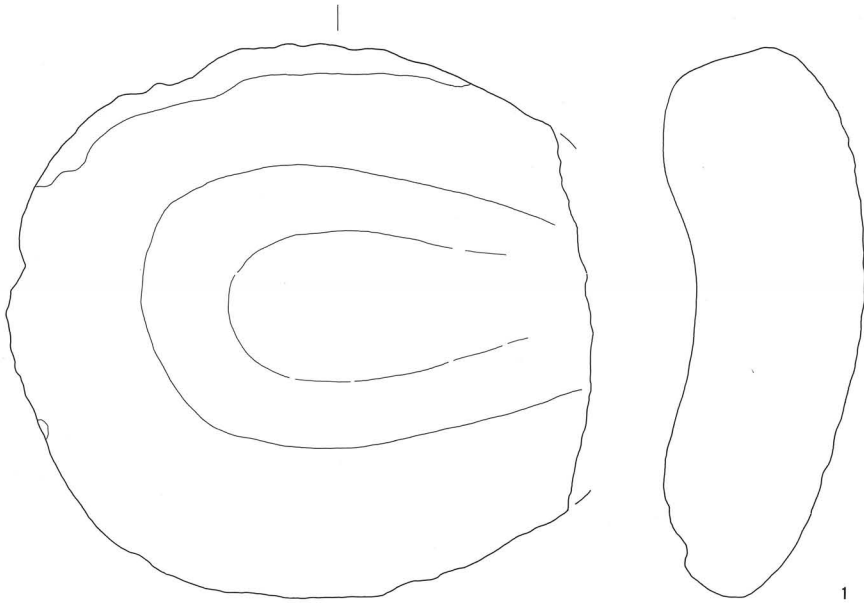
第54图 6号住居址出土石皿 (1/3)



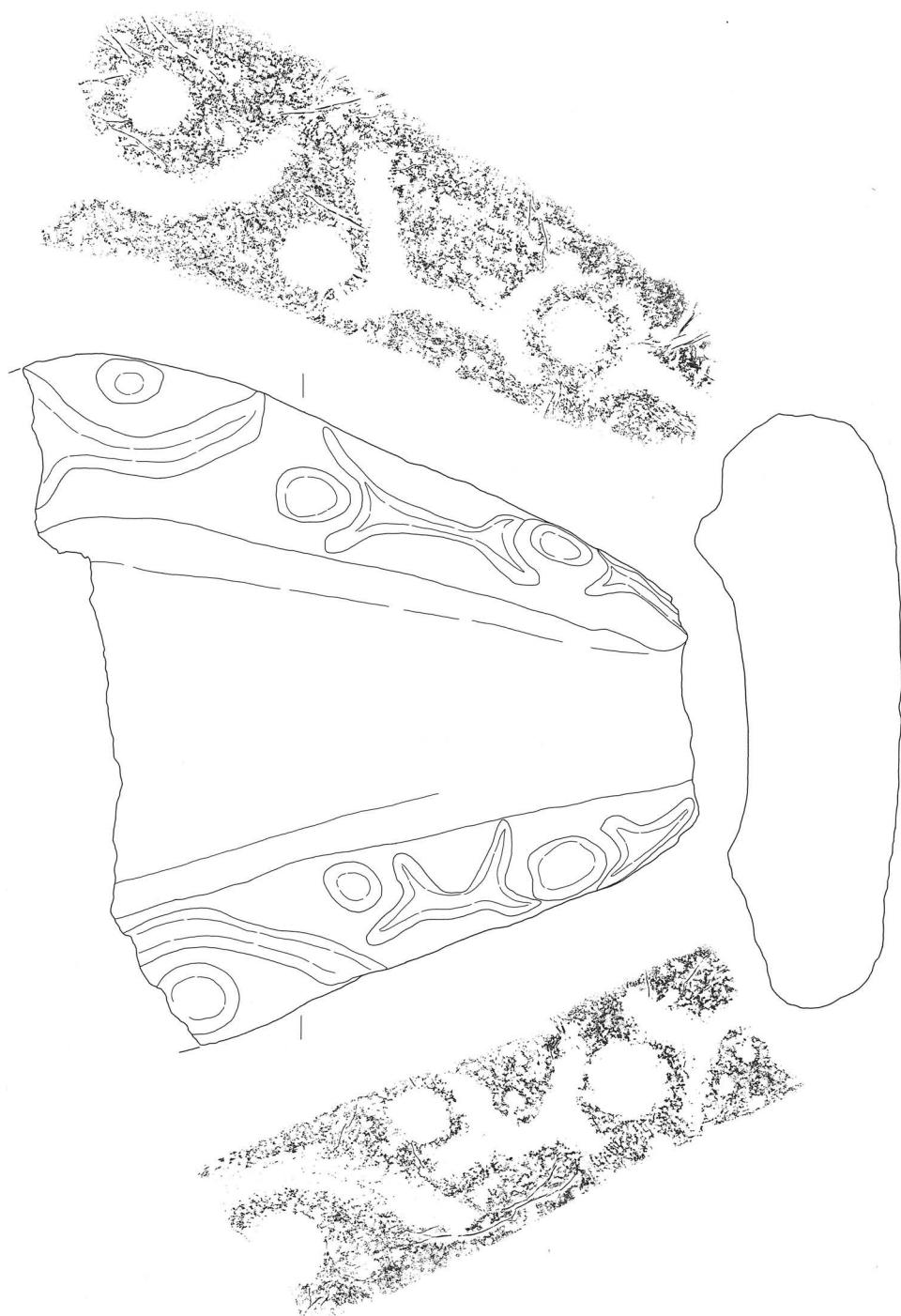
第55図 石皿 (1/3) (1は7号住居址出土)



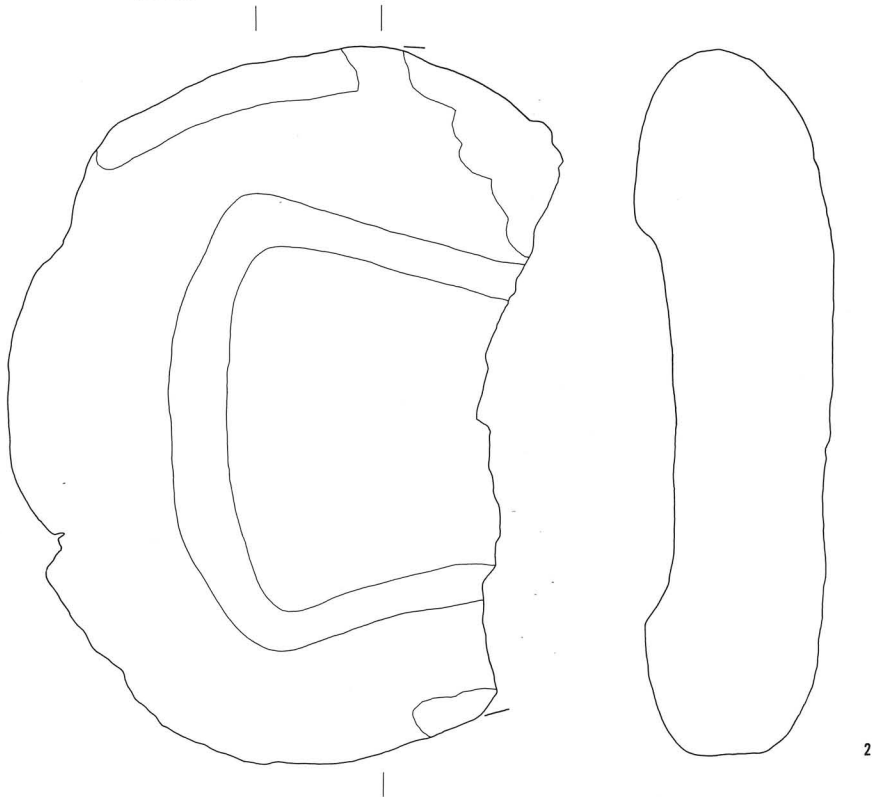
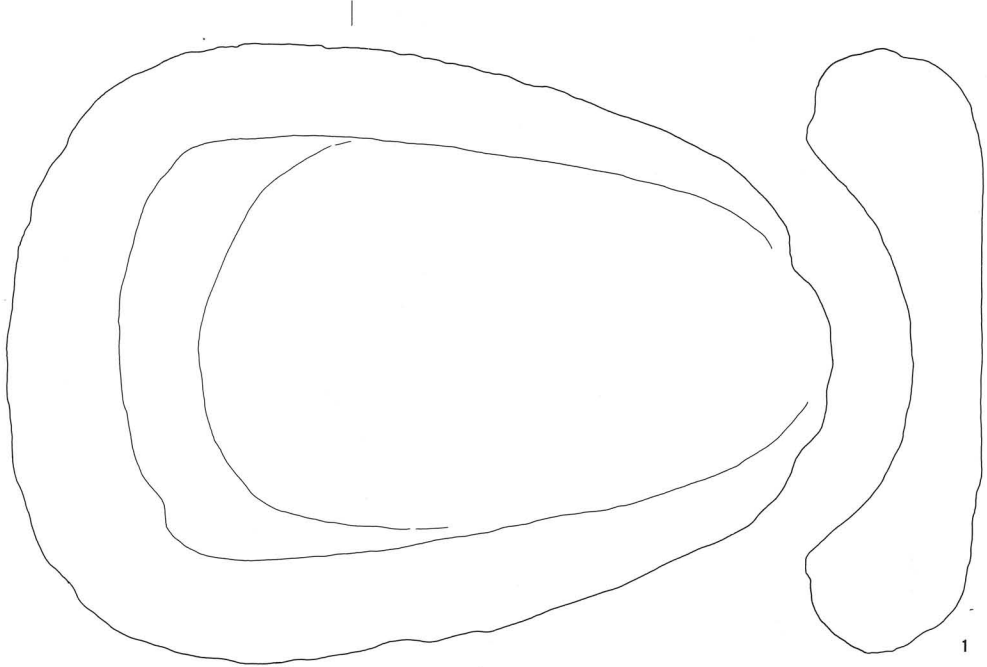
第56図 包含層出土石皿 (1/3)



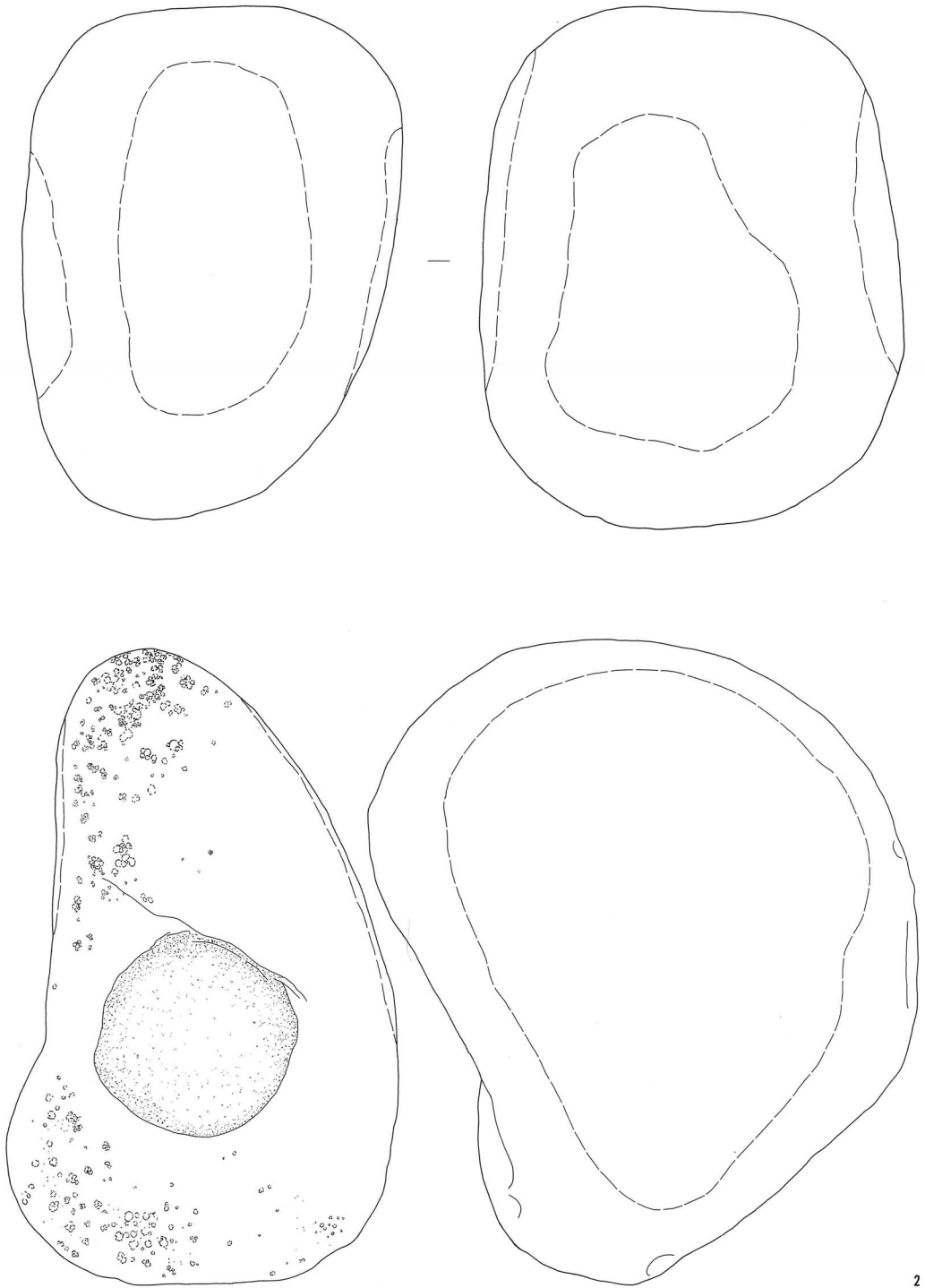
第57図 包含層出土石皿 (1/3)



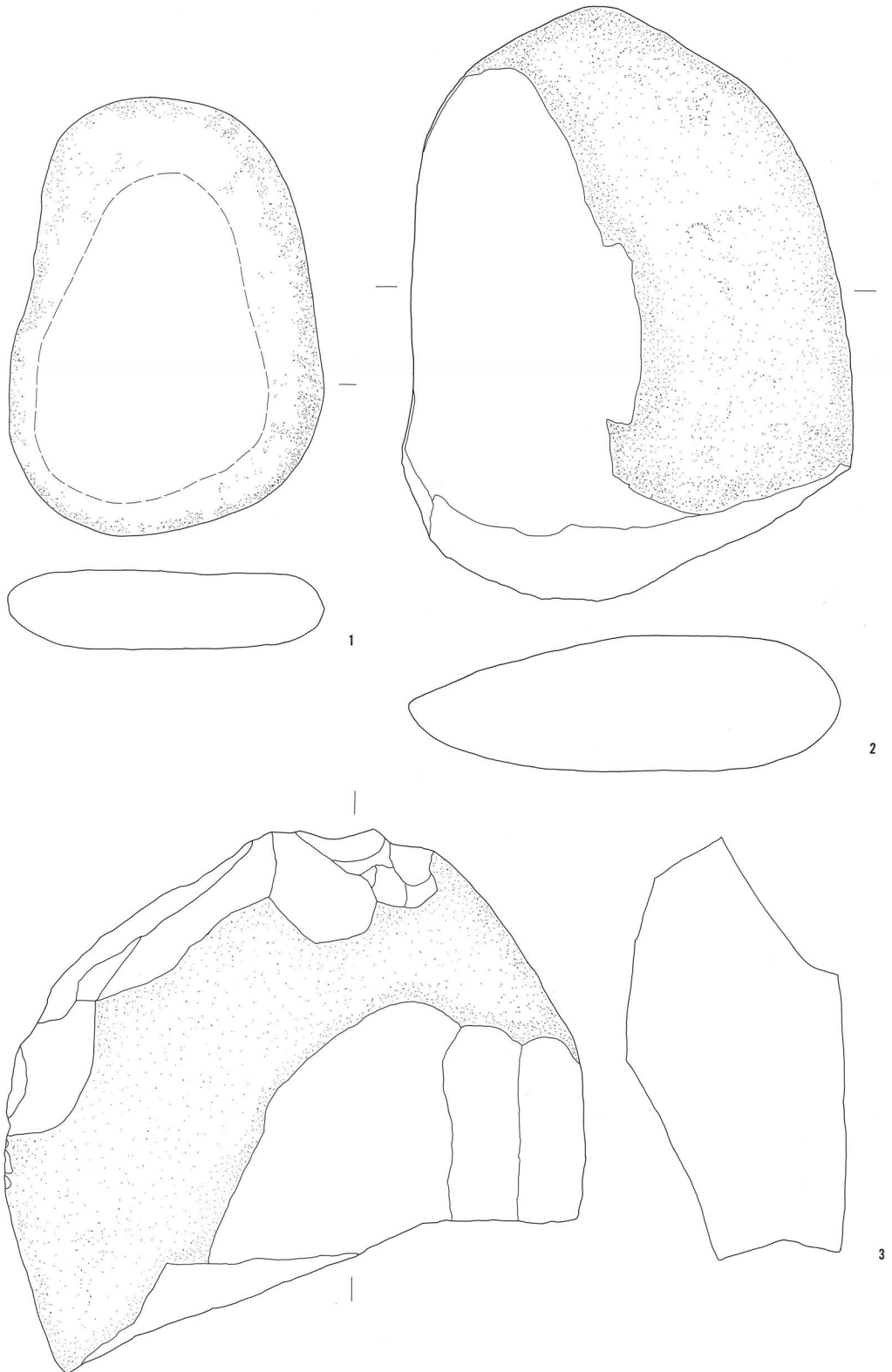
第58図 石皿 (1/3) (1は4号住居址出土)



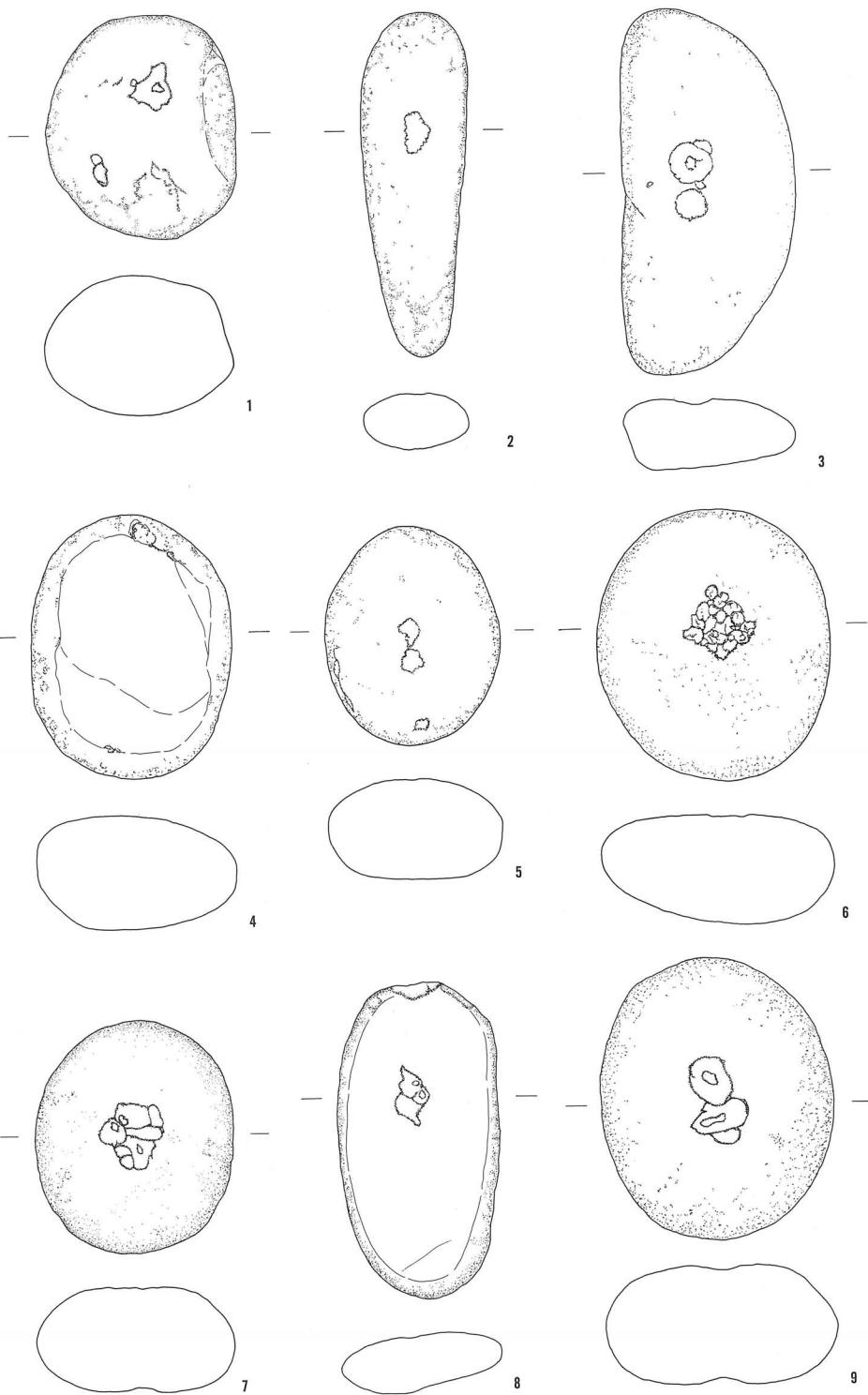
第59図 住居址出土大型砥石 (1/3)



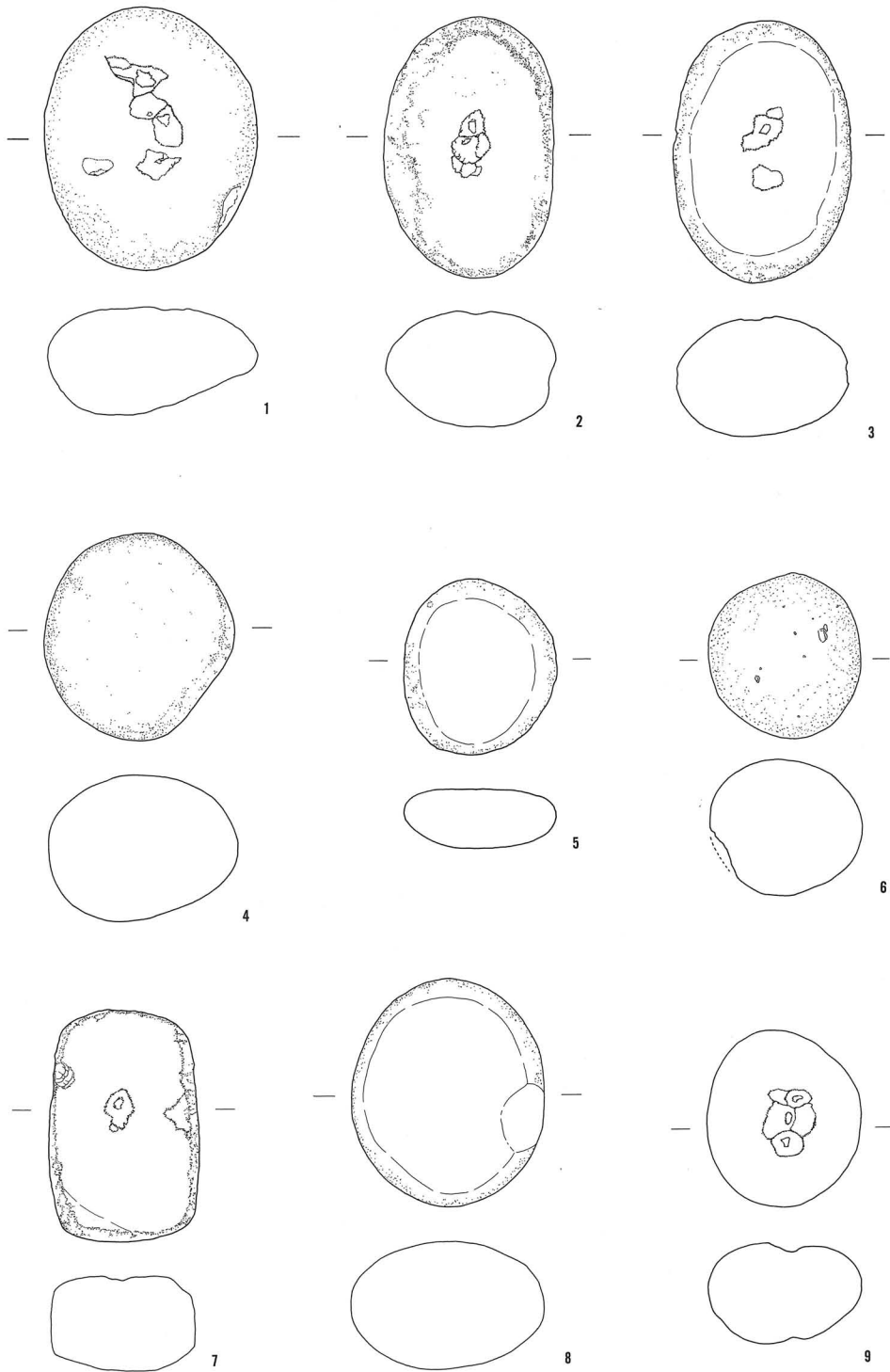
第60図 大型砥石 (1/3) (1は8号住居址床面出土)



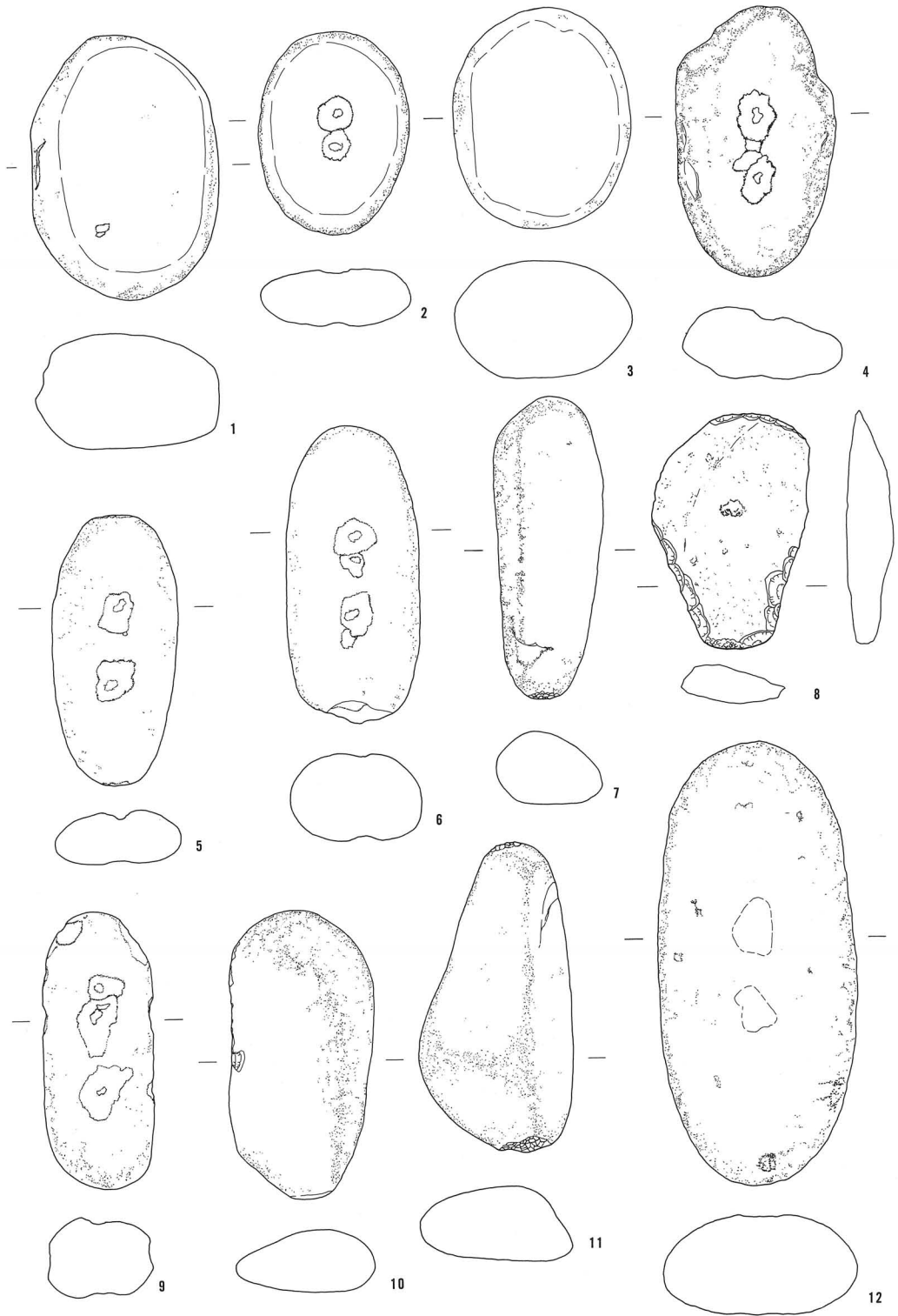
第61図 住居址出土磨石類 (1/3)



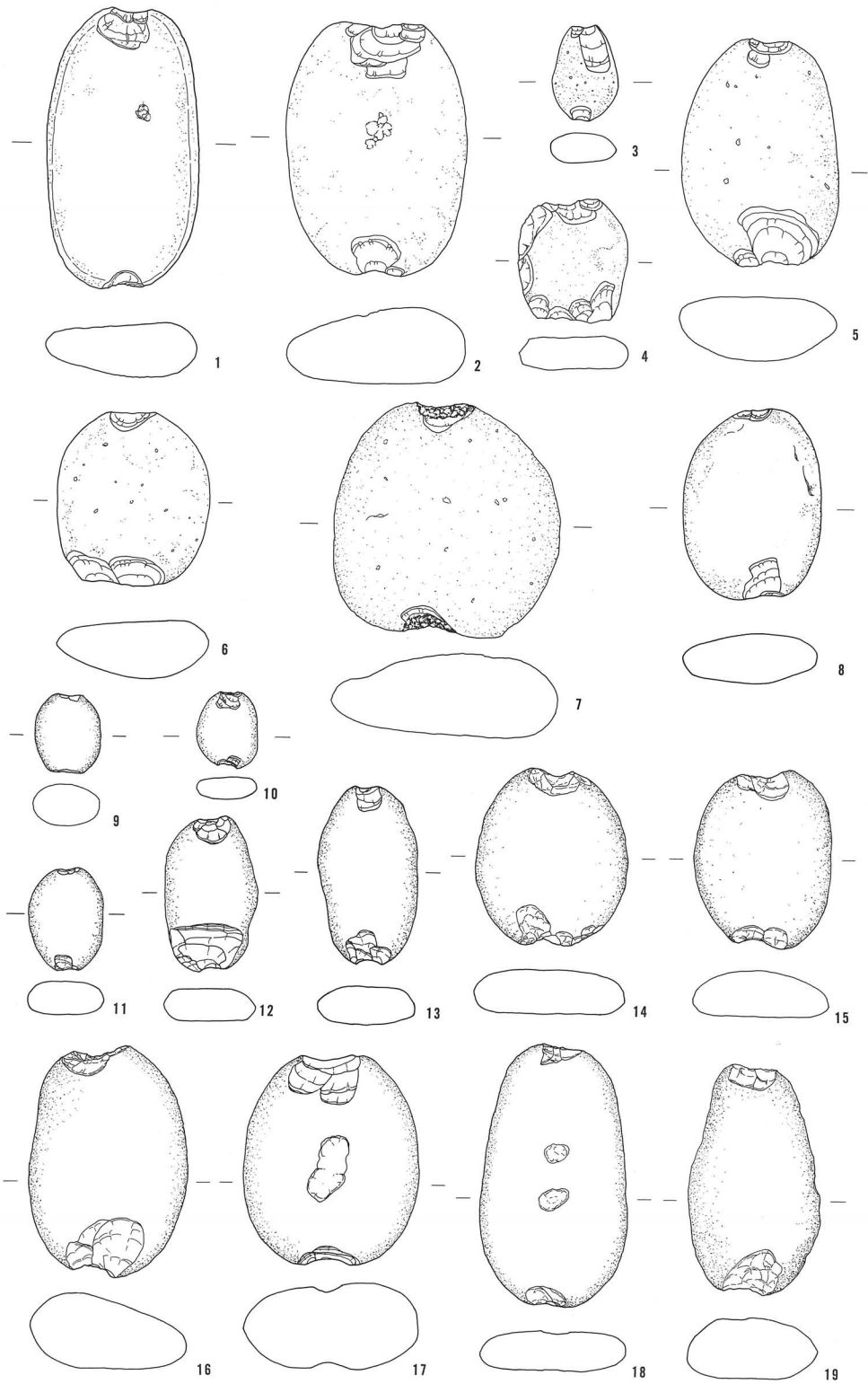
第62図 住居址出土磨石類 (1/3)



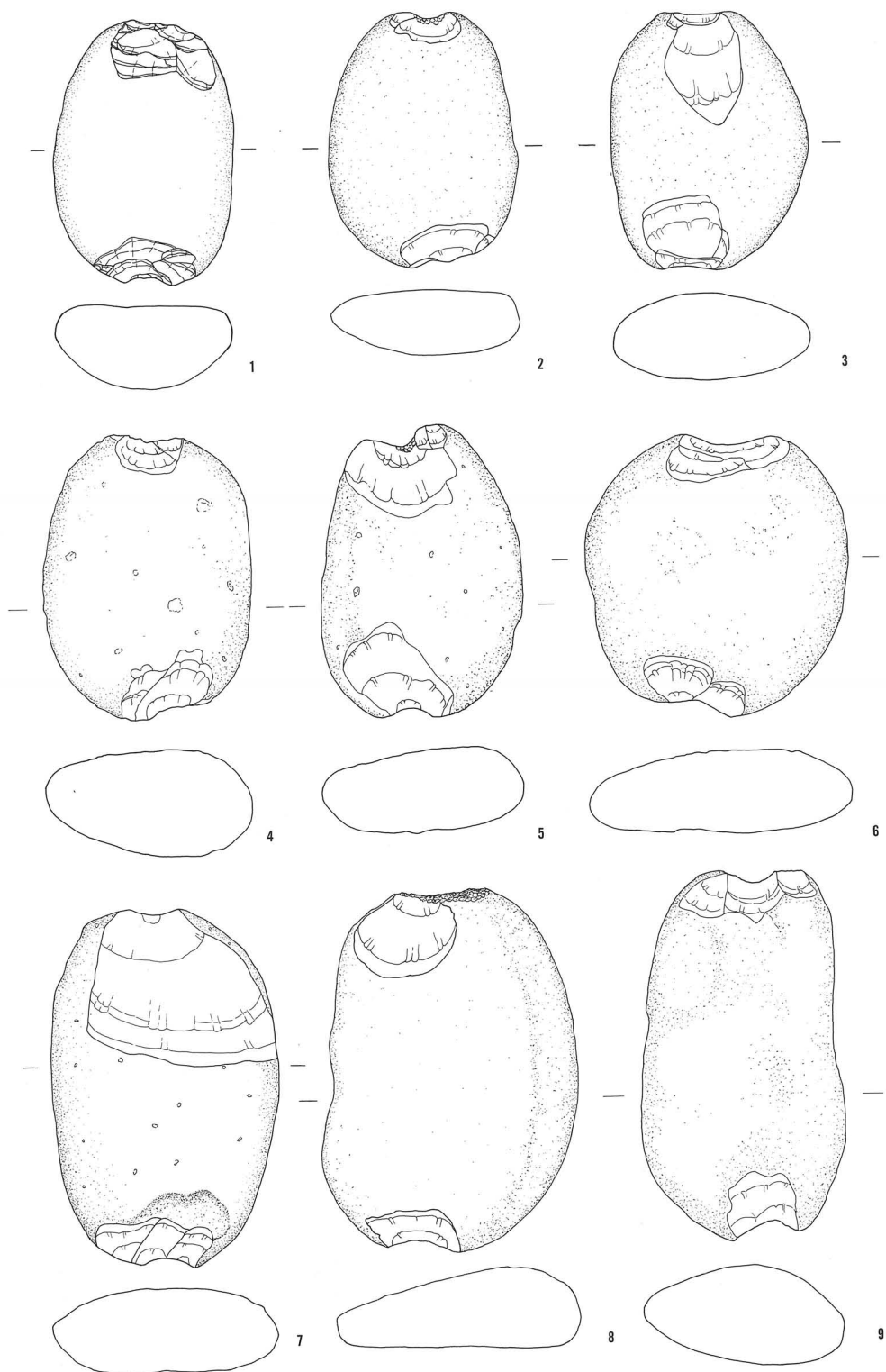
第63図 住居址出土磨石類・敲石類 (1/3)



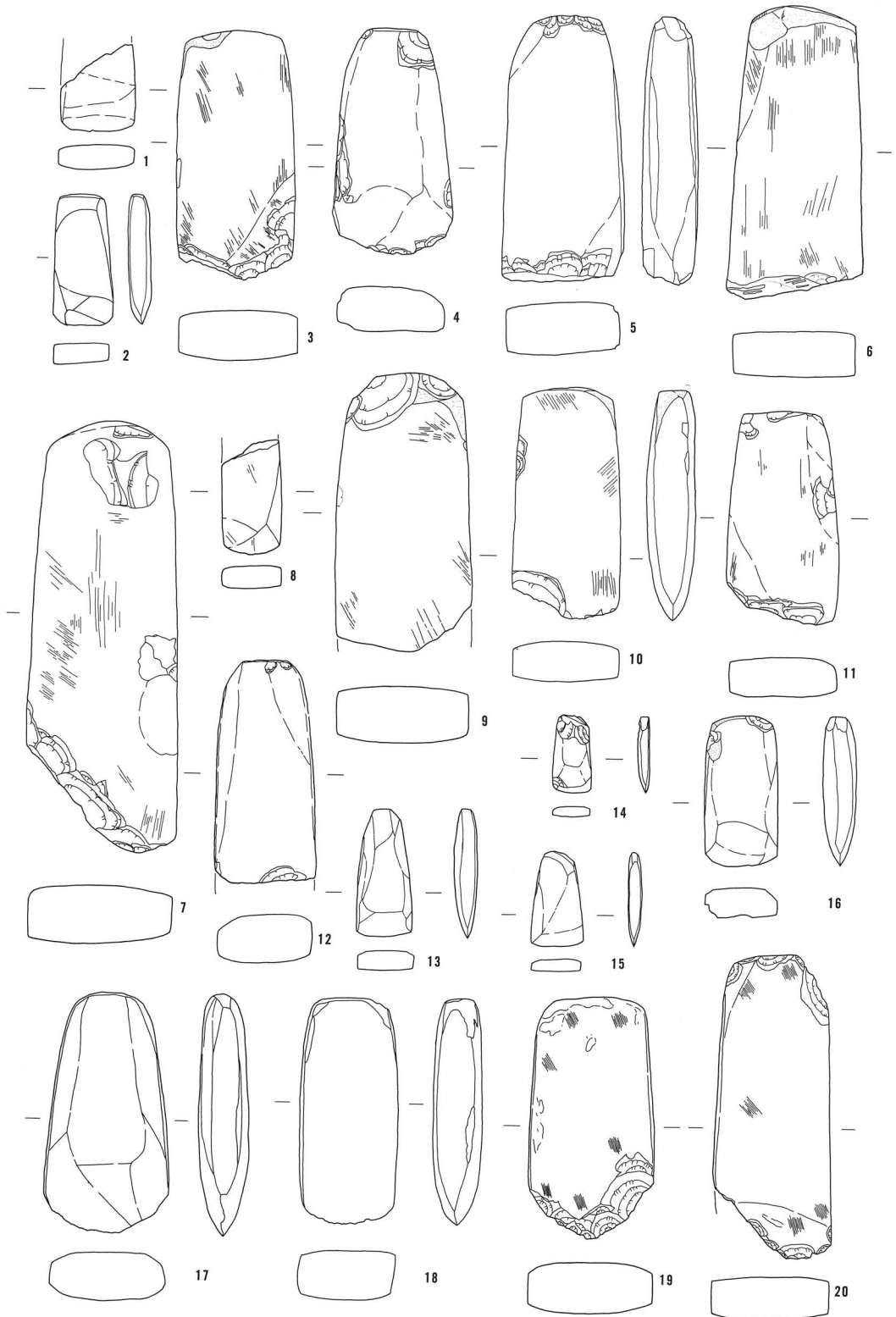
第64図 礫石錘 (1/3) (1~8は住居址出土)



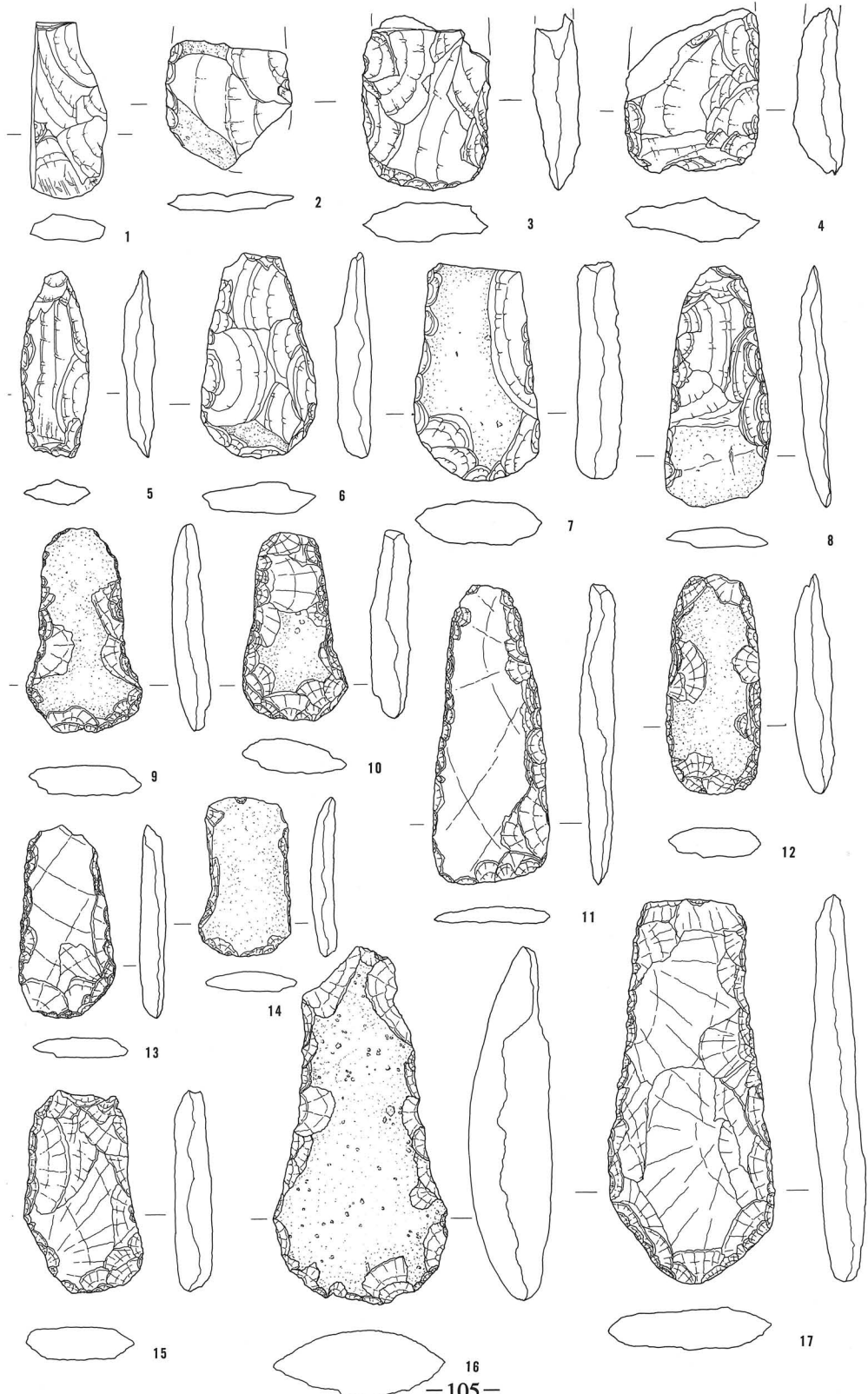
第65図 包含層出土礫石錘 (1/3)



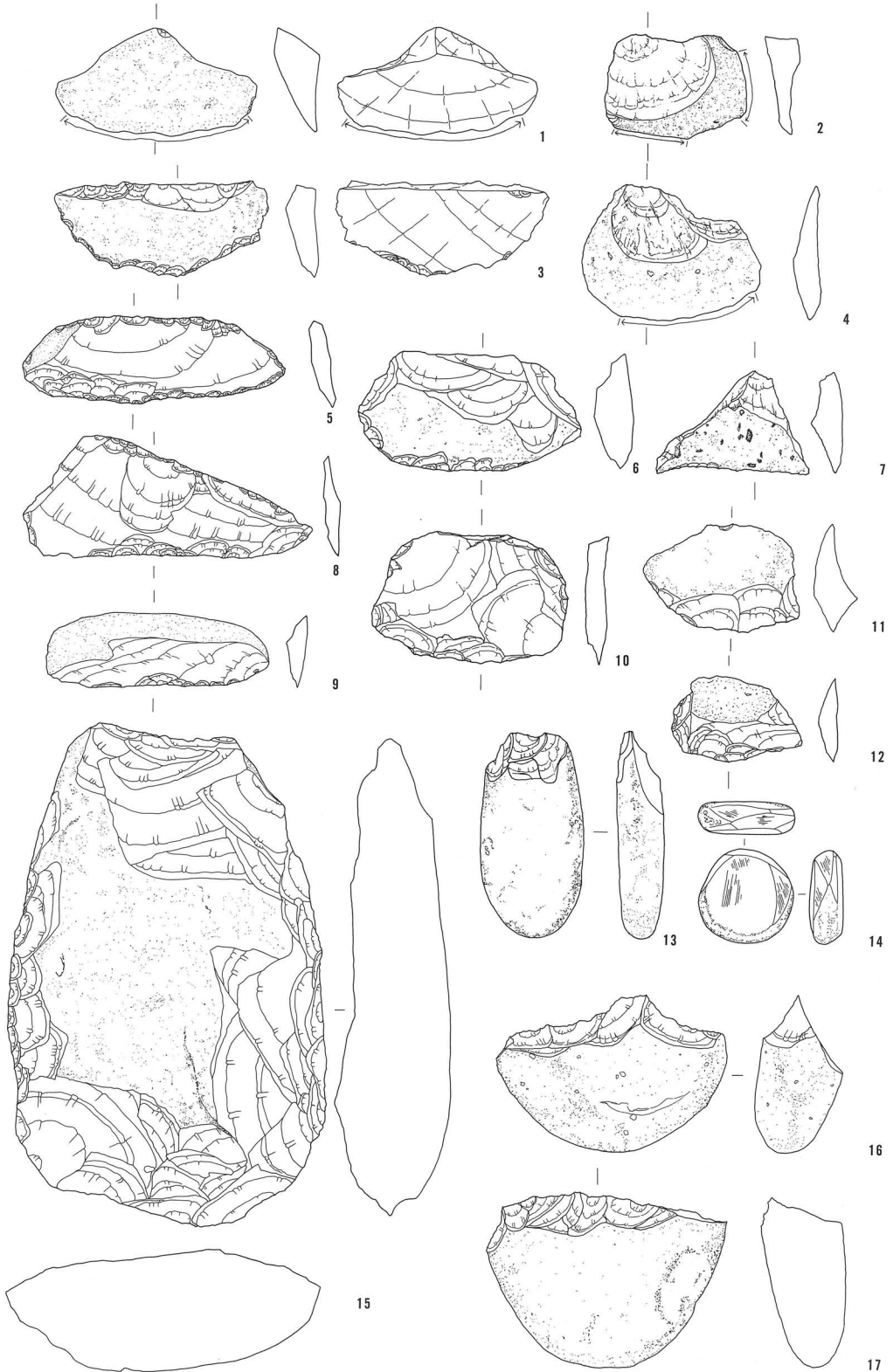
第66図 磨製石斧 (1/3) (1~12は住居址出土)



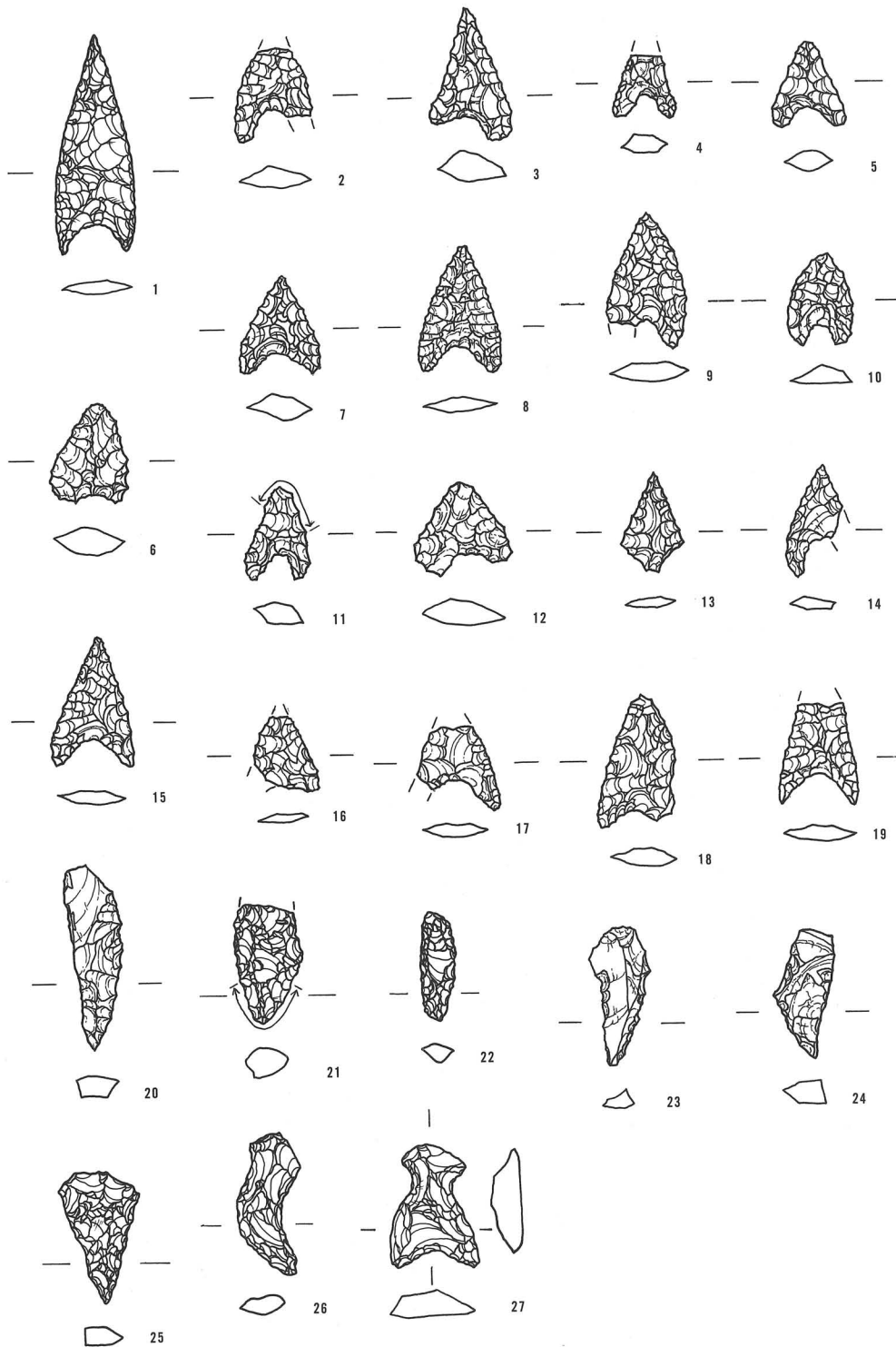
第67図 打製石斧 (1/3) (1~8は住居址出土)



第68图 横刃形石器 (3·5~12)·擦切石器 (1·2·4)·砥石 (14)·
石核样石器 (15)·礫器 (13·16·17)



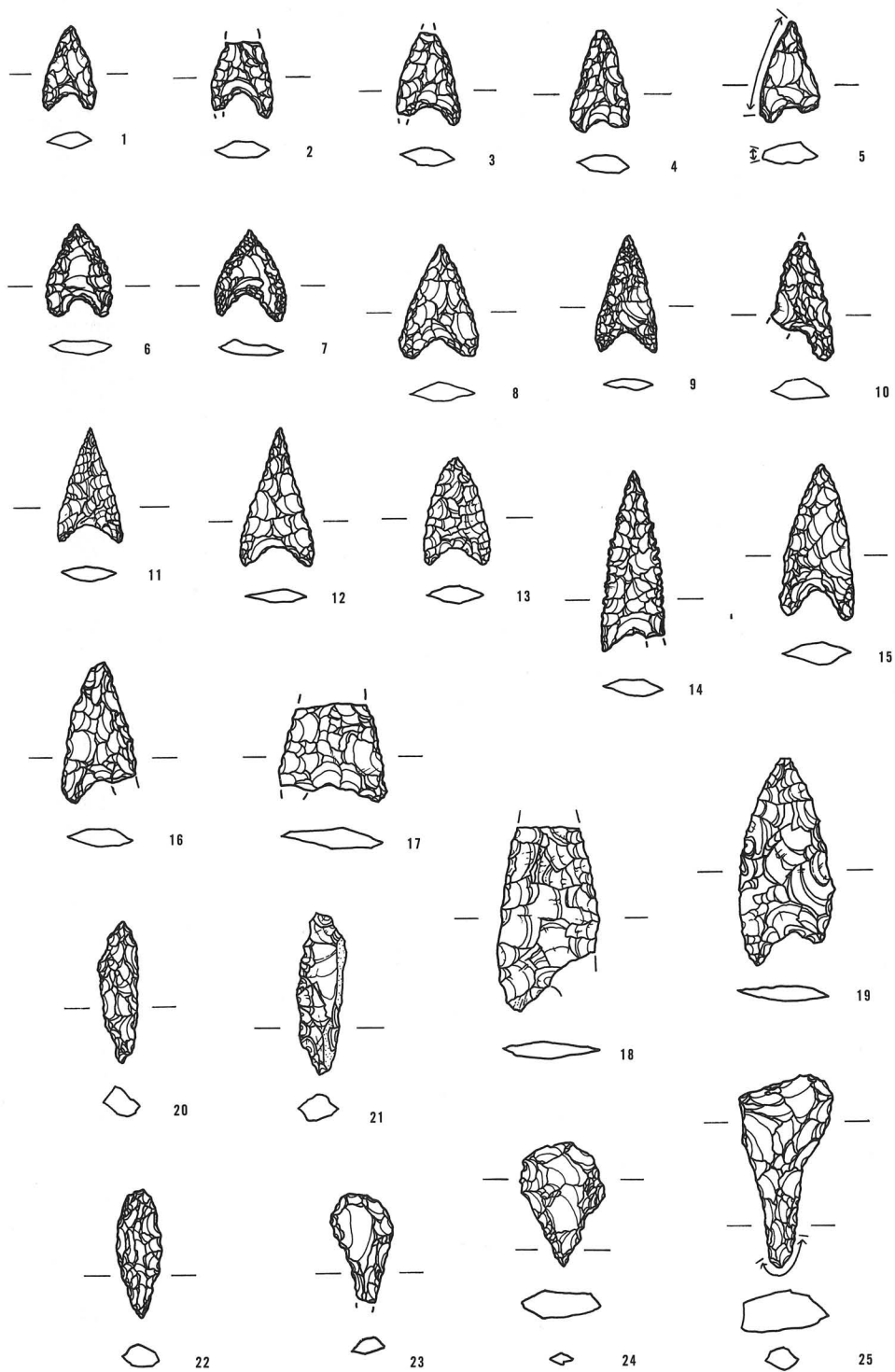
第69図 住居址出土石鏃・石錐・異形石器 (2/3)



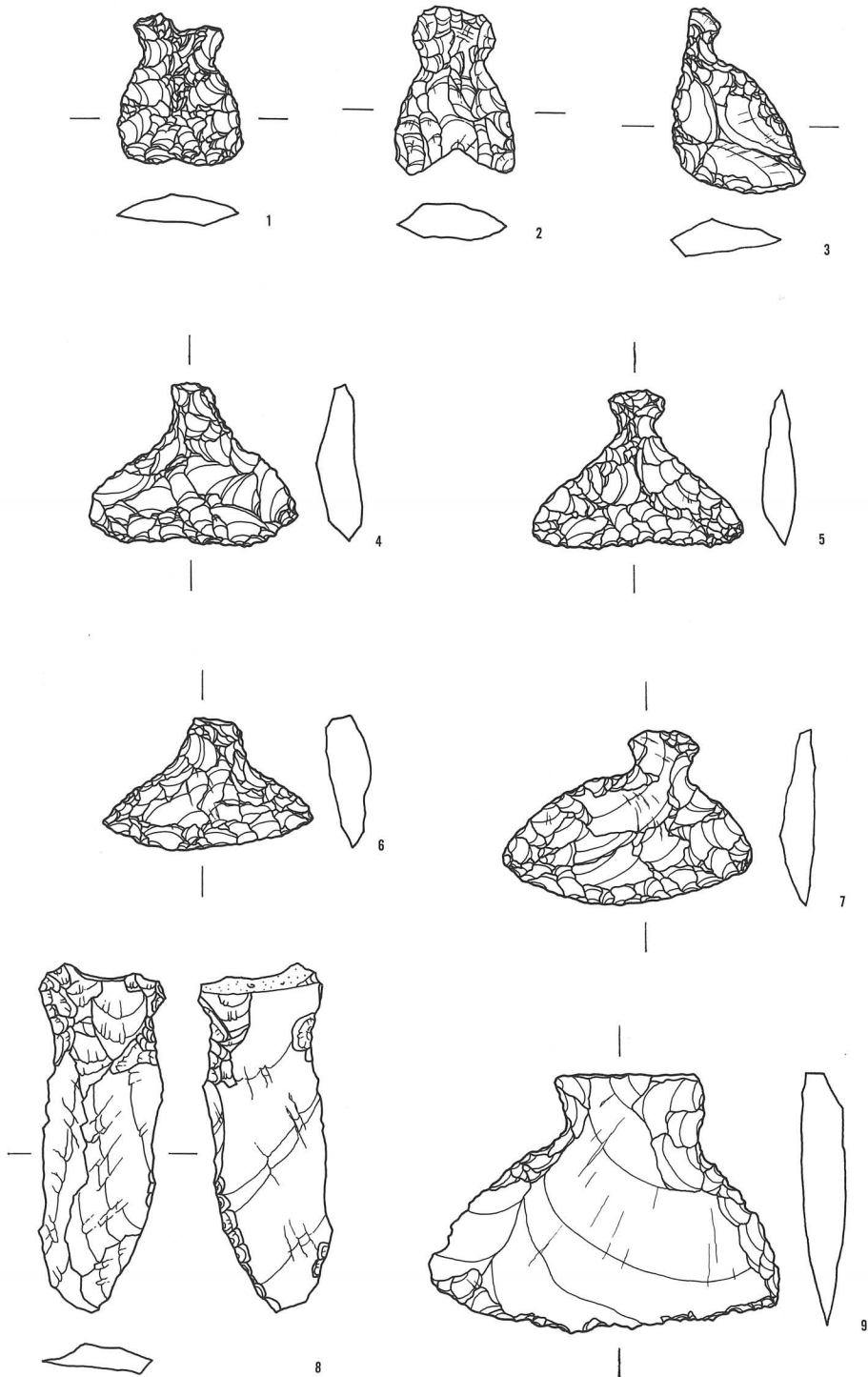
第70図 住居址出土削器・石匙・調整剝片類 (2/3)



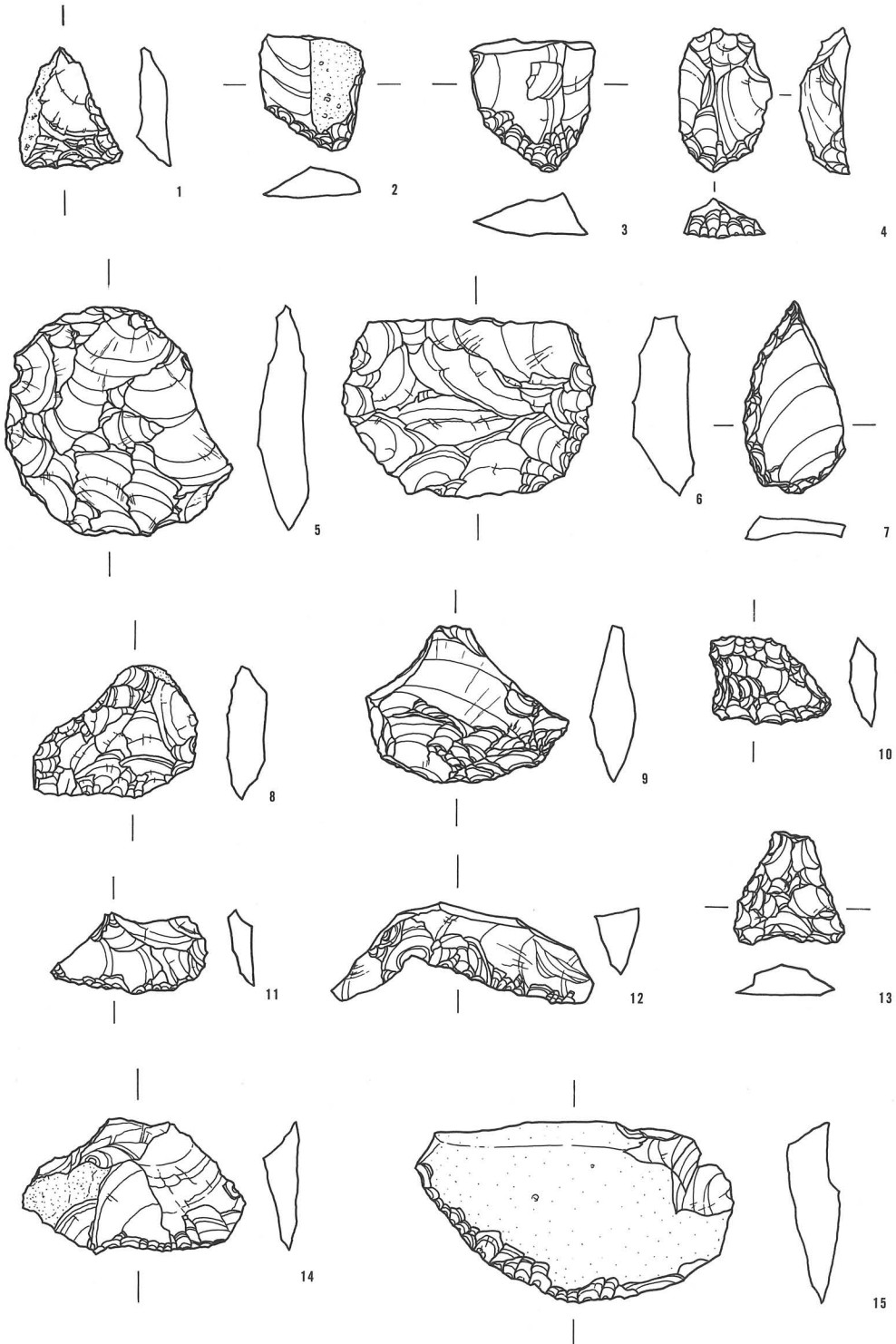
第71圖 包含層出土石鏃・石錐 (2/3)



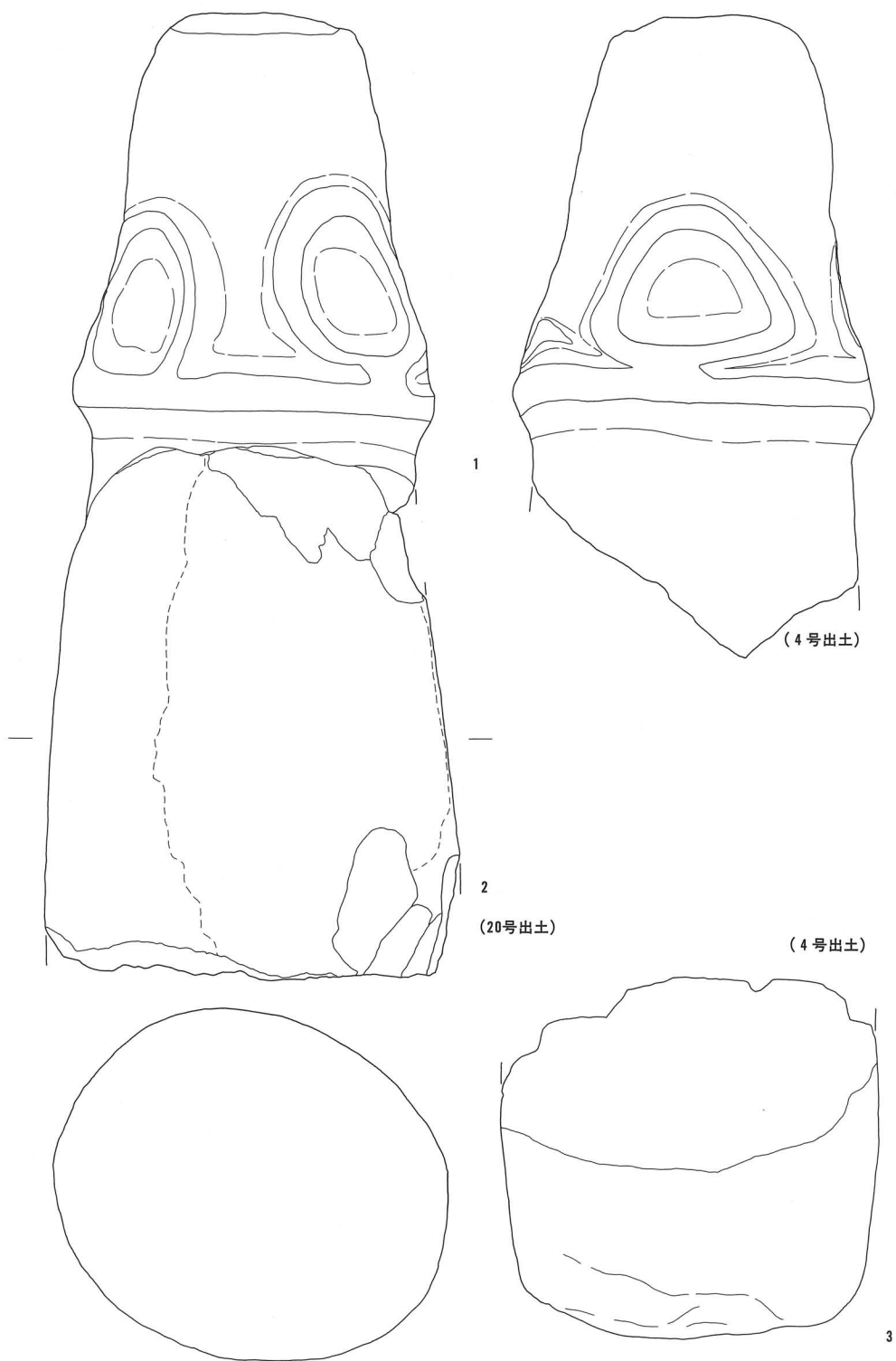
第72図 包含層出土異形石器・石匙・粗製石匙 (2/3)



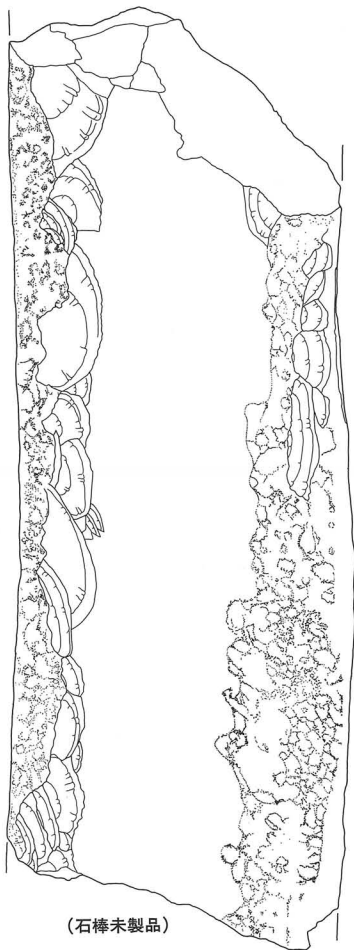
第73图 包含層出土削器 (2/3)



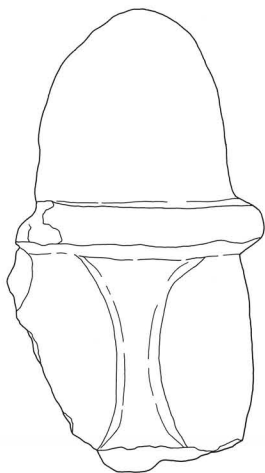
第74図 4号・20号住居址出土石棒 (1/3) (接合資料)



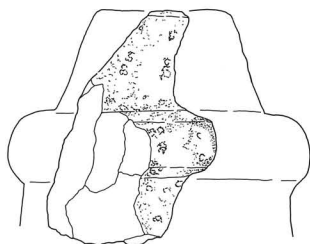
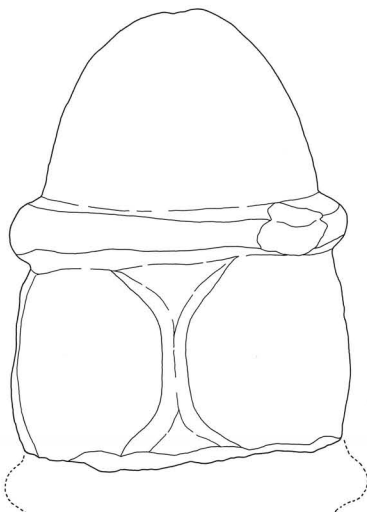
第75図 石棒・石棒未製品 (1/3) (2は8号、3は13号住居址出土、4・5は同一個体)



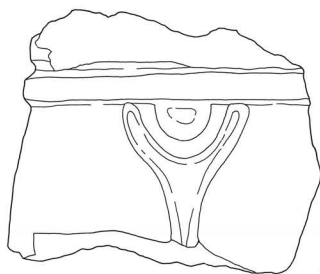
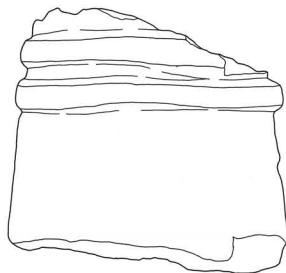
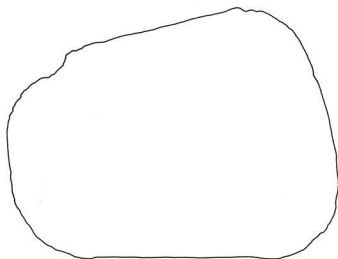
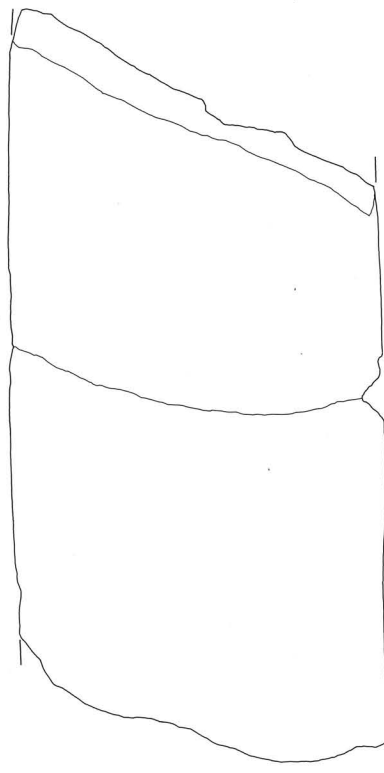
(石棒未製品)



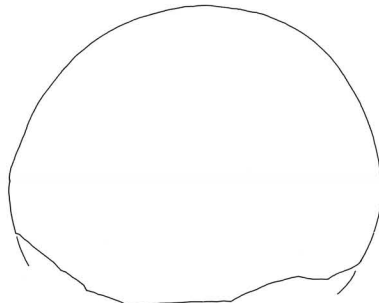
2



3

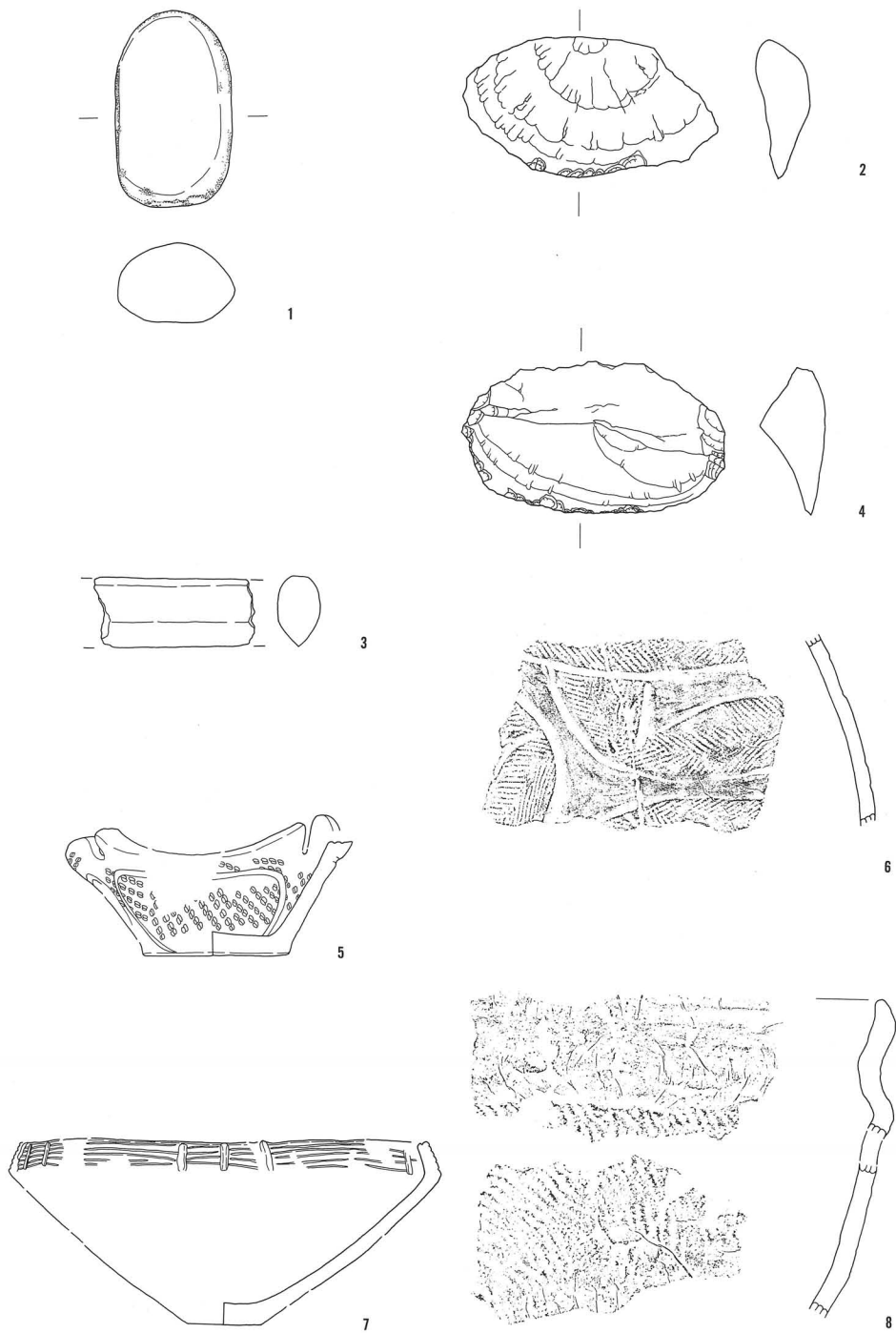


4



5

第76図 後期遺物 (1/3) (1・2・4・6は14号、8は18号住居址出土)



堂ノ前遺跡 石器集計表（中期中葉主体）

		4号住	5号住	6号住	7号住	8号住	9号住	13号住	15号住	16号住	20号住	21号住	包含層	計	主 要 石 材	
小型剥片石器類	石 鏃	3			1		2	4		2	4		3 0	5 0	下呂石60%、チャート24%	小型剥片石器類全体 チャート 48.2% 下呂石 39.3% 黒曜石 3.7% 珪質凝灰岩 3.0% 珪質頁岩 1.5% その他 3.7%
	石 錐	1		1				3			1		8	1 4	チャート57.1%、下呂石28.6%	
	削器類	5				2	4	2	1		2	1	4 0	5 7	チャート70.2%、下呂石21.1%	
	石 匙			1	1					1	1		6	1 0	チャート40%、下呂石30%、珪質凝灰岩20%	
	異形石器				1						1		2	4	黒曜石50%	
大型剥片石器類	粗製石匙												2	2		
	打製石斧		1	2		1					1 2		1 1 5	1 3 1	頁岩79.4%	
	横刃形石器			3				4			8	1	5 0	6 6	頁岩49.7%	
	擦切石器			6	2		1				4		7	2 0	砂岩75.0%	
礫 石 器 類	磨製石斧	1		4		2	2	2		1	1 3		7 3	9 8	蛇紋岩92.9%	
	礫 器								1		2		2	5		
	礫石錘	1				2	1		1		4		8 6	9 5		
	敲 石	1			1		1	1			6		3 4	4 4		
	磨石類		1	7	7	8	6	4	4		5 9	1	2 5 1	3 5 3	多孔質安山岩65.4%	
	有縁石皿	1		1	1								1 1	1 4	多孔質安山岩85.7%	石皿全体
	盤状石皿			1									3 0	3 1	多孔質安山岩54.8%	多孔質安山岩64.4%
	台 石										6		1 2	1 8		
	大型砥石	2		2		1				1	6		2 0	3 2	砂岩93.8%	砥石全体
	手持砥石			1	1						6		2 5	3 3	砂岩97.0%	砂岩 95.3%
調整剥片類	楔形石器					1	2	3			1		2 0	2 7		
	調整剥片	1		1	1						4		1 1	1 8		
	使用痕剥片					1							2 2	2 3		
石製品	石 棒	※ 1				1		1					2	5	「塩屋石」85.7%	
	石棒未製品												2	2		

堂ノ前遺跡小型剥片石器類計測一覧表

1. 石鏃

番号	出土区	石質	形態	遺存	器長(mm)	器幅(mm)	器厚(mm)	重量(g)	備考	挿図番号
1	E45	下呂石	凹基無茎	完形	32.5	15.0	4.0	1.7		第71図-15
2	E43	下呂石	凹基無茎	完形	29.0	15.5	3.0	0.8		第71図-12
3	E46	黒曜石	凹基無茎	完形	25.0	13.0	4.0	0.6		第71図-9
4	E55	チャート	凹基無茎	完形	25.5	14.5	3.0	0.8		第71図-11
5	D50	下呂石	凹基無茎	完形	24.0	17.0	4.0	1.0		第71図-8
6	D47	チャート	凹基無茎	完形	25.0	17.0	5.0	1.3		
7	G48	チャート	凹基無茎	完形	24.0	14.0	5.0	1.1		第71図-13
8	E55	下呂石	凹基無茎	完形	21.5	15.0	6.0	1.2		
9	E45	チャート	凹基無茎	完形	20.0	14.0	4.0	0.9		第71図-6
10	F43	チャート	凹基無茎	完形	19.0	15.0	3.0	0.8		第71図-7
11	D47	下呂石	凹基無茎	完形	17.0	11.5	2.5	0.5		第71図-1
12	H39	下呂石	凹基無茎	完形	15.5	11.5	2.0	0.3		
13	表面採集	下呂石	凹基無茎	完形	15.0	11.0	4.0	0.5		
14	G52	ホルンフェルス	凹基無茎	完形	44.5	20.0	2.0	2.8		第71図-19
15	F55	下呂石	凹基無茎	片脚欠	38.0	(14.0)	3.0	(1.6)		第71図-14
16	表面採集	下呂石	凹基無茎	完形	22.0	12.0	4.0	0.9		第71図-4
17	G48	下呂石	凹基無茎	先端・片脚欠	(30.0)	(16.0)	4.0	(1.5)		第71図-16
18	E56	下呂石	凹基無茎	先端・片脚欠	(25.0)	(13.0)	4.0	(1.1)		第71図-10
19	F44	チャート	凹基無茎	片脚欠	26.0	(14.0)	3.0	(1.5)		
20	D43	下呂石	凹基無茎	先端・片脚欠	(19.0)	(14.0)	4.0	(0.9)		第71図-3
21	D42	下呂石	凹基無茎	先端・片脚欠	(16.0)	(13.0)	3.5	(0.7)		第71図-2
22	G52	珪質凝灰岩	凹基無茎	先端・片脚欠	(21.0)	(22.0)	3.5	(2.3)		第71図-17
23	C40	チャート	凹基無茎	先端・片脚欠	(20.5)	(15.5)	4.0	(1.2)		
24	D44	チャート	凹基無茎	先端・片脚欠	(22.0)	(13.0)	2.0	(0.8)		
25	D45	下呂石	平基無茎	先端欠	(20.0)	20.0	5.0	(2.2)		
26	H42	下呂石	凹基無茎	先端欠	(22.0)	13.0	3.0	(0.7)		
27	E52	チャート	凹基無茎	先端欠	(22.0)	18.0	5.0	(2.0)		
28	F45	珪質凝灰岩	凹基無茎	先端・片脚欠	(41.0)	(22.0)	4.0	(3.6)		第71図-18
29	H51	下呂石	凹基無茎	脚部のみ	(21.0)	(9.5)	(3.0)	(0.9)		
30	H41	下呂石	凹基無茎	完形	21.0	13.0	4.0	1.0		第71図-5
31	SB-4	珪質頁岩	凹基無茎	完形	47.5	12.5	3.0	2.5	床面より出土	第69図-1
32	SB-4	下呂石	凹基無茎	完形	29.5	18.0	6.0	2.2	床面より出土	第69図-3
33	SB-4	下呂石	凹基無茎	先端・片脚欠	(21.0)	(16.5)	4.0	(1.3)	中央ピット内より出土。	第69図-2
34	SB-6	チャート	凹基無茎	完形	28.0	18.0	3.0	1.7		第69図-8
35	SB-6	下呂石	凹基無茎	完形	22.0	16.5	5.0	1.4		第69図-7
36	SB-6	下呂石	凹基無茎	完形	17.5	15.0	4.0	0.8	受熱している。	第69図-5
37	SB-6	チャート	凹基無茎	先端欠	(14.0)	13.0	3.5	(0.7)		第69図-4
38	SB-7	下呂石	凹基無茎	片脚欠	30.0	16.5	3.5	(1.8)		第69図-9
39	SB-9	下呂石	凹基無茎	完形	21.0	13.5	3.5	1.0		第69図-10
40	SB-9	下呂石	凹基無茎	先端・脚部欠	(18.0)	(12.0)	3.5	(0.9)		
41	SB-13	下呂石	凸基有茎	完形	22.0	13.0	2.5	0.6		第69図-13
42	SB-13	下呂石	凹基無茎	完形	19.5	20.5	5.0	1.7		第69図-12
43	SB-13	下呂石	凹基無茎	完形	22.5	12.0	5.5	1.9		第69図-6
44	SB-13	下呂石	凹基無茎	完形	20.5	14.0	5.0	1.2	石鏃同様の使用痕がある。	第69図-11
45	SB-16	チャート	凹基無茎	先端欠	(22.5)	11.5	3.5	(1.1)		第69図-19
46	SB-16	下呂石	凹基無茎	片脚欠	(24.5)	(9.5)	3.0	(0.6)		第69図-14
47	SB-20	下呂石	凹基無茎	完形	29.0	17.5	3.0	1.2		第69図-15
48	SB-20	下呂石	凹基無茎	先端・片脚欠	(30.0)	(16.5)	3.5	(1.9)		第69図-18
49	SB-20	下呂石	凹基無茎	先端・片脚欠	(18.0)	(15.0)	2.5	(0.8)	柱穴内より出土。	第69図-17
50	SB-20	下呂石	凹基無茎	先端・片脚欠	(17.5)	(12.0)	2.0	(0.6)	擦切石器様の使用痕あり。	第69図-16

2. 石鏝

番号	出土区	石質	形態	遺存	器長(mm)	器幅(mm)	器厚(mm)	重量(g)	備考	押図番号
1	H48	高原川流紋岩	つまみ付	完形	40.5	20.5	9.5	6.0	鏝部先端に使用痕あり。	第71-25
2	H41	チャート	つまみ付	鏝部欠	(30.0)	16.0	8.0	(4.4)		
3	H41	下呂石	つまみ付	鏝部欠	(23.0)	12.0	4.0	(1.3)		第71-23
4	E52	チャート	三角形	完形	43.0	18.0	8.5	6.3		
5	E45	チャート	三角形	完形	26.0	18.0	5.5	3.0		第71-24
6	E51	輝石安山岩	棒状	完形	34.0	10.0	6.0	1.9		第71-21
7	H38	チャート	棒状	完形	30.0	9.0	6.0	1.7		第71-20
8	F43	チャート	棒状	完形	27.0	10.0	6.5	1.7		第71-22
9	SB-4	下呂石	つまみ付	完形	31.5	12.5	5.0	1.6	ピエスボール利用。	第69-23
10	SB-6	チャート	三角形	完形	28.5	12.0	4.5	1.9		第69-24
11	SB-13	チャート	三角形	基部や欠	(26.0)	14.5	8.0	(3.7)	鏝部先端に使用痕あり。	第69-21
12	SB-13	下呂石	棒状	完形	40.5	11.5	6.0	2.9		第69-20
13	SB-13	下呂石	棒状	完形	24.0	7.5	3.5	0.8	ピエスボール利用。	第69-22
14	SB-20	チャート	三角形	完形	29.0	17.0	7.5	3.1		第69-25

3. 石匙

番号	出土区	石質	形態	遺存	器長(mm)	器幅(mm)	基部幅(mm)	器厚(mm)	重量(g)	備考	押図番号
1	D44	チャート	横型	完形	32.5	52.0	15.0	6.0	12.4		第72図-7
2	D46	チャート	横型	完形	34.5	43.0	9.0	9.0	10.5		第72図-4
3	F46	珪質凝灰岩	横型	完形	28.0	43.5	10.5	8.5	8.2		第72図-6
4	E49	下呂石	横型変形	完形	32.5	29.0	7.0	8.0	6.3	刃部が右上端にある。	第72図-3
5	H44	下呂石	横型	完形	34.0	44.0	11.0	6.5	6.1	前期の可能性あり。	第72図-5
6	F45	チャート	横型	完形	22.5	20.5	5.5	2.0	1.0		
7	SB-6	珪質凝灰岩	横型	完形	36.0	48.0	9.5	6.0	9.1		第70図-15
8	SB-7	チャート	縦型	完形	42.5	20.5	17.5	8.0	7.4		第70図-16
9	SB-15	黒曜石	縦型	完形	42.5	17.0	10.0	7.0	4.8		第70図-12
10	SB-20	下呂石	縦型	完形	69.5	15.5	6.0	13.0	7.8	両面加工。	第70図-17

4. 異形石器

番号	出土区	石質	形態	遺存	器長(mm)	器幅(mm)	基部幅(mm)	器厚(mm)	重量(g)	備考	押図番号
1	F45	黒曜石	石匙様	完形	31.0	26.0	18.0	6.0	4.9		第72図-1
2	表面採集	黒曜石	石匙様	完形	36.0	24.0	17.0	7.5	6.3		第72図-2
3	SB-7	チャート	石鈎型	完形	30.0	12.0	——	7.0	2.7	全体に摩滅(使用)痕	第69図-26
4	SB-20	下呂石	石匙様	完形	27.0	19.0	13.5	6.5	2.6		第69図-27

5. 粗製石匙

番号	出土区	石質	形態	遺存	器長(mm)	器幅(mm)	基部幅(mm)	器厚(mm)	重量(g)	備考	押図番号
1	E42	砂質凝灰岩	横型	完形	45.0	72.5	31.0	9.5	38.2		第70図-9
2	D45	高原川流紋岩	縦型	完形	72.0	23.5	23.5	8.5	14.8		第70図-8

礫石錘計測一覧表 (完形のもののみ)

番号	出土区	石質	最大長 (cm)	打欠部 内径(cm)	最大幅 (cm)	打欠部幅		最大厚 (cm)	重量(g)	備考	挿図番号
						上	下				
1	D46	砂岩	16.2	15.5	11.2	3.9	2.9	4.0	1030		第65図-8
2	D44	安山岩	16.4	15.2	9.1	2.7	2.7	4.4	960		第65図-9
3	D47	濃飛流紋岩	15.8	15.4	9.8	2.2	2.7	4.8	1040		第65図-7
4	E48	濃飛流紋岩	15.6	15.1	11.1	1.9	2.4	3.4	900		
5	F46	多孔質安山岩	11.9	10.9	10.9	2.3	2.7	5.0	810		
6	E46	多孔質安山岩	12.9	11.4	11.6	3.1	3.4	3.8	750		第65図-6
7	D42	片麻岩	12.7	12.0	10.5	2.9	2.9	4.1	770		
8	E46	濃飛流紋岩	12.6	12.0	10.2	4.3	4.3	3.4	650		
9	G53	砂岩	11.8	11.7	10.0	2.9	3.1	4.0	710	受熱している。	
10	F43	砂岩	12.0	11.3	10.7	2.0	2.0	4.3	830		
11	F43	デイサイト	12.9	12.7	9.7	2.5	2.4	4.3	710		
12	E50	頁岩	13.9	13.1	7.7	1.8	1.9	4.3	810		
13	H47	多孔質安山岩	11.6	10.9	10.8	2.3	2.8	4.9	820		
14	D46	多孔質安山岩	12.6	11.7	9.4	1.8	2.7	3.9	630		
15	F48	濃飛流紋岩	13.1	12.6	10.4	3.1	3.8	3.7	760		
16	D42	多孔質安山岩	10.4	9.6	9.6	2.5	2.2	4.2	510	表裏に凹あり。	
17	D43	砂岩	12.4	12.1	10.0	2.3	3.5	4.3	810		
18	F48	砂岩	12.3	12.0	8.7	1.8	2.2	3.9	600	受熱している。	
19	F43	多孔質安山岩	11.3	10.5	10.5	2.4	3.2	4.4	670		
20	H41	濃飛流紋岩	10.9	11.1	11.2	2.1	2.7	2.9	580		
21	G43	石英斑岩	12.5	12.5	8.1	2.4	1.4	4.0	670		
22	D47	濃飛流紋岩	11.3	10.8	9.8	2.5	3.8	4.5	660		
23	表面採集	凝灰岩	12.5	11.9	9.2	2.2	2.0	4.5	755		第65図-4
24	E49	濃飛流紋岩	12.6	11.5	8.8	2.7	2.0	3.6	605		第65図-5
25	表面採集	濃飛流紋岩	12.0	11.8	7.5	2.7	2.3	4.6	555		
26	F43	多孔質安山岩	11.0	11.0	9.4	2.3	4.9	4.3	675	敲打痕あり。	
27	E50	濃飛流紋岩	11.8	11.3	8.0	1.8	2.1	3.4	490		第65図-1
28	F43	濃飛流紋岩	12.5	12.3	7.9	2.0	1.2	3.6	540		
29	F42	安山岩	11.5	11.3	8.6	1.8	2.5	3.6	550		第65図-3
30	E48	濃飛流紋岩	12.6	12.1	9.3	1.8	1.8	4.3	730		
31	H49	砂岩	12.3	11.9	8.9	1.1	2.0	3.8	585		
32	F50	閃緑岩	10.6	10.1	9.9	2.4	2.2	4.0	630		
33	F46	多孔質安山岩	10.9	10.6	9.5	2.4	1.8	3.6	525		
34	E51	多孔質安山岩	11.4	11.1	9.3	1.6	1.8	3.5	555		
35	表面採集	濃飛流紋岩	10.6	9.6	8.8	2.2	2.2	3.5	500		
36	D42	安山岩	11.2	10.6	9.0	2.7	2.1	3.1	515		
37	D44	安山岩	10.0	9.8	9.7	1.7	2.0	4.0	610		
38	G51	石英斑岩	10.3	9.7	9.2	1.7	2.2	3.7	510		
39	表面採集	石英斑岩	11.0	10.1	8.1	1.9	2.2	3.0	360	受熱している。	
40	F50	砂岩	11.4	10.6	8.3	1.6	2.7	2.8	400	表裏に凹あり。	第65図-2
41	D48	濃飛流紋岩	10.7	10.3	7.0	2.0	1.6	4.0	460		
42	D48	砂岩	9.5	9.4	8.1	2.1	2.3	3.4	380		
43	F48	安山岩	9.5	8.8	7.6	2.2	2.4	3.9	395	表裏に凹あり。	第64図-17
44	G54	濃飛流紋岩	11.1	10.7	6.8	1.7	1.6	2.7	325		
45	E49	凝灰岩	11.5	11.3	6.3	1.7	1.1	2.0	210		第64図-18
46	G43	石英斑岩	8.9	8.4	8.1	1.9	2.2	2.8	325		
47	H46	砂岩	9.6	9.5	7.4	2.5	2.5	3.7	395		
48	F46	砂岩	9.8	9.0	7.1	2.8	3.1	3.6	365		
49	D47	アブライト	10.1	9.9	8.0	2.4	2.2	2.6	320		
50	D48	花崗岩	9.9	9.7	6.5	1.5	1.2	2.3	260		

番号	出土区	石 質	最大長 (cm)	打欠部 内径 (cm)	最大幅 (cm)	打欠部幅		最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考	押図番号
						上	下				
51	G41	片麻岩	10.1	9.8	5.7	1.8	1.7	2.6	235		第64図-19
52	E42	凝灰質流紋岩	10.3	9.4	7.0	1.9	1.7	3.3	270		第64図-16
53	H48	安山岩	7.9	6.6	6.9	1.9	3.0	2.3	200		
54	G46	濃飛流紋岩	8.9	8.6	6.1	1.5	1.8	2.6	250		
55	D42	砂 岩	8.9	7.1	6.0	2.0	1.7	2.1	145		第64図-15
56	H41	砂 岩	8.1	7.6	6.5	1.5	1.7	1.7	130		
57	D42	安山岩	8.6	8.3	4.9	1.3	1.9	2.4	155		
58	F54	凝灰岩	8.1	7.8	5.9	1.8	1.4	2.1	145		
59	G46	安山岩	8.0	7.3	6.7	1.5	1.8	2.0	155		第64図-14
60	E47	安山岩	7.0	6.7	5.0	1.4	1.3	1.8	85		
61	H48	砂 岩	7.0	6.9	5.2	1.7	1.3	2.5	125		
62	E49	砂 岩	6.8	6.6	4.4	1.0	1.3	3.3	140		
63	F43	濃飛流紋岩	7.7	7.5	4.2	1.0	0.8	1.8	85		
64	C42	濃飛流紋岩	6.8	6.5	4.4	0.9	0.8	2.4	110		
65	D48	多孔質安山岩	6.5	6.3	4.9	1.0	1.0	2.4	115		
66	D41	濃飛流紋岩	6.4	6.1	6.0	1.1	1.2	1.5	81		
67	E42	安山岩	6.6	6.2	4.2	1.2	1.1	1.6	75		
68	F42	砂 岩	5.6	5.2	5.0	1.3	1.1	2.8	106		
69	F40	濃飛流紋岩	6.7	6.5	4.0	1.0	0.9	1.4	61		第64図-13
70	E42	砂 岩	5.4	5.3	4.2	1.2	2.2	1.9	60		
71	G43	安山岩	5.4	5.2	2.7	1.2	0.8	1.5	34		
72	E44	濃飛流紋岩	5.2	5.0	4.4	1.3	1.1	1.6	55		
73	E46	多孔質安山岩	4.2	4.1	3.5	0.6	1.5	1.8	42		
74	E48	濃飛流紋岩	4.5	4.4	3.3	0.8	0.9	1.4	32		第64図-12
75	E47	安山岩	4.6	4.5	3.5	1.1	0.8	2.1	41		
76	E46	砂 岩	8.4	7.9	5.8	2.0	2.5	3.0	204		
77	D48	砂 岩	3.8	3.5	3.4	0.8	1.2	1.3	25		
78	D49	片麻岩	4.1	3.9	3.0	1.2	1.4	1.2	20		
79	E48	砂 岩	3.5	3.3	3.0	1.0	1.4	1.9	30		第64図-11
80	G53	砂 岩	3.3	3.1	3.2	0.9	1.2	1.8	27		
81	F45	頁 岩	3.2	3.1	2.7	1.0	0.8	1.1	15		第64図-10
82	SB-4	安山岩	12.5	12.1	6.8	1.7	1.8	2.6	367	床面出土。	第64図-1
83	SB-8	凝灰岩	11.8	10.7	8.3	1.8	3.5	3.3	439	ピット内出土。敲打痕あり。	第64図-2
84	SB-8	濃飛流紋岩	4.4	4.3	3.0	0.9	1.0	1.4	24		第64図-3
85	SB-9	片麻岩	5.5	5.0	4.8	3.1	2.6	1.6	71		第64図-4
86	SB-13	濃飛流紋岩	10.4	9.8	6.8	1.8	2.0	2.8	281		第64図-5
87	SB-20	濃飛流紋岩	7.8	7.5	6.6	1.9	1.8	2.6	194		第64図-6
88	SB-20	頁 岩	8.5	8.4	5.8	1.3	2.1	2.2	188		第64図-8
89	SB-20	濃飛流紋岩	10.1	9.8	10.0	1.9	3.1	3.6	606	炉石に転用。	第64図-7

図 版



野首地区集落と堂ノ前遺跡（北東方向から）



野首地区・林地区集落と堂ノ前遺跡（南西方向から）



遺構プラン検出状況



遺構掘り下げ作業



遺跡内土層堆積状況



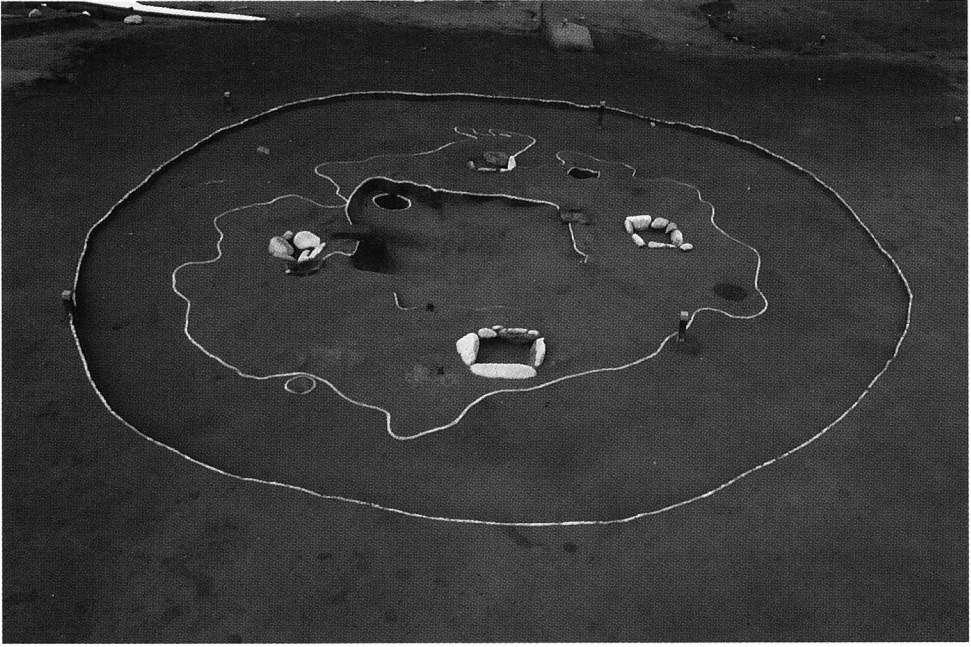
写真撮影のための遺構清掃



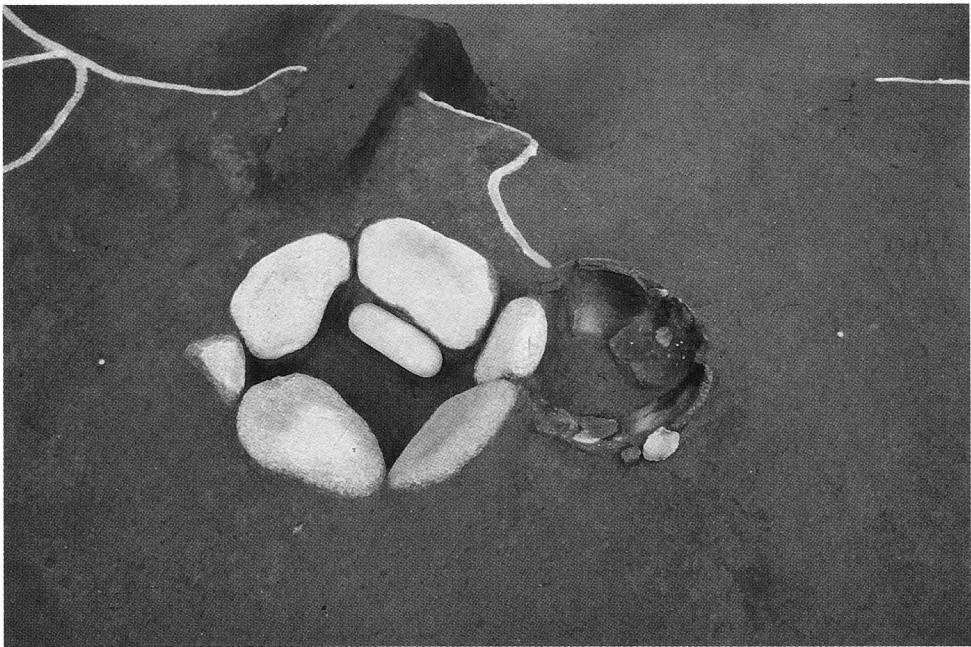
中学生体験学習



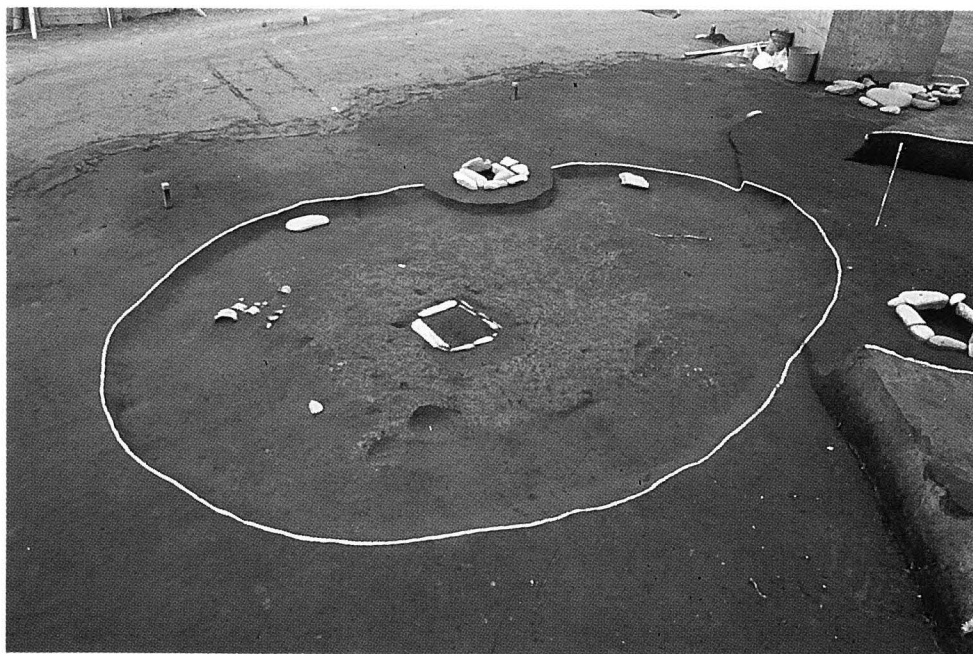
1号住居炉址



4号住居址



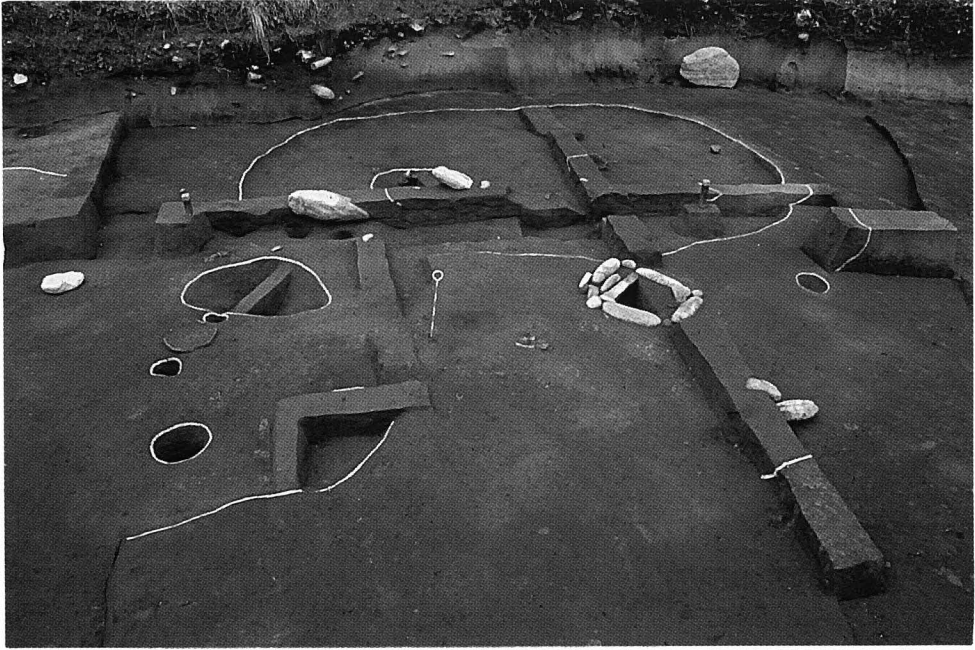
4号住居址炉址（部分）



5号·6号·15号住居址



6号·15号住居址



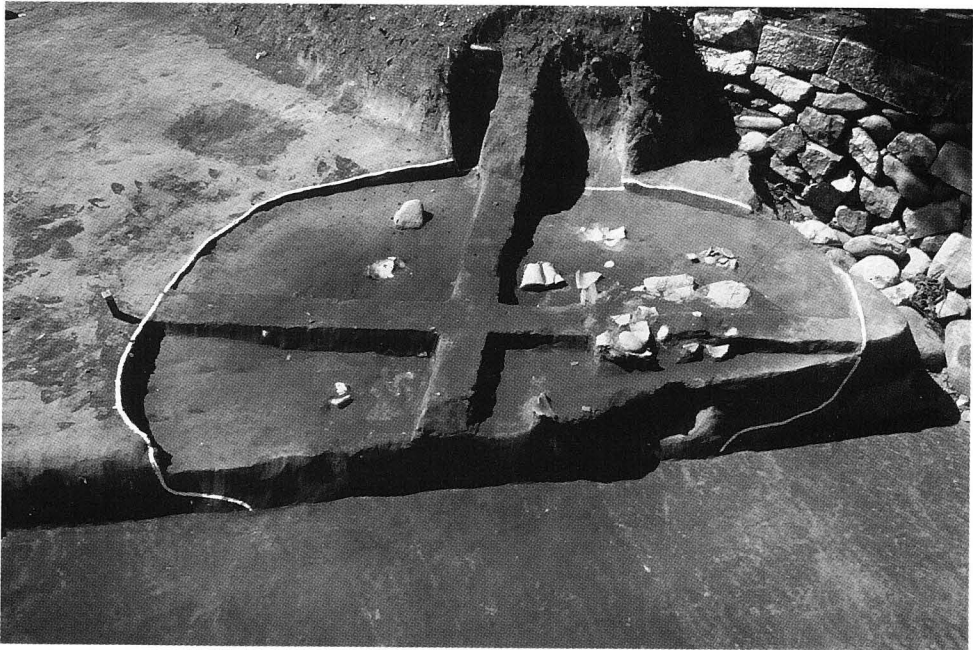
7号·16号·17号住居址



7号住居址 埋甕



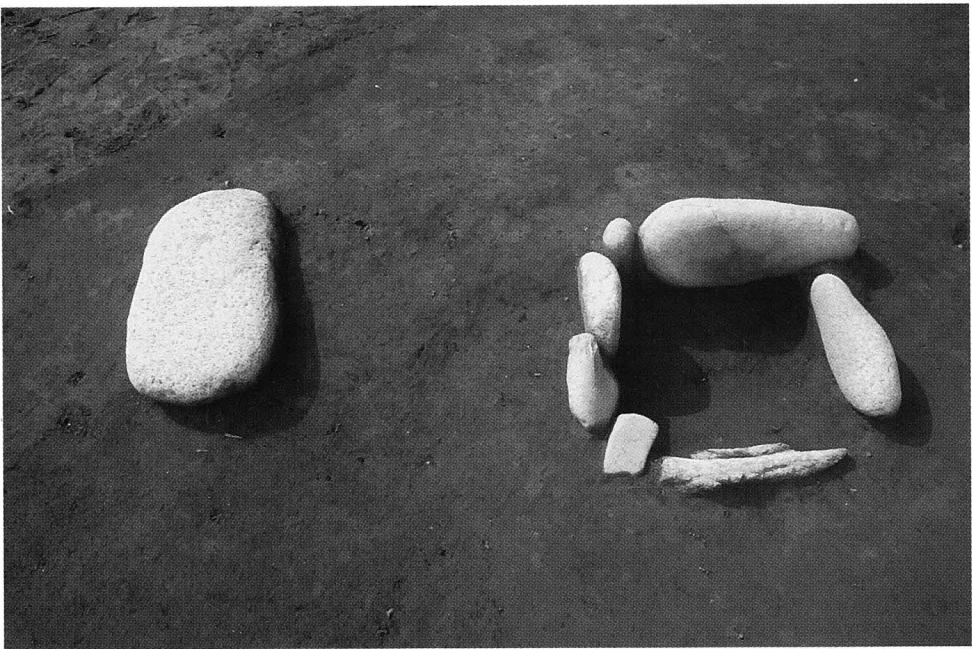
8号住居址



9号住居址 覆土土器



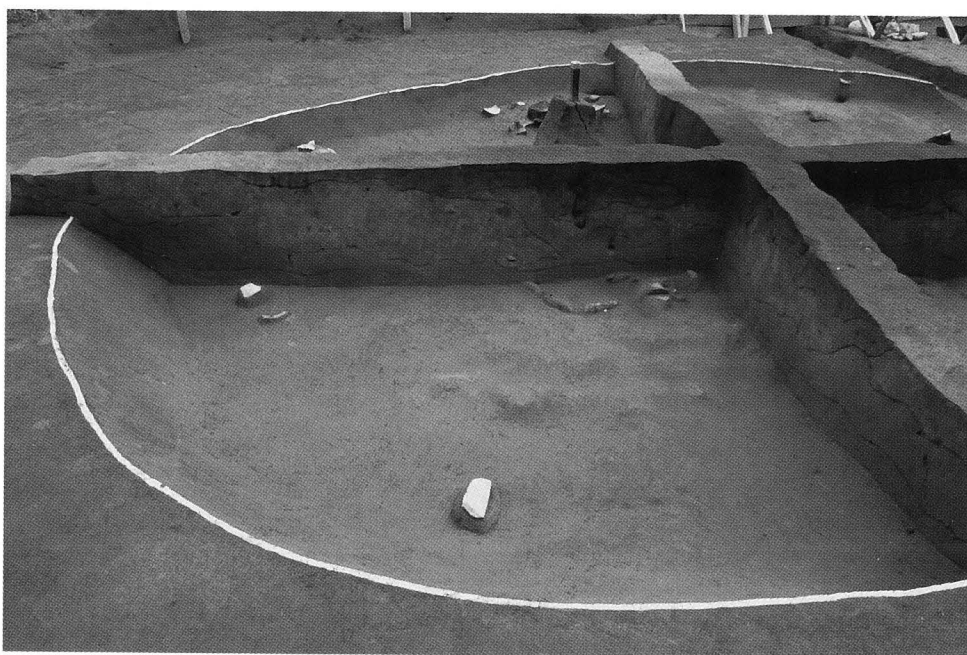
9号住居址



11号住居址 炉址



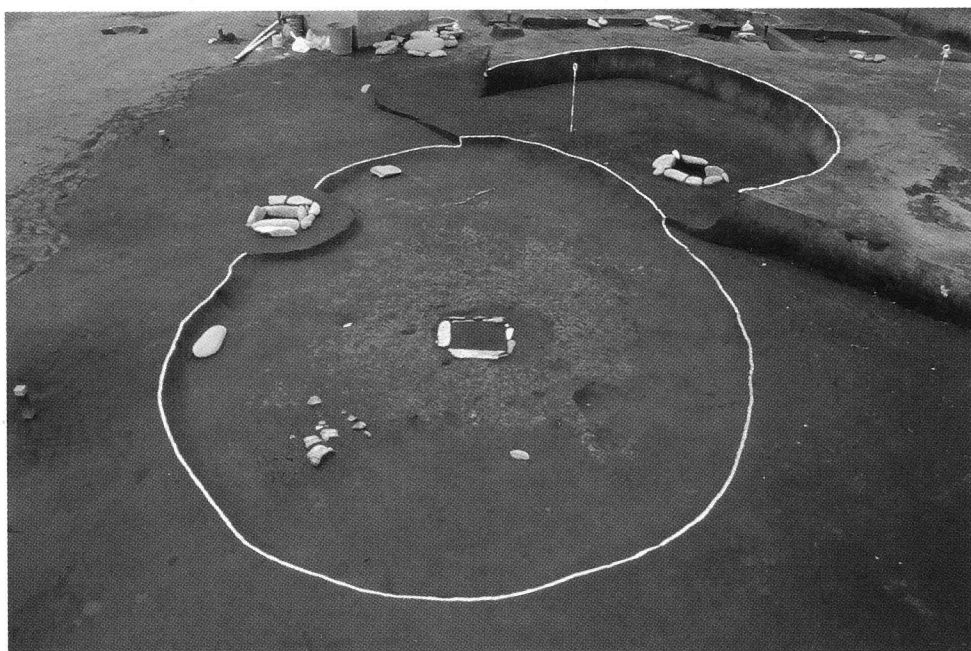
動物意匠文土器検出状況



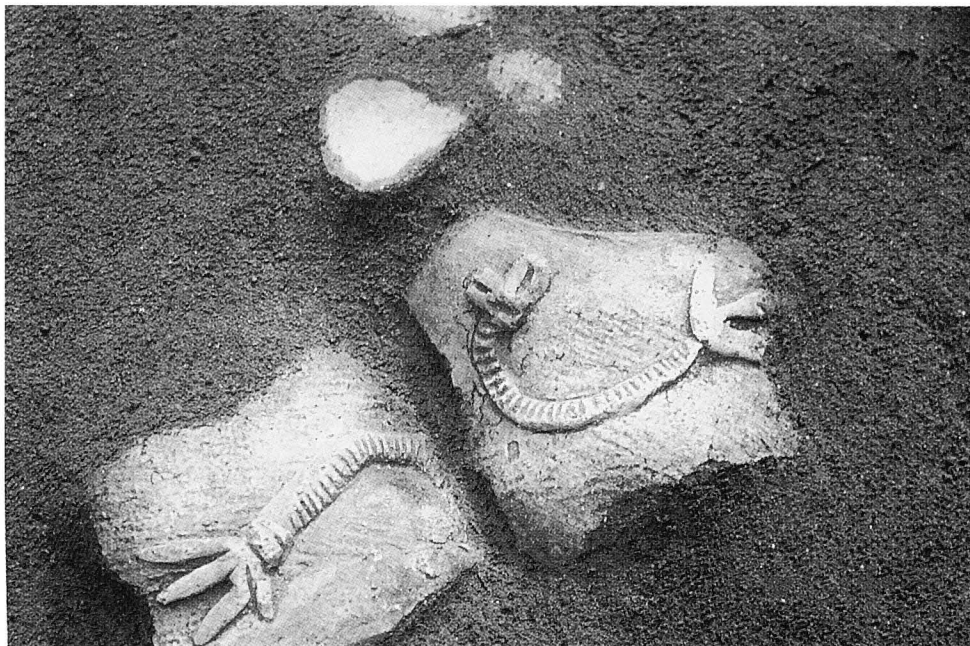
13号住居址覆土堆積状況



13号住居址 炉址



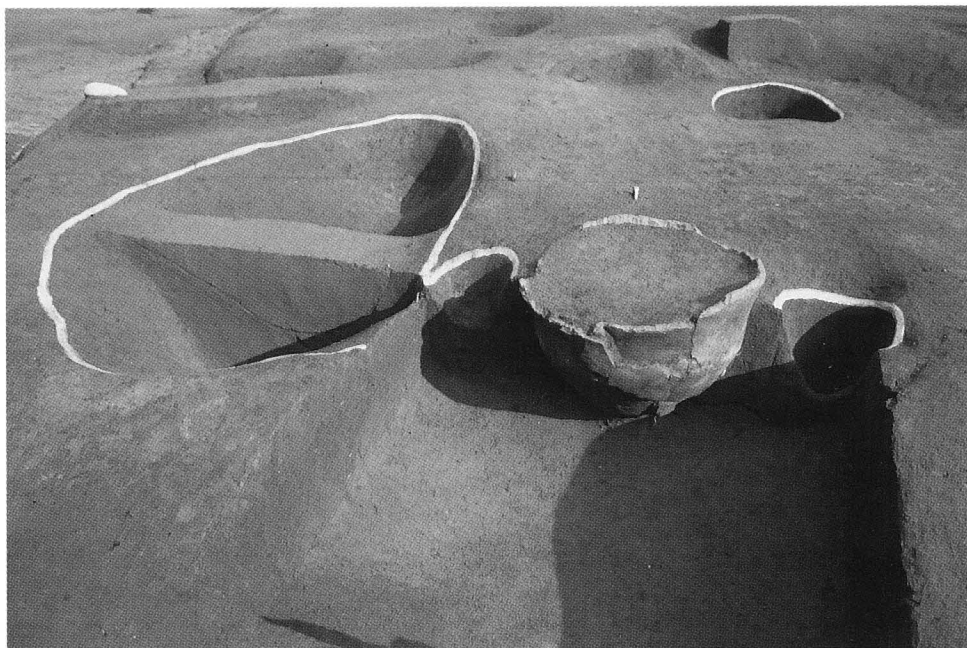
5号・6号・15号住居址



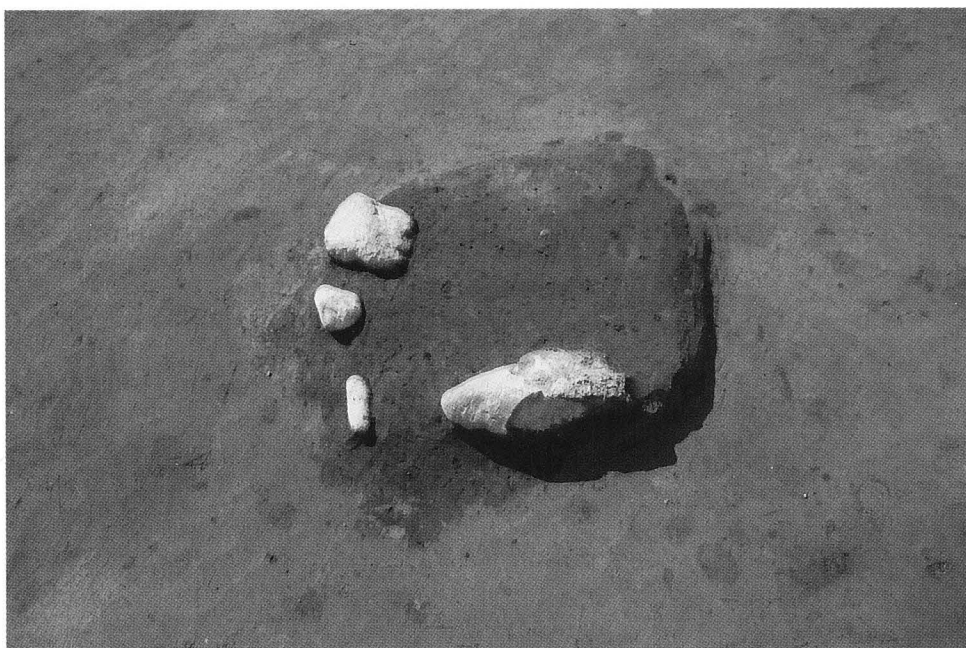
動物意匠文土器検出状況（15号住居址内）



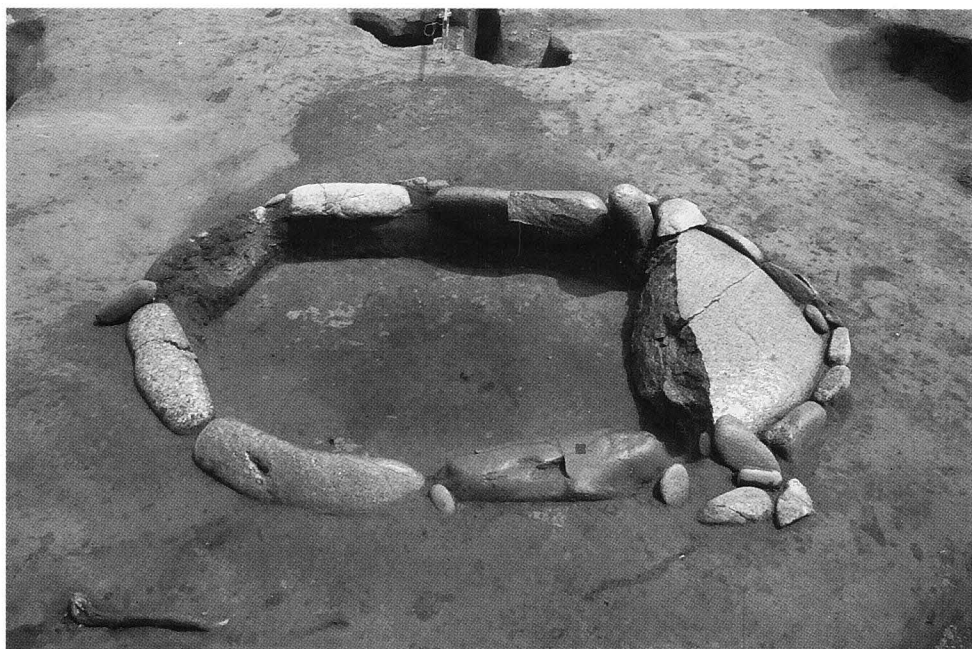
16号住居址埋甕



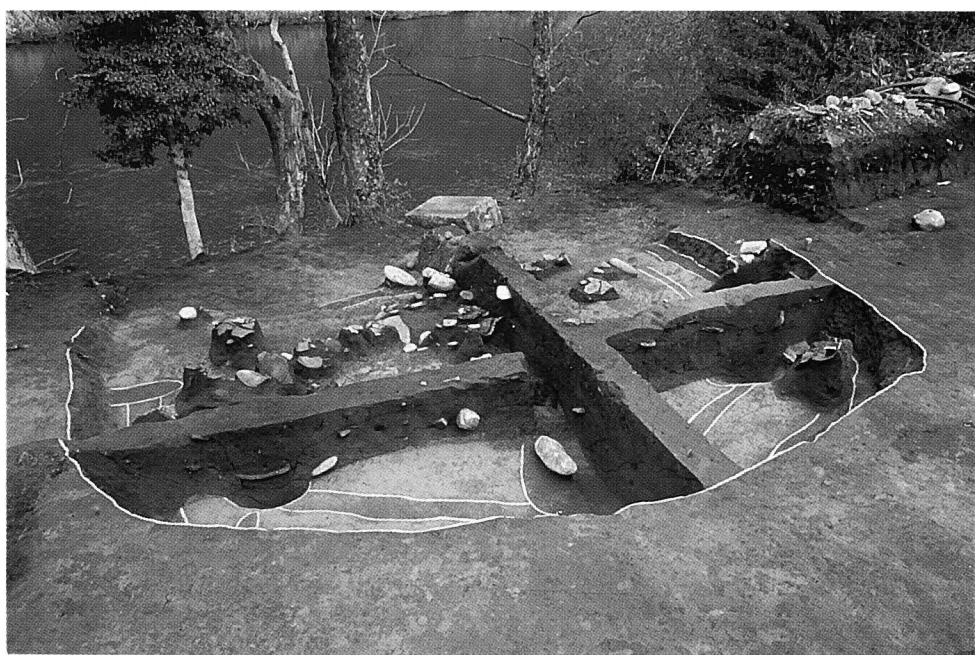
17号住居址 埋甕



19号住居址 炉址



20号住居址 炉址



20号住居址



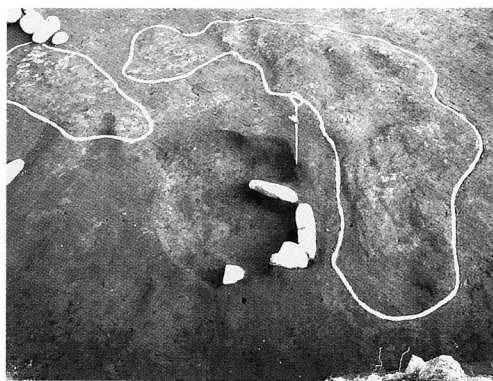
20号住居址 埋甕



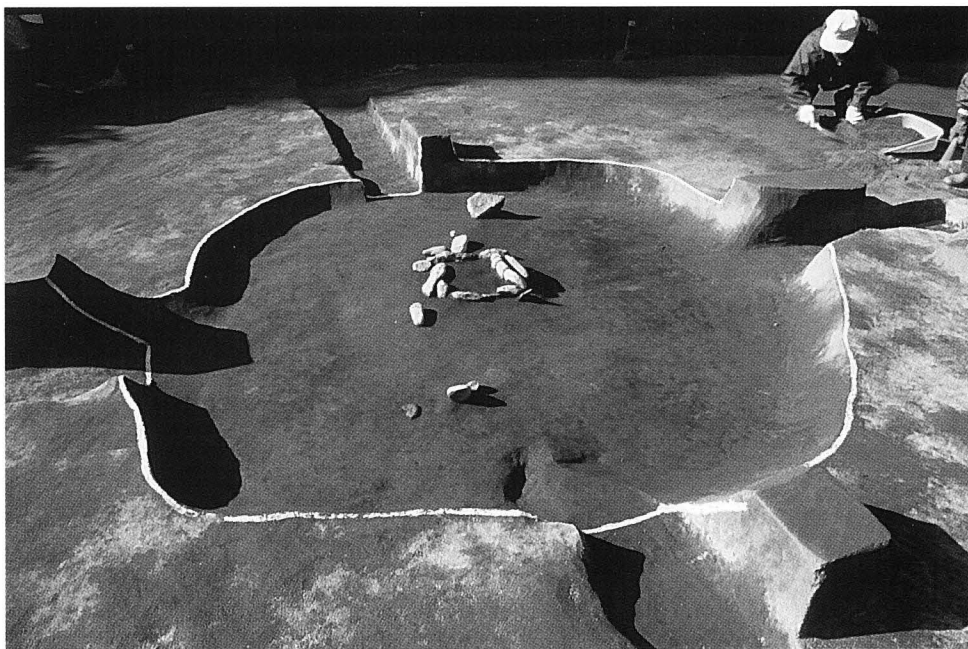
20号住居址 土器検出状況



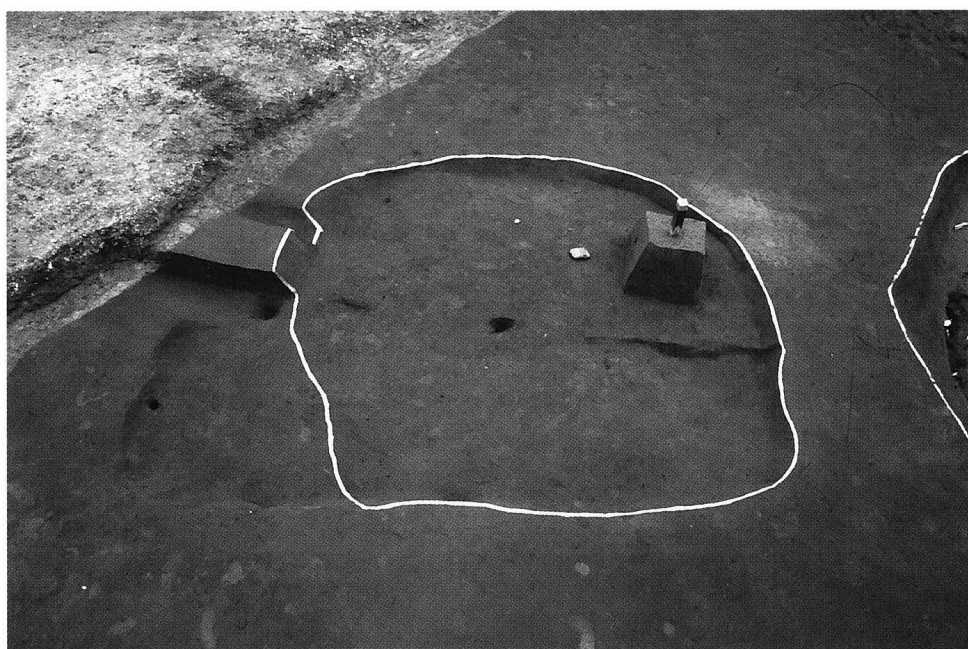
20号住居址 周溝（部分）



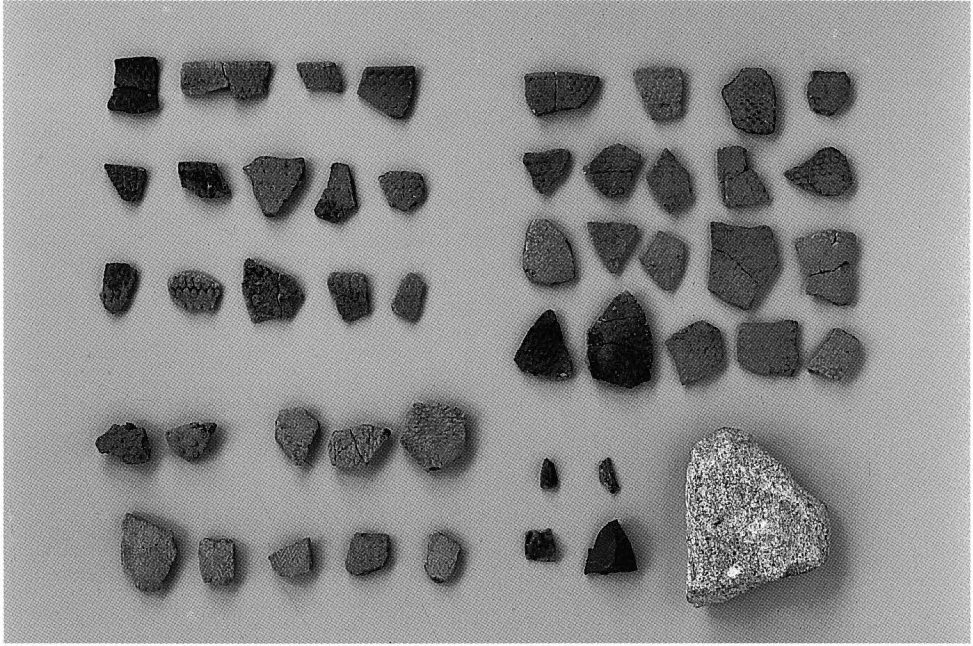
21号住居址 炉址



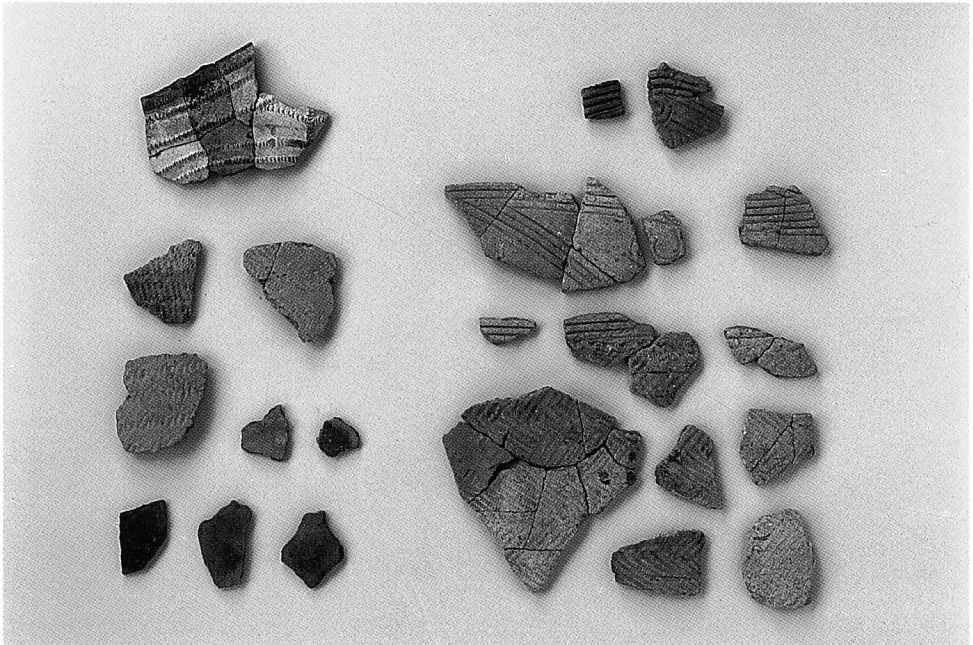
14号住居址（後期）



18号住居址（後期）



早期包含層遺物



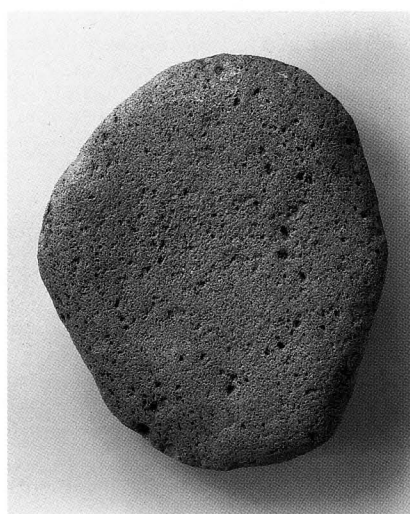
前期包含層遺物（土器）



前期包含層遺物（石器・石製品）



前期中葉 尖底土器



前期 石皿



4号住居址 埋設土器



4号住居址 出土土器(1)



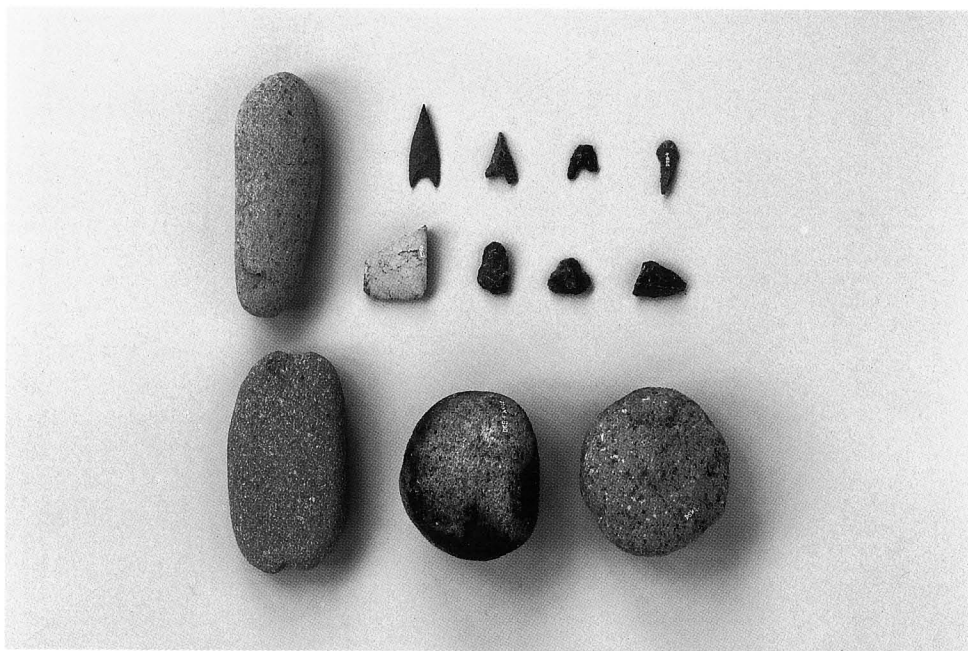
4号住居址 出土土器(2)



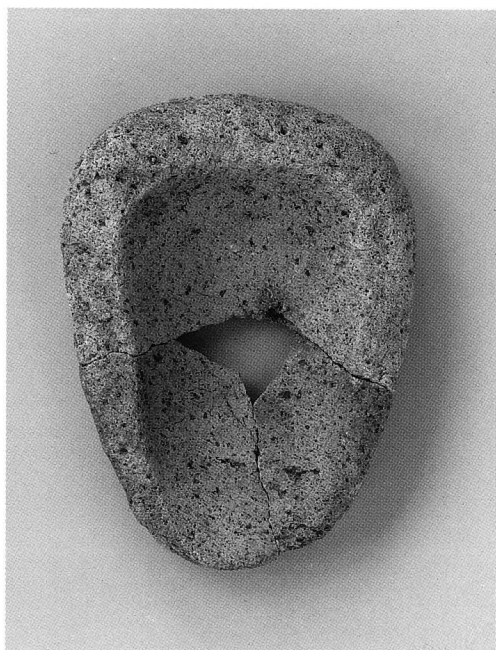
4号住居址 出土土器(3)



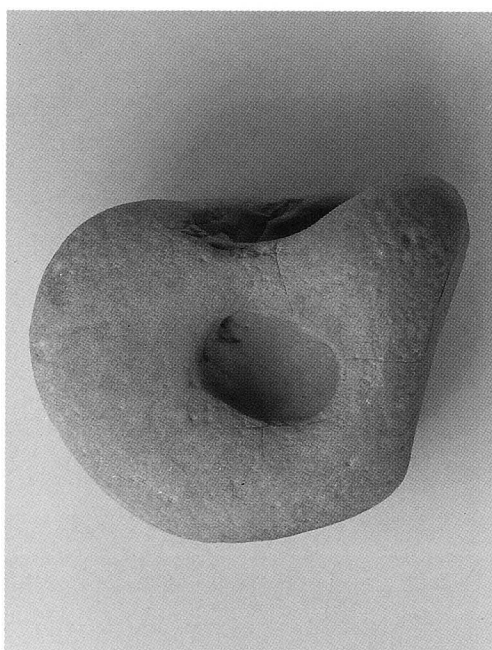
13号住居址 出土土器(4)



4号住居址 出土石器



4号住居址 出土石皿



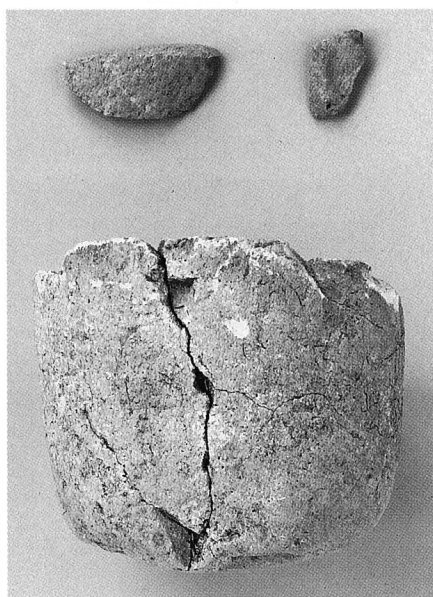
4号住居址 出土砥石



4号・20号住居址 石棒接合資料



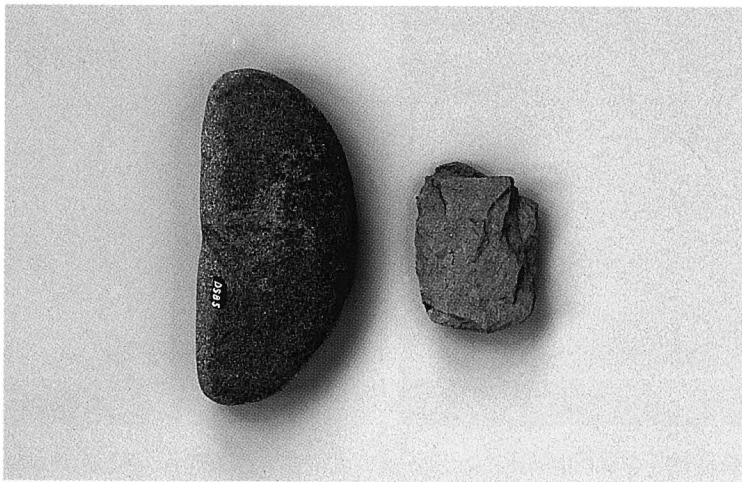
20号住居址 石棒検出状況



4号・13号住居址 石棒基部・破片



5号住居址 出土土器



5号住居址 出土石器



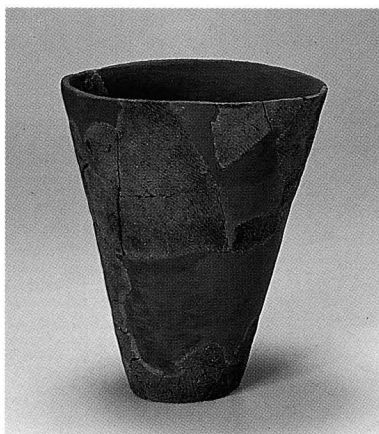
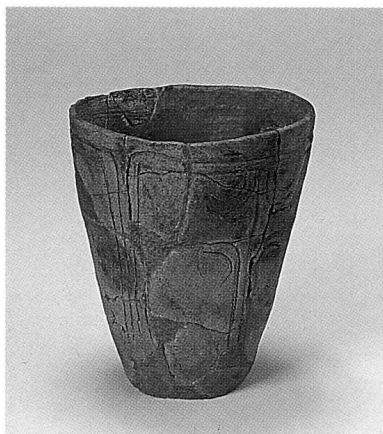
(左と同一個体)



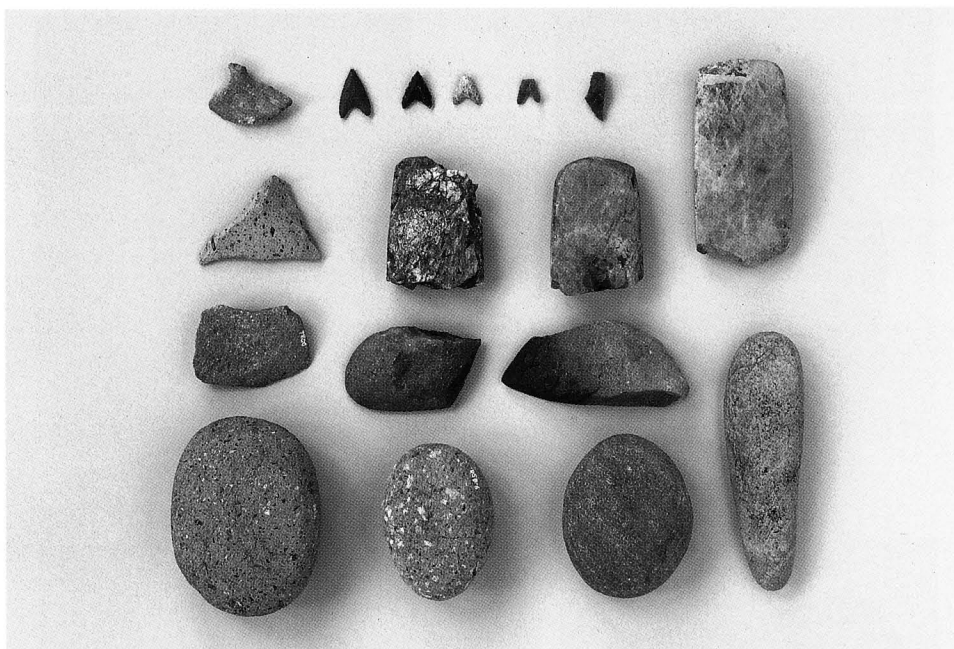
(左と同一個体)



6号住居址 出土土器(1)



6号住居址 出土土器(2)



6号住居址 出土石器



6号住居址 出土石皿



6号住居址 出土石核様石器



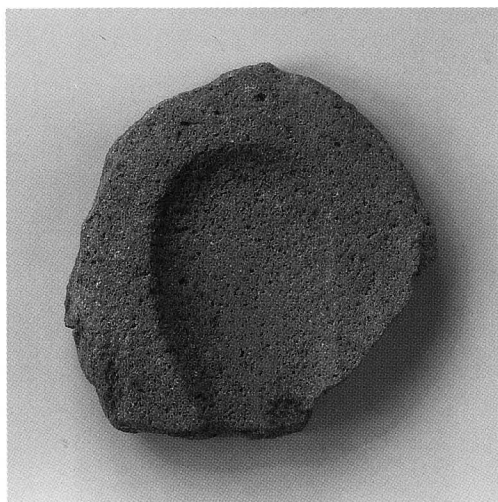
7号住居址 埋甕



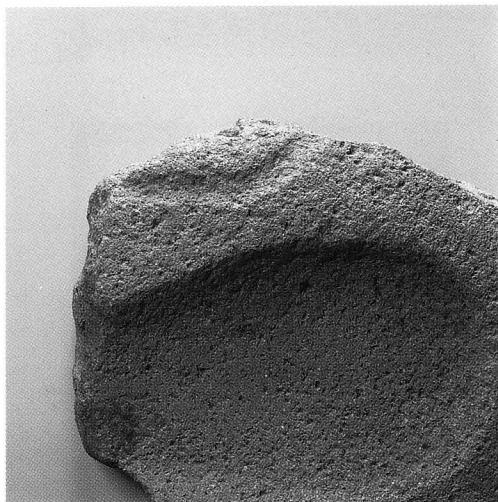
7号住居址 出土土器



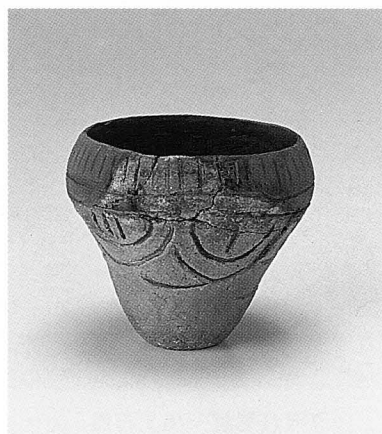
7号住居址 出土石器



7号住居址 出土石皿



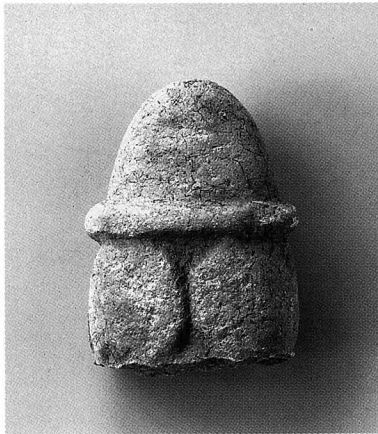
7号住居址 出土石皿（部分）



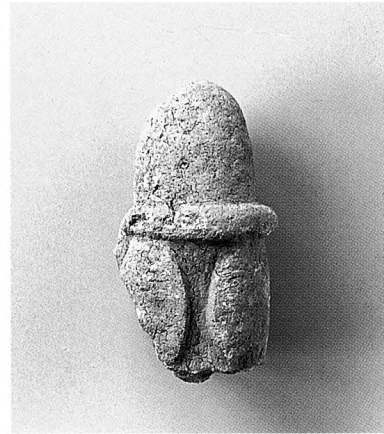
8号住居址 出土土器(1)



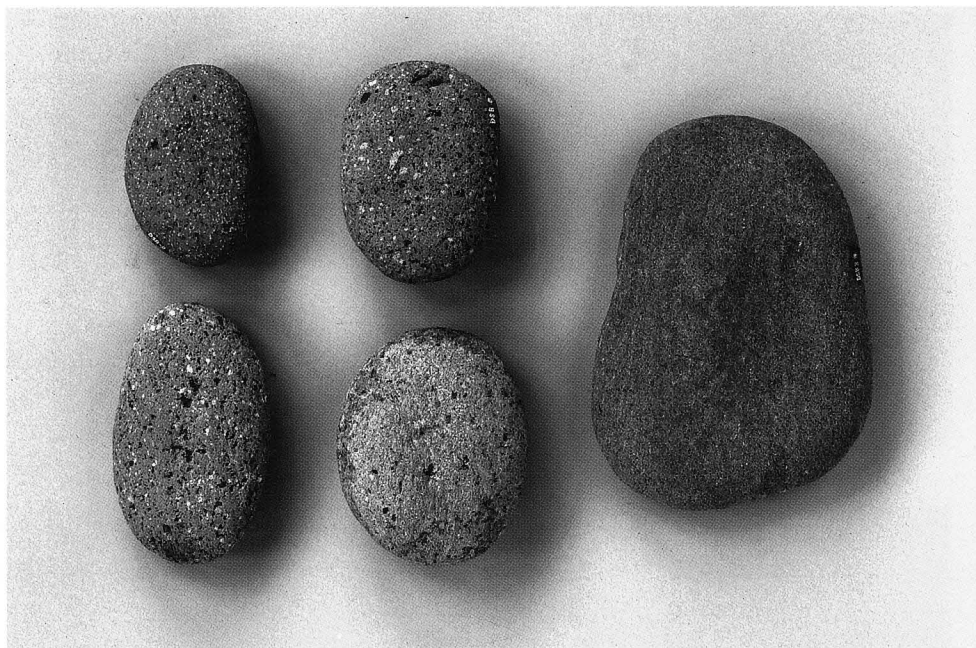
8号住居址 出土土器(2)



8号住居址 出土石棒



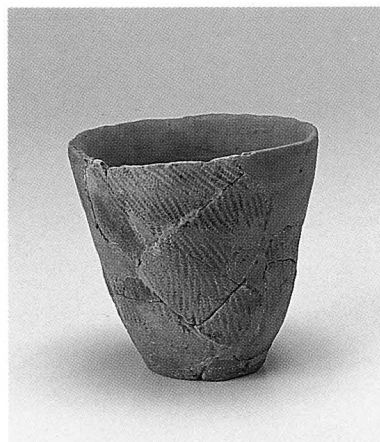
(左と同一個体)



8号住居址 出土石器(1)



8号住居址 出土石器(2)



9号住居址 出土土器



9号住居址 出土石器



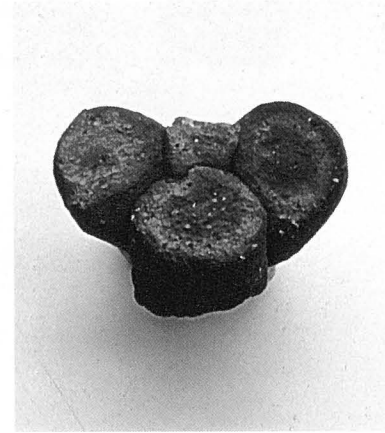
9号住居址 土器出土状况



動物意匠文土器



動物意匠文土器（部分）



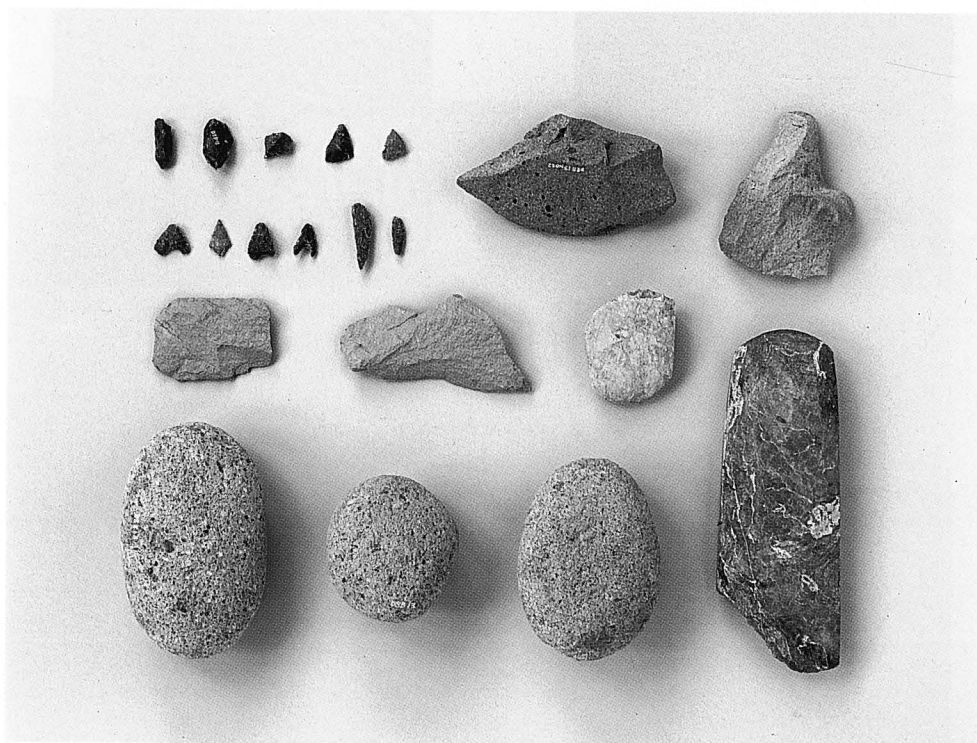
動物意匠文加飾接合面



13号住居址 出土土器(1)



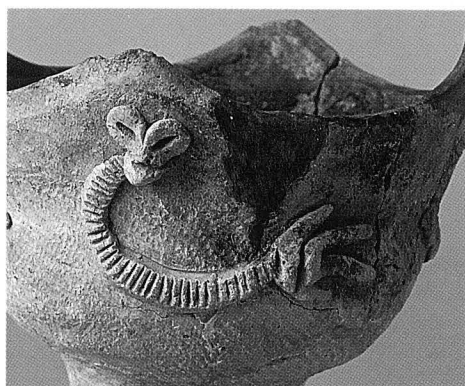
13号住居址 出土土器(2)



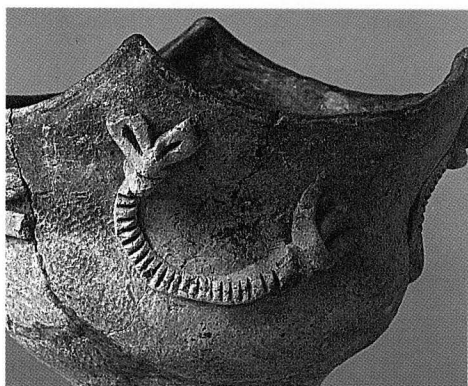
13号住居址 出土石器・石製品



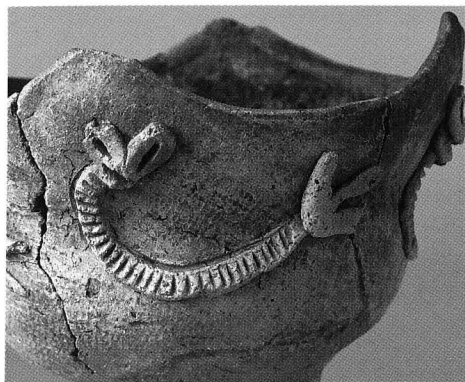
15号住居址 動物意匠文土器



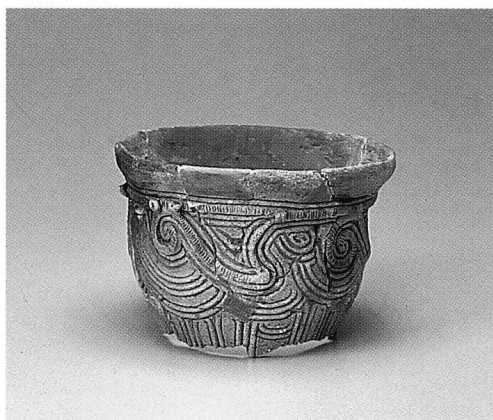
部分



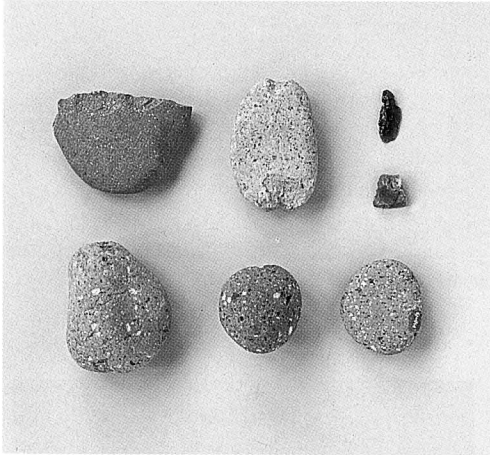
部分



部分



15号住居址 ピット内土器



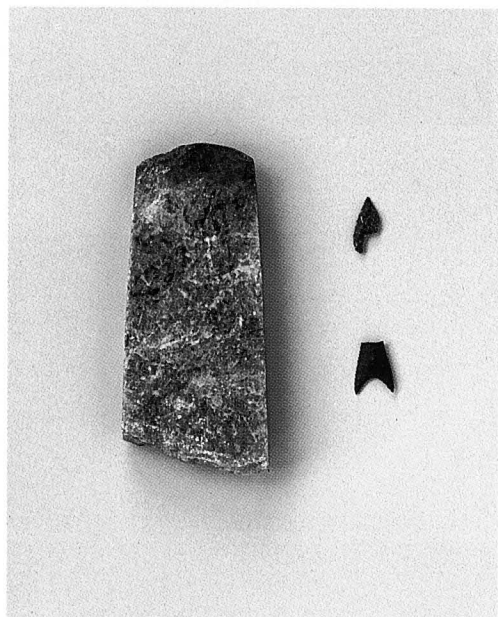
15号住居址 出土石器



16号住居址 出土土器（ピット内出土）



16号住居址 出土土器



16号住居址 出土石器



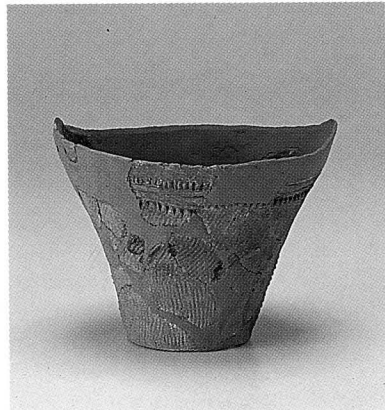
17号住居址 埋甕



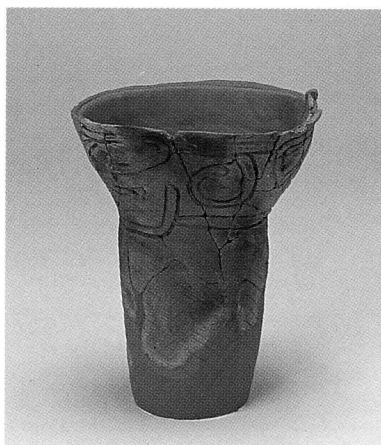
20号住居址 埋甕(旧)



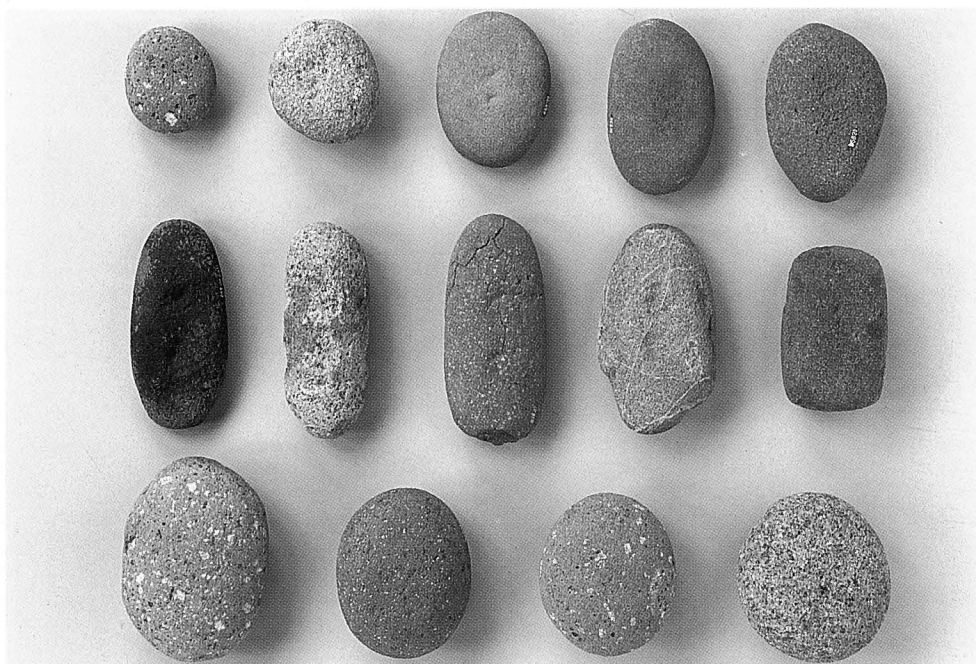
20号住居址 埋甕(新)



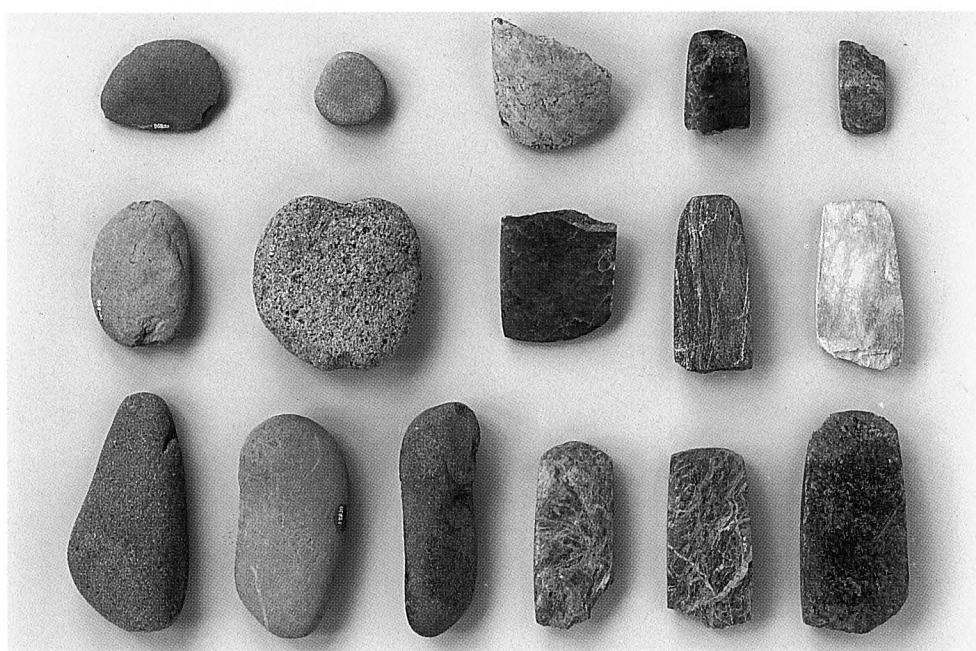
20号住居址 出土土器(1)



20号住居址 出土土器(2)



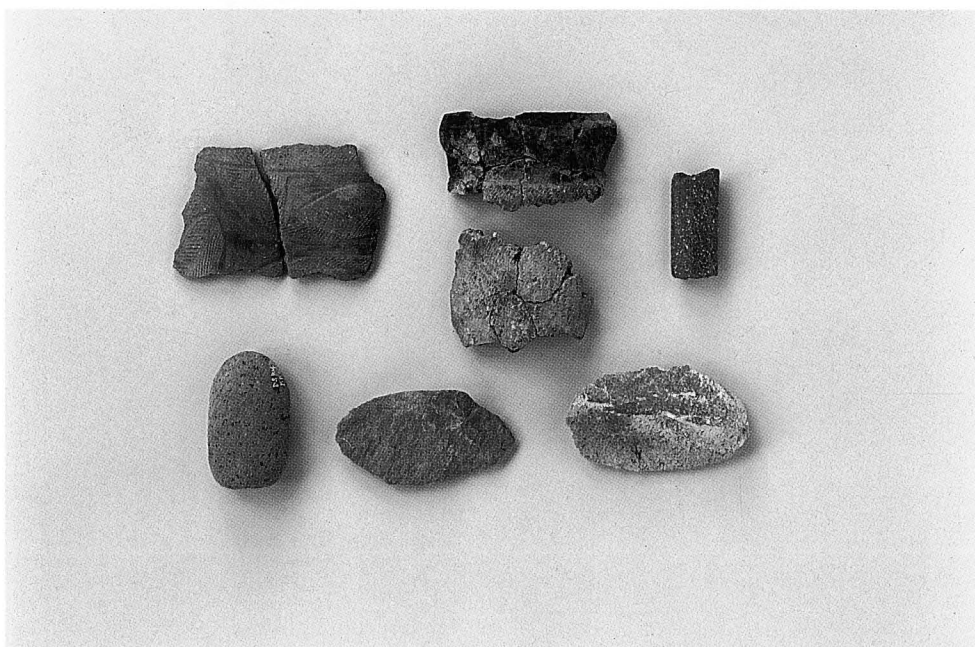
20号住居址 出土石器(1)



20号住居址 出土石器(2)



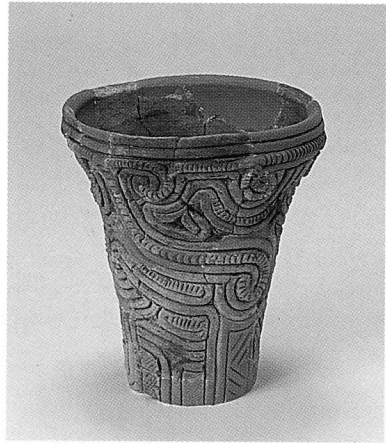
20号住居址 出土石器(3)



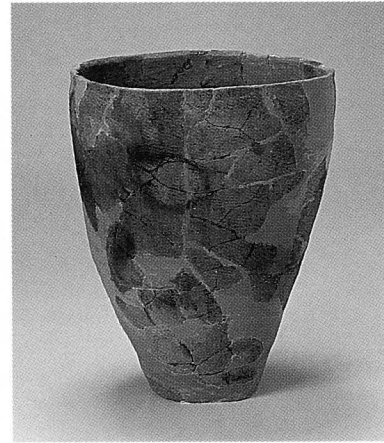
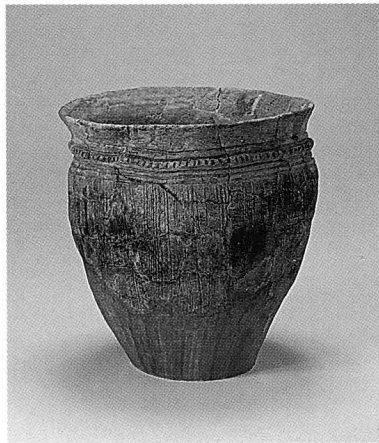
14号・18号住居址 出土遺物



包含層出土信州系土器（1・2は単独出土の埋甕）



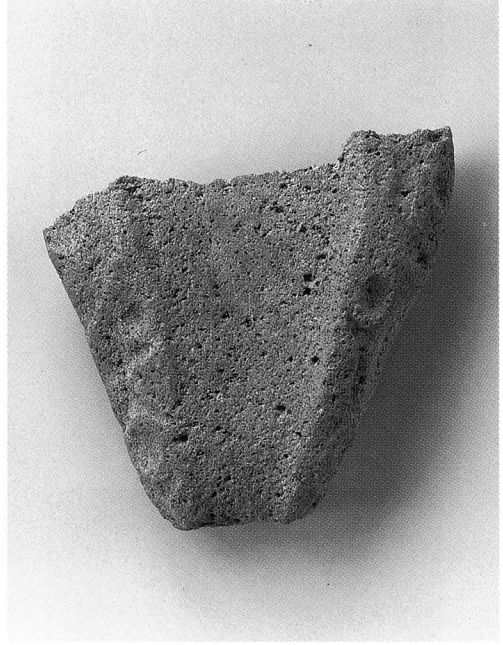
包含層出土土器（北陸系）



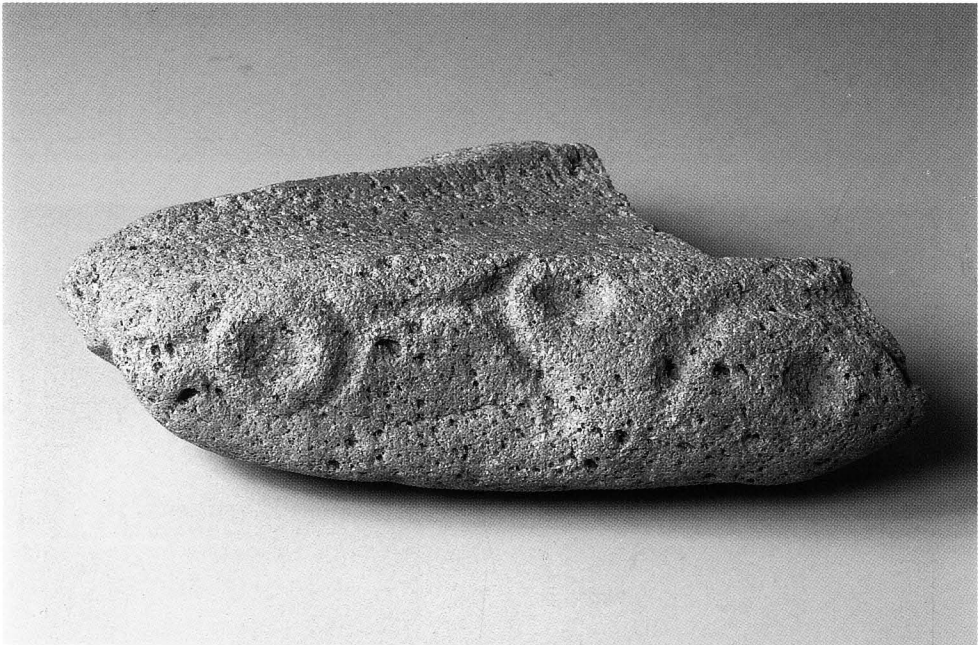
包含層出土土器（粗製土器）



石皿



刻文入石皿



刻文入石皿



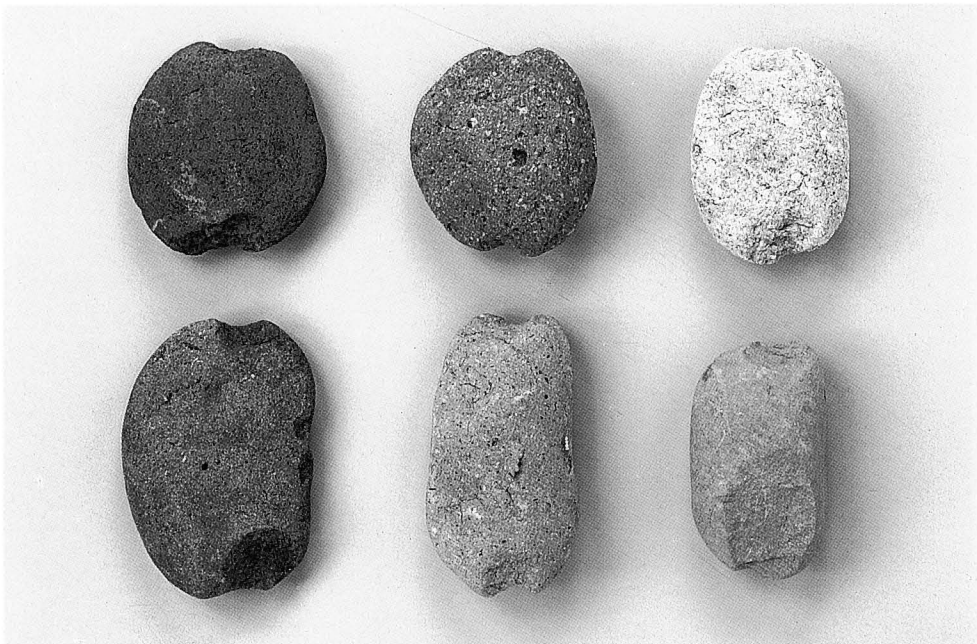
包含層出土 磨石類(1)



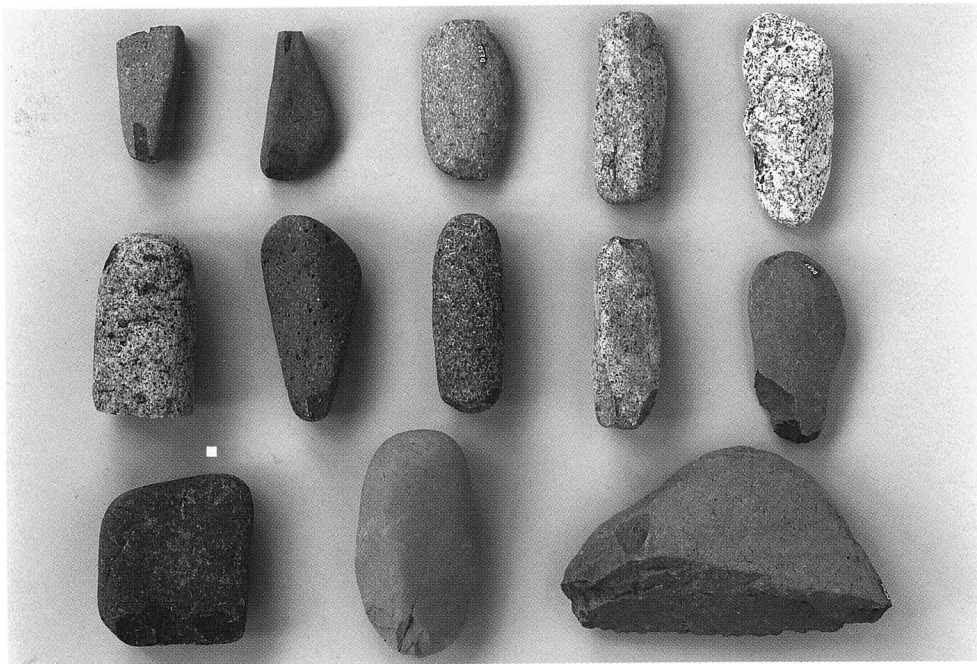
包含層出土 磨石類(2)



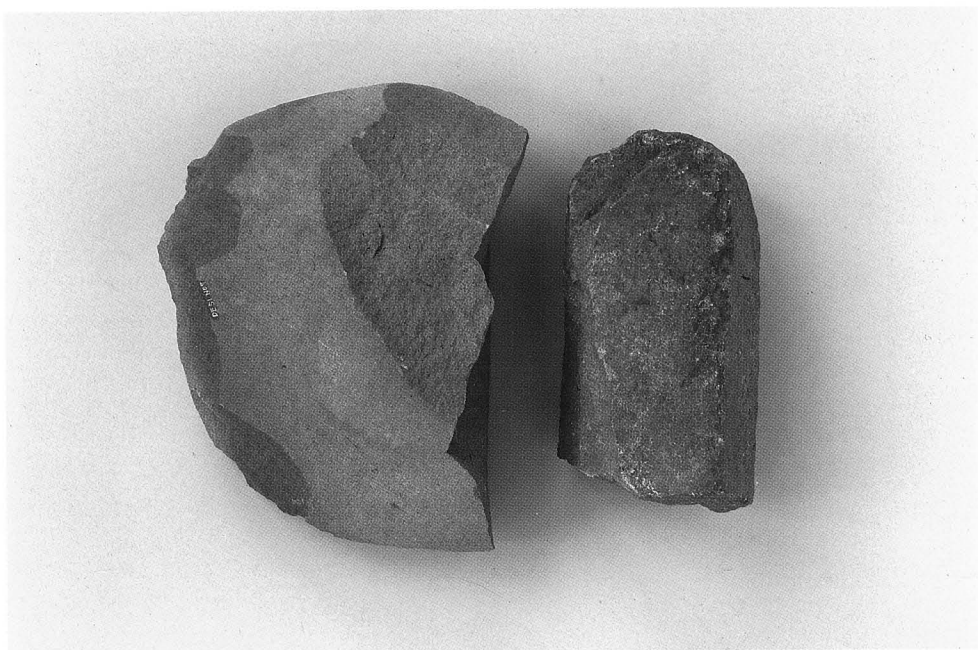
包含層出土 礫石錘(1)



包含層出土 礫石錘(2)



包含層出土 敲石類



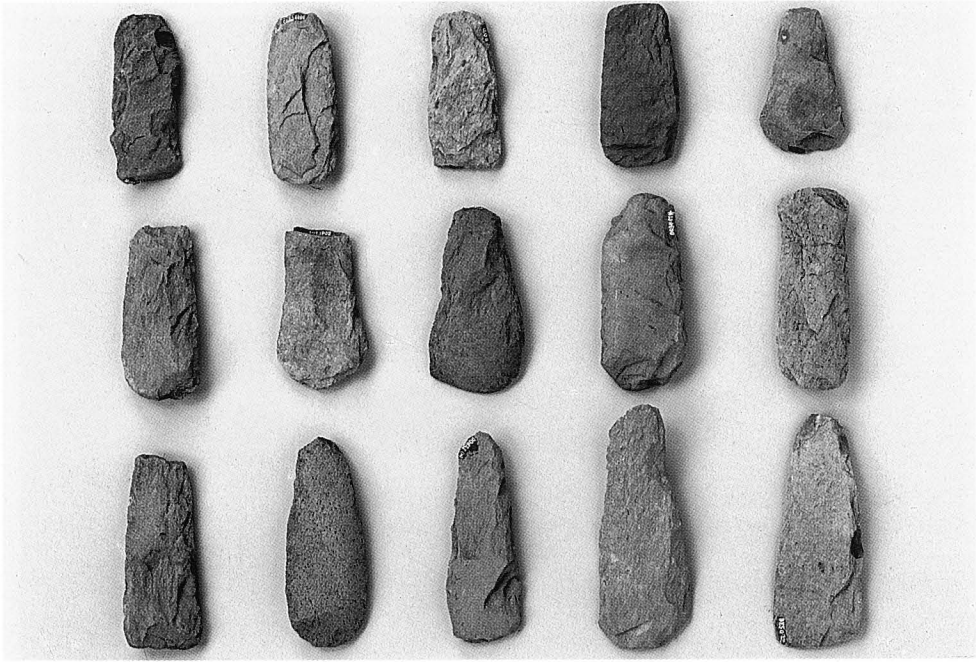
包含層出土 大型砥石



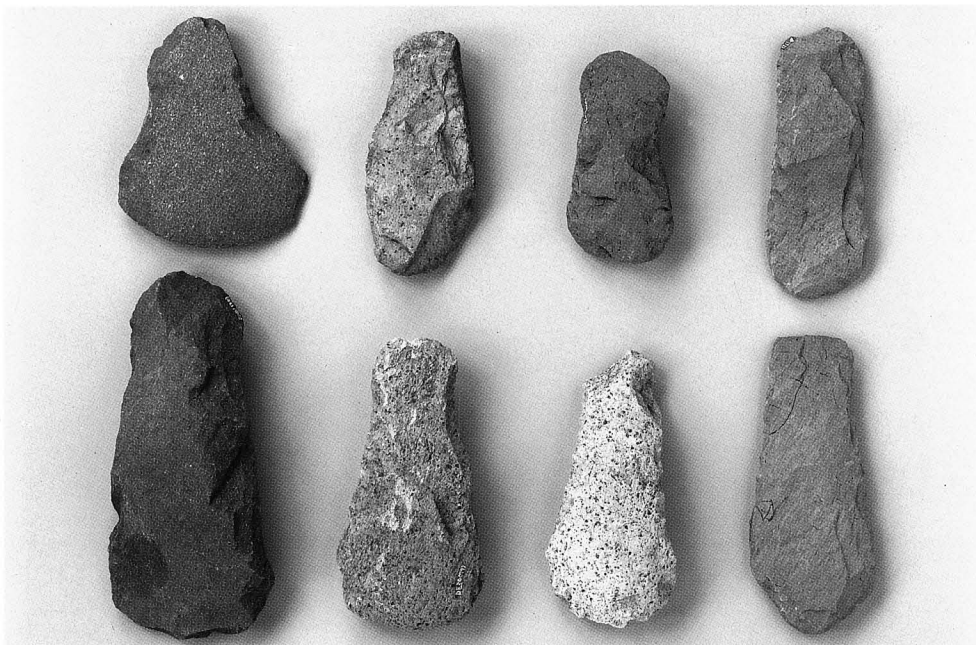
包含層出土 磨製石斧(1)



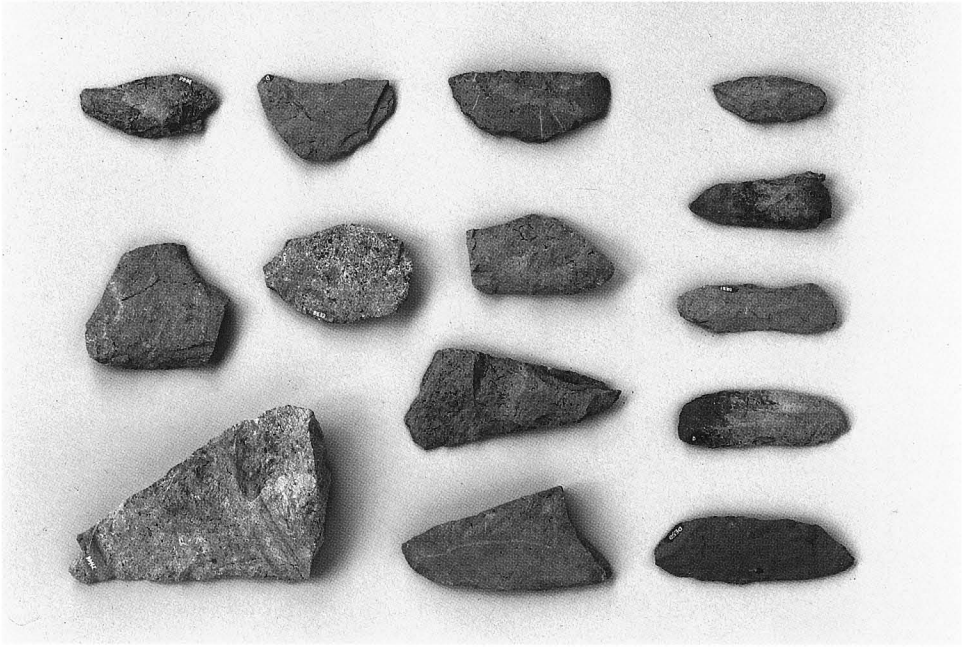
包含層出土 磨製石斧(2)



包含層出土 打製石斧(1)



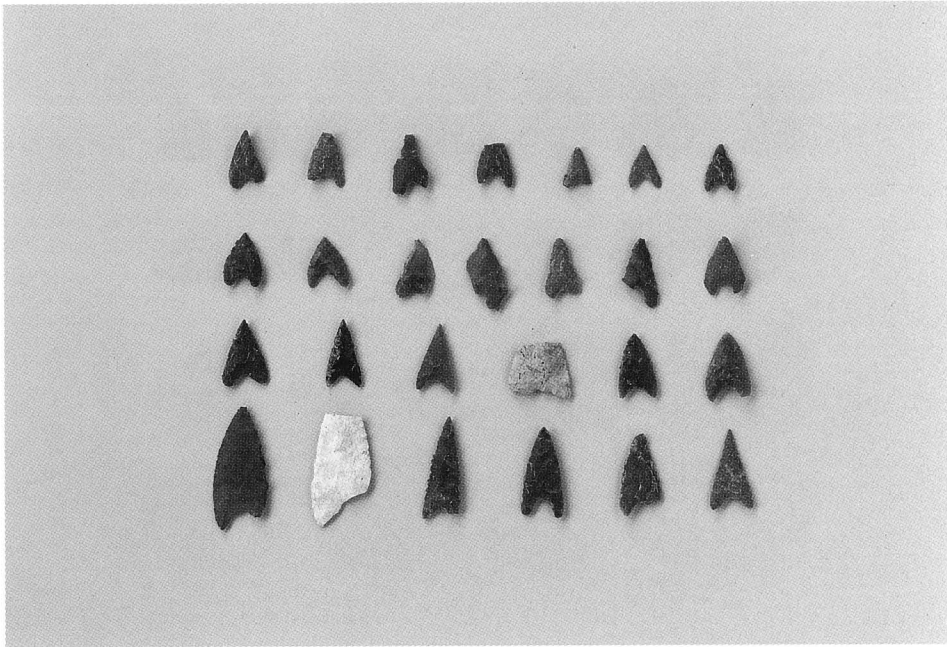
包含層出土 打製石斧(2)



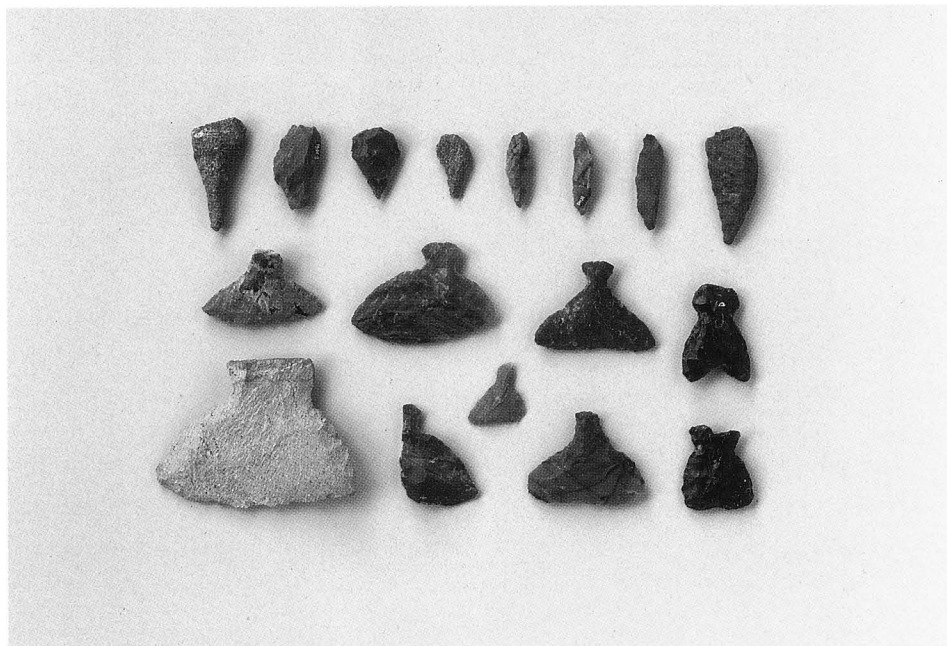
包含層出土 横刃形石器



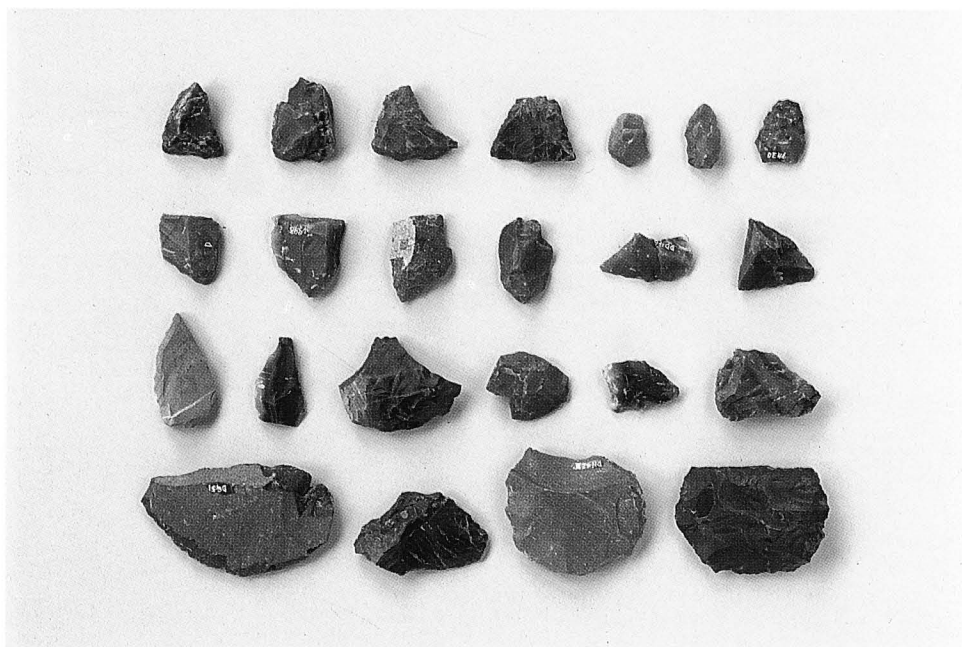
包含層出土 擦切石器・礫器



包含層出土 石鏃



包含層出土 石錐・石匙・異形石器



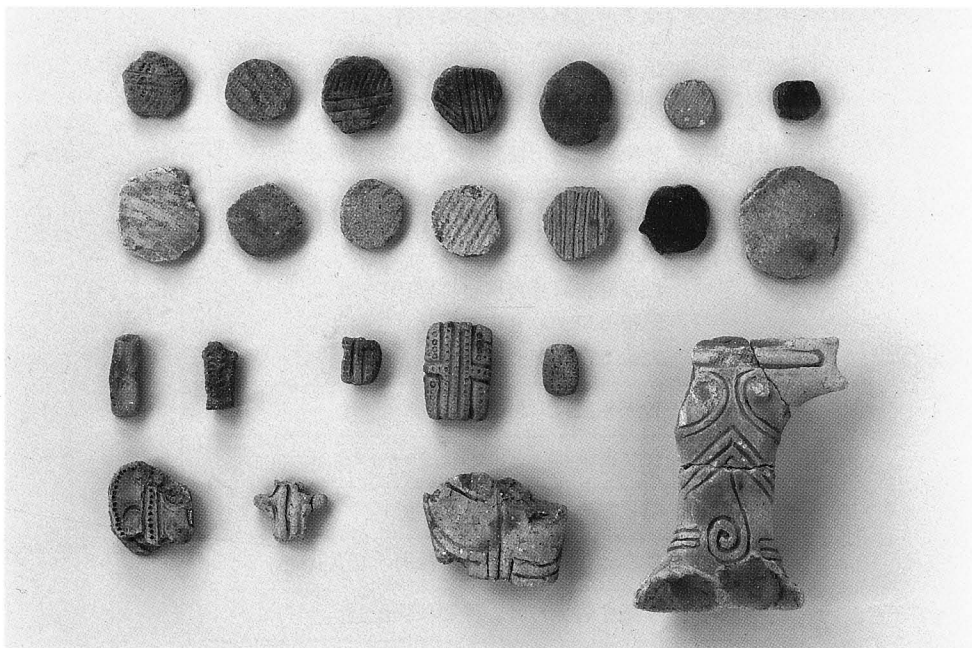
包含層出土 削器類



包含層出土石棒



(左と同一個体)



土製品



調整剥片類

報告書抄録

書名	岐阜県吉城郡宮川村 堂ノ前遺跡発掘調査報告書
副書名	国道360号線バイパス改修工事に伴う 埋蔵文化財調査報告
編集者	林直樹・立田佳美・小島功・早川正一
編集機関	宮川村埋蔵文化財調査室
所在地	509-45 岐阜県吉城郡宮川村塩屋104番地 飛騨みやがわ考古民俗館 TEL. 0577-62-3251
発行日	1996年3月29日
遺跡名	堂ノ前遺跡（どうのまえいせき）
所在地	岐阜県吉城郡宮川村大字野首
時代	縄文時代早・前・中・後期（中期中心）
主な遺構	中期住居址17軒、後期住居址2軒
主な遺物	縄文土器・石器・石製品

岐阜県吉城郡宮川村
堂ノ前遺跡発掘調査報告書
国道360号線バイパス改修工事に伴う
埋蔵文化財調査報告

発行日 1996年3月29日
発行者 岐阜県・宮川村教育委員会
編集 宮川村埋蔵文化財調査室
印刷者 (有)村坂印刷

